鋤崎古墳群2

鋤崎古墳群A群第1次、第2次、第3次調査
鋤崎製鉄A遺跡第1次調査

福岡市埋蔵文化財調査報告書第506集

1997

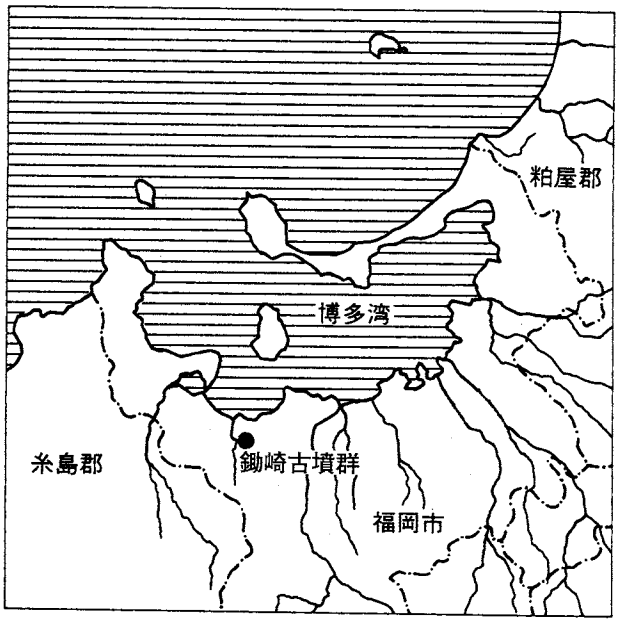
福岡市教育委員会

SUKI ZAKI

鋤崎古墳群2

鋤崎古墳群A群第1次、第2次、第3次調査
鋤崎製鉄A遺跡第1次調査

福岡市埋蔵文化財調査報告書第506集

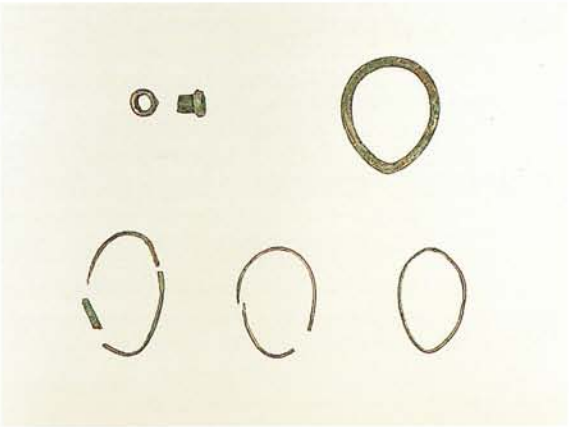


遺跡調査番号　8726・8945・9425
遺跡略号　SKK-A

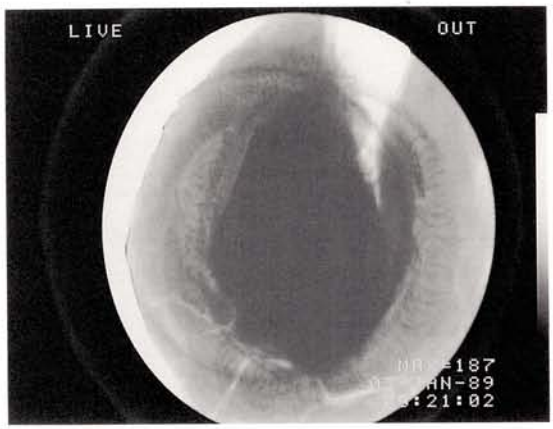
1997

福岡市教育委員会

(1) 9号墳 出土鉄刀3105



(2) 9号墳 出土鉄刀3105 金銅装金具



(3) 9号墳 出土鉄刀3105 鍔レントゲン撮

(4) 横口付炭窯(084)完掘状況（窯尻から）

序

福岡市では北方に広がる玄海灘の海を介し、彼地との人、物、文化の交流が先史時代より絶え間なく続けられてきました。この地の利、歴史を物語る多くの遺構、遺物が地中に残され、調査が進むなか、明らかにされてきました。その中には、大陸の先進技術、文化を示す貴重なものも多く、学術研究上、注目されているところです。

今回の発掘調査は今津湾を望む丘陵先端部で行われました。6世紀後半以降の群集した古墳をはじめ、住居跡、製鉄炉等も発見されました。特に製鉄に用いる炭を作った窯跡は残りが良く、製鉄の技術、歴史を研究するなかで注目されているものです。また、住居、墓、鉄生産跡が近くで見つかり、当時の生活を具体的に復元するのに良好な資料を得る事ができました。

本書はこうした調査成果を収めたもので、やむなく、多様な開発で消滅する埋蔵文化財について実施した記録保存の一つです。研究資料とともに埋蔵文化財に対するご理解と活用への一助となれば幸いです。

最後に、調査に際し御協力いただいた建設事業の関係者各位の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成9年3月31日

福岡市教育委員会
教育長　町　田　英　俊

例　　言

1．本書は福岡市西区大字今宿青木鋤崎421―4外において、福岡市教育委員会が、1987年度（第１次)、1989年度（第２次)、1994～1995年度（第３次）に実施した発掘調査報告書である。
2．第１次、第２次調査は小林が、第３次調査は荒牧、榎本、大塚の各職員が現場担当した。
3．本書に使用した遺構図面類の資料作成にあたっては、各担当者のほか、黒田和生、梶村嘉長、山口満、俵寛司、相浦浩、宮城弘樹が行った。
4．遺物整理、復元は大瀬良清子、土斐崎孝子、馬場イツ子、松本藤子、三栗野明美、村嶋里子、品川伊津子、永井和子、永田世津子が行い、実測、浄書は各担当者の他、黒田和生、名取さつき、藤村佳公恵、八丁由香が行った。
5．本文の執筆は第２章の第１次、第２次調査分を小林が、その外第３次調査分を荒牧と大塚が執筆し、編集は荒牧が行った。
6．本書は1984年刊行の鋤崎古墳(福岡市埋蔵文化財報告書第112集)の続編として、「鋤崎古墳群２」とする。
7．本書掲載の実測図、写真、遺物等、調査で得られた資料類は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管され、公開、活用していく予定である。

凡　　例

1．本書掲載の遺構図方位は第２次調査は磁北、第３次調査は国土座標北である。
2．掲載図面のアミ掛けについては各個別に説明を加える。
3．古墳の各部称についてはIIIの２（Ｐ－５）において説明を加えている。
4．遺物番号は第２次調査では任意の通し番号、第３次調査では整理において登録した番号を使用した。

調査名	鋤崎古墳群Ａ群第１次	鋤崎古墳群Ａ群第２次	鋤崎古墳群Ａ群第３次
調査番号	8726	8945	9425
遺跡略号	ＳＫＫ－Ａ	ＳＫＫ－Ａ	ＳＫＫ－Ａ
調査地地籍	西区大字今宿青木字 鋤崎421―4外	西区大字今宿青木字 鋤崎419―1外	西区大字今宿青木字 鋤崎421―4外
開発面積	9,420㎡	9,420㎡	9,420㎡
調査面積	(測量)	480㎡	6090㎡
調査期間	870817～870902	890925～891118	940708～950829

本文目次

I　序　　説…… 1
　1．調査に至る経過…… 1
　2．調査の組織…… 1
　3．調査の経過…… 1
II　位置と環境…… 2
　1．立　地…… 2
　2．歴史的環境…… 2
　3．鋤崎古墳群A群…… 2
III　調査の方法と記録…… 5
　1．調査の方針…… 5
　2．本報告書の記述について…… 5
　3．要　旨…… 6
IV　鋤崎古墳群A群1次調査…… 7
　1．調査の概要…… 7
V　鋤崎古墳群A群2次調査…… 8
　1．調査の概要…… 8
　2．4号墳…… 9
　3．5号墳……18
　4．11号墳……26
　5．12号墳……28
　6．13号墳……29
　7．石棺墓……30
　　1号石棺墓……30
　8．土　壙……31
　　1号、2号土壙……31
　　3号、4号土壙……32
　　5号、6号、7号土壙……33
　　8号、9号……34
　9．小　結……34
VI　鋤崎古墳群A群3次調査
　1．1号墳……35
　2．2号墳……47
　3．3号墳……51
　4．6号墳……60
　5．7号墳……68
　6．8号墳……75
　7．9号墳……83
　8．10号墳……95
　9．15号墳…… 103
　10．小石室…… 109
　11．14号墳…… 109
　12．16号墳…… 111
　13．17号墳…… 116
　14．18号墳…… 119
　15．19号墳…… 121
　16．20号墳…… 122
　17．21号墳…… 124
　18．23号墳…… 126
　19．24号墳…… 126
　20．27号墳…… 126
　21．28号墳…… 126
　22．29号墳…… 128
　23．土壙墓…… 129
　　26号墳…… 129
　　156 …… 129
　　157 …… 129
　　158 …… 131
　　159 …… 131
　24．竪穴住居跡…… 132
　　(1) 164 …… 132
　　(2) 079 …… 133
　25．横口式炭窯…… 134
　26．製鉄関連遺構・遺物…… 136
　　(1) 093 …… 136
　　(2) 108 …… 142
　　(3) 古墳出土鉄滓…… 148
　27．窯　跡…… 153
　28．焼土壙…… 153
　　049、033、035、094…… 153
　　091、083、036、072…… 156
　　074、082、039、037…… 156
　29．土　壙…… 156
　　031、032…… 156
　30．その他の遺構と遺物…… 157
　31．まとめ…… 158

挿図目次

Fig. 1　周辺遺跡分布図 (1/25,000) …… 3
Fig. 2　調査地点位置図 (1/8,000)…… 4
Fig. 3　古墳各部名称…… 5
Fig. 4　第2次調査区遺構配置図 (1/300)…… 7
Fig. 5　4号墳 地山成形測量図 (1/100) …… 8
Fig. 6　4号墳 墳丘測量図 (1/100) …… 9
Fig. 7　4号墳 墳丘断面図 (1/60)……10
Fig. 8　4号墳 石室実測図 (1/40)……11
Fig. 9　4号墳 閉塞部実測図 (1/40)……12
Fig.10　4号墳 遺物出土状況図 (1/30)……13
Fig.11　4号墳 墓道出土土器実測図 (1/4) ……14
Fig.12　4号墳 墳丘出土土器実測図 (1/4) ……15
Fig.13　4号墳 出土土器実測図2 (1/6) ……16
Fig.14　4号墳 出土石器実測図 (1/2) ……16
Fig.15　5号墳 地山成形測量図 (1/100) ……17
Fig.16　5号墳 墳丘測量図 (1/100) ……18
Fig.17　5号墳 墳丘断面図 (1/60)……19
Fig.18　5号墳 石室実測図 (1/40)……20
Fig.19　5号墳 閉塞部実測図 (1/40)……21
Fig.20　5号墳 遺物出土状況図 (1/30)……22
Fig.21　5号墳 墓道出土土器実測図1 (1/4) ……22
Fig.22　5号墳 墳丘出土土器実測図1 (1/4) ……23
Fig.23　5号墳 墳丘出土土器実測図2 (1/4) ……24
Fig.24　5号墳 出土土器実測図3 (1/6) ……25
Fig.25　5号墳 出土石器実測図 (1/2) ……25
Fig.26　11号墳 地山成形測量図 (1/100) ……26
Fig.27　11号墳 墳丘断面図 (1/40)……26
Fig.28　11号墳 石室実測図 (1/30)……27
Fig.29　12・13号墳 地山成形測量図 (1/100) ……28
Fig.30　12号墳 石室実測図 (1/30)……28
Fig.31　13号墳 石室実測図 (1/30)……29
Fig.32　1・2号 石棺墓実測図 (1/30) ……30
Fig.33　1・2号 石棺墓出土土器実測図 (1/4)……31
Fig.34　1～3号 土壙実測図 (1/40)……32
Fig.35　4～8号 土壙実測図 (1/40)……33
Fig.36　土壙出土土器実測図 (1/4)……34
Fig.37　土壙出土土器実測図2 (1/6)……34
Fig.38　包含層出土土器実測図 (1/4)……34
Fig.39　包含層出土石器実測図 (1/1)……34
Fig.40　1号墳 墳丘測量図 (1/200) ……35

Fig.41　1号墳 墳丘土層断面図（1/80）……36
Fig.42　1号墳 墳丘列石実測図（1/80）……37
Fig.43　1号墳 石室実測図（1/60）……38
Fig.44　1号墳 閉塞石実測図（1/60）……39
Fig.45　1号墳 羨道部遺物出土状況図（1/30）……40
Fig.46　1号墳 玄室出土土器実測図（1/4）……41
Fig.47　1号墳 羨道出土土器実測図（1/4）……42
Fig.48　1号墳 羨道出土土器実測図2（1/4）……43
Fig.49　1号墳 墳丘出土土器実測図（1/4）……45
Fig.50　2号、15号、16号、17号墳 墳丘遺存図（1/200）……47
Fig.51　2号、15号、16号、17号墳 地山成形図（1/200）……47
Fig.52　2号墳 墳丘断面図（1/60）……48
Fig.53　2号墳 石室実測図（1/40）……49
Fig.54　2号墳 石室俯瞰と掘り方実測図（1/40）……50
Fig.55　2号墳 閉塞部実測図（1/40）……50
Fig.56　2号墳 出土遺物実測図（1/4）……50
Fig.57　3号墳 墳丘遺存図（1/200）……52
Fig.58　3号墳 地山成形図（1/200）……52
Fig.59　3号墳 墳丘断面図（1/60）……53
Fig.60　3号墳 石室実測図（1/60）……54
Fig.61　3号墳 石室俯瞰と掘り方実測図（1/60）……55
Fig.62　3号墳 閉塞石実測図（1/40）……56
Fig.63　3号墳 墓道土層断面図（1/40）……56
Fig.64　3号墳 石室内遺物出土状況図（1/40）……57
Fig.65　3号墳 Ⅳ区周溝内遺物出土状況図（1/80）…57
Fig.66　3号墳 周溝内出土土器実測図（1/4）……58
Fig.67　3号墳 出土遺物実測図（1/2・1/4）……59
Fig.68　6号墳 地山成形図（1/200）……60
Fig.69　6号、10号墳 墳丘遺存図（1/200）……60
Fig.70　6号墳 墳丘土層断面図（1/100）……61
Fig.71　6号墳 石室実測図（1/40）……62
Fig.72　6号墳 石室俯瞰と掘り方実測図（1/40）……63
Fig.73　6号墳 閉塞石実測図（1/40）……64
Fig.74　6号墳 遺物出土状況図……65
Fig.75　6号墳 Ⅰ区墳丘内遺物出土状況図（1/20）…65
Fig.76　6号墳 出土遺物実測図1（1/4）……66
Fig.77　6号墳 出土遺物実測図2（1/4）……67
Fig.78　7号墳 墳丘遺存図（1/200）……68
Fig.79　7号墳 地山成形図（1/80）……68
Fig.80　7号墳 墳丘土層断面図（1/60）……69
Fig.81　7号墳 石室実測図（1/40）……71
Fig.82　7号墳 閉塞石実測図（1/40）……72
Fig.83　7号墳 墳丘内土器出土状況図（1/20）……73
Fig.84　050 実測図（1/40）……73
Fig.85　054 実測図（1/20）……73
Fig.86　050 出土遺物実測図（1/20）……73
Fig.87　7号墳 出土遺物実測図（1/4・1/2）……74
Fig.88　8号墳 墳丘遺存図（1/200）……75
Fig.89　8号墳 西側高まり土層断面図（1/60）……76
Fig.90　8号墳 地山成形と遺物出土状況図（1/80）…76
Fig.91　8号墳 墳丘土層断面図（1/60）……77
Fig.92　8号墳 石室実測図（1/40）……79
Fig.93　8号墳 閉塞石実測図（1/40）……80
Fig.94　051 実測図（1/40）……80
Fig.95　8号墳 墓道土層断面図（1/40）……80
Fig.96　8号墳 出土遺物実測図（1/4）……82
Fig.97　9号墳 墳丘遺存図（1/200）……83
Fig.98　9号墳 地山成形図（1/200）……83
Fig.99　9号墳 墳丘土層断面図（1/60）……84
Fig.100　9号墳 石室実測図（1/40）……86
Fig.101　石室俯瞰と掘り方実測図（1/60）……87
Fig.102　9号墳 墓道実測図……87
Fig.103　9号墳 石室内遺物出土状況図（第1面・第2面、1/40）……88
Fig.104　9号墳 石室内遺物出土状況図（第1面・第2面、1/40）……88
Fig.105　9号墳 石室内出土遺物実測図1（1/4）……91
Fig.106　9号墳 石室内出土遺物実測図2（1/4）……92
Fig.107　9号墳 石室内出土遺物実測図3（1/4）……93
Fig.108　9号墳 石室内出土遺物実測図4（1/2・1/4）……94
Fig.109　10号墳 地山成形図（1/200）……95
Fig.110　10号墳 墳丘土層断面図（1/60）……96
Fig.111　10号墳 石室実測図（1/40）……97
Fig.112　10号墳 墳丘内と墓道内遺物出土状況図（1/60）……98
Fig.113　022 実測図（1/30）……98
Fig.114　10号墳 墳丘内供献遺物出土状況図（1/20）…98
Fig.115　055 実測図（1/40）……98
Fig.116　10号墳 石室閉塞石実測図（1/40）……99
Fig.117　10号墳 出土土器実測図1（1/4）……100
Fig.118　10号墳 出土遺物実測図2（1/4・1/2）……101
Fig.119　15号墳 墳丘土層断面図（1/60）……104
Fig.120　15号墳 石室内遺物出土状況図（1/40）……105
Fig.121　15号墳 石室俯瞰と掘り方実測図（1/40）…105
Fig.122　15号墳 石室実測図（1/40）……105
Fig.123　15号墳 出土遺物実測図1（1/4）……106
Fig.124　15号墳 出土遺物実測図2（1/4）……107
Fig.125　15号墳 出土遺物実測図3（1/4）……108
Fig.126　14号墳 地山成形と周辺遺構配置図（1/200）……109
Fig.127　14号墳 石室実測図（1/30）……110
Fig.128　14号墳 出土遺物実測図（1/4・1/2）……110
Fig.129　16、17、19～21号墳 墳丘遺存図（1/200）111
Fig.130　16号墳 地山成形図（1/200）……111
Fig.131　16号墳 墳丘トレンチ土層断面図（1/60）…112
Fig.132　16号墳 石室実測図（1/30）……112
Fig.133　16号墳 石室俯瞰と周溝内遺物出土状況図（1/40）……113
Fig.134　16号墳 石室内玉類出土状況図（1/40）……113
Fig.135　16号墳 出土遺物実測図（1/4・1/1）……114
Fig.136　17号墳 墳丘トレンチ土層断面図（1/60）…115
Fig.137　17号墳 石室実測図（1/30）……116
Fig.138　17号墳 石室俯瞰と掘り方実測図（1/30）…117
Fig.139　17号墳 石室内遺物出土状況図（1/30）……117
Fig.140　17号墳 出土遺物実測図（1/4・1/1）……118
Fig.141　17号墳 石室外出土遺物実測図（鉄器・石器1/2）……118
Fig.142　18号墳 石室実測図（1/30）……119
Fig.143　18号墳 石室俯瞰と掘り方実測図（1/30）…119
Fig.144　19号墳 墳丘トレンチ土層断面図（1/60）…120
Fig.145　19号墳 石室実測図（1/30）……120
Fig.146　19号墳 石室内遺物出土状況図（1/30）……121
Fig.147　19号墳 石室俯瞰と掘り方実測図（1/30）…121
Fig.148　19号墳 出土遺物実測図（1/4・1/2）……121
Fig.149　20号墳 墳丘トレンチ土層断面図（1/60）…122
Fig.150　20号墳 石室実測図（1/30）……123
Fig.151　20号墳 石室俯瞰と掘り方実測図（1/30）…123
Fig.152　20号墳 出土遺物実測図（1/4・1/2）……123
Fig.153　21号墳 石室実測図（1/30）……124
Fig.154　21号墳 石室内出土鉄器（1/2）……124
Fig.155　21号墳 出土甕棺実測図（1/4）……125
Fig.156　23号墳 石室実測図（1/30）……126
Fig.157　24号墳 地山成形図（1/40）……127

Fig.158　24号墳 石室実測図（1/30）…… 127
Fig.159　27号墳 石室実測図（1/30）…… 128
Fig.160　28号墳 石室実測図（1/30）…… 128
Fig.161　29号墳 石室実測図（1/30）…… 128
Fig.162　26号墳 実測図（1/30）…… 129
Fig.163　土壙墓 実測図（1/30）…… 130
Fig.164　土壙墓 出土遺物実測図（1/4）…… 131
Fig.165　164 出土遺物実測図（1/4）…… 132
Fig.166　164 実測図（1/60）…… 132
Fig.167　164 内カマド実測図（1/30）…… 132
Fig.168　079 実測図（1/60）…… 133
Fig.169　079 出土遺物実測図（1/4）…… 133
Fig.170　084（横口式炭焼窯）実測図１（1/40）……折り込み
Fig.171　084（横口式炭焼窯）実測図２（1/40）……折り込み
Fig.172　093 炉床・排滓溝検出状況（1/30）…… 137
Fig.173　093 実測図（1/60）…… 138
Fig.174　093 出土鉄滓実測図１（1/4）…… 139
Fig.175　093 出土鉄滓実測図２（1/4）…… 140
Fig.176　093 出土鉄滓配置図（1/10）…… 141
Fig.177　108 平面実測図（1/60）…… 142
Fig.178　108 出土鉄滓実測図１（1/4）…… 143
Fig.179　108 出土鉄滓実測図２（1/4）…… 144
Fig.180　108 出土鉄滓実測図３（1/4）…… 145
Fig.181　108 出土鉄滓配置図（1/10）…… 146
Fig.182　古墳出土鉄滓実測図１（1/4）…… 149
Fig.183　古墳出土鉄滓実測図２（1/4）…… 150
Fig.184　焼土壙 実測図・出土遺物実測図（1/40・1/4）
…… 154
Fig.185　焼土壙 実測図２（1/40）…… 155
Fig.186　031・032 実測図（1/4）…… 156
Fig.187　031・032 出土遺物実測図（1/2）…… 156
Fig.188　052 出土遺物実測図（1/4）…… 157
Fig.189　052 実測図（1/20）…… 157
Fig.190　133 出土遺物実測図（1/4）…… 157
Fig.191　133 実測図（1/40）…… 157
Fig.192　古墳出土須恵器分類（1/4）…… 159
Fig.193　鋤崎古墳群Ａ群墓道復元図…… 161
Fig.194　古墳石室一覧…… 161
Tab. 1　093 出土鉄滓観察表…… 147
Tab. 2　108 出土鉄滓観察表…… 148
Tab. 3　古墳出土鉄滓分類表…… 150
Tab. 4　古墳出土鉄滓観察表…… 151

図版目次

PL. 1　(1) 鋤崎古墳群全景（東より）
　(2) 鋤崎古墳群全景（北より）
PL. 2　(1) 第２次調査区全景（北東より）
　(2) 第２次調査区全景（東より）
PL. 3　(1) 第２次調査区地山整形全景（東より）
　(2) ４、５、11～13号墳 全景（南より）
　(3) ４、５、11号墳 全景（北東より）
　(4) ４、５、11～13号墳 全景（北東より）
　(5) ４、５号墳 石室全景（南より）
PL. 4　(1) ４号墳 全景（東より）
　(2) ４号墳 石室全景（北東より）
　(3) ４号墳 奥壁（北より）
　(4) ４号墳 右側壁（東より）
　(5) ４号墳 左側壁（西より）
　(6) ４号墳 閉塞部（北より）
　(7) ４号墳 墓道遺物出土状況（東より）
　(8) ４号墳 墳丘遺物出土状況（北より）
PL. 5　４号墳 出土遺物
PL. 6　(1) ５号墳 全景（東より）
　(2) ５号墳 石室全景（南より）
　(3) ５号墳 奥壁（北より）
　(4) ５号墳 羨道（北より）
　(5) ５号墳 閉塞部（北より）
　(6) ５号墳 閉塞部（南より）
　(7) ５号墳 墳丘(Ⅳ区)遺物出土状況（北より）
　(8) ５号墳 墳丘(Ⅳ区)遺物出土状況（北より）
PL. 7　(1) ５号墳 出土遺物
PL. 8　(1) 11～13号墳 全景（北東より）
　(2) 11号墳 全景（東南より）
　(3) 12、13号墳 全景（北東より）
　(4) 12号墳 全景（北より）
　(5) 13号墳 全景（南より）
PL. 9　(1) ２～７号 土壙全景（北より）
　(2) １号 石棺墓全景（北より）
　(3) ２号 石棺墓全景（西より）
　(4) １号 土壙全景（東より）
　(5) ２号墳 全景（北より）
PL.10　(1) ３号 土壙全景（東より）
　(2) ４号 土壙全景（北より）
　(3) ８号 土壙全景（西より）
　(4) ９号 土壙全景（西より）
　(5) 石棺墓、土壙出土遺物
PL.11　(1) 第３次調査全景（南東から）
　(2) 尾根線上古墳
　（２、15、16、17、19、20、21号墳、南東から）
PL.12　(1) 第３次調査全景（南東から）
　(2) 北側丘陵裾部（６、10、７、８号墳、北東から）
　(3) 北側丘陵裾部（６、10、７、８号墳、東から）
　(4) 北側丘陵斜面（14号墳付近、北から）
　(5) 南側丘陵裾部（北から）
PL.13　(1) １号墳 全景（南東から）
　(2) １号墳 右側側壁（西から）
　(3) １号墳 閉塞石（北東から）
　(4) １号墳 玄室（西から）
　(5) １号墳 閉塞石（西から）
　(6) １号 羨道部遺物出土状況
PL.14　(1) ２号墳 地山成形（北西から）
　(2) ２号墳 石室全景（北西から）
　(3) ２号墳 石室全景（南西から）
　(4) ２号墳 石室全景（北西から）
　(5) ２号墳 石室内遺物出土状況（左袖石隅角）
PL.15　(1) ３号墳、９号墳 墳丘遺存（南西直上から）
　(2) ３号墳 石室全景と地山成形（南西から）
　(3) ３号墳 石室全景と地山成形（南から）
　(4) ３号墳 Ａトレンチ土層断面（西から）
　(5) ３号墳 玄室内鉄刀出土状況（北から）
PL.16　(1) ３号墳 石室全景（南西から）
　(2) ３号墳 玄室全景（北東から）
　(3) ３号墳 玄室右側壁（北西から）
　(4) ３号墳 玄門閉塞石（北東から）
　(5) ３号墳 閉塞石（南東から）
　(6) ３号墳 横口部左側壁　（南から）
PL.17　(1) ６号墳、10号墳 墳丘遺存（北直上から）
　(2) ６号墳 墳丘遺存（東から）

PL.17 (3) 6号墳 地山成形（東から）
(4) 6号墳 地山成形（北西から）
(5) 6号墳 Cトレンチ土層断面（南東から）
(6) 6号墳 閉塞石（南東から）
PL.18 (1) 7号墳 墳丘遺存（南西から）
(2) 7号墳 石室全景（南東から）
PL.19 (1) 7号墳 墳丘遺存（南西から）
(2) 7号墳 地山成形（南西から）
(3) 7号墳 玄室奥壁（南西から）
(4) 7号墳 玄室右側壁（北西から）
(5) 7号墳 閉塞石（南西から）
(6) 7号墳 Ⅰ区墳丘内供献土器
PL.20 (1) 8号墳 墳丘遺存（北東から）
(2) 8号墳 石室全景（北東から）
(3) 8号墳 前庭部積石（北東から）
(4) 8号墳 地山成形（南西から）
(5) 8号墳 閉塞石（北東から）
(6) 8号墳 Cトレンチ土層断面（北東から）
PL.21 (1) 9号墳 墳丘遺存（南西から）
(2) 9号墳 石室全景（南西から）
(3) 9号墳 墳丘遺存と墓道（南西から）
(4) 9号墳 石室俯瞰（北東から）
(5) 9号墳 Aトレンチ土層断面（南西から）
(6) 9号墳 地山成形（南西から）
PL.22 (1) 9号墳 玄室内遺物出土状況（北東から）
(2) 9号墳 玄室右側壁第1、2面遺物出土状況（北西から）
(3) 9号墳 左側壁第1、2面遺物出土状況（南東から）
(4) 9号墳 玄室右側壁第3面遺物出土状況（北西から）
(5) 9号墳 墓道閉塞石流出状況（南西から）
(6) 9号墳 墓道鉄滓出土状況（北西から）
PL.23 (1) 10号墳 墳丘遺存（南東から）
(2) 10号墳 A、Cトレンチ土層断面（南東から）
(3) 10号墳 石室全景（南東から）
(4) 10号墳 石室全景（北東から）
(5) 10号墳 石室遺存状況と閉塞石（北東から）
(6) 10号墳 地山成形（南東から）
PL.24 (1) 10号墳 Ⅰ区墳丘内遺物出土状況（南西から）
(2) 10号墳 Ⅰ区墳丘内供献遺物出土状況（南西から）
(3) 10号墳 墓道遺物出土状況（南から）
(4) 10号墳 Cトレンチ土層断面（南東から）
(5) 10号墳 Ⅱ区墳丘内石室(022)検出状況（南東から）
(6) 10号墳 Ⅱ区墳丘内石室（022)検出状況（北東から）
PL.25 (1) 15号墳 石室全景（南西から）
(2) 15号墳 石室全景（北西から）
(3) 15号墳 玄室内鉄刀出土状況（南西から）
(4) 15号墳 玄室内遺物出土状況（南から）
PL.26 (1) 尾根線上小石室（16号、17号、20号墳、北西から）
(2) 尾根線上小石室（19号、21号墳、北西から）
PL.27 (1) 14号墳 石室完掘（北東から）
(2) 16号墳 完掘（西から）
(3) 16号墳 周溝内遺物出土状況（東から）
(4) 16号墳 周溝内遺物出土状況（近景、東から）
(5) 17号墳 石室検出状況（北西から）
(6) 17号墳 石室完掘（南東から）
PL.28 (1) 19号、21号墳 完掘（南東から）
(2) 19号墳 石室完掘（南東から）
(3) 19号墳 石室内遺物出土状況（北東から）
(4) 20号墳 石室完掘（北西から）
(5) 20号墳 墳丘遺存（西から）
(6) 20号墳 石室内鉄器出土状況（北から）
PL.29 (1) 21号墳 完掘（北から）
(2) 21号墳 石室内土師器甕棺（東から）
(3) 21号墳 石室床面（南から）
(4) 18号墳 石室完掘（北西から）
(5) 18号墳 左側壁（西から）
(6) 23号墳 石室完掘（南から）
PL.30 (1) 24号墳 石室完掘（北東から）
(2) 28号墳 石室完掘（南東から）
PL.31 (1) 27号墳 石室完掘（南から）
(2) 23号墳、094(焼土壙）完掘（北から）
PL.32 (1) 157 土壙墓完掘（南東から）
(2) 156 土壙墓完掘（北東から）
PL.33 (1) 164 竪穴住居跡完掘（北西から） 2
(2) 079 竪穴住居跡完掘（西から）
PL.34 (1) 084 横口式炭焼窯全景（南西から）
(2) 084 横口式炭焼窯全景（北西から）
PL.35 (1) 084 横口式炭焼窯完掘（南西から）
(2) 084 横口式炭焼窯内部（南東から）
(3) 084 第3～4横口付近焼成部断面（南東から）
(4) 084 第3横口付近焼成部（南から）
(5) 084 第2横口断面（南東から）
(6) 084 第1～2横口付近焼成部断面（北西から）
PL.36 (1) 093 製鉄炉跡全景（南西から）
(2) 093 南側排滓溝検出（南東から）
(3) 093 北側排滓溝土層断面（北西から）
(4) 093 南側排滓溝断面（北西から）
(5) 093 炉床部検出状況（南東から）
(6) 093 炉床・南側排滓溝完掘状況（北西から）
PL.37 (1) 131 窯跡完掘（北から）
(2) 050 焼土壙完掘（東から）
PL.38 (1) 033 焼土壙完掘（北東から）
(2) 033 焼土壙内遺物出土状況（北東から）
PL.39 (1) 133 完掘（東から）
(2) 049 焼土壙完掘（南西から）
PL.40 (1) 031 完掘（南から）
(2) 031 土層断面（東から）
(3) 032 完掘（南から）
(4) 032 土層断面（東から）

Ⅰ 序　説

1．調査に至る経過

1986年（昭和61年）、西部ガス株式会社、西部ガス興商株式会社より委託された佐藤工業よりガス関連事業予定地として、当該地の埋蔵文化財についての問い合わせ、審査願いが行われた。文化財課（現 埋蔵文化財課）ではこれを受け、昭和62年１月30日に踏査を行い、11基の古墳を確認した。その後、事業計画の具体案を待つとともに、調査のための条件整備についての協議を重ねた。この折、古墳群の保存とともに、隣接する前方後円墳、鋤崎古墳を保護し、周辺の景観も保全されるよう当課から重ねて要望した。こうした協議を進める中、先ず、第１次調査を昭和62年８月より、現況測量、古墳周辺の清掃、空中写真撮影を目的にして行った。第２次調査はガスホールダーへの進入路建設のため消滅する部分に限って、平成元年に実施した。古墳群の大半を占める第３次調査は平成６年から行い、約１年１月の期間を要した。

2．調査の組織

調査は以下の組織体制で臨んだ。なお、調査にあたっては、西部ガス株式会社、西部ガス興商株式会社、佐藤工業株式会社より調査費用をはじめ、調査における条件整備等で多大な御協力を頂き、関係各位の皆様方に厚くお礼申し上げる次第である。

（第１次、第２次調査）
調査主体：福岡市教育委員会
調査総括；埋蔵文化財課長　柳田純孝
　　第２係長　飛高憲雄（第１次調査）
　　柳沢一男（第２次調査）
事前審査：下村　智
庶　　務：松延好文
調査担当：小林義彦

（第３次調査）
調査主体：福岡市教育委員会
調査総括：埋蔵文化財課長　折尾学
　　埋蔵文化財第１係長　横山邦継
事前審査：文化財主事　山口譲治
　　係員　菅波正人
庶　　務：吉田麻由美
調査担当：荒牧宏行　榎本義嗣　大塚紀宣

3．調査の経過

上述のとおり、本報告の鋤崎古墳群Ａ群の調査は３次に及んでいる。第１次調査は古墳群の保存も含めた協議を続ける中行われ、現況の測量、写真撮影を目的に実施した。その期間は昭和62年８月17日から同年９月２日にわたる。第２次調査は現況で確認される４号墳、５号墳を主対象に平成元年９月25日から同年11月18日まで実施した。この調査では竪穴式ないし石棺系の小石室を内部主体にもつ小円墳も検出され、丘陵全体に多様な遺構が存在することが予想された。丘陵の大半を対象とした第３次調査は平成６年７月８日から翌年の８月29日まで行った。全面の表土剥ぎを予定し、敷地内で廃土処理をおこなうため、東斜面から裾部、尾根線上、西側斜面から裾部の3分割した調査行程で行った。後述するが、墓、住居、製鉄生産跡の遺構が検出され、具体的な関連が把握された。

II　位置と環境

1．立　　地

福岡市の北西部、早良平野と糸島平野を限るように叶岳（341m）—長垂山（118m）の丘陵が海岸まで派生する。本遺跡はこの丘陵の西側に派生した尾根線を占めている。当地の西方には鮏川が今津湾に向けて北流し、周辺に狭長な扇状地が形成され、今宿平野と呼称されている。この平野と今津湾岸の今宿に形成された陸繋砂丘（1）との間には後背湿地のラグーンが広がる。

2．歴史的環境

ここでは、本遺跡の中心を占める古墳時代を主に述べる。分布図で示されるように周辺の丘陵縁辺には多数の群集墳が形成されている。地形と「和名抄」にみられる律令制下における郡制の区分を考慮すれば、上述の叶岳以東の丘陵部に形成された早良グループと以西の今宿グループに概ね分かれる。

扇状地の早良平野を可耕地とし、それを東に望むように南は西山（430m）から北は長垂山から派生する丘陵に古墳時代後期（6世紀中葉以降）の群集墳が多数形成されている。特に中域の羽根戸古墳群（49）一帯では群集が著しい。しかし、この地域では前方後円墳はみられず、「早良郡」内を治めるような首長墓は近年明らかになった拝塚古墳、樋渡古墳、梅林古墳のように早良平野の扇央部や東の油山丘陵部に想定されるようである。

これに対し、「怡土郡」の東に位置した今宿グループは高祖山（416m）から派生した丘陵先端に形成される。女原古墳群（10）、新開古墳群（11）、谷上古墳群（14）、相原古墳群（16）等が位置し、首長墓として山ノ鼻1号墳—若八幡古墳—鋤崎古墳（28）—丸隈山古墳—今宿大塚古墳（15）等の規模等において突出した前方後円墳が考えられている。近年、この系列上に位置する可能性をもつ兜塚古墳、谷上古墳が調査された。また、この首長墓の系譜と異なり、小規模な前方後円墳が数基、6世紀後半代の群集墳と混在しているものがある。これは先の早良群内の西側丘陵に造墓された古墳群と違った様相をみせている。

これらの古墳群の既往の調査によって鉄滓の供献が注目されている。金武古墳群、羽根戸古墳群、相原古墳群、女原古墳群など早良、今宿の両地域の古墳群の多くに見出されるとともに、鉄滓の散布から製鉄遺跡の存在が古墳群に混在し、丘陵に認められる。調査によって、古代までの製鉄炉の存在が知られるのに都地遺跡第5次、内野原田遺跡、堀ノ内遺跡（30）、女原上ノ谷製鉄址などがある。この地域における製鉄産業の盛況を推察するのに難くないが、良質の砂鉄の産出によるところが大きいものと思われる。

3．鋤崎古墳群A群

叶岳から派生した丘陵の北端部に位置し、標高16～35mをはかる。尾根線から今津湾を一面に眺望できる。北側は長垂山との丘陵との間に谷が入り、現在溜め池に改変されている。この谷部に沿って東へ広石—野方へ抜ける道があるが、古代官道に通じるものと想定されている。延喜式によると額田（野方に比定されている）に駅がおかれたという。

鋤崎古墳群A群（27）には現状で10基、隣接するB群に4基の古墳が確認されていた。西側丘陵に築かれた前方後円墳、鋤崎古墳（38）は1981～83年にかけて調査された。全長62m、埋葬施設に初期横穴式石室を築き、四獣鏡、内行花文鏡など6面の銅鏡、大刀、短甲など豊富な出土品をみた。特に

Fig. 1　周辺遺跡分布図（1/25,000）

1 今宿遺跡群　2 女原遺跡　3 女原笠掛遺跡　4 大塚遺跡　5 今宿五郎江遺跡　6 新開古墳群Ｆ群　7 谷遺跡　8 谷上古墳群Ｃ群
9 青木遺跡群　10 女原古墳群　11 新開古墳群　12 新開製鉄遺跡　13 青木城跡　14 谷上古墳群　15 大塚古墳　16 相原古墳群
17 相原製鉄Ａ遺跡　18 相原製鉄Ｂ遺跡　19 相原製鉄Ｃ遺跡　20 木村遺跡　21 木村古墳群Ａ群　22 焼山製鉄遺跡　23 油坂古墳群Ｂ群
24 ショウガ谷製鉄跡　25 油坂古墳群Ａ群　26 鋤崎遺跡　27 鋤崎古墳群　28 鋤崎古墳　29 鋤崎製鉄Ｂ遺跡　30 堀の内遺跡
31 堀の内製鉄遺跡　32 焼山古墳群Ｂ群　33 長垂山古墳群　34 長垂大谷遺跡　35 草場古墳群　36 生の松原遺跡　37 斜ヶ浦瓦窯跡
38 斜ヶ浦製鉄遺跡　39 草刈古墳群　40 高崎古墳群　41 大又遺跡　42 宮の前遺跡　43 広石遺跡群　44 広石古墳群　45 笠間谷古墳群
46 野方中原Ｂ遺跡　47 野方古墳群　48 野方塚原西遺跡　49 羽根戸古墳　50 高祖城跡・怡土城跡　51 元冠防塁　52 広石南古墳群

埋葬施設は横穴式石室の受容を研究するうえで重要な位置づけがされるものである。北側の丘陵に立地した鋤崎遺跡は造成による改変が著しく、その実態は把握されていない。唯一、西端の沖積部に弥生時代の住居跡を調査している。(鋤崎遺跡第１次調査)

周辺では古墳群の密集度は薄く、南側では離れた焼山古墳群Ｂ群まで見られず、東側では広石南古墳群（52）（1996年度調査)、高崎古墳群（40）（1969～1971年度調査）に散在して分布するのみである。しかし、南東の広石古墳群までの空白には、昭和30年代に造成された高崎のゴルフ場内や、宅地造成された草刈古墳群（39）のように、消滅したものも多いと思われる。

こうした小規模の墳丘を有する古墳群のなかでも高崎２号墳の単鳳環頭太刀や徳永古墳群Ｈ群26号墳の三葉環頭太刀の出土にみられるように、幾分突出した階層性がみられるものがある。

Fig. 2　調査地点位置図（1/8,000）

0633 油坂古墳群A群　0629 鋤崎遺跡　0631 鋤崎古墳群A群
0636 鋤崎製鉄A遺跡　0872 鋤崎古墳　0632 鋤崎古墳群B群
0637 鋤崎製鉄B遺跡　0639 堀ノ内遺跡　0869 浅谷古墳
0527 広石南古墳群A群　0528 広石南古墳群B群

III　調査の方法と記録

1．調査の方針

調査は以下の方針のもとに工程をたて進行した。

(1) 第３次調査は第２次調査成果を考慮すると古墳周辺に多様な遺構が存在することが予想されるため、古墳群が立地する丘陵全体を対象とし、全面を表土剝ぎすることにした。

(2) 第３次調査では場内で廃土処理を行うため、７号、８号が立地する丘陵東部、２号、３号、９号が立地する尾根線上、1号と製鉄遺跡が立地する西部に概ね３分割し、この順で調査を進めた。

(3) 第２次調査では任意のトラバースのもとに基準をきめ、測量を行った。第３次調査では国土座標を用い、これに基づきグリッドを設定した。

(4) 遺構番号は古墳については福岡市文化財分布地図に記載された号数を踏襲し、新たに検出された古墳は11号より通して番号を付した。その他、墳丘が確認できない石棺墓、焼土壙などは第２次調査では遺構の性格別に１から番号を付したが、第３次調査では、古墳の番号に続け、登録番号をつけた。整理すると以下の通りである。

（第２次調査）

古墳　４号、５号、11号、12号、13号

石棺　ＳＱ－01、02

土壙　ＳＫ－01～09

（第３次調査）

古墳（石棺墓を含める）　001～003、006～010
014～029

＊登録番号と古墳の号数は合致させている

土壙、焼土壙、土壙墓

その他すべての遺構　031～169

2．本報告書の記述について

使用した番号、名称、図面表記は以下の通りである。

(1) 掲載した遺物番号は第２次調査では任意の通し番号、第３次調査では整理に用いた登録番号をそのまま使用した。

(2) 古墳の各部名称は以下に示すとおりである。

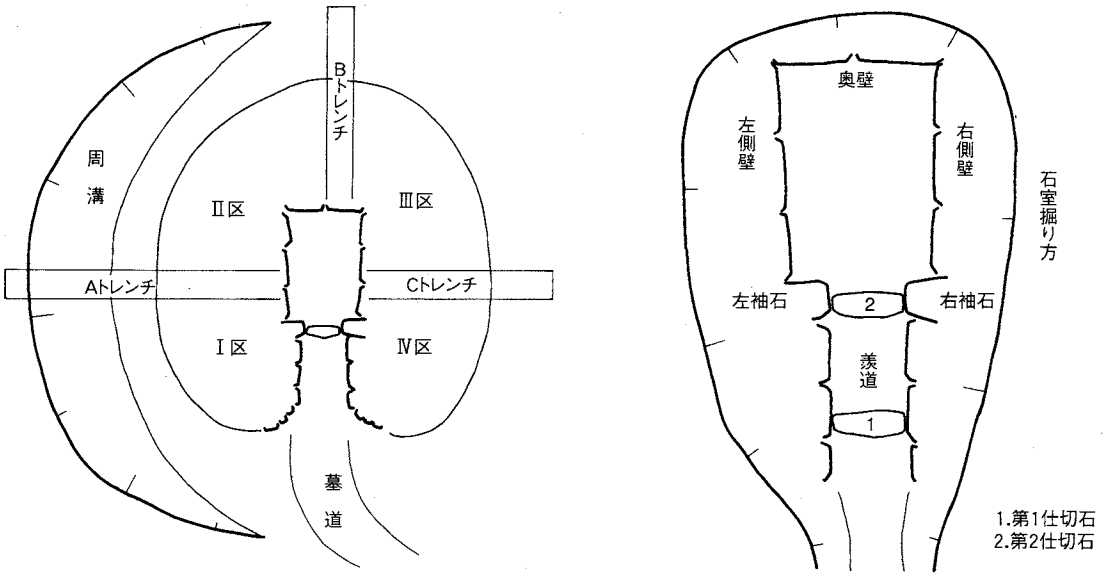


Fig. 3　古墳各部名称

要　旨

第２次、第３次調査を合わせ、古墳11基を検出した。立地の上で近接した２基が単位となり、鋤崎古墳群Ａ群で５グループの家族単位集団が容易に見出せる。調査区外であるが、南側丘陵斜面にはＢ群の４基が同じく２基近接し立地している。

時期的には３号墳が６世紀前半まで溯る可能性があり、首長墓の鋤崎古墳（前方後円墳）に近接して一帯の群集墳が開始されたともみられる。１号墳が築造された７世紀初頭で古墳築造の終焉をむかえるまで連綿と古墳群が形成され、追葬されていく。その中で尾根線上の３号、９号、南斜面の１号墳の盟主的な存在を示す古墳と斜面や谷近くに形成された古墳との２つの流れが見出せる。なお、９号墳の石室内からは多数の土器とともに金銅装の大刀が副葬されていた。

７世紀代にはいると、竪穴式の小石室を埋葬施設とする古墳が築造される。先の古墳に付随して立地するものの他、尾根線上に５基が群集している。単葬への変化を表すものとみられる。期をほぼ同じくして、南側丘陵裾部には竪穴住居の集落が営まれ、西際の谷開口部近くに土壙墓群が形成される。また小型化が進んだ小石室もやや遅れて、周縁域に造られる。いずれもその継続期間は極めて短く、集落に関しては水が流出しやすい不適な地形であったものと思われる。

古墳群とともに注目されたのは地山を刳り貫いて構築された横口式炭焼窯の検出と製鉄炉の検出であった。ともに、丘陵南側裾部に位置している。鍛冶滓は７号、８号墳の墳丘基底面に供献されたものが見出されていたが、製鉄生産が本格化したのは古墳築造が終えたＶ期以降と考えられ、特に、９号墳への追葬、鉄滓供献を考慮すれば、７世紀後半から８世紀初頭に盛況をむかえ短期間で操業を終えたものと思われる。

Ⅳ　鋤崎古墳群Ａ群１次調査

１．調査の概要

1980年代、福岡市は都市機能の拡充とともに都市人口の増加が急速に進んでいた。なかでも西区、早良区、城南区は宅地開発が急速に進み、それに伴うガス需要の増加は高い伸びを示して供給の不足をきたす見通しになってきた。そのため西部ガス㈱では都市ガスの安定供給を果たすために佐藤工業㈱の社有地である西区今宿青木の山林約40,000㎡に新たなガスタンク基地の建設を計画し、都市ガスの安定供給を計ろうとした。佐藤工業㈱ではこのガスタンク基地の建設と併せて社有地一帯をゴルフ練習場用地、外食産業用地として総合的に開発することを計画立案し、その実施にむけて開発予定地内にある遺跡の調査依頼が埋蔵文化財課に提出された。

しかしながら、建設予定地の丘陵上には古墳時代後期の小円墳群からなる鋤崎古墳群Ａ群とＢ群や鋤崎製鉄遺跡があり、七身坂池を挟んだ西方の丘陵尾根上には４世紀の前方後円墳である鋤崎古墳が占地し、自然の豊かな緑地域であった。そこで埋蔵文化財課では、数度にわたる詳細な現地踏査を行ない、その成果をもとに隣接する鋤崎古墳（前方後円墳）の保護のために有効な緑地帯を確保し、遺跡の有用な活用を計ることなどの協議を重ねて必要最小限の発掘調査を実施することとなり、調査区域の雑木の伐採作業に着手した。ところが、今宿校区発展期成会から「このガスタンク基地建設に関する開発計画は地元説明が十分でなく、その真意も地元の住民へは伝わってはいない。同意も不十分である。」との事で、この開発を前提とする発掘調査は地元住民と開発者の間に合意が形成されるまで中断が望ましい旨の緊急的な要望が埋蔵文化財課に提出された。そのため両者間に十分な合意が整うまで発掘調査は中止することとなった。しかし現地では雑木の伐採が完了し調査前の写真撮影の準備が進んでいたことから写真撮影のみは実施し、その完了をもって第１次調査を終了した。

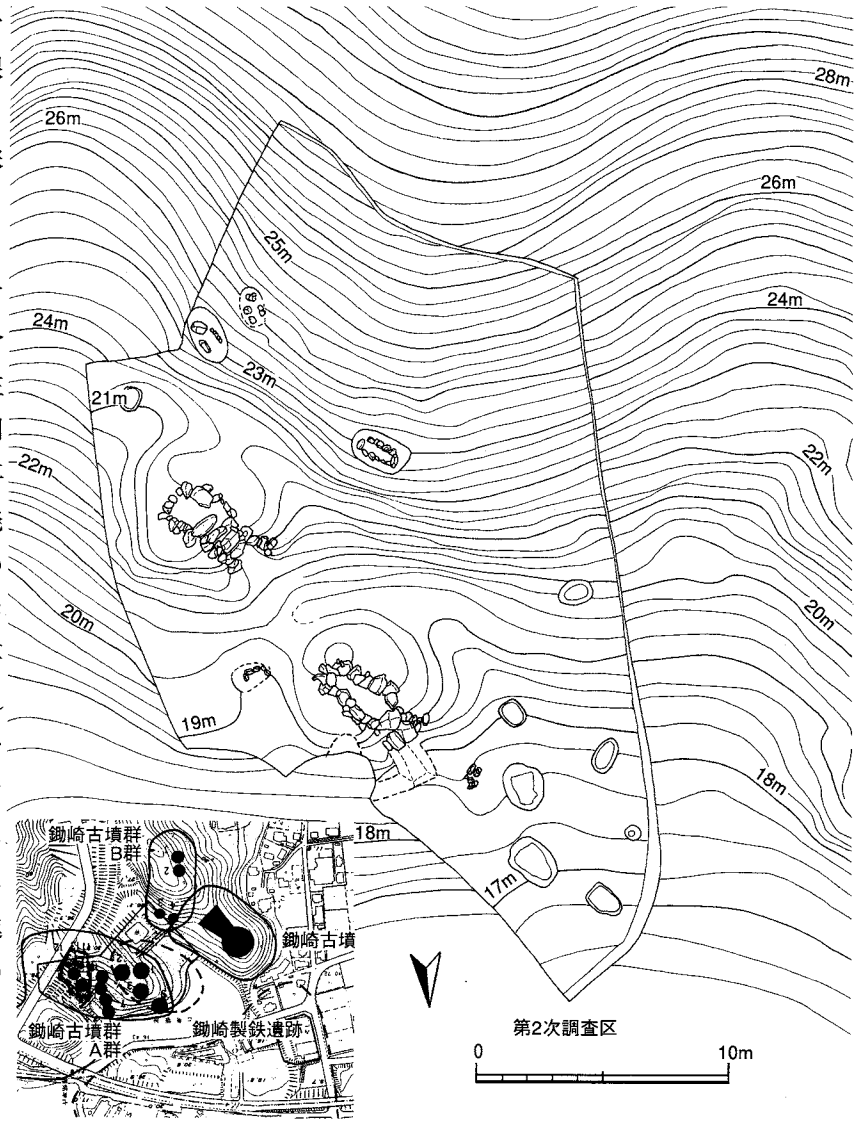


Fig. 4　第２次調査区遺構配置図（1/300）

V　鋤崎古墳群A群２次調査

１．調査の概要

鋤崎古墳群の所在する今宿青木地区は、1986（昭和61）年に西部ガス㈱の新たなガスタンク基地の建設予定地として開発が計画されていた。しかしながら、ゴルフ練習場や外食産業用地を含めたその開発計画は地元各町や今宿校区発展期成会等との合意不形成によって一時中断し、調査前の全景写真の撮影をもって第１次調査は終了していた。その後の協議の結果、ガスタンク基地建設についての地元各町との合意が形成され、ガスタンクの建設工事が開始された。

第２次調査は、ガスタンク建設の工事用進入道路の法面下に埋没する４号墳とそれに隣接する５号墳の２基に限定して発掘調査を実施した。現地では発掘調査に先立って工事用道路の造成とそれに伴う調整池の建設が進んでいた。そのために４号墳の後背面は周溝端まで数メートルの盛土がなされていた。また、東側は墳丘の間際までが調整池の建設によって削りとられており、調査時の排土は調整池の堰堤を経て敷地外へ搬出することを余儀なくされた。

発掘調査した２基の古墳は、小山塊から北にむかって派生する舌状丘陵の東側緩斜面下に占地している。この立地的制約から西面する緩斜面には地山整形が加えられ、隣接する墳丘は墓道の連接が予想された。そのため発掘調査は、西側緩斜面の中段から５号墳前面にかけての480㎡の範囲で実施した。発掘調査の結果、緩斜面上からは小石室を埋葬主体とする３基の小円墳が新たに発見された。５号墳の後背周溝内と前庭部からは２基の小型石棺墓が、５号墳の前面と４号墳の後背周溝内から８基の土壙が検出され、そのうち５基が焼土壙であった。４号墳の石室は花崗岩の路頭石を側壁の基石列として構築する特異な構造形態を示すものであった。また、４号墳の墳丘下には弥生時代中期の大型甕を廃棄した土壙があり、周辺部への遺構の拡がりが想起される。

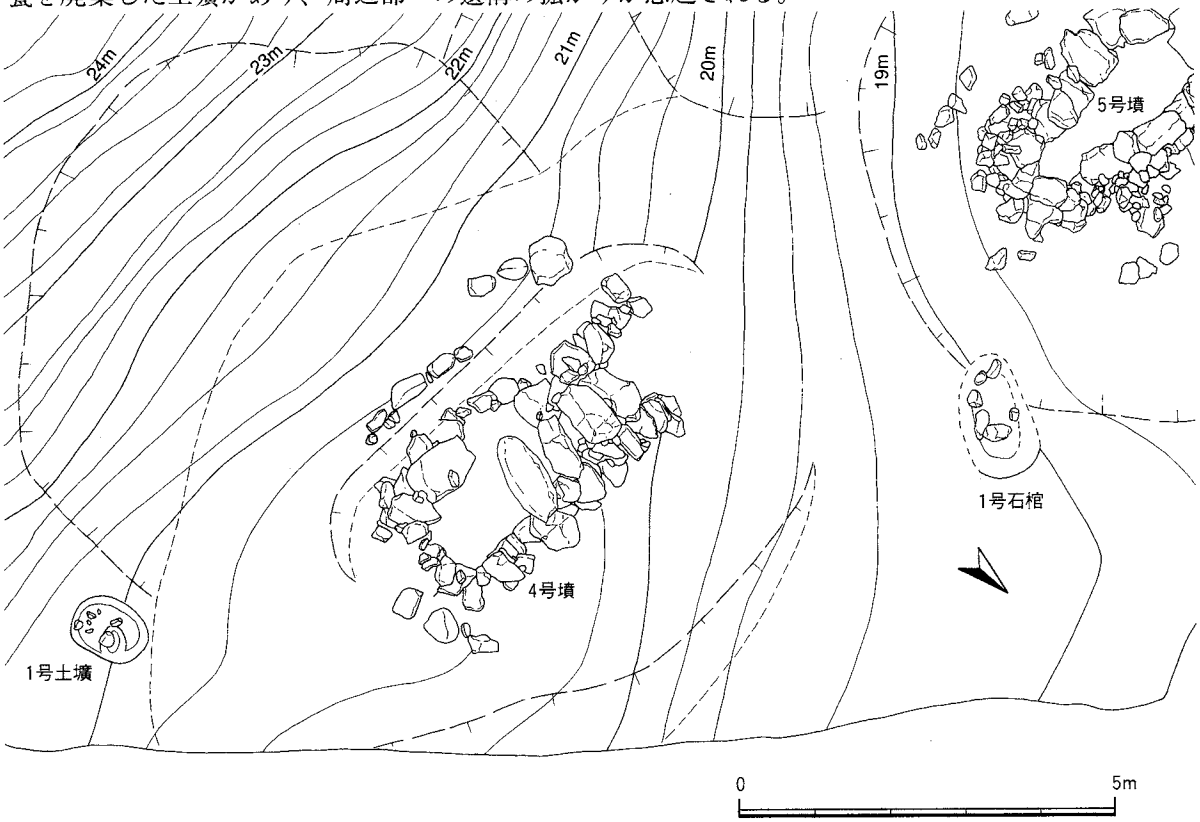


Fig. 5　４号墳 地山整形測量図（1/100）

2．4号墳

(1) 位置と現状(付図)

4号墳は、小山塊から北西にのびる舌状丘陵の東側緩斜面の裾部に占地する。この東側の緩斜面から裾部にかけては6基の円墳が、2基ごとに小群を構成して南北に並んで分布している。4号墳は、舌状丘陵の東側緩斜面の最奥部に占地し、南に開口する墓道には5号墳が墳裾を接する様にして位置している。墳丘は、西から南の後背面が斜面上方からの流土によって埋没し、墳頂との比高差は20～30cmと僅かである。一方、東側は谷の開削により墳裾部を辛うじて残すまでに大きく抉りとられている。石室は天井石が消失し、既に開口していた。また、墓道もほぼ埋没しており、僅かに浅い流路状の落ち込みがみられるほどであった。

(2) 墳　　丘（Fig. 6．7　PL. 4）

地山整形　石室は緩斜面の等高線に沿ってほぼ平行に構築している。従って古墳の構築に伴う地山整形は、南西側の丘陵斜面を馬蹄形に巡る溝の開削と周溝内側の墳丘基底面の整地の2工程からなっている。馬蹄形溝は、南西側の斜面を基底面幅8m、高さ2.5mの半円形に削り出している。溝底は石室の右側壁にむかって1.2～2.5mの幅で80cmほどの比高差をもって緩やかに傾斜し、そこから更に1mほど段状に掘り込んで石室の掘り方としている。奥壁側は緩斜面上にあたるために掘り込みは非常に浅い。石室の基底面は、この掘り方の底面にレヴェルを合わせて石室の形状なりに長さ9m、幅4.5mの楕円形に整形している。そのため谷にむかう北東側は緩斜面の旧表土上に基底面のレヴェルまで盛土して平坦面を造り出している。この平坦面の盛土は、石室の中心から谷にむかって長さ3～3.5m、25～50cmの厚さで地山整形によって削り出した黄褐色粘土を版築状に強く突き固めて造り出している。右側壁と奥壁側の掘り方上縁には大きめの花崗岩礫が内護列石状に巡っている。また、この整形面の大半は花崗岩の路頭で占められ、地山の削り出しは路頭面に沿って浅く行なわれている。

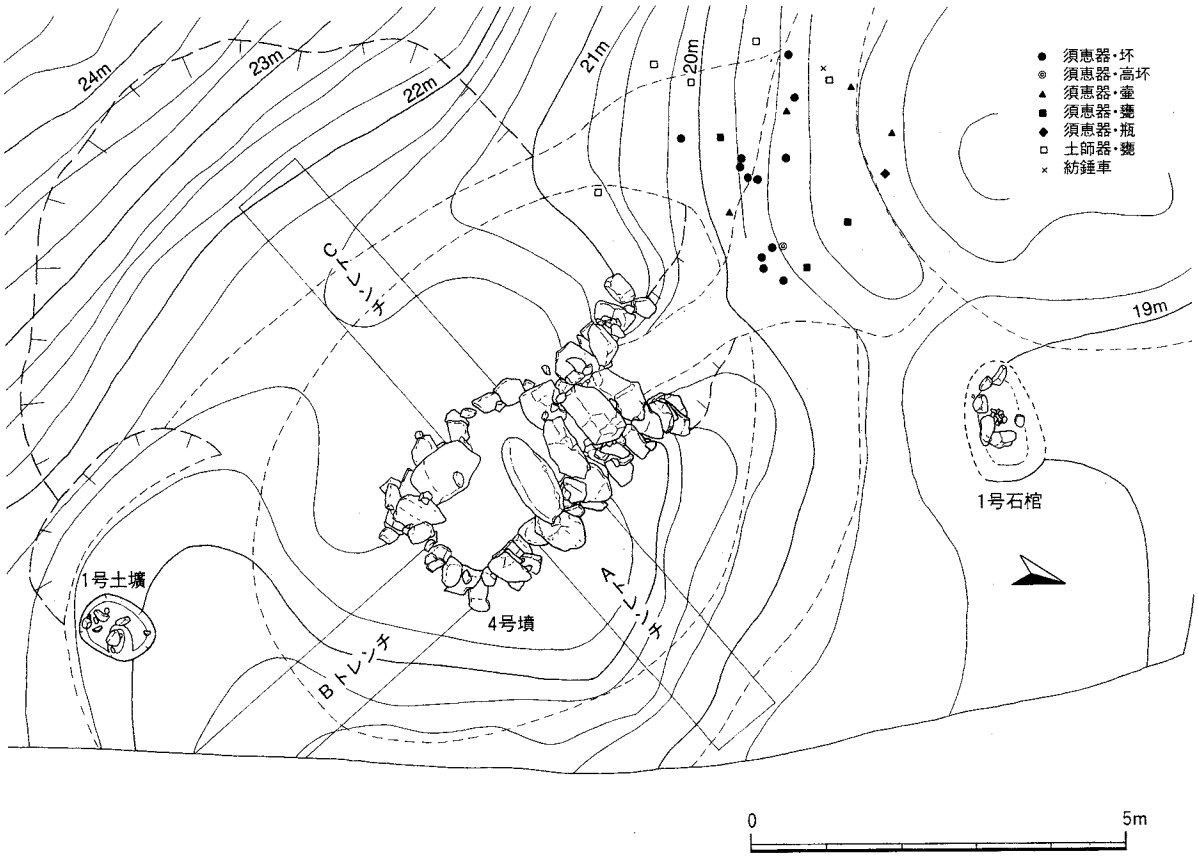


Fig. 6　4号墳 墳丘測量図（1/100）

墳丘　墳丘は、地山整形の裾と石室基底面の整形面端を基底面にして２工程に分けて盛土している。まずはじめに石室の掘り方面まで比較的細かな単位でやや固く叩き絞めて盛土している。これは石室構築時の裏込め的なものとして、壁石の積み上げと平行して一段ずつ強く叩き絞めているために比較的丁寧に盛り上げているが、版築はなされていない。次に壁石上半から墳頂部まで盛土している。しかし、これは天井石の被覆と墳形の整形を主眼としているために層厚に盛土している。そのため墳丘下半部の盛土と比べてやや粗く丁寧さに欠けており、層位的な違いはあまり明瞭ではない。墳丘の整形はこの盛土後になされ、平面形は南北８m、東西６mの楕円形をなす。周溝を含めた規模は南北12m、東西８mの大きさになる。また、墓道からの比高は1.8mで、復原高は2.5mほどになろう。

(3) 横穴式石室（Fig. 8．9　PL. 4）

４号墳の埋葬主体は、主軸方位をN－52°－Wにとる単室の両袖型横穴式石室で、丘陵の斜面に平行して北西に開口する。石室の天井石と左側壁の中央部が腰石を残して抜き取られていた。石室は緩斜面を段状に造成した掘り方内に構築され、羨道前面には直線的な墓道が連接される。羨道部側壁や閉塞石はほぼ完全な形で残っていた。石室各部や閉塞石の石材にはすべて花崗岩を用いていた。

石室掘り方　掘り方は斜面に平行するように掘り込まれている。斜面側の石室右壁側は地山整形面が緩やかに傾斜し、花崗岩の路頭に沿ってやや深く掘り込まれる。一方、谷側の左壁側は地山整形時の排土を強く突き固めて整形面を造り出して石室を構築している。このため奥壁と羨道を結ぶ石室の中央より谷側は掘り方がなく、斜面側のみに石室の形状に沿うような南北に長い楕円形状をなす。

玄室　奥壁幅1.37m、袖部幅1.3m、右側壁長2.3m、左側壁長2.15mを測り、その平面プランはやや歪みのある長方形をなすが、左側壁は玄門の内側への突出が弱く弧状に緩やかに張り出すために片袖状の形状すら呈する。壁体の構築は各壁面に似た手法を用いている。奥壁に２石、側壁に４石のやや大ぶりの転石を縦位に据えて内側を整えて腰石としている。この腰石上には30～70cm大の中ぶり

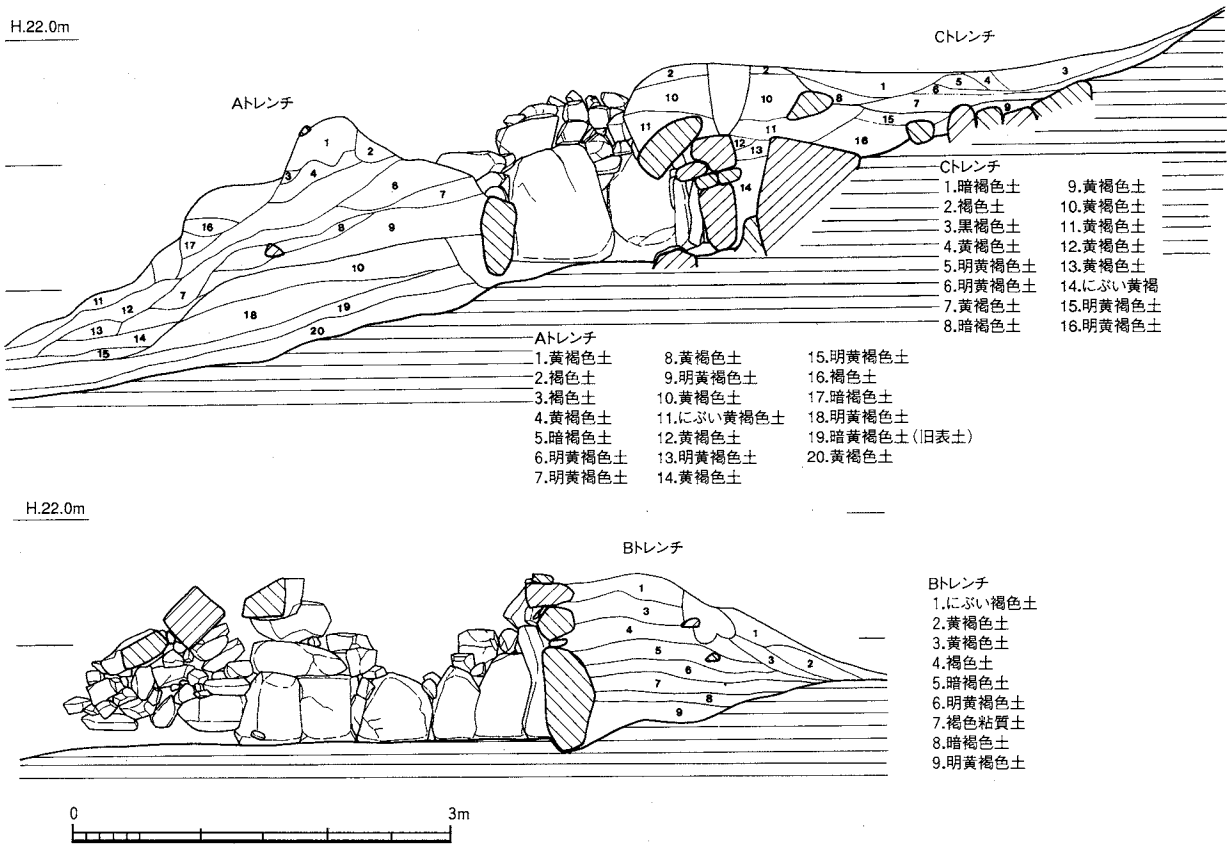


Fig. 7　４号墳 墳丘断面図（1/60）

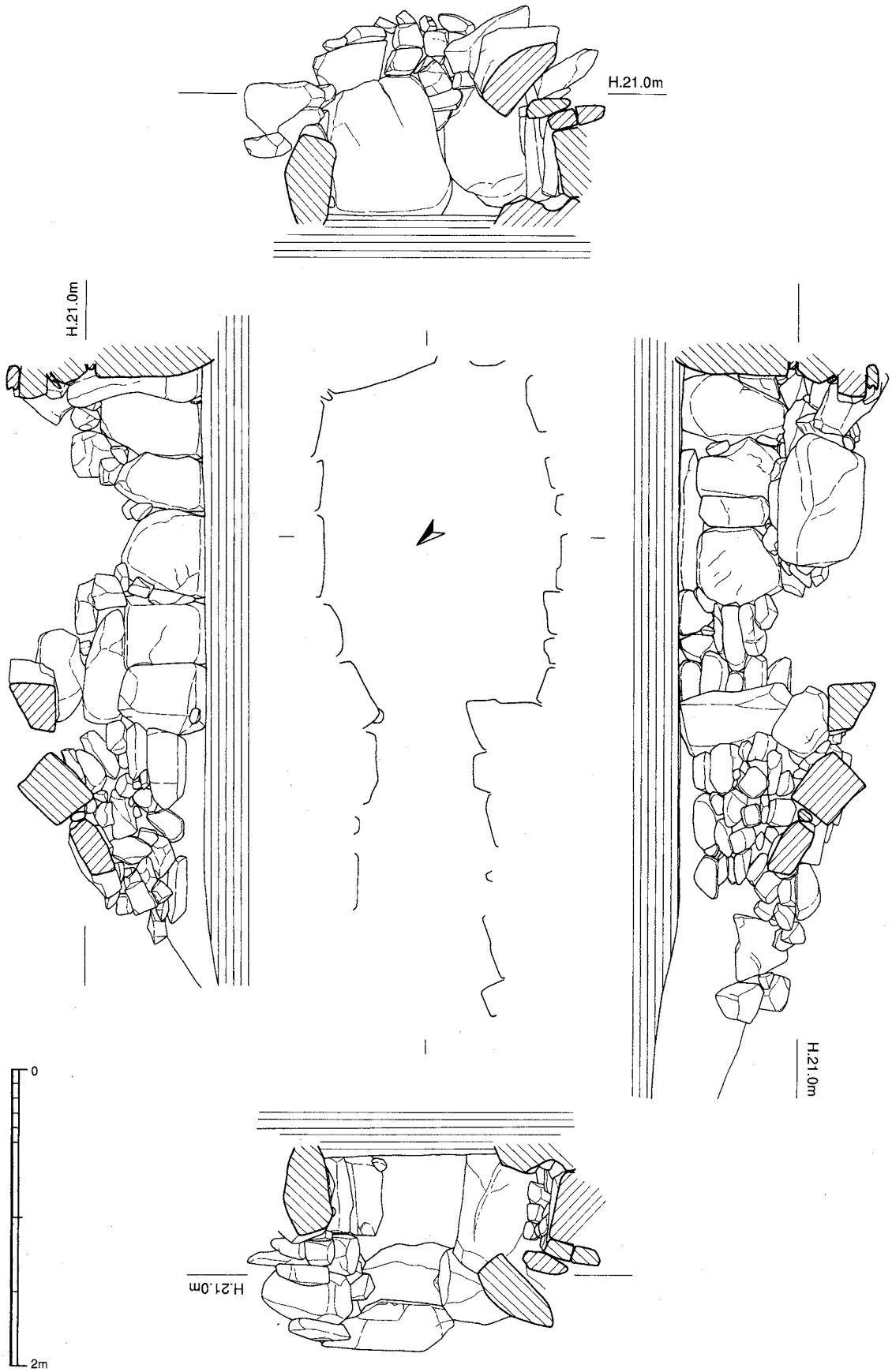


Fig. 8　4号墳 石室実測図（1/40）

の転石をほとんど横積みにしてやや内傾させながら積み上げている。各壁石間の隙間には不揃いな小ぶりの転石が充塡されている。右側壁は中央部に花崗岩の路頭があり、その岩上に腰石を据えている。また、玄門側は大ぶりの縦石ではなく、中ぶりの転石５～６石を目路が通るように横積みしている。天井石は既にないが、周壁の持ち送りの傾斜と玄門上の天井石からみて腰石上に７～８石を積み上げ、その上に平石を架構したものと思われる。床面からの高さは1.5～1.7mほどであろう。

玄門部は素型の両袖を配するだけであるが、左袖石は明確な隅角を造らず縦位の花崗岩を斜めに配して弧状に張り出させており、一見して片袖状にもみられる。この左袖石上には15cmほど引いた所に転石を横積みし、そのまま羨道部へと壁面が続いている。そのために奥壁側からの景観は袖石が突出した棚石状をなしている。右袖石幅は35cm、左袖石幅は45cm、高さは55～90cmで袖石間の幅は55cmを測る。袖石は両側壁より25～50cmほど内側に張り出し、転石を縦位に立てて据えている。

床面は攪乱を受けて相当に荒れていた。右側壁際に小さな転石が散乱しており、敷石を張った可能性もある。床面は中央部が浅い凹レンズ状をなしている。

羨道　右壁長180cm、左壁長120cmで幅は玄門側で65cm、墓道側で80cmを測り、やや末広がり状に幅広になる。壁面は中ぶりの転石を横位に据え、その上に小ぶりの転石を積み上げている。壁面は玄門側で６～８石、墓道側で２～３石を積み上げ、墓道にむかって緩く弧状に傾斜している。天井石は２石あり、玄門より墓道へ１mの距離まで架かっている。床面は浅い凹レンズ状をなし、左壁の途切れる辺りから緩やかに傾斜して墓道へと繋がっている。

墓道　墓道は、羨道の右壁端から１mほど開きぎみにのびて幅2.2m、長さ1.8mほどの前庭部を造る。この前庭部は地山の整形土で５号墳の後背部周溝を埋め、西へ緩やかに傾斜して５号墳の西側周溝へ繋がって谷の開口部へ至っている。

閉塞施設　左右の玄門の間に幅20cm、高さ25cm、長さ75cmの角礫を横に架して框石としている。その框石前面の羨道上には20～30cmのやや偏平な角礫を３～５石ほど積み重ねて玄室との境を塞いでいる。石積みは比較的乱雑で、その隙間には小礫と土を詰めている。天井石との間には15cm程の隙間がある。

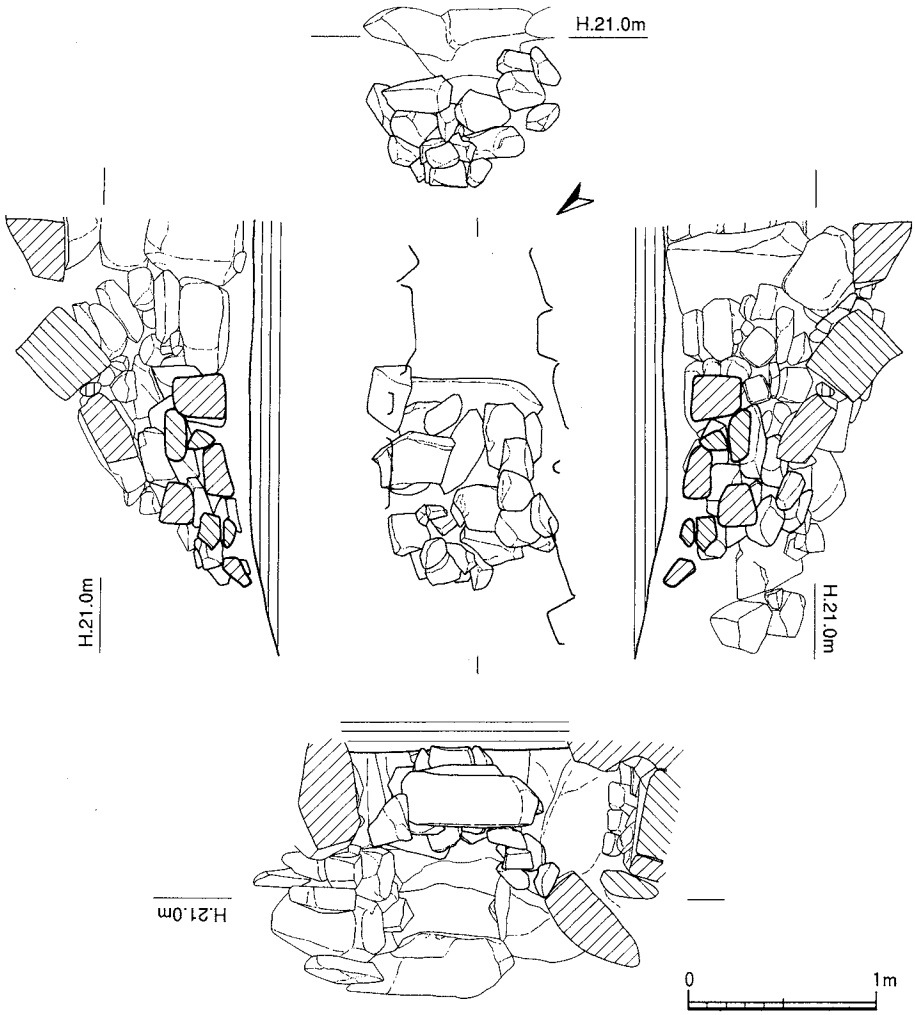


Fig. 9　４号墳 閉塞部実測図（1/40）

(4) 出土遺物

石室内は盗掘を受けており、副葬遺物は数点の須恵器片を除いては何もない。一方、石室前面の墳丘上や周溝内からは須恵器坏や甕・壺・高坏等がまとまって出土している。これに対して後背面の墳丘や周溝からのまとまった出土はない。また、墓道からも帯状に長く拡がって出土しているが、盗掘時に掻き出されたものかとも考えられる。

墓道出土の遺物（Fig.11　PL. 5 .10）

須恵器坏蓋（1）　口径12.4cm、器高3.7cm。天井部はやや丸みをおび、口縁部はストレートに立ち上がる。調整は口縁部がヨコナデ、天井部は外面がヘラケズリ、内面はナデ。胎土は精良で、灰色。

須恵器坏身（2～6）　2は口径11.5cm、器高4.2cm。受け部の立ち上がりはストレートに内傾し、小さく屈曲して直口する口唇部はやや尖る。受け部はわずかに上方に引き出され、底部は緩やかな丸みをもつ。3・4は受け部の立ち上がりが反りぎみに内傾する。受け部の引き出しは小さく、底部は丸みをもつが、3はやや偏平。口径は11.4～12cm。5は口径11.6cm、器高は3.6cm。受け部は水平に

Fig. 10　4号墳 遺物出土状況図（1/30）

摘み出し立ち上がりとの境に浅い凹線が巡る。短く内傾する立ち上がりは基部が肥厚し、端部は小さく摘み上げる。調整は底部がヘラケズリ、口縁～体部はヨコナデ、内底面はナデ。青灰色。6は口径9.8cm、器高3.1cmの小型の坏身。口縁部はストレートに外方に開き、底部は丸くおさまる。調整は口縁部がヨコナデ、底部は外面がヘラケズリ、内面はナデ。胎土は石英と長石を含む。灰色。

須恵器壺(7・8)　7は把手付きの小型壺で口径6.5cm、器高は6.4cm。口縁部は緩やかに外反し、胴部との境に小さな三角凸帯が巡る。偏球形の胴部は明瞭な段が付きその上位に渦巻き状の偏平な把手が縦に付く。把手と胴部の間には薄い粘土紐が融接される。口縁部はヨコナデ、胴部外面はナデ、内面は押圧ナデ。胎土は精良で、灰～暗青灰色。8は胴部最大径が17.4cmの脚台付長頸壺であろう。胴部はやや肩の張った球形で、肩部に1条の浅い凹線が巡る。脚台には3ヶ所に透かし痕がみられる。

須恵器高坏(9)　口径12.3cm、脚部径9cm、器高7.5cm。坏部は体部が直口し、口縁部は丸くおさまる。脚部は短くラッパ状にのび、内弯ぎみに外反する裾部は端部を上方に丸く摘み上げている。坏部上半と脚部はヨコナデ、内底面はナデ調整。胎土は精良で、焼成は堅緻。色調は青灰～灰白色。

墳丘出土の遺物（Fig.12～14　PL.5.10）

須恵器坏蓋(10～12)　天井部が丸みをもつもの（10・11）と平坦なもの（12）がある。10は口径14.7cm、器高4.2cm。体部は内弯ぎみに立ち上がり、口縁部は丸くおさまる。11は口径13.4cm、器高4.5cm。直口して立ち上がる口縁部は端部を小さく摘み出し、内唇は内傾して平坦に整える。体部はヨコナデ、天井部はヘラケズリ、内面はナデ。10は赤焼け。12は口径12.2cm、器高は3.9cm。口縁部は内弯ぎみの体部から直口して立ち上がる。体部はヨコナデ、天井部はヘラケズリ後にナデ。青灰色。

須恵器坏身(13～28)　蓋受けの立ち上がりをもつもの（13～27）とないもの（28）に大別され、更に立ち上がりがストレートに内傾するもの（13～19）と反りぎみのもの（20～27）に細分される。13・14・18・19はストレートに内傾する立ち上がりが短く、底部はやや平坦である。15～17は立ち上がりがやや長く屈曲して直口ぎみにのびる。口径は10～13.4cm、器高は2.9～4.2cm。20～27は立ち上がりが反りぎみに内傾する。体部が膨らみ、底部は丸みをもつが24は比較的平坦で直線的である。受け部は内弯ぎみに上方に摘み出すが、17と23は基部に鋭い凹線を巡らす。24は焼成時に被せていた蓋の口縁部が誘着している。19・22・24には底部にヘラ記号がある。口縁部～体部がヨコナデ、底部はヘラケズリ、内底面はナデ調整。灰～濃青灰色。28は体部が緩やかに屈曲してストレートにのびる。内唇に弱い段がつき、底部は丸い。口径10.3cm、器高は3.5cm。体部がヨコナデ、底部は回転ヘラケズリ。

高坏(29.30)　29は口径11.8cm。体部は緩く屈曲してストレートに外傾する。底部と体部の境と体部下半に凹線が巡る。ヨコナデ調整。30は口径10.8cm、坏部高は8.5cmの碗状の高坏。体部は緩やかに膨らんで立ち上がり、直口ぎみの口縁部は小さく外反する。体部の上下段には各2条の凹線が巡る。体部はヨコナデ、外底面はカキ目調整。

台付壺(31)　口径5.4cm、脚径5.6cm、器高6.8cm。胴部は偏球形状に小さく膨らみ、上位に1条

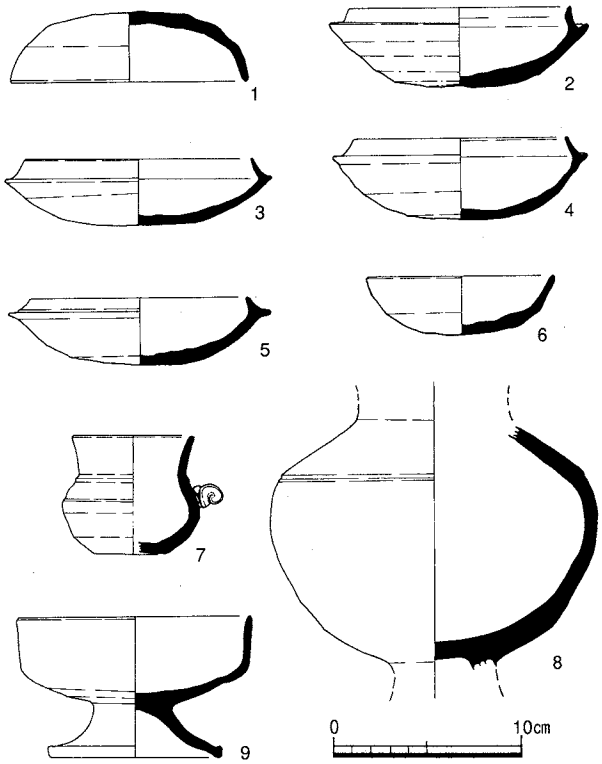


Fig.11　4号墳 墓道出土土器実測図（1/4）

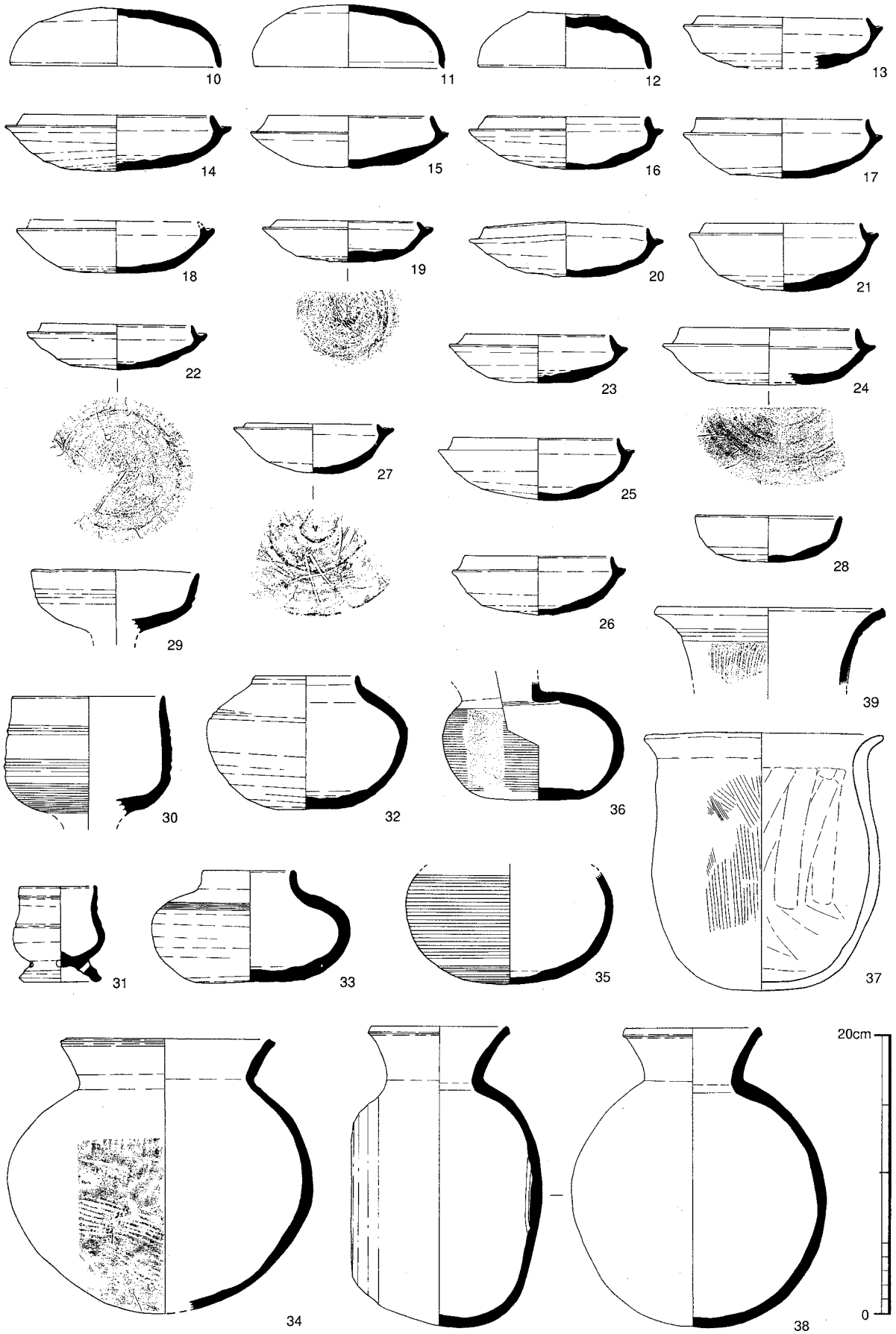


Fig. 12　4号墳 墳丘出土土器実測図１（1/4）

の浅い凹線が巡る。口頸部は僅かに外反し、屈曲部と口縁下には摘み出した細い凸帯が巡る。脚部は短く、中位で屈曲して明瞭な段を造る。脚の接合部には4ケの円孔を穿つ。内底面は中央が突起状に盛り上がる。底部がナデのほかはヨコナデ。灰色で、一部に灰釉がかかる。

須恵器小型壺(32～35)　32は口径7.2cm、器高9.4cm。口縁部は短く内傾する。胴部は肩の張った偏球形で肩部に1条の浅い凹線が巡る。口縁下には焼成時に被せた蓋の粘土痕が残り、胴部には灰釉がかかる。灰～濃灰色。33は口径6.8cm、器高7.9cm。口縁部は短く直口する。胴部は肩の張った楕円形をなす。底部がヘラケズリのほかはヨコナデで、肩部にはカキ目が残る。外面は灰赤色、内面は暗青灰色。35は胴部最大径が14.8cm。外面にはカキ目調整を施し、提瓶か。暗青灰色。34は口径15.3cm、器高が19.5cmの中型壺。口縁部は強く屈曲して「く」字状に短く外反し、平坦な端部は外唇に浅い凹線が巡る。胴部は薄く、球形をなす。胴部外面は平行叩き後に粗いカキ目、内面は叩き後に押圧ナデ調整。灰～濃灰色。

須恵器平瓶(36)　胴部は肩の張った偏球形で、口頸部は上面の中心から外れて接合される。外面はカキ目、内面は押圧後にヨコナデ。底部はヘラ後にナデ調整。色調は濃灰～灰紫色。

須恵器提瓶(38)　口径9.8cm、器高21.2cm、胴部径18cm、胴部高13.4cmの提瓶で、長頸壺の肩部に 短い口頸部を付したものである。そのために胴部は前面が緩やかな丸みをもつ。背面は壺の底部にあたりヘラケズリで平坦に整える。口頸部は胴部の肩から立ち、緩やかに屈曲して外反する。口頸部がヨコナデ、胴部はナデ、内面は叩き痕が僅かに残る。外面は灰色、内面は濃灰～灰紫色。

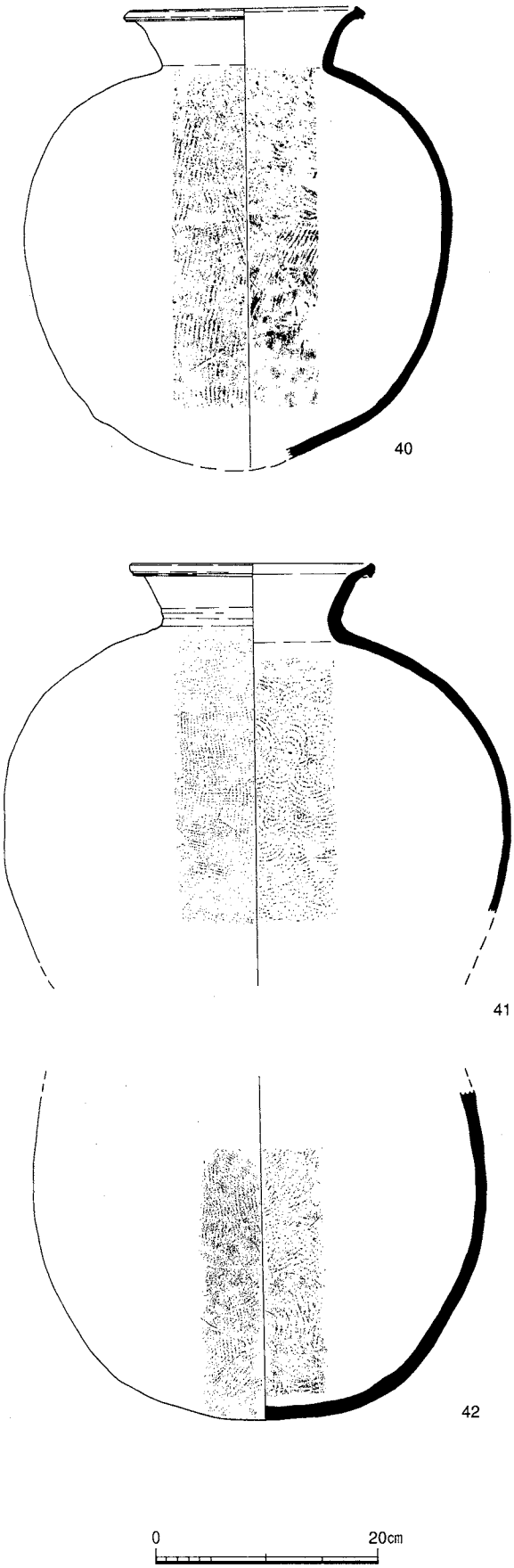


Fig. 13　4号墳 墳丘出土土器実測図2 (1/6)

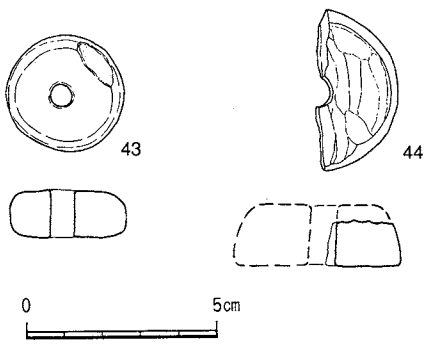


Fig. 14　4号墳 出土石器実測図 (1/2)

須恵器小型甕(39)　口径16.4cm。口縁部は緩やかに外反し、上唇を僅かに摘み上げている。頸部の上縁には２条の浅い横凹線を巡らし、その下にヘラ描き文を縦方向に施す。胎土は精良で微細砂粒と雲母微細を僅かに含み、焼成は堅緻。外面は濃灰色、内面は灰色。

須恵器中型甕(40～42)　40は口径21.8cm、器高は42cmになろう。頸部は短く外反し、小さく外傾する口縁部は内唇を鋭く摘み上げ、外唇には浅い横凹線が巡る。胴部はやや肩の張った球形をなす。口頸部がヨコナデ、胴部は外面が平行叩き後に粗いカキ目調整。内面は上半に青海波文、中位に平行叩き痕が残る。41は口径21.1cm。頸部は短く外反し、小さく屈曲した口縁部は内唇を僅かに摘み上げて丸くおさめ、外唇は嘴状に下方に摘み出す。球形の胴部は格子目風の叩き後に平行叩きを加え、内面には青海波文の当具痕が残る。42は球形の胴部下半。調整は外面が格子目風の叩き後に粗いカキ目、内面には青海波文の当具痕が残る。いずれも胎土は精良で、焼成は堅緻。色調は黒灰色～青灰色。

土師器甕(37)　口径16.9cm、器高は18.2cm。口縁部は緩く屈曲して「く」字形に短く外反する。胴部は丸みの少ない長胴状で、底部は丸底ぎみ。調整は口縁部がヨコナデ、胴部外面は粗いハケ目、内面はヘラケズリ。外面には煤が付着している。胎土は良質で細～小砂粒と雲母微細を含む。赤橙色。

紡錘車(43.44)　いずれも滑石製である。43は、径3.1cm、厚さは1.3cmで、径６mmの円孔は軸心よりやや片寄る。外縁は両面から丁寧に研磨して丸く研ぎ込んでいる。44は半欠品であるが、径は4.4cm 、厚さは2.1cm、孔径は７mmになろう。外縁はやや丸みをもち、断面形は台形をなす。

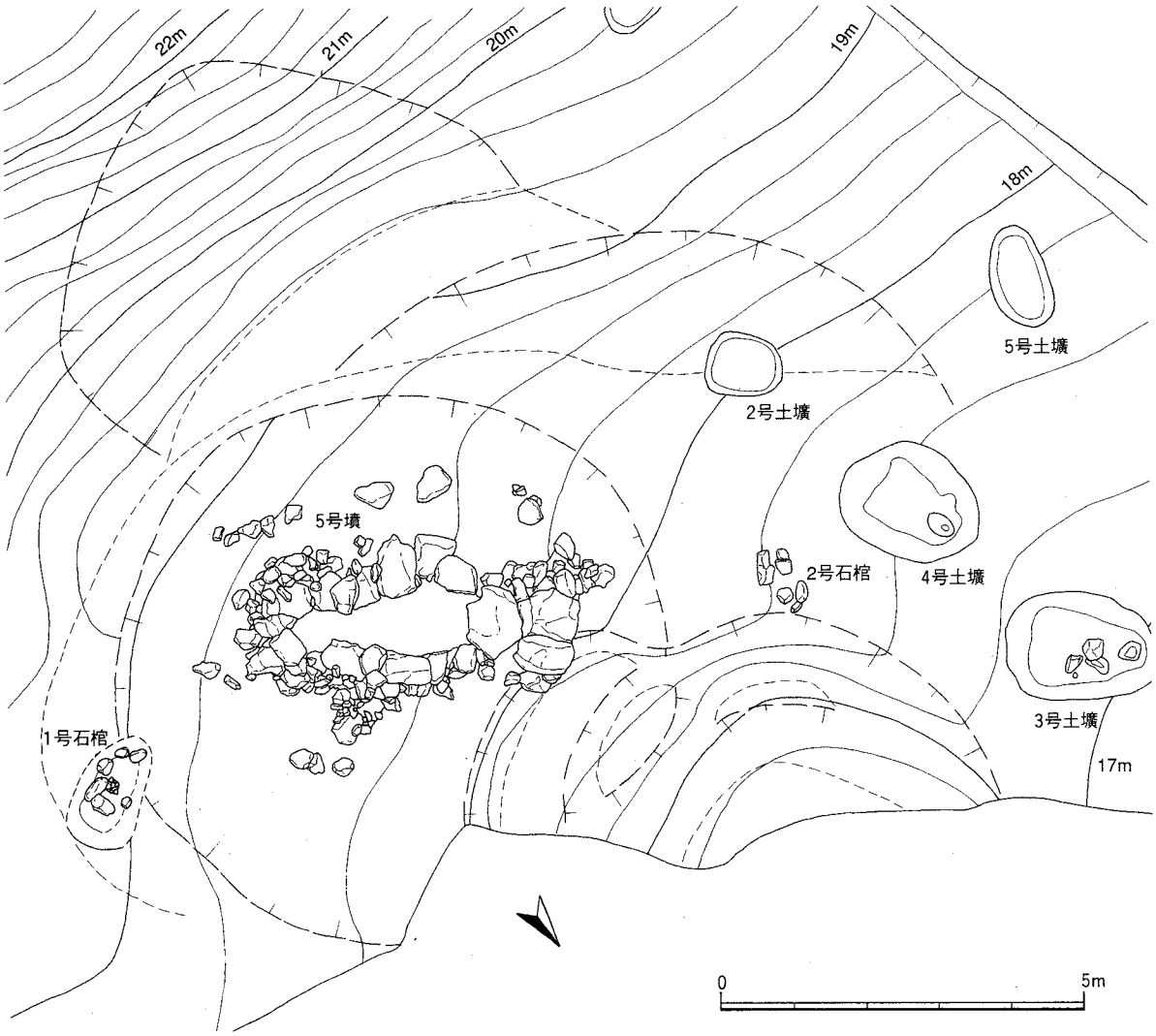


Fig. 15　５号墳 地山整形測量図（1/100）

3．5号墳の調査

(1) 位置と現状（付図）

5号墳は、舌状丘陵の東側斜面の裾野部に占地する。この丘陵の東側には6基の円墳が2基ごとに小群をなして分布しており、5号墳は4号墳と並んで谷奥に一群を構成する。5号墳は谷の出口に近く、東南方の谷奥には4号墳が周溝を接して位置している。墳丘は、南西側の斜面と谷奥からの流土で後背面は埋没していた。一方、谷に面した北側は調整池の造成で墳丘の一部が大きく抉り取られていた。石室は天井石が抜き取られて既に開口していたが、墓道はほとんど埋没していた。

(2) 墳　　丘（Fig.15～17　PL.6）

地山整形　古墳は丘陵斜面の等高線にほぼ沿うようにして石室を構築している。従って古墳構築のための地山整形は、南側の丘陵斜面を石室の右壁に沿うように半円形に削り出して馬蹄形溝を造る開削と墳丘基底面の整地の2工程からなる。はじめに南側の緩斜面を基底面幅7m、高さ3mの半円形に削り出し、裾部に1mほどの平坦面を造りその西側を更に大きく弧状に削り出している。この整形面の北側に直径が7.5m、深さが25cmの凹レンズ状の円形土壙を掘り込んでいる。この土壙上に墳丘を盛土することによって結果として馬蹄形溝が造り出される。次に、この円形土壙の上端まで削り出した黄褐色土で強く突き固めて盛土し、平坦な整地面を造り出している。石室の基底面は、この整地面の中心に盛土上から地山面まで50～80cmほど掘り抜いて造り出している。

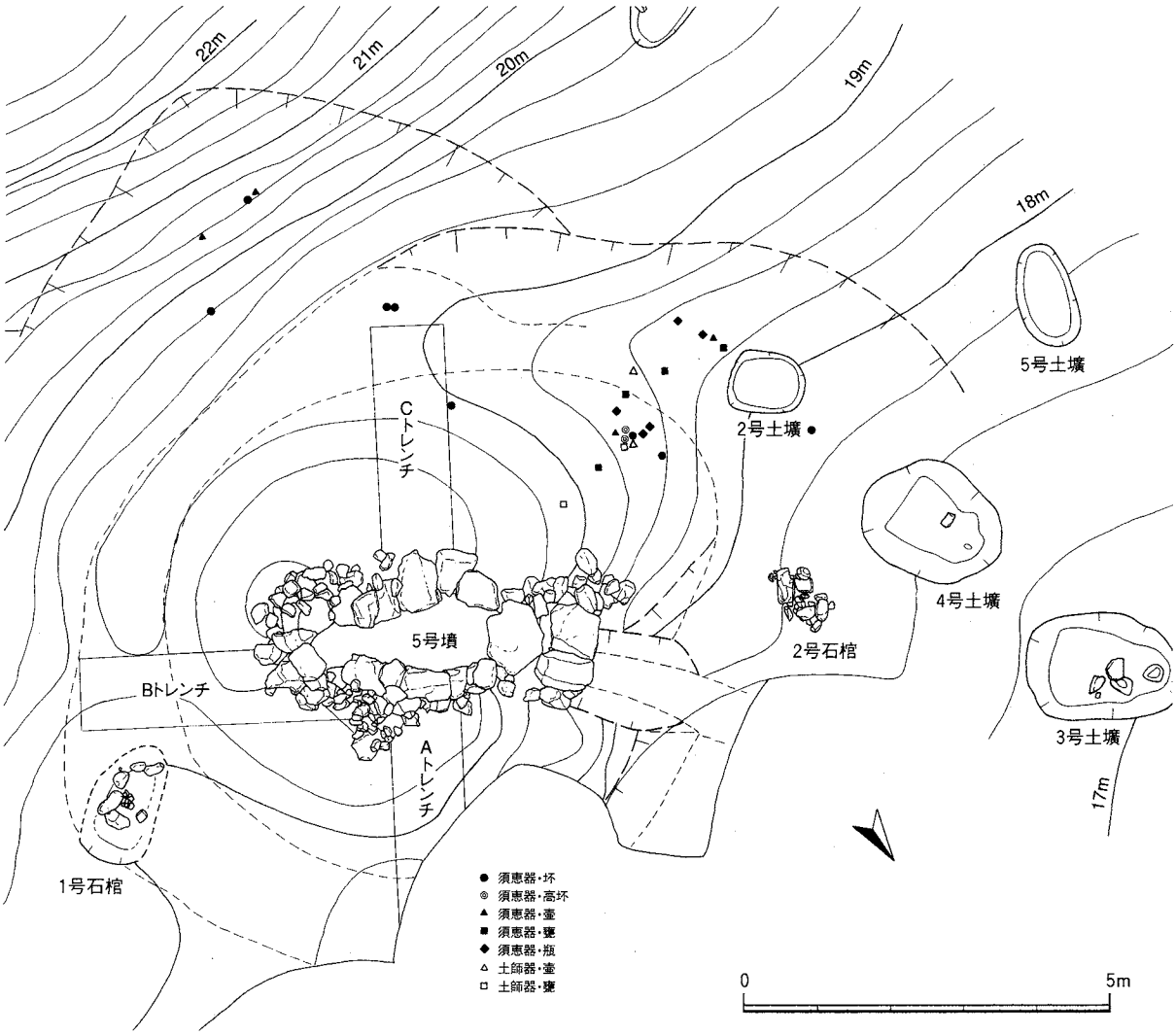


Fig.16　5号墳 墳丘測量図（1/100）

墳丘　墳丘は、周溝内側の整地面を基底面として盛土を行なっている。はじめに整地面から掘り込んだ石室掘り方内に据えた腰石の安定後の壁石の積み上げに平行して丁寧に固く叩き絞めて盛土している。次に壁石上半から墳頂部まで天井石の架構と被覆を主眼として層厚に盛土し、その後に墳丘の平面形を整えたものと思われる。そのため基底面や墳丘下半部の盛土と比べてやや粗く、層位的な違いもあまり明瞭ではない。墳丘の平面形は、直径が7.5mのほぼ正円形をなし、周溝を含めた規模は径９ｍになる。また、墳丘の高さは後背面が60cm、墓道からの見かけの高さは２ｍになる。

(3) 横穴式石室（Fig.18　PL. 6）

５号墳の埋葬主体は、単室の片袖型横穴式石室である。石室は地山整形によって造り出された整地面のほぼ中央に主軸方位をＮ－51°－Ｗにとって構築され、４号墳とほぼ同軸線上に並んでいる。石室は長方形の玄室に左壁に片寄って羨道を連接するもので、石室全長は左壁で3.6m、右壁で４ｍを測る。閉塞部はほぼ完全に残っており、石室各部の石材は花崗岩を用いている。石室は天井石が抜き取られ、玄室内は盗掘を受けており副葬遺物は何もなかった。

石室掘り方　掘り方は半月形に削り出した地山整形面の東側に掘り込んだ円形土壙のほぼ中央部に斜面に平行して掘り込んでいる。はじめに直径7.5mの浅い円形土壙を掘り、この土壙上に斜面裾のレヴェルまで削り出した排土を強く突き固めて整形面を造る。次にこの整形面のほぼ中央に長方形の竪穴を掘り込んで墓壙としている。掘り方は整形面を掘り抜いて地山面にまで達し、更にその内縁には石室の腰石を安定させる浅い溝状の掘り込みがある。

玄室　奥壁幅115cm、袖部幅115cm、左右の壁長260cmを測る長方形プランをなし、左壁がわずかに膨らむ。壁体の構築法は各壁ともにほぼ同じである。60～90cmの大ぶりの割石か面を整えた転石を奥壁に２石、右壁に３石を横位に配して腰石とするが、左壁は縦位に配するため６石を並べている。腰

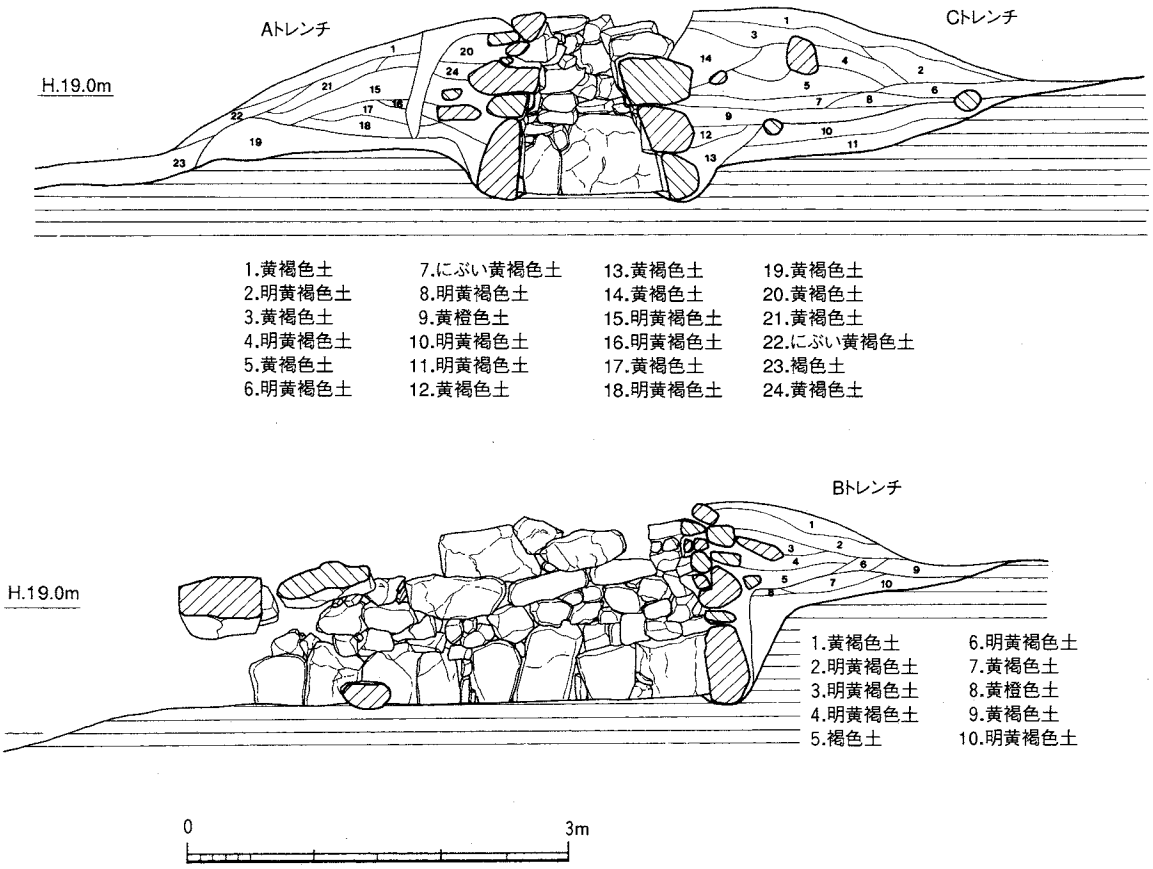


Fig. 17　５号墳 墳丘断面図（1/60）

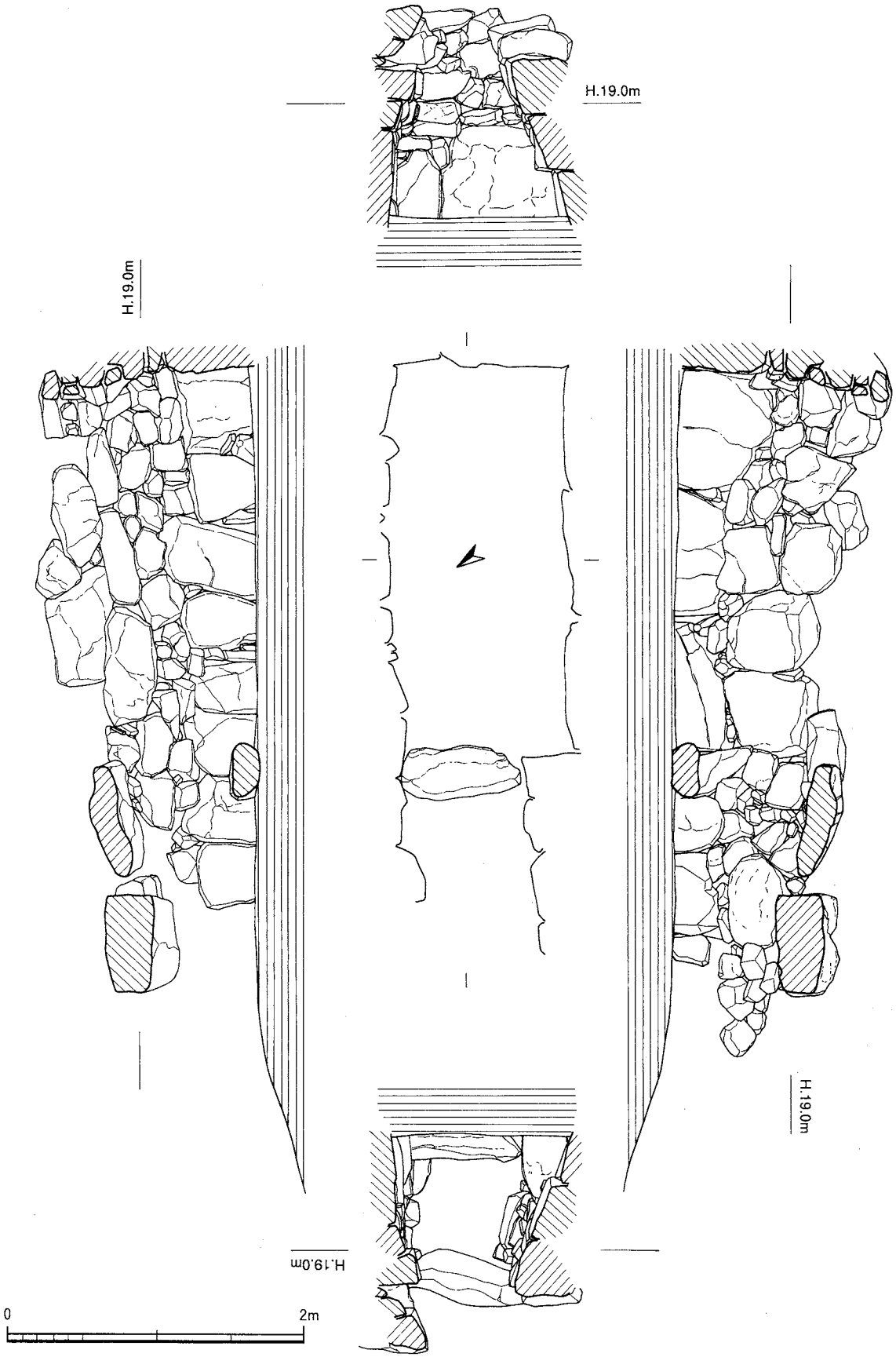


Fig. 18　5号墳 石室実測図（1/40）

石上はやや小ぶりの転石を水平方向に目路が通るように3～4段横積みにしている。更にその上半は天井まで中～大ぶりの転石を横位に持ち送って積み上げている。ただし、右壁の袖石側は腰石上に大ぶりの転石や割石を積み上げている。壁体は20～25°の傾斜をもって持ち送る。

玄門は右壁のみに配する片袖型で、左壁はそのままの壁体構造で羨道へと続く。右袖石の幅は30cmで、側壁より35cm内側に張り出す。袖石には未加工の花崗岩を用いて縦位に据えている。

床面はほぼ平坦で、敷石の布設はなされていない。

羨道　右壁長140cm、左壁長は85cmで、左壁が短いが天井石は左壁の途切れた上にも架かり、本来は左右長ともに同じであったと考える。石積み法は両壁とも玄室の壁体構築法の延長上にあり、同じように腰石を配し転石を横積みにして構築している。床面は平坦で、墓道にむかってわずかに傾斜し、右壁面の途切れる辺りから急速に傾斜して墓道へと続く。袖石部には細長の框石を据えている。

墓道　羨道から連接して緩やかな弧を描いて谷にむかってのびる。床面は凹レンズ状の断面形をなし、羨道の右壁端辺りから急速に傾斜して下っている。開口部は調整池の造成によって既に消失しているが、現存長は150～180cmを測る。

閉塞施設　框石の端から羨道壁端までの羨道全域をやや偏平な角礫を積み重ねて塞いでいる。はじめに框石の前面に偏平な中ぶりの角礫を2石敷き、その前石の上面にやや大ぶりの偏平な角礫を積み重ねている。この転石の前後に小～中ぶりの礫を2～4段積み重ねている。床面からの高さは50cmで、天井石との間には約20cmの隙間がある。石材はすべて花崗岩である。

(4) 出土遺物

石室内は完全に盗掘を受け、数点の須恵器片を除いて副葬遺物は検出されなかったが、細片の中には墓道に掻き出された遺物と接合するものもある。一方、石室北西側の墳丘（IV区）からは須恵器の坏や壺等がまとまって出土している。また、南西側の墳丘裾や周溝内からも出土しているが、これらの多くは4号墳の墳丘に供献されたものの流入と考えられる。

墓道出土の遺物

(Fig.21　PL.7.10)

須恵器坏蓋(45)　口径10.4cm、器高は2.2cm。天井部は平坦で、ストレートにのびる。

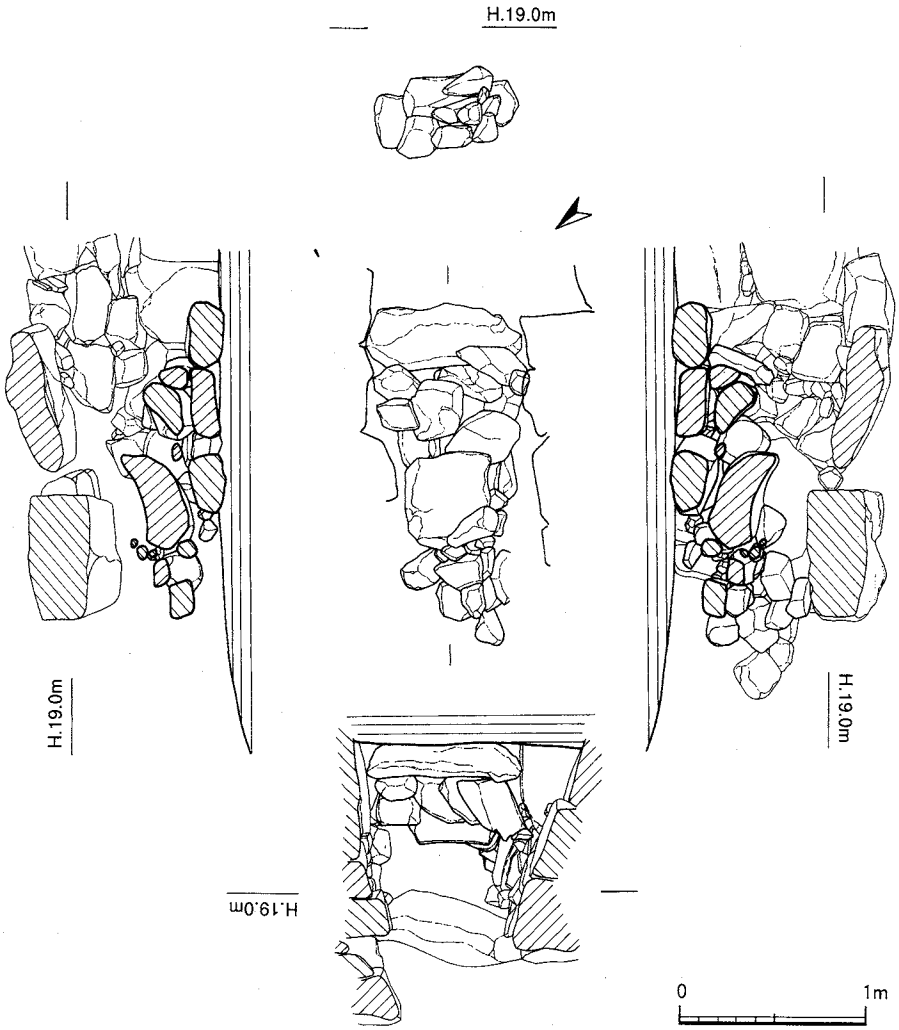


Fig.19　5号墳 閉塞部実測図（1/40）

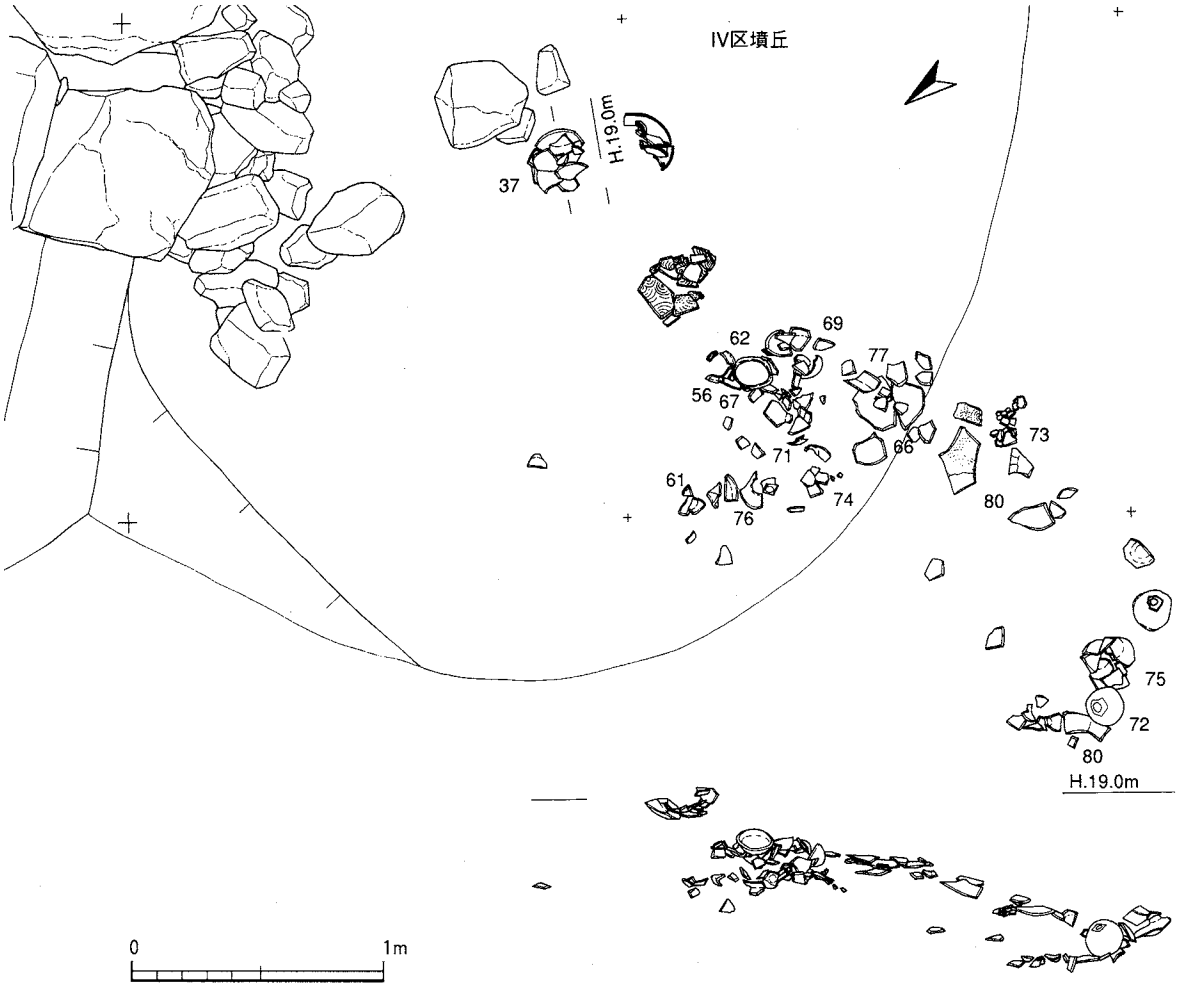


Fig. 20　5号墳 遺物出土状況図（1/30）

身受けの返りは低く内傾し、口縁部より内面に小さく張り出す。濃灰色。

須恵器坏身(46・47)　46は口径11.5cm、器高2.8cm。口縁部は内弯ぎみに立ち上がる体部から小さく屈曲して短く直口し、端部を僅かに摘み出す。体部～口縁部がヨコナデ、底部はナデ。茶灰色。47は口径9.7cm、器高3.3cm。内傾する立ち上がりは小さく屈曲して直口し、受け部は短く上方に引き出す。底部は丸く体部との境に小さな段を造る。底部がヘラケズリ、内底面がナデ。底面にはヘラ記号がある。

須恵器高坏(48)　坏部は底部と体部の境に段を造り、体部は内弯ぎみに立ち上がる。体部下位には低い凸帯状の段が２条巡り、その間にヘラ工具による斜めの刺突文を施文する。脚裾部には１条の凹線が巡り、端部は小さく上下に摘み出して平坦に整える。中位には２条の凹線が巡り、その上下には幅５mmの透かしがはいる。胎土には細～小砂粒と雲母微細を含む。灰色で、坏部には灰釉がかかる。

土師器高坏(49)　短くストレートにのびる脚部で、中位に縦長の透かしがはいる。外面は縦方向の粗いヘラ研磨、内面はナデ調整。胎土には小砂粒と雲母を含み、焼成は良好。色調は暗赤褐色。

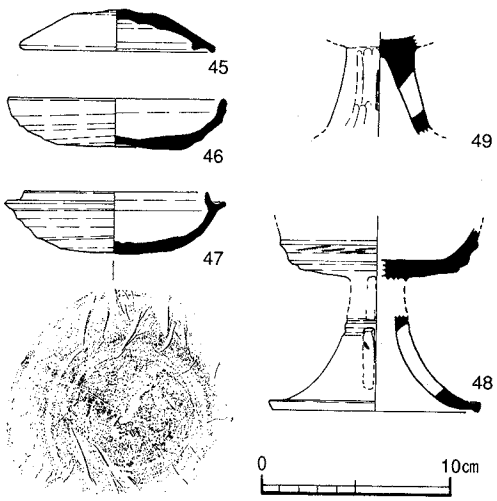


Fig. 21　5号墳 墓道出土土器実測図１（1/4）

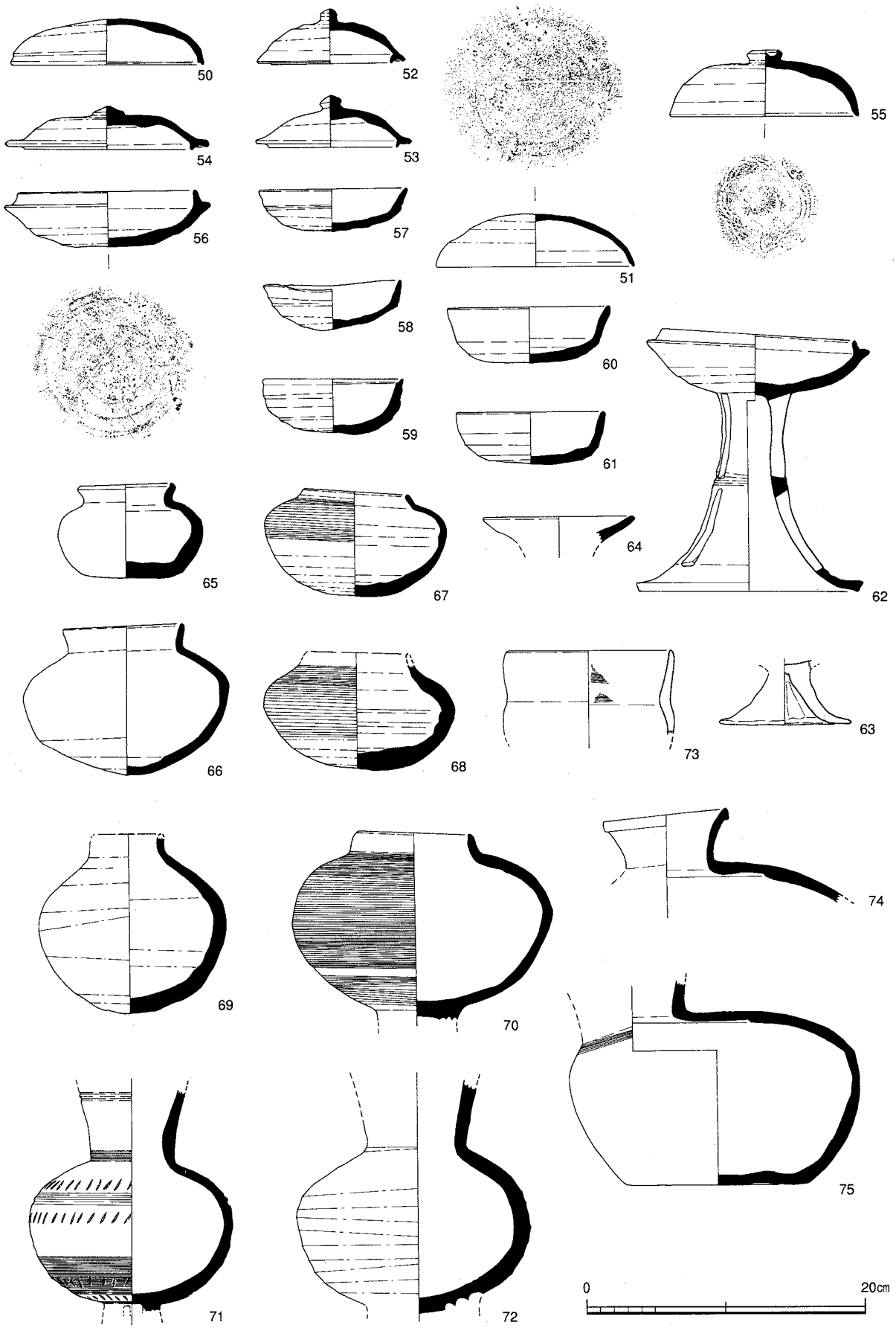


Fig. 22　5号墳 墳丘出土土器実測図1 (1/4)

墳丘出土の遺物（Fig.22～25　PL.7.10）

須恵器坏蓋(50～55)　天井部に摘みがつくもの（52～55）とないもの（50・51）がある。50は口径13.7cm、器高3.4cm。天井部はやや偏平で低く、直口ぎみに立ち上がる口縁部は内唇に段を造る。胎土は精良で、焼成は堅緻。濃青灰色。51は口径14cm、器高3.8cm。天井部は丸みをおびてやや高い。体部は中位に緩やかな段を造って内弯ぎみに立ち上がり、口縁部は内唇に小さな段を造る。天井部にヘラ記号がある。青灰色。52と53は丸い天井部に宝珠形の摘みがつき、身受けの返りは低く反りぎみに内傾する。52は口径8.4cm、器高は3.9cm。胎土は良質で細～小砂粒を含む。淡青灰色。53は口径9cm、器高3.7cm。胎土は微細砂と雲母微細を僅かに含み、灰色。54は口径11.8cm、器高は3.2cm。天井部は低く平坦で、身受けの返りはストレートにのびた体部から短く内傾する。低い天井部には偏平な摘みが付く。調整はいずれも天井部がヘラケズリ、内底面がナデのほかはヨコナデ。55は口径13.6cm、器高は4.9cm。天井部は平坦でやや丸みをもち、口縁部は内弯ぎみに立ち上がる体部からストレートにのびる。偏平な摘みは中央が突起状に張り出す。調整は体部がヨコナデ、天井部はヘラケズリで、内底面には青海波文の叩き痕が残る。胎土は良質で細～粗砂粒を含み、焼成は良好。淡～濃青灰色。

須恵器坏身(56～61)　蓋受けの立ち上がりのあるもの（56）とないもの（57～61）に大別される。56は口径12.7cm、受け部径14.6cm、器高は3.9cm。立ち上がりは直口ぎみに僅かに内傾し、受け部は短く水平にのびる。浅い底部には「×」印のヘラ記号を施文する。体部～口縁部がヨコナデ、底部はヘラケズリ、内底面はナデ調整。胎土には細～小砂粒と雲母微細を含み、焼成は堅緻。外面は灰色、内面は灰紫色。57～61は口径が9.8～11.6cmと小さく、体部は底部との境が緩く屈曲して立ち上がる。57は口径10cm、器高3.1cm。底部と体部との境には段を造り、ストレートに立ち上がる体部の中位には1条の浅い凹線が巡る。58は口径9.8cm、器高3.4cm。体部はやや丸い底部との境に緩い凸帯様の段を造り、口縁部はストレートに立ち上がる。59は口径10cm、器高4cm。底部と体部との境には段を造り、体部は内弯ぎみに立ち上がる。口縁部は外唇を小さく摘み出し、内唇に明瞭な段がつく。60は口径11.6cm、器高は3.9cmで、体部は反りぎみに立ち上がる。61は口径10.3cm、器高は3.8cmを測り、体部は直口ぎみに立ち上がる。調整はいずれも口縁～体部がヨコナデ、底部はヘラケズリ、内底面はナデ仕上げ。胎土は細～小砂粒と雲母を含むが良質で、焼成は堅緻。色調は灰色。

須恵器高坏(62)　口径14cm、脚径16.2cm、器高18.9cm。坏体部は緩やかに膨らんで立ち上がり、受け部は水平に小さく摘み出す。返りはストレートに内傾する。脚部は細長で大きくラッパ状に開き、端部は上下に摘み出す。脚筒部の中央には2条の凹線が巡り、それを挟んだ上下に細い透かし孔を三

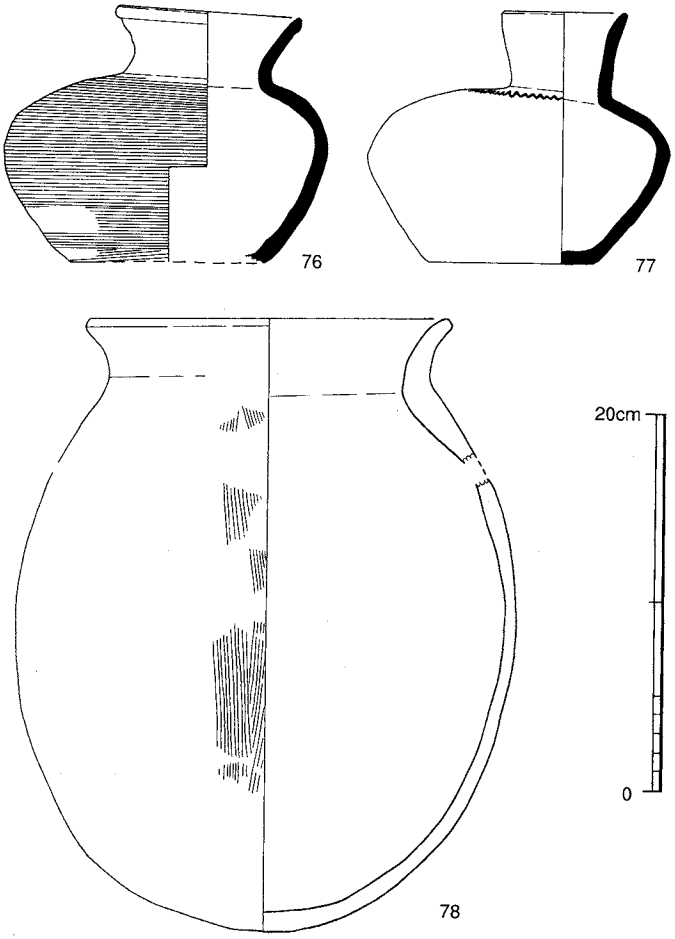


Fig.23　5号墳 墳丘出土土器実測図2（1/4）

方に配する。また、脚裾部にも浅い２条の凹線が巡る。調整は坏体部下半がヘラケズリのほかはヨコナデ。胎土は精良で少量の砂粒を含み、焼成は堅緻。淡青灰色。

須恵器瓶(64)　口径10.8cm。口縁部は内弯ぎみに大きく外反する。胎土は精良で微細砂と雲母微細を含み、焼成は堅緻。内面が灰紫色、外面は赤紫色。

須恵器小型壺(65～69)　65は口径７cm、底径6.3cm、器高6.7cm。短く外反する口縁部は端部を内に小さく摘み出す。胴部は肩の張った偏球形をなし、底部は厚い平底。口縁部はヨコナデ、胴部～内底面はナデ調整。胎土は精良で焼成は堅緻。青灰色。67・68は口縁部が短く内傾し、胴部が肩の強く張った偏球形をなすものである。胴部外面はカキ目調整、内面には粘土の継目が明瞭な段を造る。胴部下半はヘラケズリ。胎土は砂粒を含み、灰色。66は口径8.6cm、器高10.5cm。口縁部は短くストレートに外傾する。胴部は肩の張った偏球形で底部は尖底状をなす。口縁部～胴部中位はヨコナデ、胴部下半はヘラケズリ、内底面は押圧ナデ。胎土は良質で少量の砂粒を含み、淡青灰色。69は口径５cm、器高は13cmになろう。口頸部は短く 直口して立ち上がり、胴部は球形をなす。底部は厚い丸底。口頸部はヨコナデ、胴部は外面がヘラケズリ、内面はナデ。灰色。

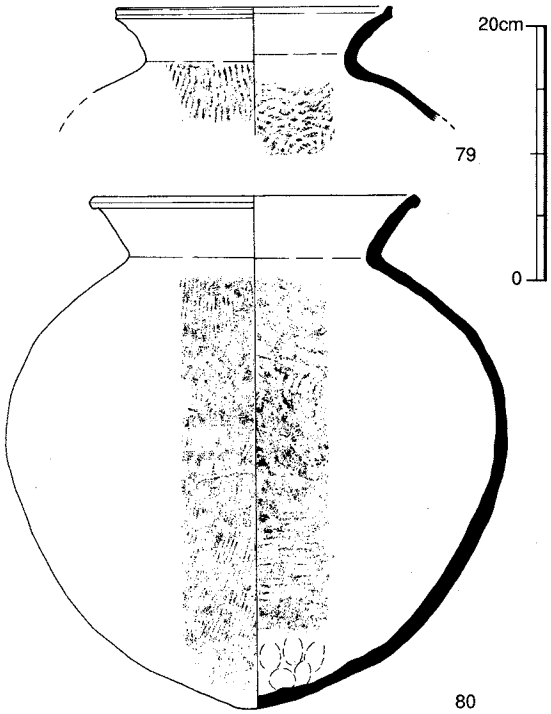


Fig. 24　５号墳 出土土器実測図３（1/6）

須恵器台付壺(70～72)　70は口径８cm。口縁部は短く反りぎみに内傾し、胴部は肩の張った偏球形。口縁部がヨコナデ、胴部は外面がカキ目、内面はナデ仕上げ。胎土は良質で細～粗砂粒を多く含み、青灰色。71・72は口頸部が細くラッパ状に外反し、胴部は球形をなす。71は頸部に２条の凹線が巡る。胴部の肩と下位にも各々２条の凹線が巡り、それを挟んでヘラ先による条線を施文している。脚台には３ヶ所に透かしがある。頸部下端と胴部下半がカキ目、胴部内面がナデのほかはヨコナデ。72は胴部外面をヘラケズリで調整して器面を研ぎだす。胎土は細～粗砂粒を含み、青灰色～灰紫色。

須恵器平瓶(74～77)　口縁部がラッパ状に小さく外反するもの（74・76）と漏斗状のもの（77）がある。胴部は肩の張った偏球形をなし、底部は平底。74は口径９cm。口縁部は外唇を摘み出して平坦に整える。76は口径10cm、器高13.7cm。口縁部外唇は小さく摘み出して丸みをおびる。77は口径6.8cm、底径8.9cm、器高13.5cm。胴部上縁にはヘラ工具による鋸歯状の山形文が巡る。調整は口頸部がヨコナデ、胴部はカキ目、胴部内面と底部はナデ。胎土は精良で色調は灰～青灰色。

須恵器中型甕(79・80)　79は口径22.5cm。頸部は短く外反し、端部を小さく摘み上げた口縁部は、外縁が浅い横凹線状をなす。胴部はやや肩の張った球形をなそう。口頸部がヨコナデ、胴部は外面が平行叩き目、内面には青海波文が残る。灰～青灰色。80は口径26.2cm、器高40.5cm。口頸部は短くストレートに外反し、端部は外唇が凸帯状に厚く張り出す。胴部はやや肩の張った球形で底部は尖底状をなす。口縁部がヨコナデ、胴部は外面が平行叩き後に粗いカキ目。内面は上半に青海波文、下半は平行叩き目で底面に指頭押圧痕が残る。色調は黒灰色。

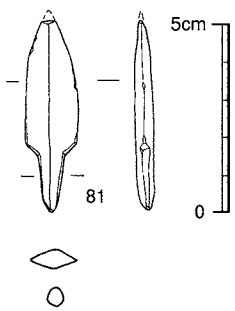


Fig. 25　５号墳 出土石器実測図（1/2）

土師器高坏(63)　脚径9.4cm。脚部は短くラッパ状に外反し、裾部は屈曲して

水平に開く。外面がナデ、内面はヘラケズリ。胎土は精良で微細砂と雲母を含む。淡橙～赤橙色。

土師器壺(73)　口径11.8cm。口縁部は内弯ぎみに直口し、端部は小さく内傾する。体部は偏球形をなそう。外面はやや粗い研磨。内面は口縁部が横ハケ目後に粗い研磨、体部はナデ。明赤褐色。

土師器甕(78)　口径19.4cm。器高は32.5cmになろう。口縁部は「く」字状に外反し、胴部は肩の張らない楕円状をなす。口縁部がヨコナデ、胴部は外面が粗いハケ目、内面はヘラケズリ。胴部下半に煤が付着する。胎土は粗く、明赤橙～橙色。

石鏃(81)　凝灰岩質の磨製石鏃。柳葉形鏃の再研品でややシャープさを欠く。断面形は鏃身が菱形、茎部は円形。鏃身長3.8cm、身幅1.4cm、厚さ5mm、茎は長さ1.6cm、厚さ5mm、全長は5.4cm。

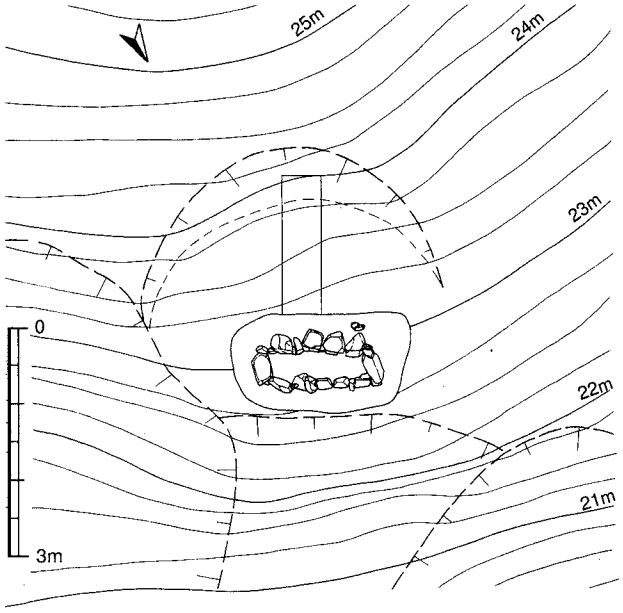


Fig. 26　11号墳 地山整形測量図（1/100）

4．11号墳

(1) 位置と現状（付図）

11号墳は、北西にのびる丘陵の東緩斜面中段の傾斜変換線上に占地している。調査前は標高23～25mの等高線が丘陵なりに巡る緩斜面で、23mの線上には4号墳の半月形の地山整形面の上縁が位置している。緩斜面上は上方からの流土でなだらかに埋まり、地山整形面を予測させる凹みも石室材の露呈もなく古墳としての確認がなかった。

(2) 墳　　丘（Fig.26.27　PL. 8）

地山整形　古墳の構築は、はじめに約20°の丘陵斜面の高い方を馬蹄形に削り出し、その裾部に幅50cm、深さ10cmの周溝を半円形に掘削する。周溝の断面は浅い凹レンズ状をなし、基底面の幅は3.5mを測る。次に墳丘基底面の整地を行なうが、斜面上に占地する小石室の故か4号墳のような明瞭なテラス面は造らずに斜面なりに薄く整地している。石室の東側は4号墳の地山整形で消失している。

墳丘　墳丘は、周溝内側の整形面を基底にして盛土を行なっている。盛土ははじめに石室の構築時に掘り方内の壁石の裏込めとして行い、壁石の積み上げに平行して1段ずつ叩き絞めながら盛り上げている。次に天井石の被覆後に墳形を整えるために盛り上げたと考えられるが天井石とともに盛土も消失し、明らかでない。墳丘の平面形は東側が消失しており明らかでないが、直径が3.5～4mの円形と推測される。墳丘の高さは西側壁の遺存度からして1.2～1.5mほどになろうか。

(3) 石　　室（Fig.28　PL. 8）

11号墳の埋葬主体は、単室の小石室で、丘陵斜面に沿うように主軸方位をN－61°－Wにとる。

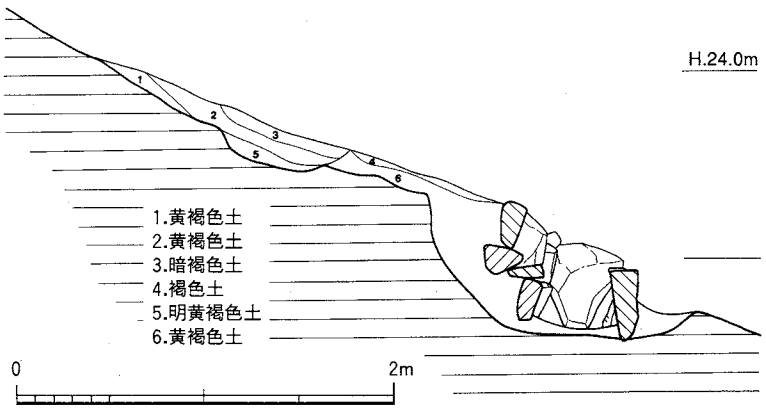


Fig. 27　11号墳 墳丘断面図（1/40）

石室掘り方　掘り方は周溝内縁から１ｍほど下った所に斜面に平行するように掘り込んでいる。整形面の東半部が消失しているが馬蹄形溝によって区画された整地面のほぼ中央にあたろう。平面形は長軸240cm、短軸142cmの不整形な隅丸長方形プランを呈し、断面形は逆台形になる。深さは西壁側で地山面を75cmほど掘り込んでいるが、東壁側は整形面の傾斜に沿って次第に浅くなる。石室腰石は掘り方から20～30cmほど内側にひいて配置され、掘り方床面上に掘削した地山土を敷き固めたうえに安定を計って据えている。

石室　石室は横口をもたない石棺系の小石室で、北側壁長132cm、南側壁長127cm、東小口壁幅36cm、西小口壁幅30cmの長方形プランを呈する。東西の側壁は面を揃えて配石しているが膨らみぎみになる。北側小口壁は斜めに据えている。壁体の構築は、側壁に５石、小口壁に１石のやや大きめの割石もしくは転石を立てて腰石としているが側壁はやや内傾ぎみである。その腰石上に小ぶりの平石や転石を横位に並べている。南側壁では更にその上に腰石と大差のない大きめの転石を１～２段積み上げており、消失している北側壁や小口壁でも類似した手法が用いられたものと推測される。壁面は持ち送らずに垂直にちかく積み上げている。南側壁では床面からの高さが60cmあり、このうえに１石ないしは２石を置いて天井を架したものと推測される。

床面は掘り方の底面に地山の掘削土を２～８cmほど強く敷き固めて造り、敷石は布設されていない。断面形は浅い凹レンズ状をなす。明らかな墓道は検出できていないが、占地する地形から推して西小口側から緩斜面に沿うように緩やかに下ったものと考えられる。

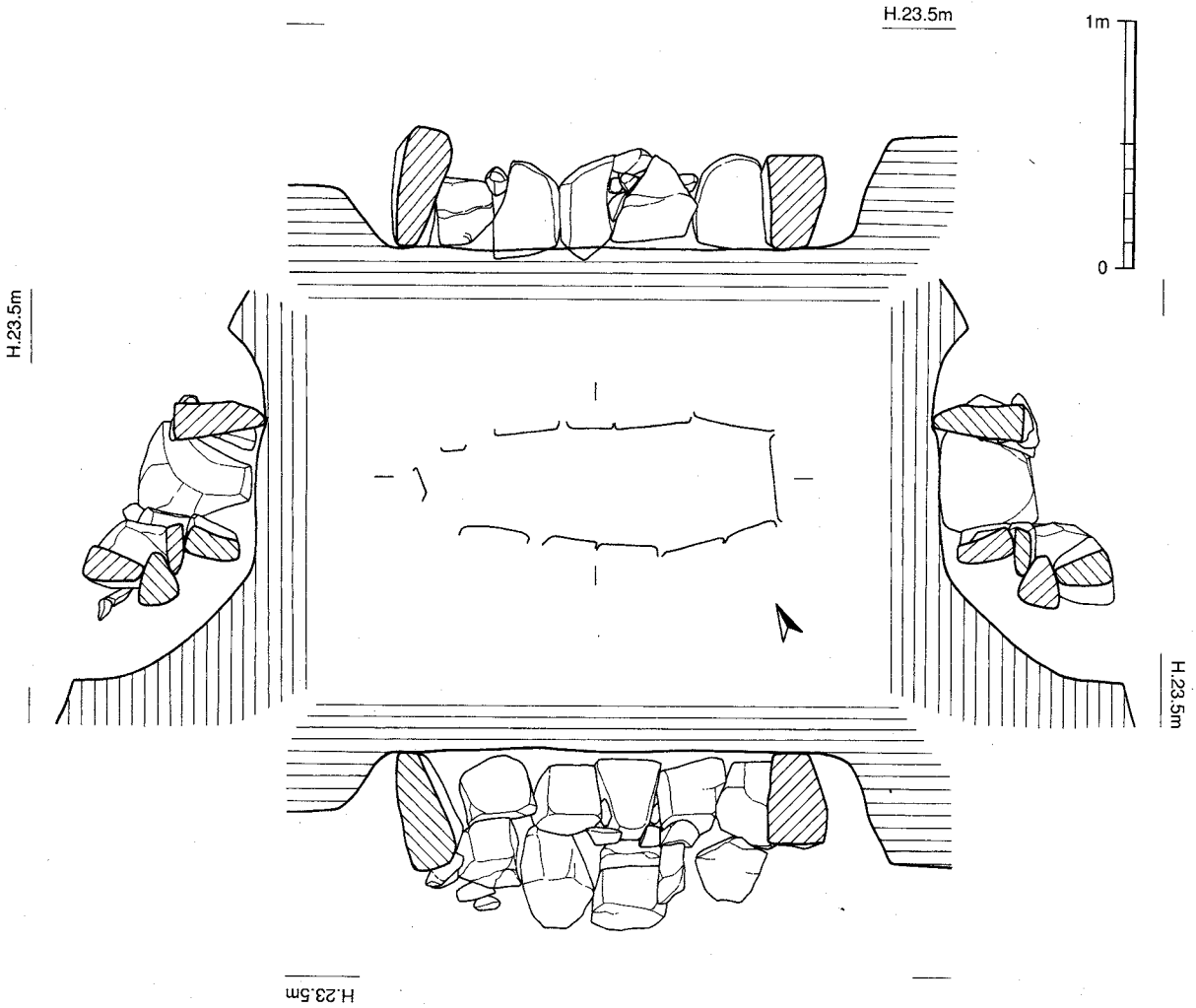


Fig. 28　11号墳 石室実測図（1/30）

5．12号墳の調査

(1) 位置と現状（付図）

12号墳は、舌状丘陵の東斜面中段の傾斜変換線上に占地している。4号墳後背の地山整形面上縁に位置し、すぐ上段には13号墳がある。古墳は小石室を埋葬主体とする小円墳であり、石室の消失は甚だしい。それ故に斜面上方からの流土で斜面上はなだらかに埋まり、地山整形面を予測させる削り出しも石室材の露呈もなく古墳としての予測はなかった。

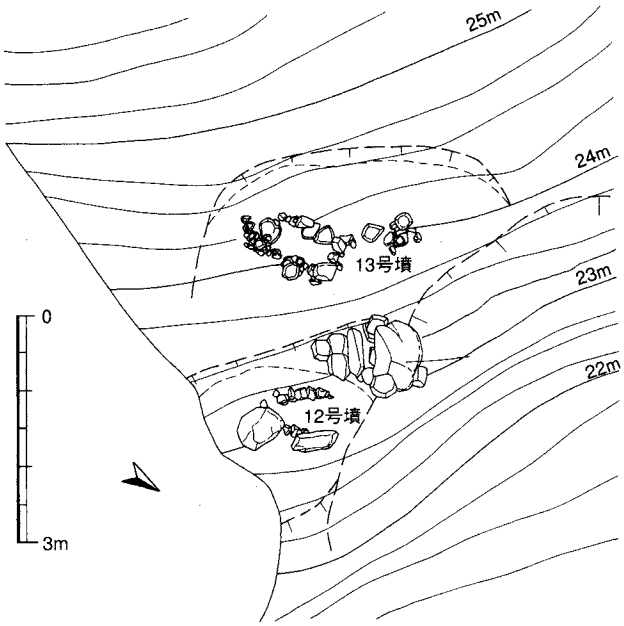


Fig. 29　12・13号墳地山整形測量図（1/100）

(2) 墳　　丘（Fig.29　PL. 8）

地山整形　古墳は丘陵の東斜面に位置する。そのために高い西側を半円形に浅く削り出すが、北西側には大きな花崗岩の路頭がありここを始点として弧を描く。南東側は道路法面の造成で消失しているが、裾径は約3mに復原できよう。比高差は20cmを測る。次にその地山土を内側の石室構築面に敷き固めてテラス状の整地面を造り、その中央に石室を構築している。

墳丘　墳丘は、半円形の整形面の裾を基底面として盛土している。盛土は石室の構築に合わせて行なうが、石室自体が小ぶりなために壁体の積み上げに応じて順次突き固めながら盛り上げている。平面形は半円形の地山整形面から推して直径が3～3.5mの円形に復原できる。しかしながら、斜面変換線上に占地する制約から東西長がやや短い楕円形状をなす可能性もある。

(3) 石　　室（Fig.30　PL. 8）

12号墳の埋葬主体は、単室の小石室で横穴式になろう。石室は、丘陵斜面に約30°ほど谷にむかって開口し、主軸方位をN－31°－Wにとる。副葬遺物の出土はない。

石室掘り方　石室は半円形の整形面裾を起点として地山土による盛土をして整地面を造り、これを基底面として石室を構築している。それ故に石材を据え付ける明らかな掘り方はない。

石室　奥壁幅30cm、側壁長70cm＋αの小石室で、北側の消失部に開口する横穴式になろうか。奥壁は動いているが50～60cm大の割石を横位に据える。右壁はやや中ぶりの転石や割石を5石を縦に並べて腰石とし、その上に小ぶりの円礫を1段積み上げている。左壁は横位の割石1石と1石の立石を据えて腰石とする。床面からの高さは40cmあり、更に1～2石を積み上げて天井を架したと考えられる。床面には拳大の円礫を密に敷き並べているが、北にむかってわずかに傾斜している。墓道は斜面に沿って北へ緩やかに下ろう。

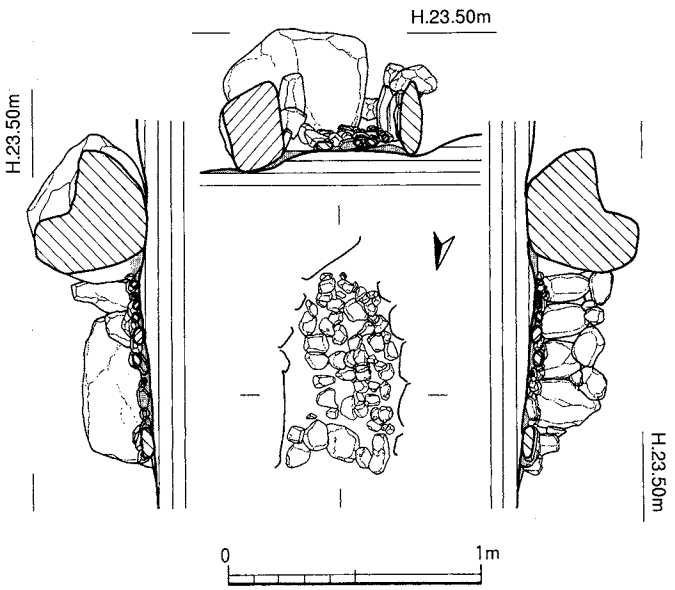


Fig. 30　12号墳 石室実測図（1/30）

6．13号墳

(1) 位置と現状（付図）

13号墳は、舌状丘陵の東側斜面の中段に占地し、12号墳のすぐ西上に隣接して位置する。調査前は、標高24～25mの等高線が丘陵に沿ってのびる緩やかな斜面であった。地山整形の窪みによる地形の変質もなく、石材の路頭もなかったために古墳としては予測していなかった。

(2) 墳　　丘（Fig.29　PL. 8）

地山整形　古墳はその立地的な制約から西側の高地を半円形に削り出し、その内側を傾斜に沿って地山整形して墳丘基底面としている。斜面中位に占地する故かフラットな整形面は造らない。

墳丘　墳丘は、半円形の地山整形面裾を基底面として薄く盛土している。盛土ははじめに石室掘り方の裏込めとして壁石の積み上げに平行して叩き絞めながら盛り上げるが、占地的制約から低墳丘であったろう。平面形は南北長が4.5mで、東西長は3mほどの楕円形に復原されようか。

(3) 石　　室（Fig.31　PL. 8）

13号墳の埋葬主体は、横穴式の小石室で、N－14°－Wに主軸方位をとる。石室は斜面の等高線に対して40°ほどの北にむいて開口する。石室および墳丘から遺物は出土していない。

石室掘り方　掘り方は半円形に削り出した地山整形の南端に寄って掘り込んでいる。レヴェルの高い右側壁と奥壁側に楕円形に掘り込まれるが、低い北東側は整地面上に配石されている。

石室　奥壁幅40cm、前幅30cm、側壁長70cmの長方形プランを呈する。奥壁には大きめの割石１石を、側壁には小ぶりの円礫を４～６石を据えて腰石とし、その上に円礫１～２石を横に並べて垂直に積み上げている。左側壁の丁寧な石積みに対して右側壁の積み上げ方は粗い。また、入り口の北壁は15cmほどの円礫１石をもって塞いでいる。床面は平坦で、敷石は布設されていない。

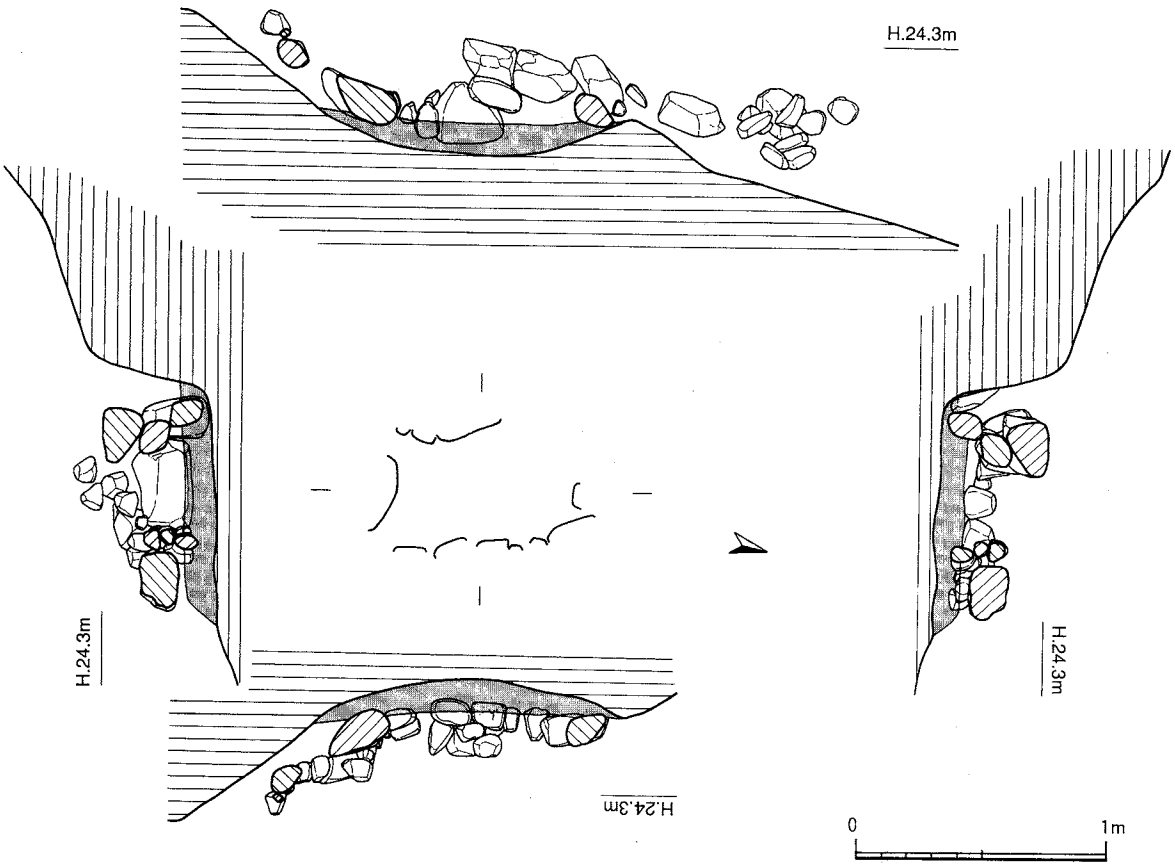


Fig. 31　13号墳 石室実測図（1/30）

7．石棺墓

石棺墓は、小型のものが2基検出された。いずれも谷に面した5号墳東側の周溝上に同じように占地して構築されており、古墳築造後の比較的短い時間帯の中で、連続して造墓されたものと想起される。一方、4号墳の周辺には1基を除いては何らの墳墓遺構も検出されなかった。

1号石棺墓（Fig.32　PL.9）

5号墳の東南側の周溝内に位置する小型の石棺墓であるが、消失が著しい。平面形は小口壁幅が27cm、側壁長は60cmで、N－70°－Eに主軸方位をとる。墓壙ははじめに楕円形の竪穴を掘り、一旦フラット面を造った後に中央部を更に掘り込む2段掘りの構造をなしている。石棺はこのフラット面の内縁に沿って小口側に1個、側壁側に3個の花崗岩礫を並べて構築している。壙底は浅い凹レンズ状をなし、破砕された須恵器壺が埋置されていた。

出土遺物（Fig.33　PL.10）

須恵器壺(82)　口径13.6cm、器高17cmを測る中型の壺である。口縁部は、直口ぎみに小さく外反して立ち上がる頸部から水平に摘み出し、胴部は球形をなす。調整は口縁部～頸部がヨコナデ、胴部は上半が叩き後にナデ、下半はヘラケズリ。胎土は良質であるが細砂を多く含み、焼成は良好。色調は明灰色を呈する。

2号石棺墓（Fig.32　PL.9）

5号墳の前庭部前面に位置する小型の石棺墓である。石棺は開削が著しく、小口と北側壁の西側が消失している。平面形は小口壁幅が30cmで、側壁長は100cm程に復原できよう。主軸方位はN－37°－Eにとる。棺

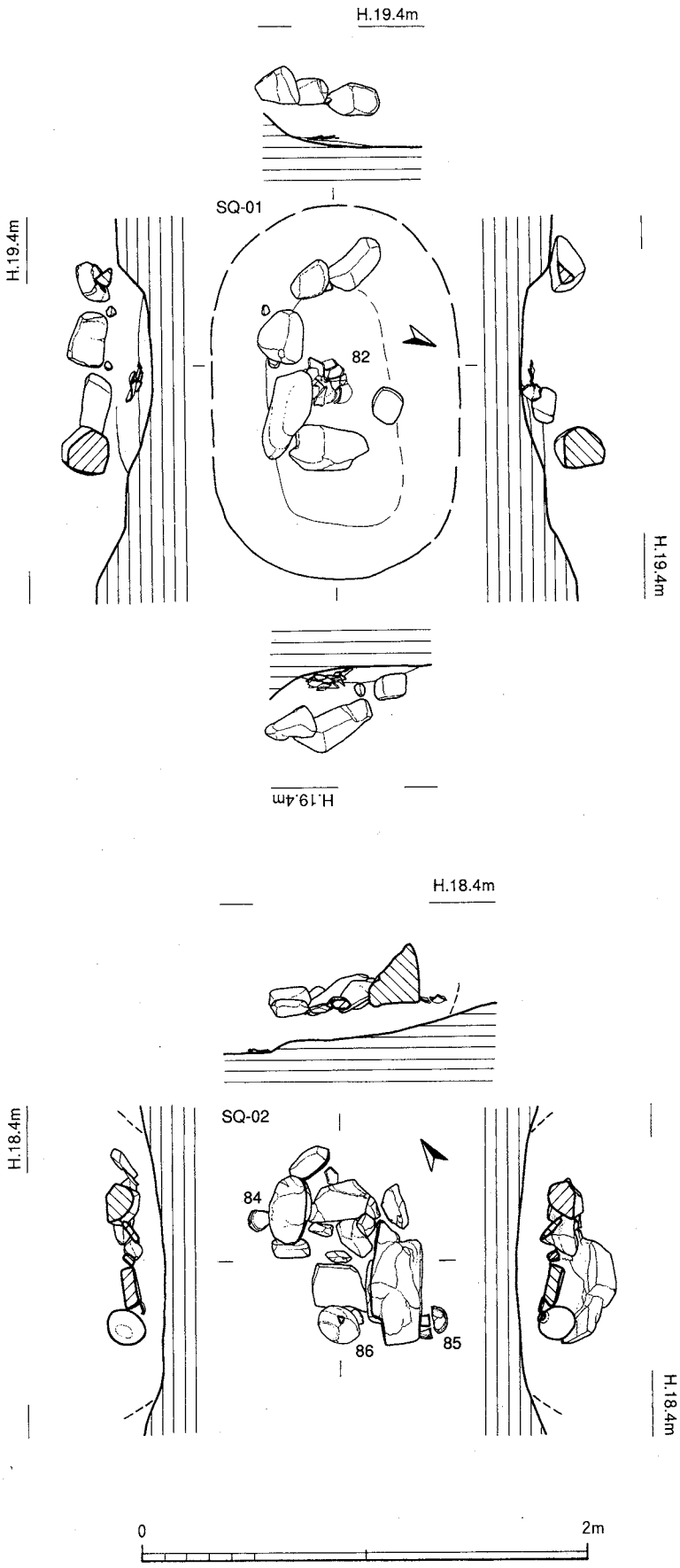


Fig. 32　1・2号 石棺墓実測図（1/30）

材には花崗岩の角礫を横に２～３個並べているが、石組みは粗い。墓壙は明らかでないが、凹レンズ状の壙底には真砂土混じりの褐色土を10cm程敷き詰めて床面としている。棺内には須恵器の平瓶と坏身が、棺外からは坏身が出土している。

出土遺物（Fig.33　PL.10）

須恵器坏身(83～85)　内傾する立ち上がりが小さく直口するもの（83・85）と短くストレートにのびるもの（84）とがある。83・85は底部に小さな段を有し、受け部は内弯ぎみにのびる。口径は10cm、受け部径11.9～12cm、器高は2.7～3.2cmを測る。84は口径9.5cm、受け部径11cm、器高は３cmを測る。端部を水平に引き出した受け部には凹線が巡り、底部には小さな段を造る。いずれも口縁部～体部上半がヨコナデ、底部はヘラケズリ、内底面はナデ調整。胎土は精良で細砂粒を含み、焼成は良好。色調は明灰～濃灰色。

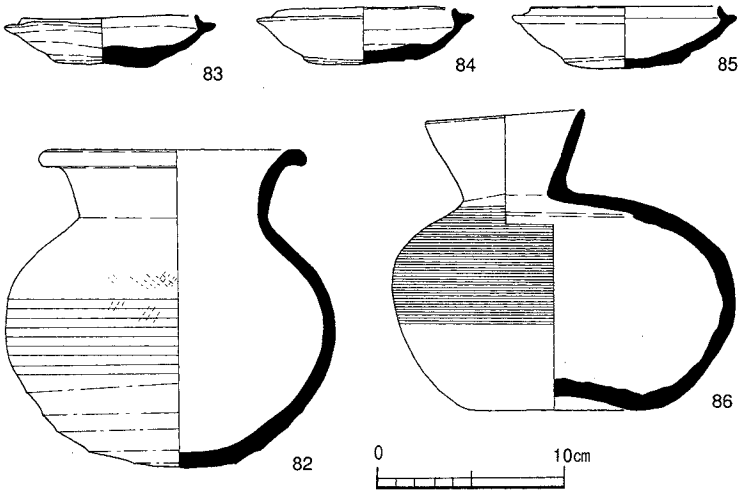


Fig.33　1・2号 石棺墓出土土器実測図（1/4）

須恵器平瓶(86)　口径8.5cm、底径10cm、器高16.1cmを測る。漏斗状をなす口頸部はストレートに立ち上がり、体部上面の中心からやや離れて接合される。体部は肩の張った偏球形をなし、底部は上げ底になる。調整は口縁部がヨコナデ、体部上半はカキ目、下半はヘラケズリ、底部は指頭による押圧ナデ。胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好。灰色。

8．土　　壙

土壙はすべてで９基が検出された。このうち４号墳の墳丘下から検出された弥生時代の土壙を除いては古墳の築造時かやや後出して開削されたものである。分布的には４号墳後背の周溝上に占地する１基を除いては５号墳前面の緩やかな平坦地上に７基がまとまって立地する。この７基の土壙は、２～４号土壙と５～８号土壙が南北に２列に並んで分布している。殊に東列の２～４号土壙は同形態の焼土壙群であり、西列の土壙群は北端の７号土壙のみが焼土壙である。また、これら８基の土壙のうち５基が焼土壙であり、開削時期と併せて古墳との繋がりが想起される。

１号土壙（Fig.34　PL.９）

４号墳南後背の周溝内に位置する土壙で、墳丘構築時に開削されたものである。平面形は長軸102cm、短軸77cmの楕円形プランを呈し、N－17°－Eに主軸方位をとる。壙底は凹レンズ状をなし、北東壁側には浅いピット状の凹みがある。その凹みの南側上端には焼土が薄く堆積していた。また、壙内には拳大～人頭大の礫石が焼土を囲むように並んでいるが、石は焼けていない。

２号土壙（Fig.34　PL.９）

５号墳の羨道から西方へ３mの周溝内に位置する焼土壙で、４号土壙の２m南にある。平面プランは長軸105cm、短軸84cmの方形を呈するが、北小口側は隅丸形をなす。N－38°－Wに主軸方位をとる。壁面はやや急峻に立ち上がり、壁高は20cmを測る。北側の小口壁を除いては壁面の上半部が１～２cmの厚さで非常によく焼けている。床面はほぼ平坦で、壙底には炭混じりの灰層が堆積していた。壙内からは小型壺が出土している。

出土遺物（Fig.36　PL.10）

須恵器坏蓋(87)　口径9.2cm、受け部径11cm、器高2.4cmを測る。天井部は低平で緩やかな丸みをもち、身受けの返りは短く内傾し、端部は小さく直口する。調整は天井部外面がヘラケズリ、内面はナデて仕上げ、体部～口縁部はヨコナデ。胎土は精良で小砂粒をわずかに含み、色調は青灰色。

須恵器壺(88)　口径4.4cm、底径3.7cm、器高５cmの小型の壺である。口頸部は短く直口し、端部は僅かに外反する。胴部はやや肩の張った偏球形をなす。調整は口頸部～胴部中位がヨコナデ、胴部下半はヘラケズリ後にナデ。胎土は細～小砂粒と雲母を含み、焼成は堅緻。色調は灰色。

須恵器平瓶(89)　ストレートに立ち上がる口頸部は漏斗状をなし、体部上面の中心から離れて接合される。体部は肩の張った偏球形をなし、平底の底部は底径10cmを測る。調整は口頸部がヨコナデ、体部は細かいカキ目、内面はナデ。胎土は良質で細～小砂粒を多く含み、焼成は良好。黒灰色。

３号土壙（Fig.34　PL.10）

群集する土壙群の北側に位置する大型の土壙で、４号土壙の１ｍ北にある。平面形は長軸212cm、短軸149cmの隅丸長方形プランを呈し、主軸方位はＮ－43°－Ｗにとる。壁面の深さは46cmを測り、側壁の中段は比較的良く焼けている。壙底は北にむかって緩やかに傾斜し、壙底には５～７cmの厚さで灰層が堆積している。また、中層には良く焼けた角礫があり、その上層には２層の厚い灰層が堆積しており、少なくとも３度の燃焼が想起される。北小口側には深さ20cm程の小ピットがある。

出土遺物（Fig.36　PL.10）

須恵器坏蓋(90)　平坦な天井部の中央に偏平な宝珠形の摘みが付く蓋。天井部外面がヘラケズリ、内面はナデ、体部はヨコナデ。胎土は精良で、焼成は良好。灰色。

須恵器壺(91)　底径３cm、器高4.2cmの小型の壺で、口径は5.2cmになろう。口頸部は直口ぎみに短く外反し、胴部は偏球形をなす。口頸部～胴部中位がヨコナデ、胴部下半はヘラケズリ、内底面はナデ調整。胎土は精良で少量の細～小砂粒と雲母を含み、焼成は堅緻。灰～濃灰色。

４号土壙（Fig.35　PL.10）

群集する土壙群の東側にあり、２号石棺墓の西１ｍに位置する大型の焼土壙である。平面プランは長軸200cm、短軸140cmの不整楕円形を呈し、Ｎ－12°－Ｗに主軸方位をと

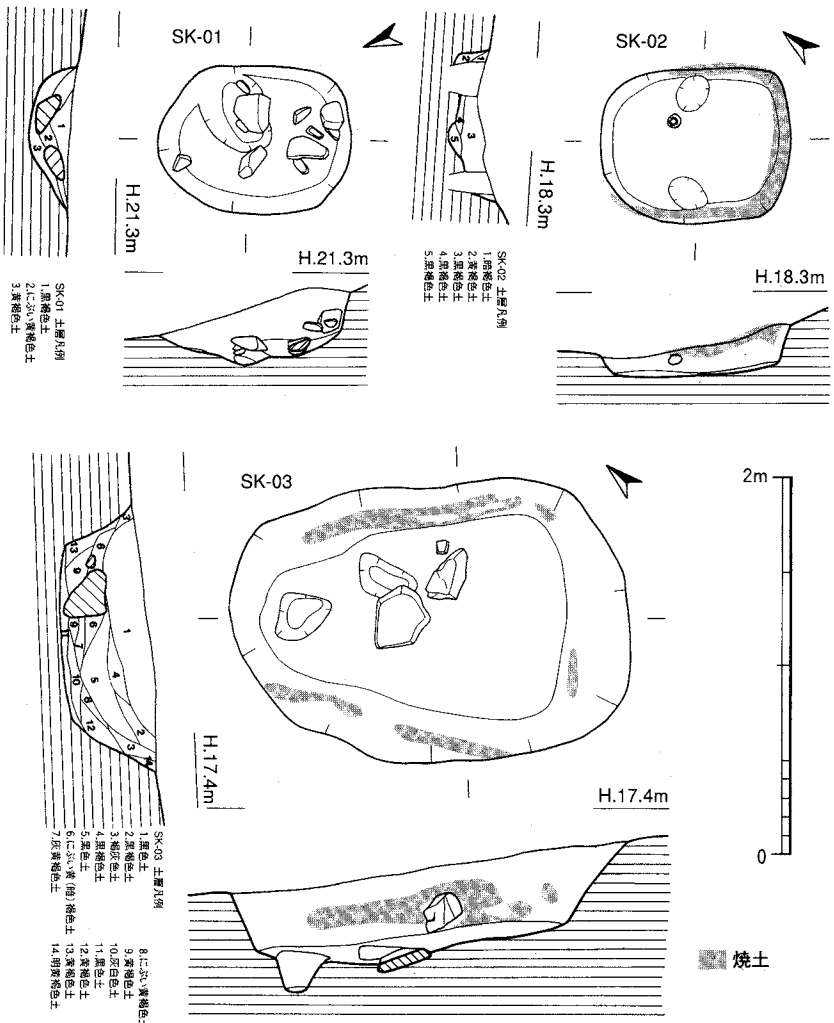


Fig.34　１～３号 土壙実測図（1/40）

る。深さ30～60cmの壁面は比較的緩やかに傾斜し、中位に弱い段を造る。その段の下半は壁面が良く焼けている。壙底は浅い凹レンズ状で北小口壁下には径が30×40cm、深さ25cmの小ピットがある。

5号土壙（Fig.35　PL.9）

5号墳の北西部にある土壙群の西南にあり、6号土壙の南方3mの距離に位置する。平面形は長軸144cm、短軸80cmの楕円形プランを呈し、主軸方位をN－27°－Eにとる。壁面は緩やかに立ち上がるが消失が著しい。壙底は浅い凹レンズ状をなす。

6号土壙（Fig.35　PL.9）

土壙群の西列の中央に位置し、7号土壙の南西2mにある小型の土壙である。平面プランは60～65cmの円形を呈し、深さは25cmを測る。壁面は緩やかに立ち上がり、壙底は浅い凹レンズ状をなす。

7号土壙（Fig.35　PL.9）

5号墳の北西部に群集する土壙中の北端にある焼土壙で、3号土壙の北西2mの距離に位置する。平面形は長軸146cm、短軸95cmの長方形プランを呈し、北小口側はやや隅丸形をなす。主軸方位はN－49°－E。壁面は深さ20～25cmでやや緩やかに立ち上がり、両側壁の一部に焼土壁が残っている。壙

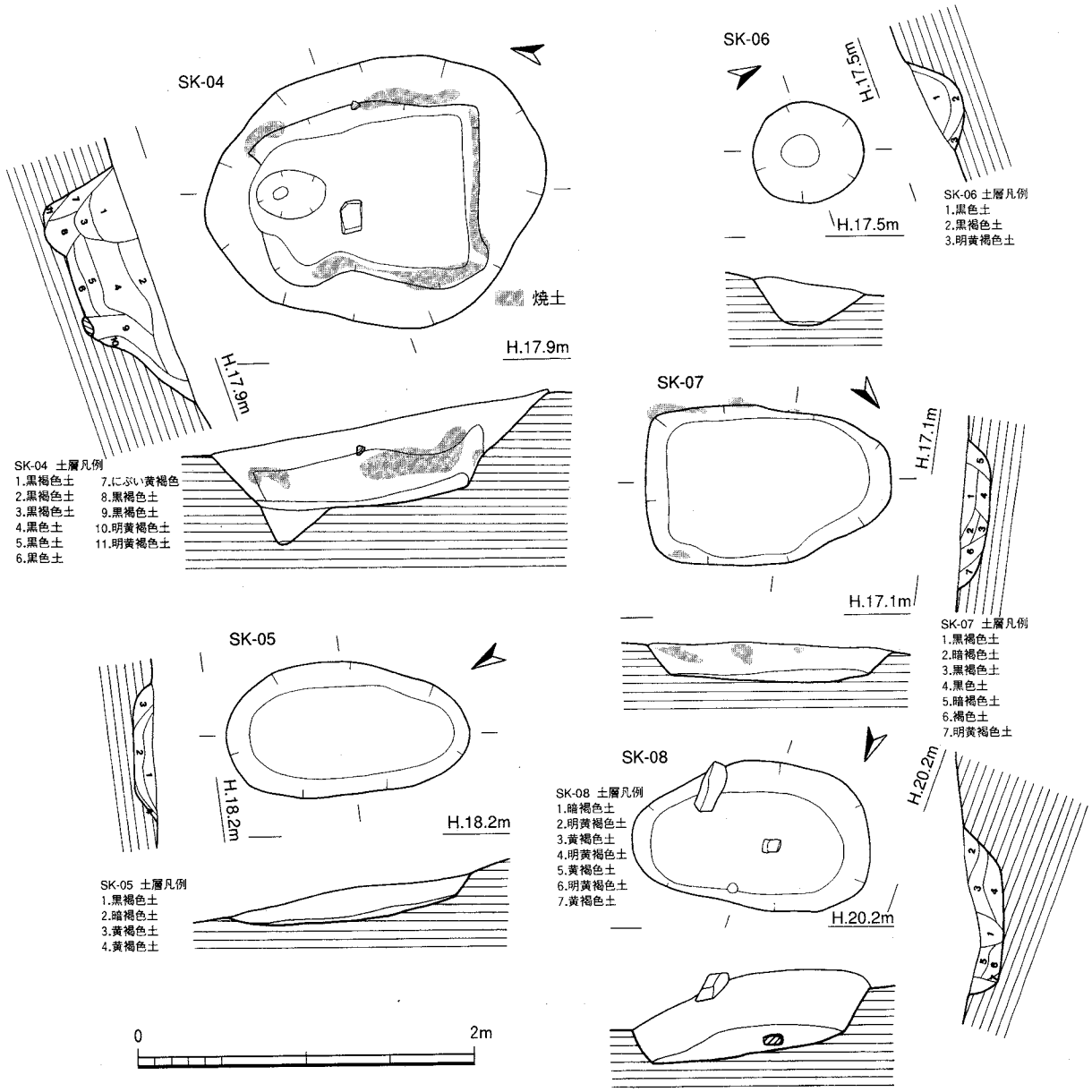


Fig.35　4～8号 土壙実測図（1/40）

底は平坦で、北小口壁側は浅い凹レンズ状をなす。覆土中に炭灰の混入はない。

8号土壙（Fig.35　PL.10）

5号土壙の南方6mに位置する小型の土壙で、舌状丘陵の緩斜面上に占地する。平面形は長軸141cm、短軸89cmの楕円形プランを呈し、N－70°－Eに主軸方位をとる。壁面はやや急峻に立ち上がり、壁高は20～45cmを測る。壙底は東側に緩やかに傾斜しながら凹む。

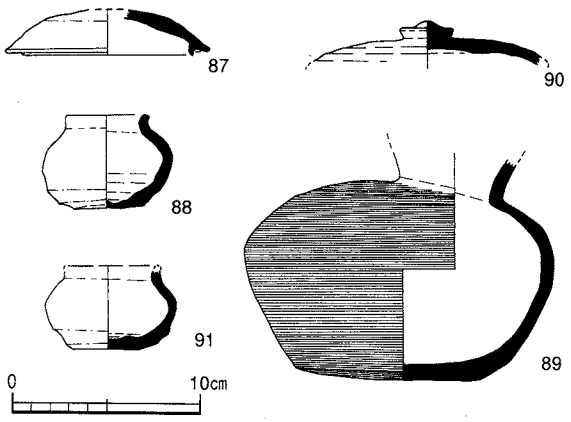


Fig. 36　土壙出土土器実測図1（1/4）

9号土壙（PL.10）

4号墳のI区墳丘下にある土壙で、4号墳の基底面構築前に掘込まれている。平面形は長軸230cm、短軸170cmの楕円形プランを呈し、主軸方位をN－32°－Eにとる。壙底は浅い凹レンズ状をなし、緩やかに立ち上がる壁面は深さ25cmを測る。壙内には破砕した弥生時代中期の大型甕片が投棄されていたが、復原はしえなかった。

出土遺物（Fig.37）

甕(92)　甕棺用の大型甕である。内唇が大きく張り出したT字状の口縁部は小さく外傾し、外唇には浅い凹線が巡る。2条の三角凸帯が貼り巡らされた胴部は砲弾状をなそう。胴部外面には煤様の黒色顔料が塗布されている。胎土には石英砂、長石と黒雲母を含み、色調は黄褐色～明黄橙色。

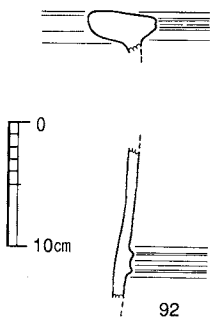


Fig. 37
土壙出土土器
実測図2（1/6）

包含層出土の遺物（Fig.38.39　PL.10）

須恵器坏蓋(93)　93は口径14.8cm、器高2.8cmの坏蓋である。口縁部は内傾ぎみに小さく直口し、天井部はヘラケズリで平坦に整えている。体部～口縁部はヨコナデ、内底面はナデ調整。胎土は精良で、色調は濃灰色。

石鏃(94)　安山岩製の凹基式無茎鏃である。尖先と基部の一端を欠くが、基部幅は2.3cm、鏃身は3.1cmを測る。

9．小　結

第2次調査では、2基の円墳に加えて小石室を埋葬主体とする小円墳3基と石棺墓2基、土壙9基を検出した。このうち円墳は、直径が7～8m、周溝を含めても9～12m、墳丘の高さも1.5～2mほどで大きさ的には後期に通有な規模のものである。しかし、4・5号墳を含めた東側斜面に占地するものは2基で一群をなし、尾根上や西側斜面に占地するものと比べて構成的に特筆される。時期的には6世紀末に築造し、7世紀後半まで追葬している。小石室墳もこの範疇におさまろう。築造は初めに5号墳を、次に4号墳を築造し5号墳の周溝を墓道としている。小石室の11～13号墳は墳丘基底面が円墳の地山整形で消失していることを勘案すればこれに先行しよう。いずれにしても単独では語れず、円墳との関わりや円墳相互の構成的要件は丘陵全域の群としての検討が肝要で全体として後述される。

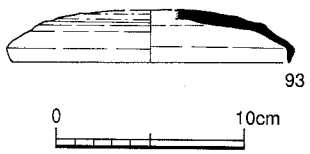


Fig. 38
包含層出土土器実測図（1/4）

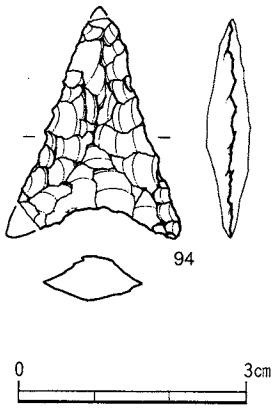


Fig. 39
包含層出土石器実測図（1/1）

VI　鋤崎古墳群A群３次調査

１．１号墳

(1) 位置と現状

北西方向に舌状に延びる尾根の南西側斜面から丘陵裾部にかけて築造される。尾根から下る比較的急な斜面が緩やかになるが、１号墳はその緩斜面を石室基底面レベルとするようになり、標高は21m前後である。墳丘は盛土の流出や人為的な改変によってすでに大きく原形を変えられており、特に石室西側は戦時中の防空壕により大きくえぐられる。石室も天井石を欠き、左側壁も石室から羨道にかけて完全に失う。石室石材の崩壊、流出も著しい。

(2) 墳　　丘

地山成形　１号墳は尾根の南側斜面の上端から裾部までほぼ全体にわたって大規模な整形を行い、墳丘を築造している。成形、墳丘後背部の馬蹄形溝と、墳丘前面の整地部分とに大きく分けることができる。馬蹄形溝は高さ2.0～2.2m、全長20mにわたって開削されており、本来の斜面よりもかなり急な傾きに仕上げている。西側では、成形ラインがすでに崩れてだらだらと西に伸びているが、実際

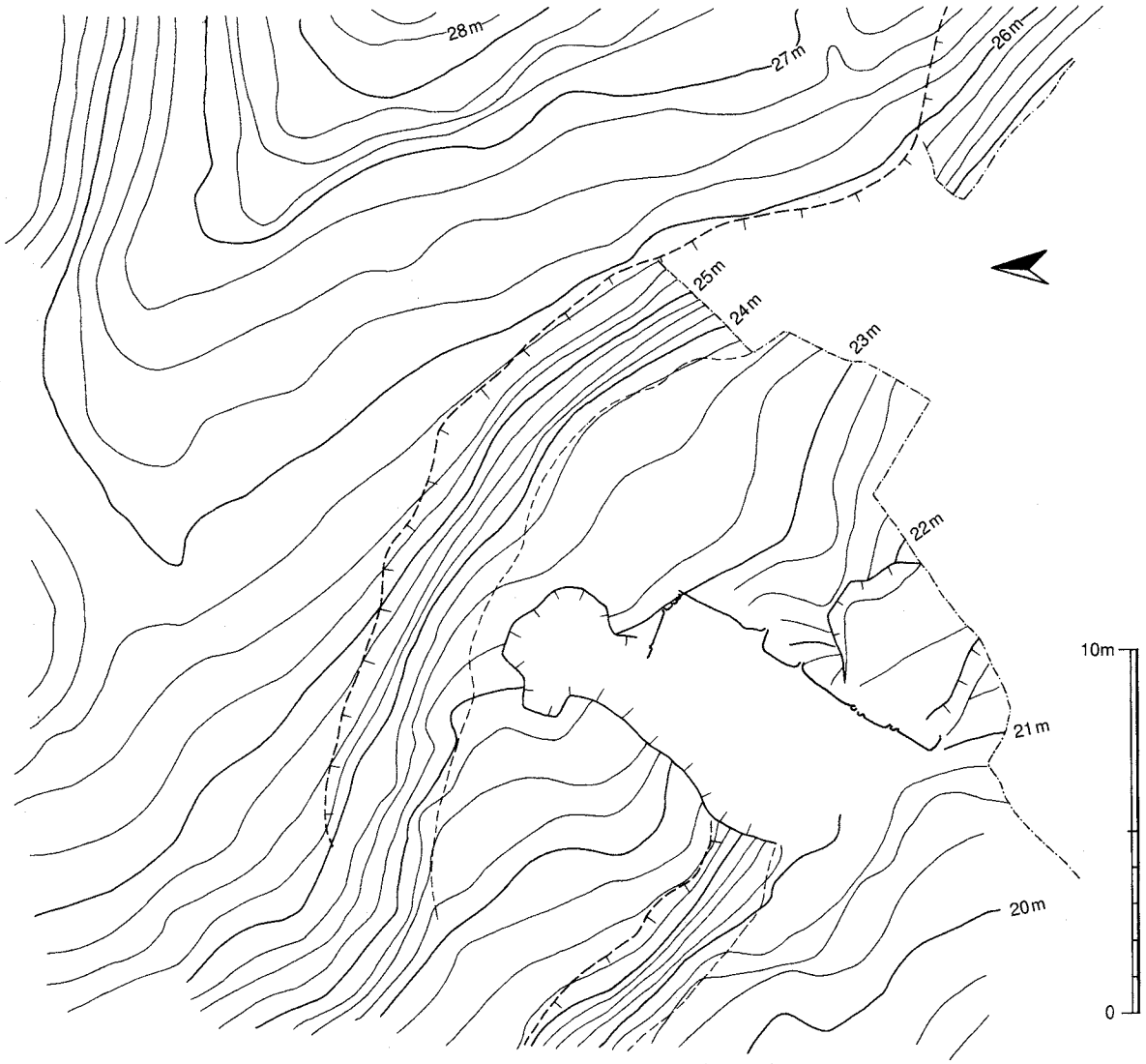


Fig. 40　１号墳 墳丘測量図（1/200）

にはある程度平面形で三日月形に仕上げていたものと考えられる。また古墳西側斜面部分にこの整形痕が見られないことから、この丘陵切断部は丘陵をめぐるものではなく墳丘後背部のみに作られたものと考えられる。切断面下部はテラス状の平坦面を作り、墳丘を盛り上げるための土台としている。この平坦面はちょうど天井石の推定レベルと同レベルであることから、このテラス状の基底面の削平は石室の規格を踏まえたきわめて計画的なものであったことが伺える

盛土　墳丘は前述のテラス状の基底面と丘陵裾部より前面の平坦部分の基底面に盛土を行い築造されている。したがって横から見ると斜面に斜めに墳丘が盛られている景観であったと推定される。しかし現在では前述のとおり、墳丘はかなりの改変、破壊を受けており、特に墳丘後背部のII区、III区での墳丘盛土の残りは非常に悪い。そのため墳丘の構築状況を推定する上で資料的には不十分な部分もある。

石室掘方内の埋土は、主に茶褐色の砂混じり粘質土を用いて行っている。石室右壁ではかなりの深さに地山を掘り下げて石室掘り方を築いており、埋め土はこの掘り方壁面と石材との間隙を充塡する形で積まれている。また奥壁側でも同様に地山壁と石材の間に埋め土を行っているが、上層では締まりなく柔らかい。これは奥壁が一枚岩で、小石材を積み上げる必要がなかったことによるものであろう。このように地山整地面まで墓壙掘方内を充塡した後に墳丘整形のための盛土を積み上げることになるが、1号墳はこの部分の盛土が大きく流出し、すくなくとも地山整形面からは比較的大きな単位で盛土を行っている形跡がある。盛土はほとんどが花崗岩バイラン土を基本としたものである。Cト

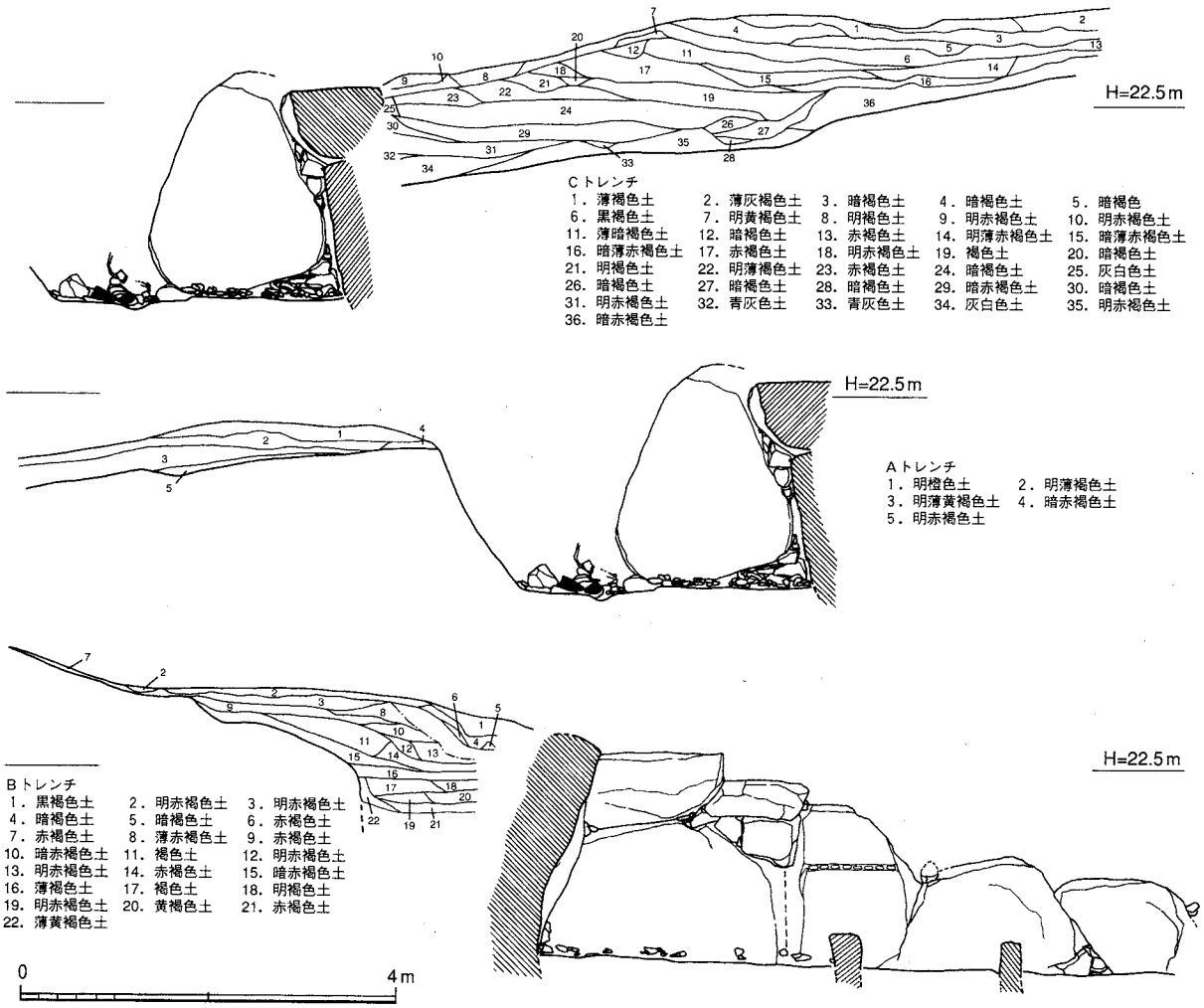


Fig. 41　1号墳 墳丘土層断面図（1/80）

レンチでは地山成形で石室方向にやや傾いた平坦面を作った上に、石室方向から水平面を作りながら側壁上面レベルまで盛土を積み上げている。この盛土は墳丘整形の盛土の一部であるとともに、それ自体が上部盛土の基底となるものでもあり、また同時に壁石の裏込め的な性格をもつものでもある。天井石レベル前後までこのように盛り上げた後、石室側ではやや細かく盛土を積み上げた様子が見られる。おそらく天井石を設置・固定する際に少しづつ安定させながら盛土を行ったためであろう。この部分の盛土は比較的柔らかい。墳裾側はやや大きな単位で盛り上げながら、次第に墳丘中心部が高くなるように調整する。盛土は比較的柔らかいが、旧表土と考えられる面付近の層は堅く締まっている。Bトレンチでは上記のうち壁石裏込め部分、側壁上面レベルまでの盛り土が残存しているが、ほぼ同様である。Aトレンチでは削平が著しく、盛土はほとんど失われている。

列石　墳丘前面の墳端部、羨門部から左右に広がる形で墳丘の外護列石がめぐっている。列石の方向は羨道～石室中軸方向とほぼ直角にのび、直線的な平面プランになっている。列石基底部は丘陵斜面の傾きに従って緩く西に下がっている。正面向かって右側部分の列石は、残存長2.2m、高さ60～85cmで、比較的小さな石を２、３段積み上げて築いており、石の面は揃えておらず積み方は粗い。左側の列石は残存長4.35mで、中間1.3mほどを欠く。列石の高さは20～60cm。残存する列石は１、２段で、残りは悪い。いずれも墳丘盛土の土止め的な機能をもつものと考えられ、この列石ラインが墳端であったと推定される。

(3) 埋葬施設

石室掘り方　１号墳は前述のように石室西側部分が大きく崩れ、石室掘り方が失われており、また奥壁、右側壁側も石室掘り方は完全には露出していない。掘り方ラインは各トレンチの状況から推定

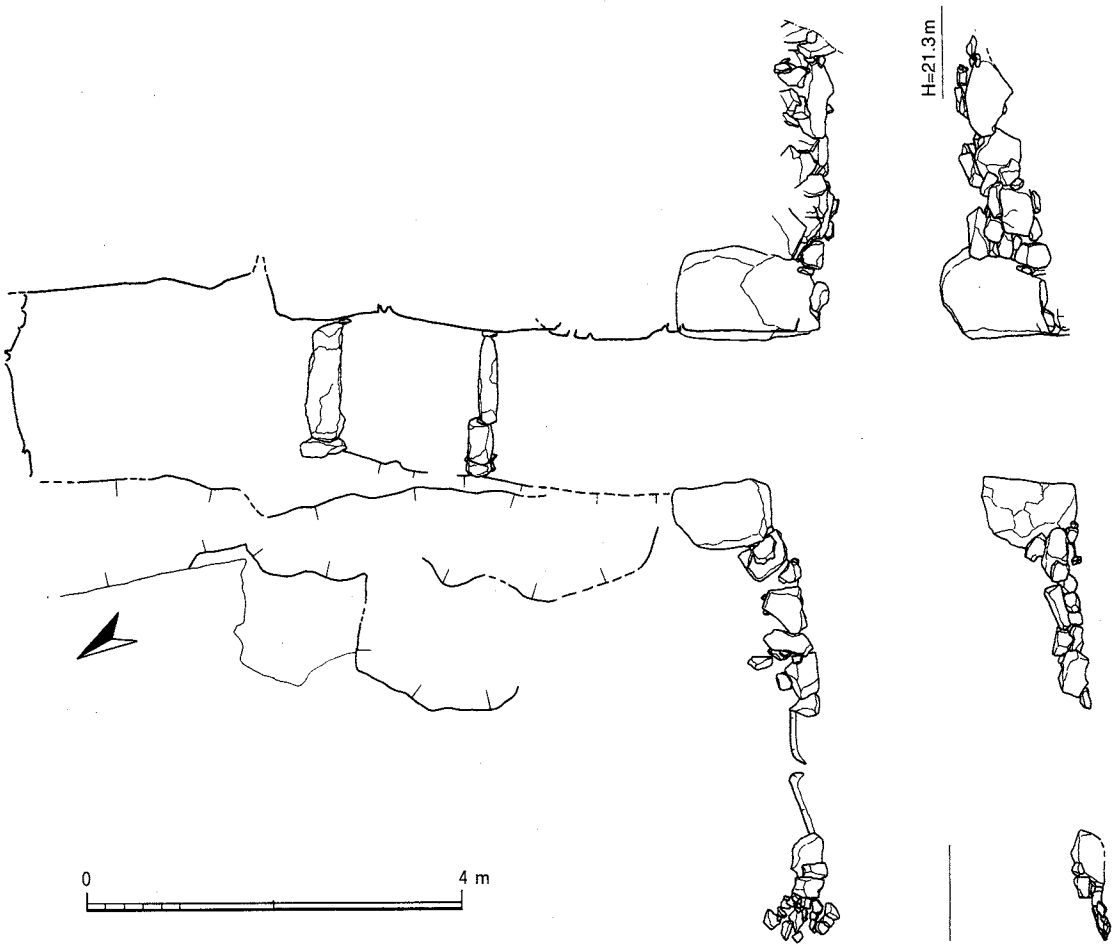


Fig. 42　１号墳 墳丘列石実測図（1/80）

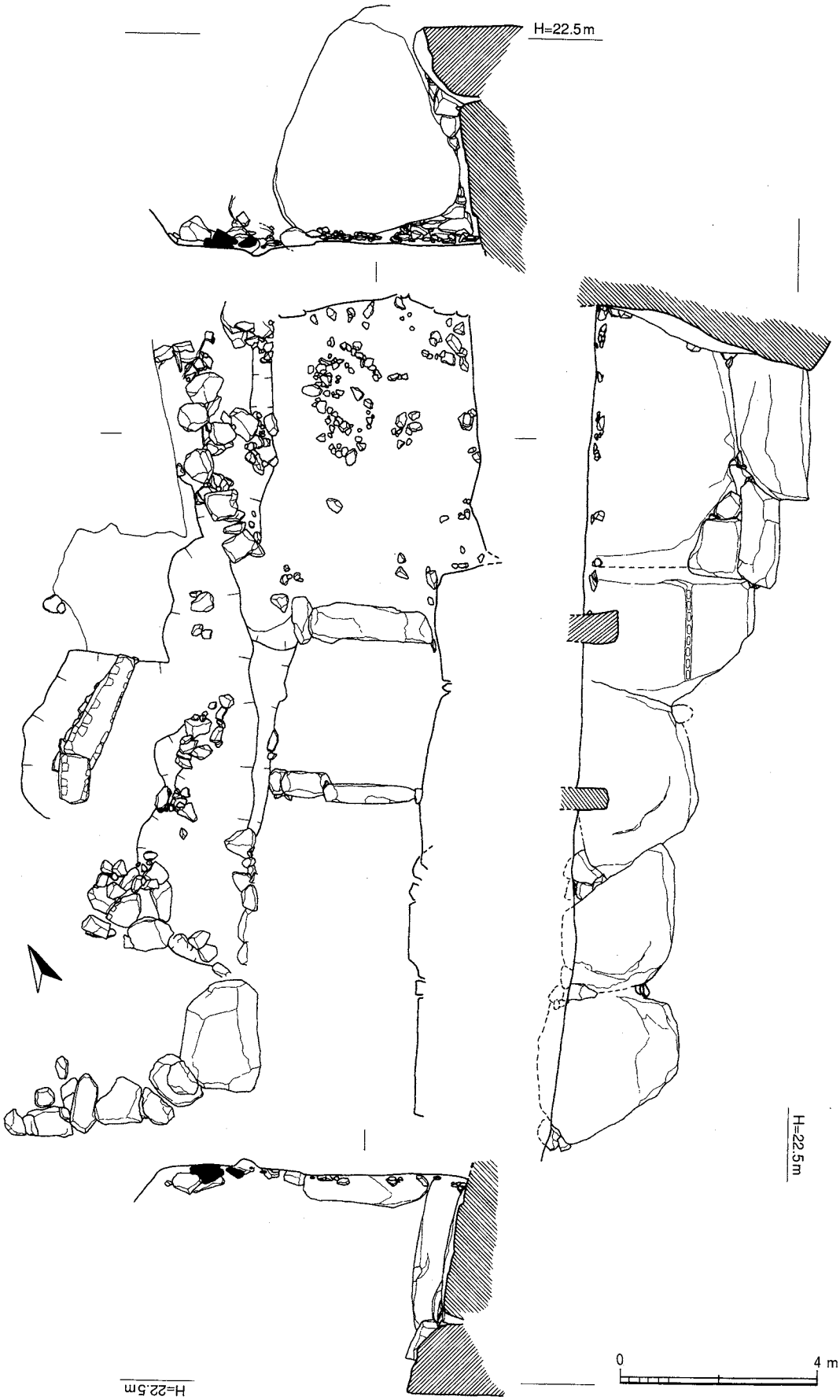


Fig. 43　1号墳 石室実測図（1/60）

している。石室掘り方は丘陵切断部分のほぼ中央に位置し、正確な幅は不明。長さ10mで、奥壁部分の深さ1.0mを測る。奥壁、石室腰石は玄室床面よりもさらに一段低く掘り下げられた部分に設置されている。

玄室　平面プランはほぼ長方形で、左壁の玄室ラインを現在の床面段落ち部に仮定すると、全長16.2m、幅2.0mを測る。玄室高さは推定で2.2m～2.5mとされる。右側壁はほぼ直線で、左側壁もほぼ同様と見られる。奥壁はやや外側にふくらむ。左側壁玄門部には幅30～40cmの袖を作り、おそらく右側壁も同様の、両袖式横穴式石室と考えられる。玄室床面には小ぶりの石が散布しているが、ほとんどが転石状で、敷石としての形は成していない。敷石が本来存在したかどうかは不明である。

壁体は奥壁、右壁ともに非常に大型の石材を用いて構築する。奥壁は縦2.4m、幅1.86m、推定厚さ１m以上の巨大な一枚岩を中央に据え、奥壁と左側石の隅角部分には比較的偏平な石を積み込んで支えとし、隙間を小石で埋める。奥壁面は比較的平坦で、上方が内傾して迫り出す。壁面形はほぼ左右対照に上方が狭くなり略三角形を呈する。この壁面のきわに沿って右壁が築かれており、左壁石も奥壁壁石際に沿って築かれていた可能性がある。右壁石も腰石として幅2.6m、高さ1.4m以上の石材を据えており、その上にやや大きめの割石を水平になるように据え、隙間を小ぶりの石で押さえる。積み方は石材の面があまり揃っておらず、やや粗い感がある。

玄門付近は袖石として大石を立てており、この石が袖部と羨道部にまたがる形になり、壁面を見る限り玄室と羨道の境界はない。仕切石は幅38cm長さ165cmの１石を置いて、羨道と玄室の境界としている。

石室内からは須恵器をはじめ遺物が散漫に出土したが，ほとんどが破片で床面から浮いた状況で出土し、また石室内に土砂の流入が著しいことから、かなりの量の遺物が流れ込みと考えられる。

羨道　羨門から玄門まで全長4.95mを測る。羨門部の１石を除いて玄室と同様右側壁を欠くが、地山面に腰石基底面と見られる掘り方を２つ検出し、右壁石の配置と対応することから、これが石材の抜き跡と考えられる。これを踏まえて推定幅1.6mとする。床面には仕切石が２ケ所に配置される。羨門側の第一仕切石は幅20cm長さ90cmと幅28cm長さ30cmの２石を中心に使用しており、２つの石がや

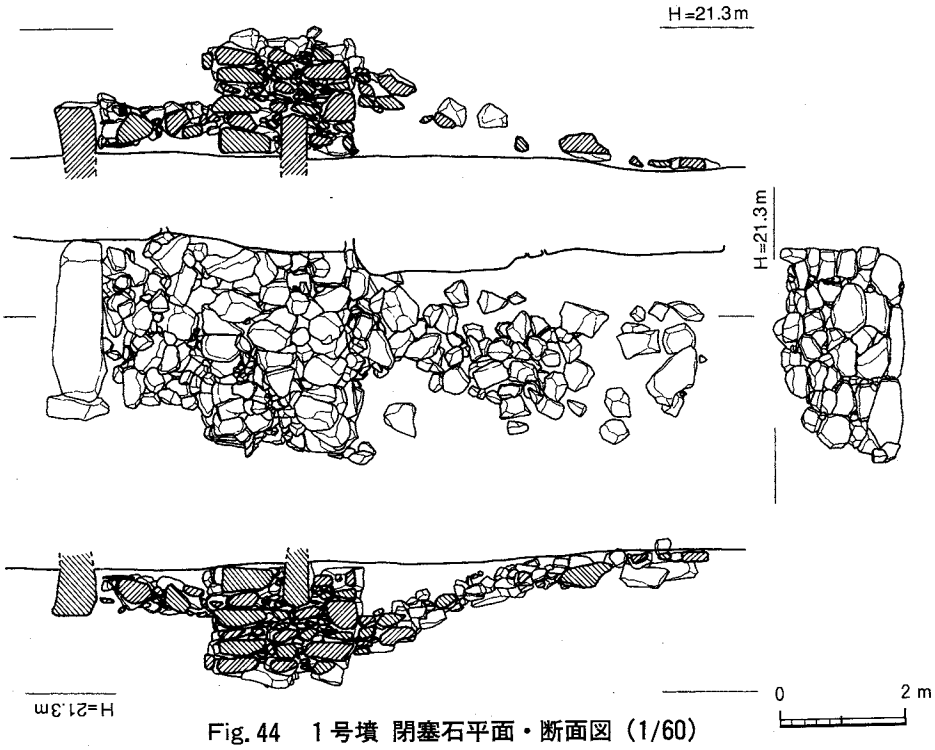


Fig. 44　１号墳 閉塞石平面・断面図（1/60）

やずれて並べられている。玄室側の第２仕切石に比べて小さめの石材を使用しており、床面からの高さは両者とも40cm前後にあわせている。第１仕切石と第２仕切石との間隔は145cmで、羨門から第１仕切石との距離は3.1mを測る。

壁石は左側石の最下部腰石と右側石の羨門部1石のみ残存する。羨道左側壁に使用されている石材は、全部で4石の大石で、石材の規模は羨門側から各々幅1.6m高さ1.4m、幅1.5m高さ1.1m、幅2.0m高さ1.3m以上、幅1.3m高さ1.7mとなる。第１仕切石と第２仕切石の両方とも壁石の中間に位置しており、両仕切石の中間を前室として意識した形跡はない。第２仕切石に接する右壁石は抜き取ろうとした形跡があり、横一列に鑿痕跡が残る。また右側崩壊部分にも抜き取った石材を加工した痕跡があり、大規模に採石を行っている。右壁石はほとんど抜き取られているが、抜き跡が残っており、また腰石の根固め石と見られる小ぶりの石が抜き跡に沿って見られることを踏まえて、左側石とほぼ同様の規模と考えられる。

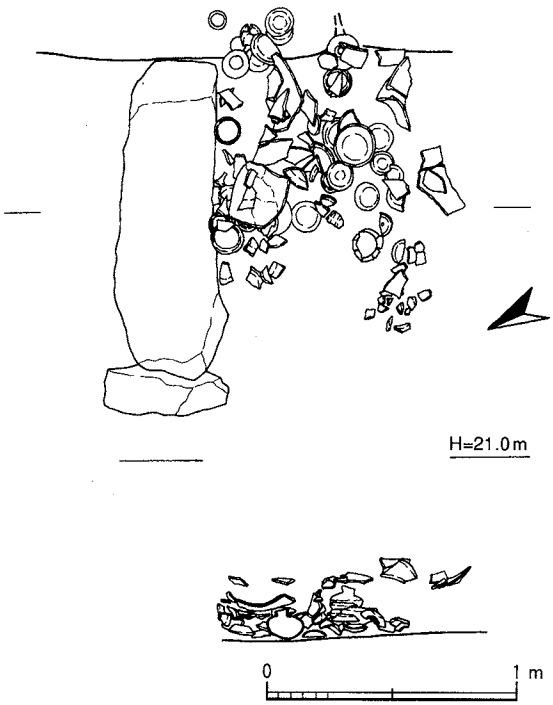


Fig. 45　１号墳 羨道部遺物出土状況図（1/30）

羨道部分からは、第１、第２の両仕切石の間で完形の土器が大量に出土しており、この部分は破壊、盗掘から免れたものと思われる。

閉塞施設　第１仕切石を根石として閉塞施設が存在する。石材は転石や割石を中心とするもので、内面、外面とも比較的整然と築かれている。閉塞の規模は幅1.1m、現存高1.0mで、本来はさらに高かったものと考えられる。閉塞石の位置は羨門から2.7mで、羨門側に崩れ落ちた石材が埋め土レベルに沿って位置する。崩れ落ちた石材は内側、第２仕切石とのあいだにも位置し、この部分は密に積まれた状況が見られない。

閉塞石の積み方は、内面、外面を各々30cm大の比較的大きな石材を揃えて配置し、石の隙間をバイラン土と暗褐色粘質土の混合土を用いて締める。中間部分には小さめの石と黒色砂質土を積み込んで、石塁状に作る。基底部には比較的大きな石を用いて面合わせを行う。基底部の石は地山直上に配置され、根締めの石などは見られない。外面見通しによると下部に比較的大きな石を、上部には小さめの石を積み上げている。

(4) 遺　　物

玄室出土遺物　玄室内からは須恵器を中心として遺物が出土したが、大半は流土内からの出土で、ここに挙げた遺物も確実に本来玄室内にあったといえるものはなく、玄室内の可能性が高いものとして考えている。451・459は須恵器杯蓋で、451は口径10.0cm、器高3.7cm。底部から外面1/3程回転ヘラケズリで、内面は回転ヨコナデ。459は口径10.4cm、器高3.1cm、天井部回転ヘラケズリ、そのほかは回転ヨコナデ。外形はやや偏平で、胎土がやや粗い。602・603は須恵器杯身。602は口径10.8cm、残存高2.5cm、最大径13.0cm、外面底部1/2回転ヘラケズリ、ほかは回転ヨコナデ。受け部の立ち上がりが弱い。外面にヘラ記号をもつ。603は口径9.2cm、器高2.8cm、最大径11.6cm。外面は1/2回転ヘラケズリ、他は回転ヨコナデ。外面にヘラ記号をもち、602のヘラ記号と同一種類の可能性が高い。胎

土が細かく、焼成は不良。463は須恵器瑳の頸部～口縁部にかけてで、口径11.8cm、残存高4.5cm。頸部の屈曲部に沈線状の段をもつ。内外面とも回転ヨコナデで、全体に薄手の作りになっている。604は土師器底部で、全体の器形は不明。底径8.6cm、外面回転ヨコナデ、内面はヨコナデとナデ。胎土は細かい。601は須恵器甕で、口径23.6cm、残存高47.5cm、最大径45.4cm。頸部外面は回転ヨコナデの後山形文をヘラ描きする。外面上位は平行タタキの上からカキ目を施す。中位～下位は交互の平行タタキの上からカキ目。内面は頸部が回転ヨコナデ、胴部は同心円文の当て具痕、底部は平行文の当て具痕が残る。なお、玄室内からは流れ込みも含めて鉄器が数点出土しているが、いずれも風化により旧状をとどめるものは少なく、また紙幅の都合もあり、図化するに及んでいない。

羨道出土遺物　羨道からは杯蓋、杯身を中心に多くの土器が出土している。621は羨道下層の黄褐色土層から出土している。口径13.0cmで、外面1/3は回転ヘラケズリ。他は回転ヨコナデ。530は口径11.8cm、器高4.1cm。外面は1/2回転ヘラケズリ。他は回転ヨコナデ。外面にヘラ記号あり。542は口径11.4cm、器高3.4cm。天井部径6.4cmで、天井部にヘラ記号あり。天井部回転ヘラケズリ、内面天井部は回転ヨコナデ後ナデ。他は回転ヨコナデ。焼成やや不良。483は口径10.4cm、器高3.9cm、天井部径6.4cmで、外面1/3が下位分ヘラケズリで他は回転ヨコナデ。605は口径11.4cm、器高3.4cm。天井部径6.4cmで天井部は回転ヘラケズリで平坦にする。他は回転ヨコナデ。536は口径11.2cm、器高3.7cm。外面1/2が回転ヘラケズリで他は内外面とも回転ヨコナデ。口縁部は内側に面を作る。全体に風化著しく、焼成不良。529は口径11.2cm、器高3.2cm、天井部径5.2cm。天井部ヘラケズリから、回転ヘラケズリ。他は回転ヨコナデ。全体にやや厚め。524は口径11.0cm、器高3.5cm。外面1/3は回転ヘラケ

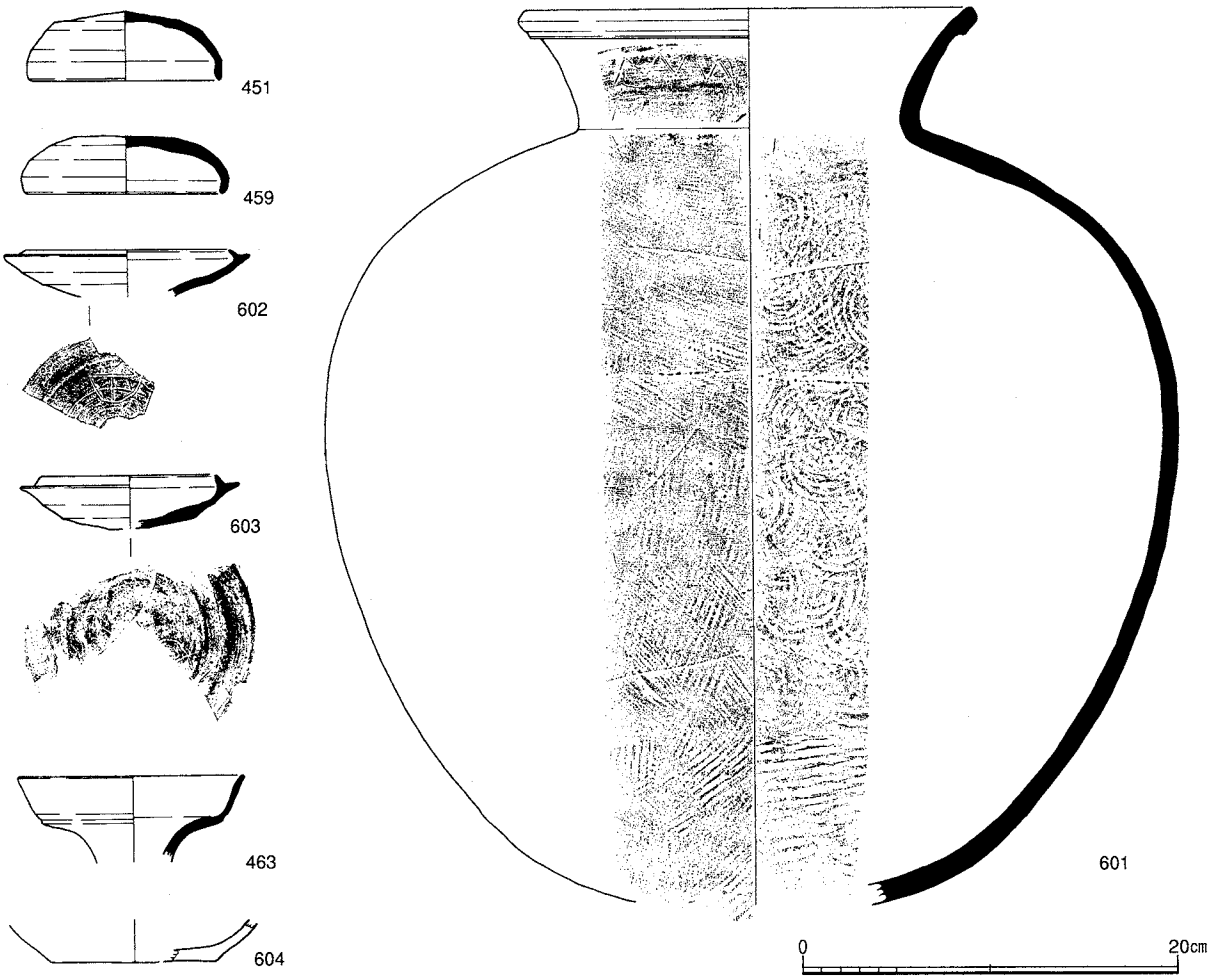


Fig. 46　1号墳 玄室出土土器実測図（1/4）

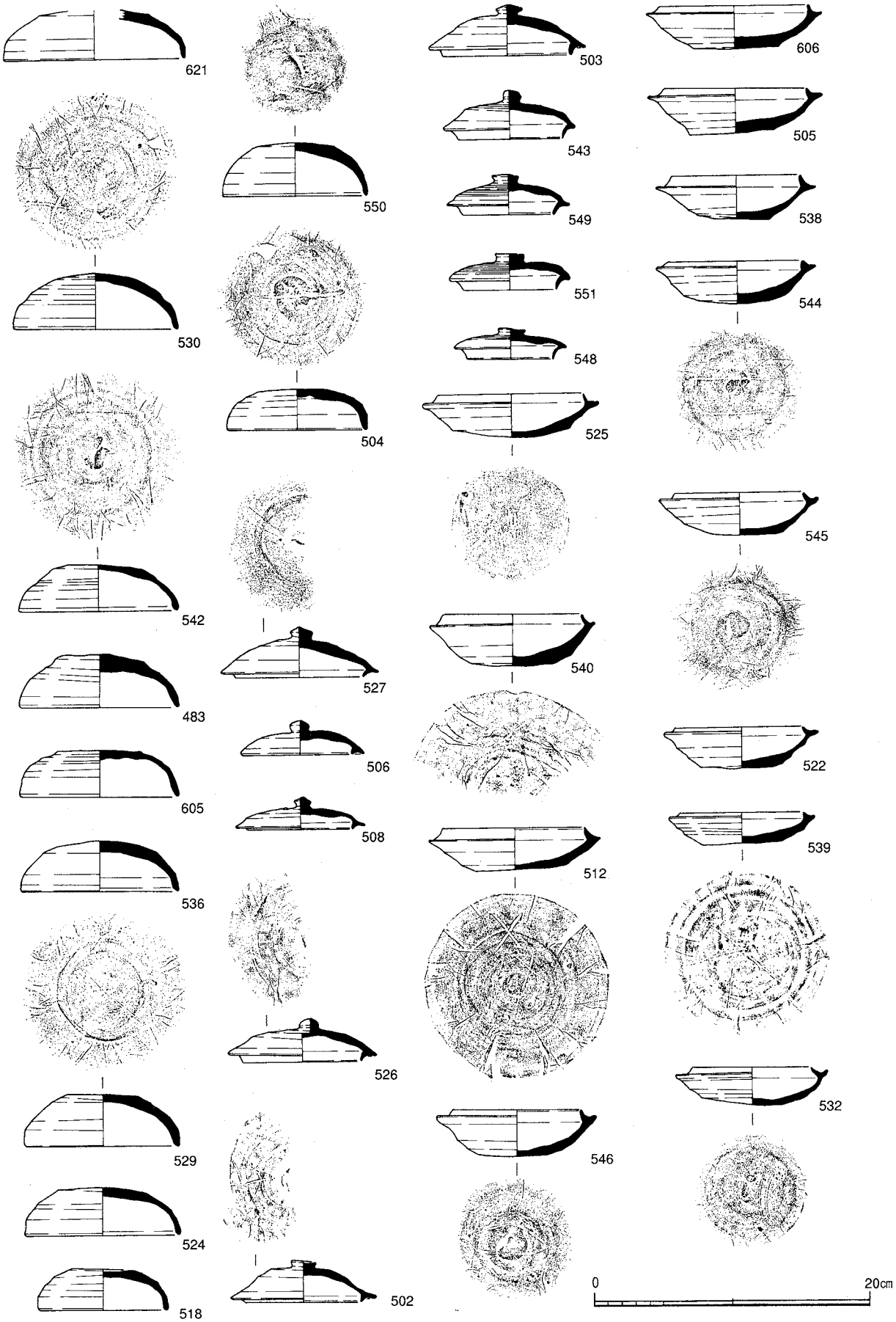


Fig. 47　1号墳 羨道出土土器実測図（1/4）

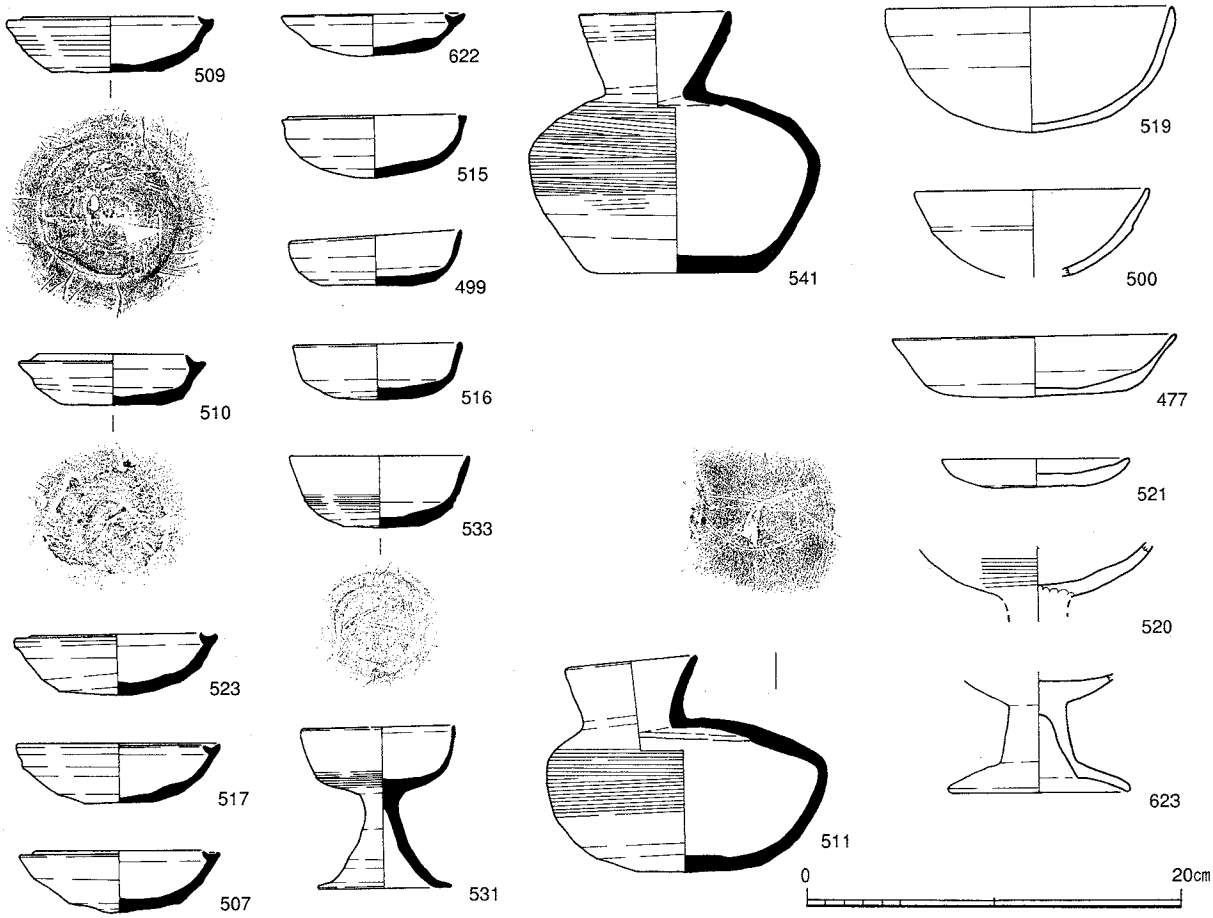


Fig. 48　1号墳 羨道出土土器実測図２（1/4）

ズリ、他は回転ヨコナデ。天井部は焼成不良で気泡が残る。518は口径9.2cm、器高3.0cm、天井部径4.3cm、外面は回転ヘラケズリで、天井部は仕上げが粗い。内面と口縁部は回転ヨコナデ。全体にわずかに歪む。550は口径10.4cm、器高4.0cmで、外面にヘラ記号を記す。外面は1/3が回転ヘラケズリ、内面は天井部が回転ヨコナデ後ナデ。他は回転ヨコナデ。504は口径10.0cm、器高3.0cm、外面は1/3が回転ヘラケズリ、他は回転ヨコナデ。内面は天井部が回転ヨコナデ後ナデで、他は回転ヨコナデ。外面にヘラ記号を記す。527は口径9.2cm、器高3.7cm、最大径11.4cmで、宝珠形つまみをもつ。天井部1/3ほど回転ヘラケズリで、他は回転ヨコナデ。506は口径7.6cm、器高2.5cm、最大径9.0cmで、宝珠形つまみをもつ。外面は回転ヘラケズリ、内面は回転ヨコナデとナデ。受け部立ち上がりは弱い。508は口径7.6cm、器高2.4cm、最大径9.4cm。宝珠形つまみをもつ。外面は回転ヘラケズリと回転ヨコナデ、内面は回転ヨコナデで、受け部立ち上がりは弱い。全体に平たい作りになる。526は口径8.6cm、器高3.2cmで、最大径10.8cmで、宝珠形つまみを中央より外れて作る。天井部は回転ヘラケズリ、他は回転ヨコナデで、受け部はやや強く立ち上がる。502は口径8.4cm、器高3.0cm、最大径10.6cm。天井部に扁平なつまみをもつ。外面は1/3が回転ヘラケズリ、他は回転ヨコナデで、内面受け部は立ち上がりが弱い。503は口径9.2cm、器高3.7cm、最大径11.4cm。扁平な宝珠形つまみをもち、外面1/2で回転ヘラケズリ、他は回転ヨコナデ。受け部立ち上がりはやや厚い。543は口径7.6cm、器高3.5cm、最大径9.6cm、つまみ径1.3cm、つまみ高0.9cm。つまみは回転ヨコナデで整形し、天井部はカキ目、回転ヘラケズリ、回転ヨコナデ。内面は回転ヨコナデとナデ。受け部は薄く強く立ち上がる。549は口径6.6cm、器高2.9cm、最大径9.0cm、つまみ高0.7cm、つまみ径2.0cm。つまみは回転ヨコナデで整

形し、かなり扁平である。外面はカキ目を施し、受け部は回転ヨコナデで薄く強く立ち上げる。551は口径6.8cm、器高2.6cm、最大径8.8cm、つまみは径2.1cm、高0.6cmの扁平な円筒形。外面はカキ目を施し、受け部の立ち上がりは薄く強い。21は口径6.2cm、器高2.3cm、つまみ径2.0cm、つまみ高0.5cm、受け部高0.8cm。全体に薄く、受け部は特に薄く作る。つまみは回転ヨコナデで整形し、かなり扁平になる。天井部にカキ目を施し、他は回転ヨコナデ。

525は口径10.6cm、器高3.1cm、最大径12.8cm。底部は回転ヘラケズリで、底部にヘラ記号を記す。他は回転ヨコナデで受け部はシャープに立ち上がる。540は口径10.0cm、器高3.8cm、最大径12.0cmを計る。底部は回転ヘラケズリ後粗いナデで、ヘラ記号を記す。外面は1/3ほど回転ヘラケズリで、他は回転ヨコナデ。受け部はやや強く立つ。512は歪みがひどく、口径9.0～10.2cm、器高3.4cm、最大径12.4cm。外面1/2は回転ヘラケズリ、他は回転ヨコナデ。底部にヘラ記号をもつ。546は口径9.3cm、器高3.3cm、底径5.1cm、最大径11.6cm。底部は回転ヘラケズリ、他は回転ヨコナデで、底部にヘラ記号を記す。焼成やや不良。606は口径10.8cm、器高3.2cm、最大径6.2cmで、底部は回転ヘラケズリで平らに仕上げる。他は回転ヨコナデで、受け部は強く立ち上がる。505は口径10.4cm、器高3.3cm、最大径12.6cmで、底部が回転ヘラケズリ、他は回転ヨコナデ。538は口径9.4cm、器高3.2cm、最大径11.0cmで、底部は回転ヘラケズリで平らに仕上げる。他は回転ヨコナデで、受け部は強く立つ。全体に小型で薄手の作り。544は口径9.8cm、器高3.1cm、底径7.4cm、最大径1.6cm。底部にヘラ記号をもつ。受け部は鈍く立ち上がる。底部は回転ヘラケズリ、他は回転ヨコナデ。545は口径9.4cm、底径4.7cm、器高3.1cm、最大径11.6cm。底部にヘラ記号をもつ。底部は回転ヘラケズリ、他は回転ヨコナデで、受け部は鈍く立つ。522は口径9.3cm、器高3.1cm、底径6.0cmで、底部は粗い回転ヘラケズリ、他は回転ヨコナデ。やや小型。539は口径9.0cm、器高2.4cm、底径5.8cm。底部は回転ヘラケズリ後ナデ。受け部は太く立つ。全体に小型で平たいつくりになる。532は口径8.6cm、器高2.8cm、最大径11.0cmで、受け部はかなりシャープに立ち上がる。底部にヘラ記号を記す。509は口径9.4cm、器高3.0cm、最大径11.0cm。全体に小型で、底部にヘラ記号をもつ。、外面1/2は回転ヘラケズリ、他は回転ヨコナデで、受け部の立ち上がりは弱い。510は口径7.8cm、器高2.7cm、最大径10.0cmで、小型である。底部にヘラ記号をもち、外面2/3は回転ヘラケズリ、他は回転ヨコナデ。受け部はやや緩く立ち上がる。523は口径9.0cm、器高3.2cm、底径6.4cm、最大径10.8cm。外面1/3は回転ヘラケズリ、他は回転ヨコナデ。受け部は鈍く、立ち上がりも弱い。517は口径9.0cm、器高2.2cm、最大径10.6cm。外面は回転ヨコナデと回転ヘラケズリ、内面は回転ヨコナデで、受け部は立ち上がりが弱い。507は口径9.0cm、器高3.3cm、最大径10.7cmで、外面は3/4が回転ヘラケズリ、他は内外面とも回転ヨコナデ。小型で受け部の立ち上がりが弱い。622は羨道下層の黄褐色土層から出土している。口径7.8cm、器高2.3cm、最大径9.8cm。小型で、受け部立ち上がりははきわめて緩い。底部は不定方向ヘラケズリで他は回転ヨコナデ。515は口径9.0cm、器高3.2cm、最大径9.8cm。小型で、受け部はほとんど立ち上がらない。外面は1/2回転ヘラケズリ、他は回転ヨコナデ。499は口径9.0cm、器高2.0cm、底径4.8cm。全体に薄手で、底部がはっきりした作りになる。底部回転ヘラケズリ、他は回転ヨコナデ。516は口径9.0cm、器高3.0cm、底部径5.2cm。小型で明瞭な底部をもつ。底部は回転ヘラケズリ、他は回転ヨコナデ。533は口径9.6cm、器高3.8cm、底径4.1cmで、底部は回転ヘラケズリ、他は回転ヨコナデ。底部が比較的明瞭で小型の作りになる。

531は須恵器高杯で器高8.6cm、口径8.0cmと小型。杯部下部にカキ目を施し、全体に薄く仕上げる。

541、511は平瓶。541は口径8.0cm、器高13.9cm。底径8.6cm。口縁部に2本の沈線を回し、胴部にカキ目を施す。511は口径6.6cm、器高11.5cm。胴部上面にヘラ記号を記す。

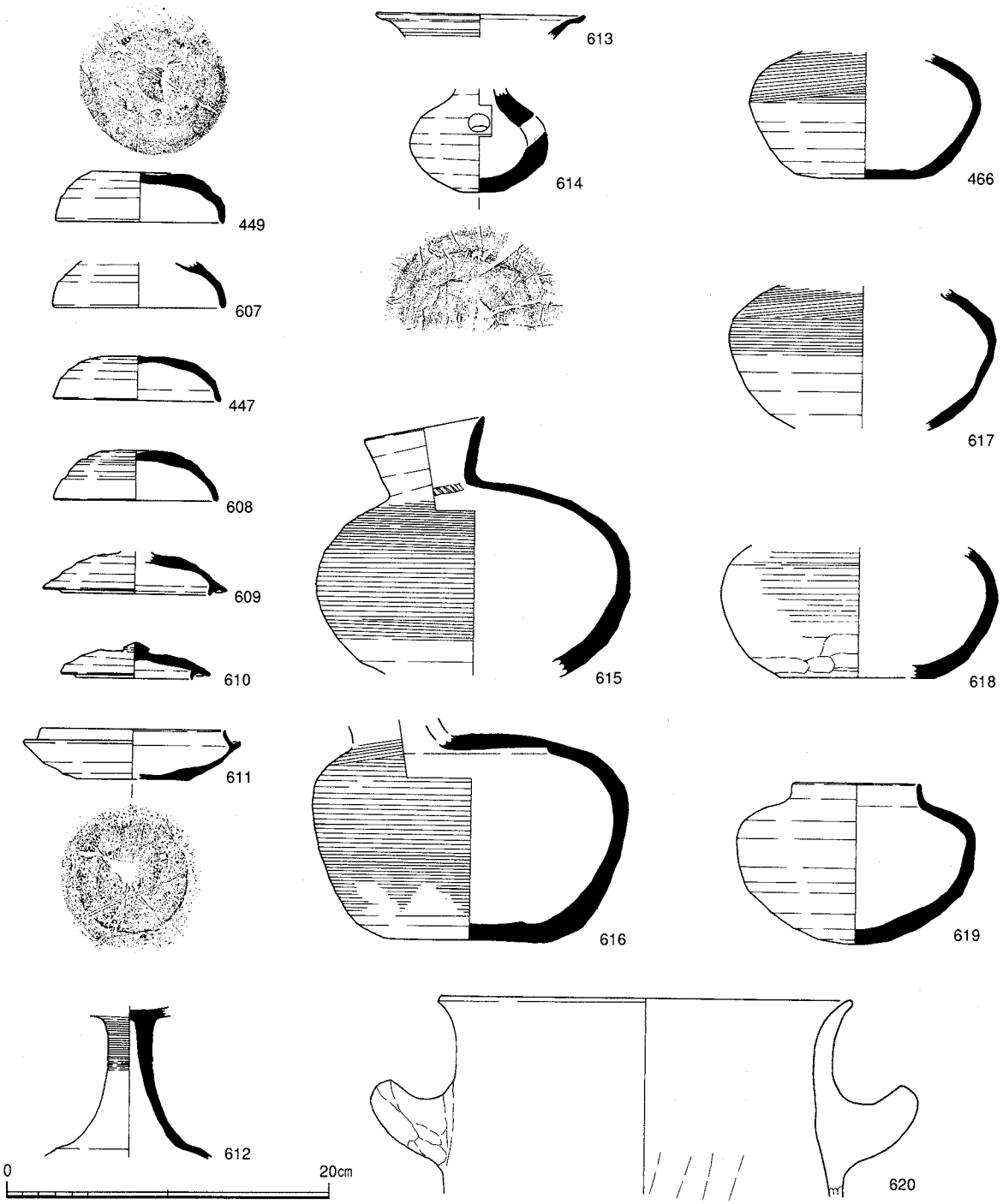


Fig. 49　1号墳 墳丘出土土器実測図（1/4）

519は土師器椀で、口径15.2cm、器高6.7cm。胎土は細かく、外面は回転ヨコナデ、内面はヘラケズリによる。やや薄手。500は口径12.4cm、胴部にヨコナデによる不明瞭な段をもつ。477は土師器皿で、口径15.0cm、器高3.2cm、底径11.6cm。外面底部は回転ヘラケズリ後ナデ、他は回転ヨコナデ、内面も回転ヨコナデ。胎土はやや細かく、焼成はやや不良。521は土師器皿または杯の一部とされ、風化著しく残り悪い。口径10.0cm、器高1.5cm、底径4.0cmで薄白褐色を呈する。520は土師器高杯の杯部で口縁部を欠く。脚部接合部径3.4cmで、外面回転ヘラケズリ、内面はナデ。623は土師器高杯の杯部下部～脚部で、残存高6.3cm、底径9.8cm、脚部高4.5cmを計る。全体に摩耗著しい。脚部外面は縦方

向ナデ、内面はナデ、杯部内面はナデ。脚部下部で強く折れ外側に広がる。

墳丘出土遺物　449は口径10.4cm、器高3.1cm。外面天井部にヘラ記号を記す。天井部は粗いナデ。他は回転ヘラケズリと回転ヨコナデ。内面は回転ヨコナデ。色調は薄赤灰色を呈する。607は羨道西側埋め土中より出土する。口径10.6cm、残存高2.9cm、外面は上位で回転ヘラケズリ、他は回転ヨコナデ、内面は回転ヨコナデ。色調は灰緑色で焼成はやや不良。447は口径10.2cm、器高2.7cm。外面1/2は回転ヘラケズリで、他は回転ヨコナデ。内面は口縁から1/2は回転ヨコナデ。天井部は回転ヨコナデ後ナデ。608は口径10.0cm、器高3.1cm、外面1/3回転ヘラケズリ、他は回転ヨコナデ。内面は底部ナデ、口縁部回転ヨコナデ。609は口径9.2cm、最大径11.4cm。外面天井部にわずかにツマミ部の立ち上がりが認められる。外面は1/2回転ヘラケズリ、他は回転ヨコナデ。内面は回転ヨコナデ。610は石室流土中より出土する。口径7.2cm、器高2.2cm、最大径9.4cm、つまみ高0.5cmを計る。外面は回転ヘラケズリで、つまみは回転ヨコナデによる整形で、扁平な形態をもつ。内面は回転ヨコナデ。611は西側集石埋め土から出土する。口径11.4cm、器高3.1cm、最大径13.6cmを計る。底部にヘラ記号を有し、受け部は薄く強く立つ。612は須恵器高杯で外面はカキ目と回転ヨコナデで仕上げる。613は瑳口縁部で、口径13.0cm。614は瑳胴部で最大径8.6cm。胴部にヘラ記号をもつ。615・616・466・617・618は平瓶。481は口径7.4cm、最大径19.4cmで内面頸部と胴部の境界に明瞭な指圧痕を残す。619は短頸壺で、口径7.8cm、器高10.0cm、最大径15.0cm。外面は胴部下半を回転ヘラケズリ、他は回転ヨコナデ。内面は回転ヨコナデ。

以上の遺物を概観して、１号墳遺物について以下のことが言える。まず玄室出土遺物については、その多くが流土中からの出土で、本来は墳丘上に位置する遺物が多く含まれることを考慮する必要がある。羨道出土遺物は第１仕切石外側に集中して出土しており、羨道部での葬送儀礼を重層的に残しているとも見られるが、実際には新しい時期の土器が古い土器の下に位置する状況が多く見られ、かなり荒らされていることが伺える。玄室内と同様羨道にも墳丘からの流れ込みと見られる遺物が上層に多く見られる。

遺物の時期は古いものでは小田富士雄氏の北部九州編年によるⅣａ期のものが羨道部から出土している。古墳の築造年代もほぼこの時期と考えられる。出土遺物の主体となるのはⅣｂ期のもので、この時期に追葬、葬送儀礼が盛んに行なわれたとみられる。古墳運営の下限はⅤ期で、この時期まで羨道部を中心に葬送儀礼を行っている。

2．2号墳（002）

(1) 位置と現状

尾根線上に位置し、小石室を埋葬施設にもつ古墳を除いた古墳のなかでは最も高所に占める。調査前の現状では、墳丘は判然とせず、石室は完全に埋没し、周辺に人頭大の集石がみられた。

ここで、丘陵の形状に若干ふれておきたい。（付図、現況図）急傾斜で北西へ派生した尾根線は19号、21号墳が検出された南東部に傾斜変換点がみられ、3号墳まではなだらかに移行しており、改変が認められる。また、尾根線両脇の斜面は、北側が比較的、自然な傾斜を保持しているのに対し、南側では、南東部2号墳付近までは急傾斜で谷落ちし、2号墳から3号墳まではなだらかなテラス状の地形を間において、下降していく。このテラス状の部分には遺構が予想されたが、周溝状の溝が2条検出されたのみで、明確なものは見出せなかった。この範囲は堆積土が薄く、表土下2～30cmで風化岩の地山に達する。3号墳から9号墳の南側斜面では段築がみられるが、調査でこの斜面より横口付炭窯（ヤツメ窯）が検出された。

このような土地改変は古墳築造や製鉄関連施設による造成のほか、地元の人からの聞き取りによれば先の戦時中、米軍の上陸に備えた陣地設営によるものがあると考えられる。1号墳に隣接し、防空壕が築かれ、また、この南斜面に多く出土する蹄鉄はこの時期、馬屋を構え鍛冶を打っていたことによるものらしい。調査区南西端の丘陵裾部から谷部にかけては鉄滓が表採され、鋤崎製鉄遺跡A群の存在が認知されていたが、以前は水田を耕作していたと聞く。

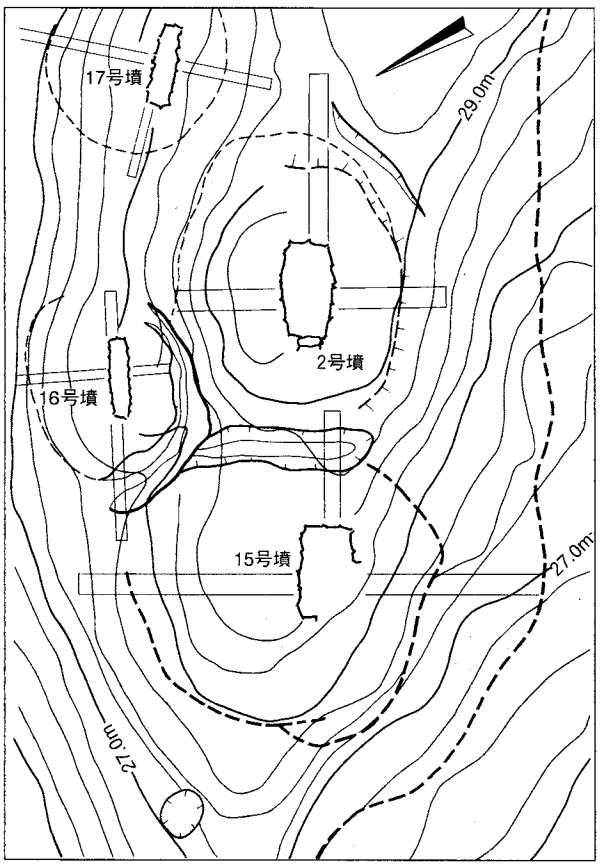


Fig. 50　2号、15号、16号、17号墳 墳丘遺存図（1/200）

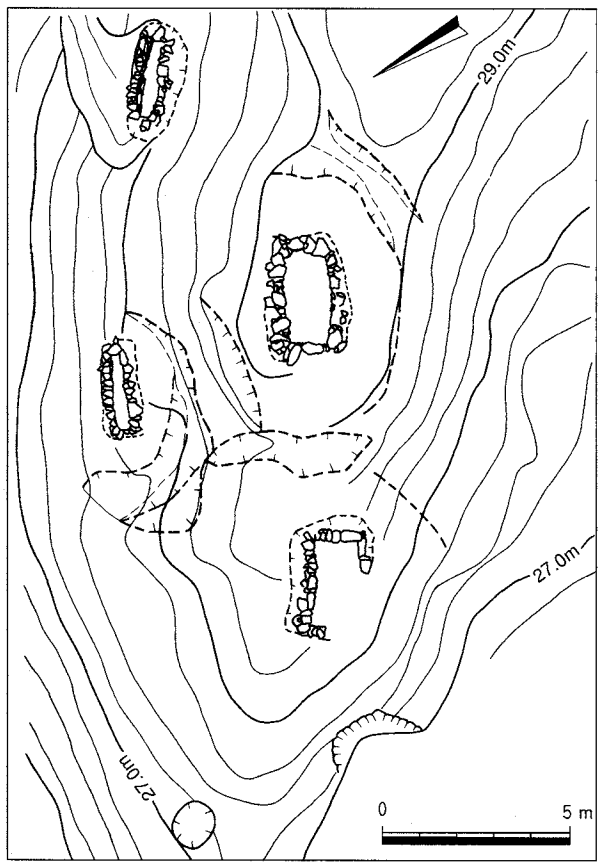


Fig. 51　2号、15号、16号、17号墳 地山成形図（1/200）

(2) 墳　　丘

地山成形

北斜面のAトレンチで石室中心から2.6m、Bトレンチで3.0m、削平を受けた南斜面のCトレンチで3.4mの位置に変換点が認められ、この内側に石室主軸方向にやや長い楕円形状の平坦面が造られている。I区、II区の等高線の歪みは16号墳、17号墳の地山成形によるものと考えられる。

墳丘

北斜面のI区、II区では墳丘が遺存するが、南斜面のIII区、IV区では削平を受け、表土下、風化岩の地山に達する。Aトレンチでは旧表上の2層の赤褐色土を除けば、黄褐色系の盛土を行い、墳端は石室中心から3.3mに求められる。III区に周溝の一部が検出され、Bトレンチの観察からは黒褐色土（3層）が周溝埋土の最下層と考えられ、墳端は石室中心から4.0mの位置となる。15号墳との間の周溝は帰属が判然としなかったが、15号墳側へ幾分回り込むことや、土層観察（15号墳Bトレンチ）から概ね15号墳に属する。しかし、2号墳の墳端も墳丘の形状から近接していると思われる。以上から、墳丘規模が8.0×7.0mの石室主軸方向にやや長い楕円形の円墳になる。

ph. 1　2号墳と周辺古墳

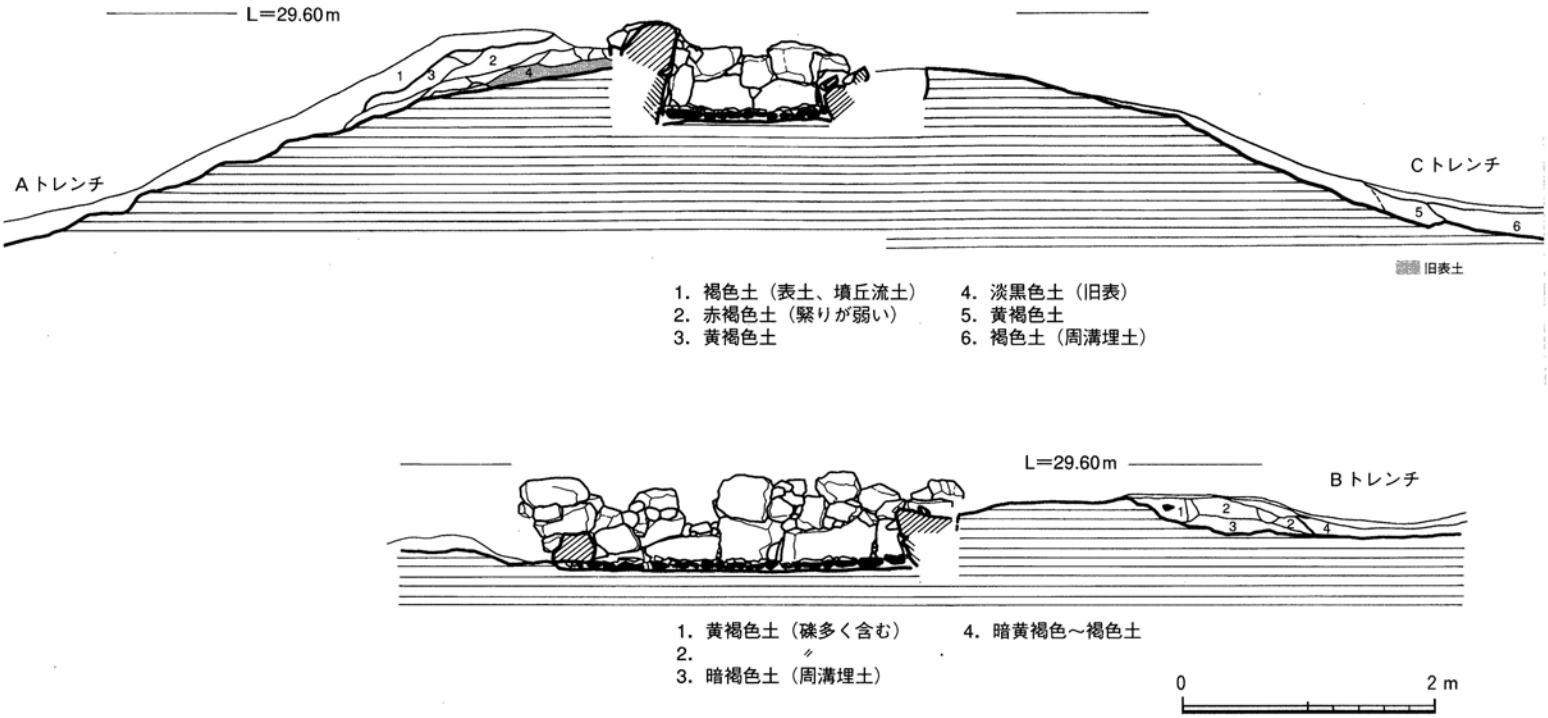


Fig. 52　2号墳 墳丘断面図（1/60）

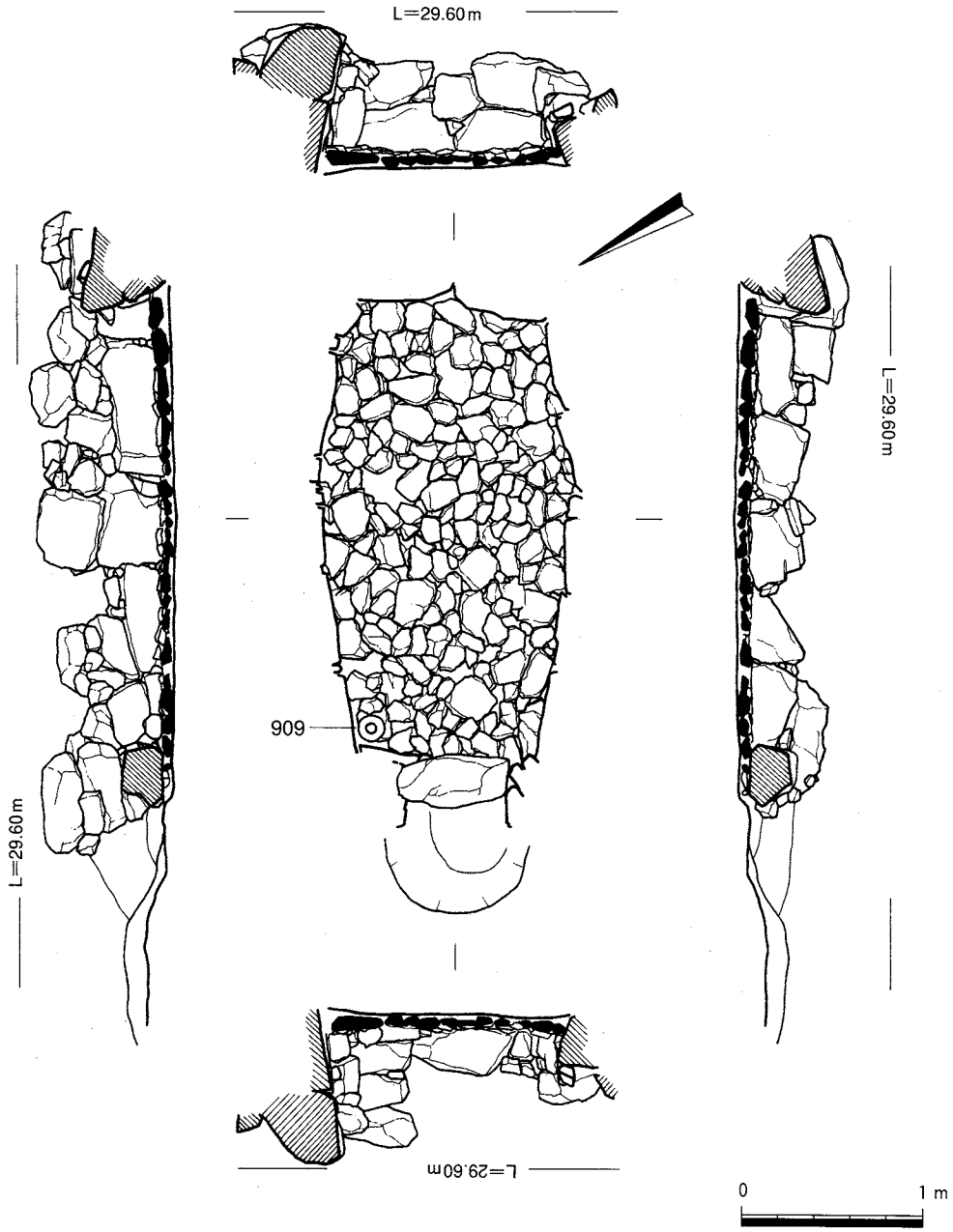


Fig. 53　2号墳 石室実測図（1/40）

(3) 埋葬施設

石室掘り方

本墳の石室は主軸方向をS－60°－Eにとり尾根筋に沿って北西に開口する。隣接する15号墳と主軸方向が近似して縦列した配置をとる。石室掘り方は長方形に近いプランをなし、腰石はこれに間を置かず、いっぱいに配置する。深さは地山から5～60cm掘られ、地山が高い奥壁側では、掘り込み上端が2段目の石材上面に及ぶ。基底面はほぼ水平で腰石の安定をはかる壁に沿った掘り込みは浅い。

玄室

中央主軸長2.50m、中央幅（最大幅）1.32mを測る胴張りプランを呈す。壁体は腰石ないし2段目までのみ遺存する。奥壁は横長の2石を腰石に用い、上面の高さはほぼ同じで2段目には小振りの転

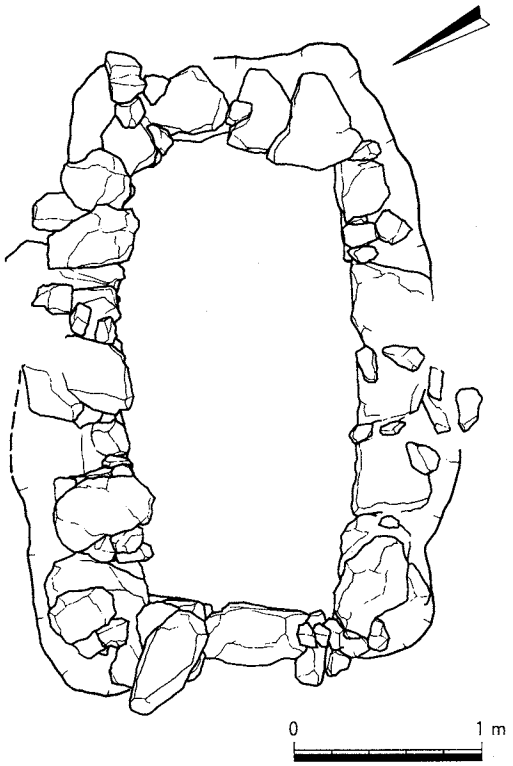


Fig. 54　2号墳 石室俯瞰と掘り方実測図（1/40）

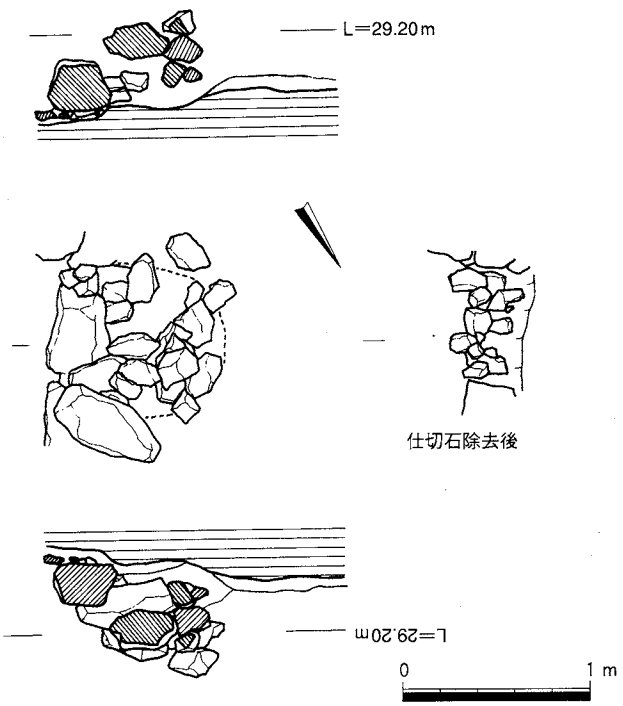


Fig. 55　2号墳 閉塞部実測図（1/40）

石を間に充塡している。左側壁は5石を腰石に用いるが、その上面の高さは袖部に向けて減じていく。2段目以上は不揃いな大きさの石材を用い、雑な感を受ける。右側壁も同様に5石の腰石を用い、トップの高さは揃うものの上面は尖った形状をなす。左袖部は低平な腰石の上に3石を乗せ構成する。右袖部は仕切石と右側壁との間に小石が充塡されているのみで、構成されていたものか疑わしく片袖の可能性がある。敷石は残りが良く上面は平坦に整然としている。

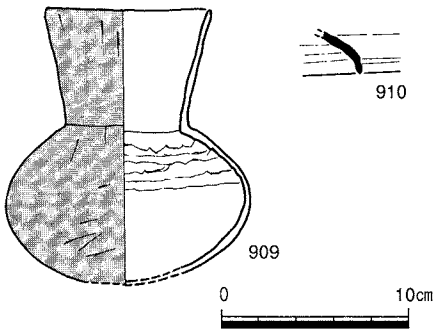


Fig. 56　2号墳 出土遺物実測図（1/4）

羨道、墓道

積石は袖部までしかみられず、貼り石も確認できない。墓道内に閉塞石と思われる小石が散乱するのみであった。墓道は地山より10cm程上位から掘り込みを検出した。玄門に向けて下降し、仕切石下でさらに一段掘り込まれ、玄室内敷石に続く小石をおいている。

閉塞施設

玄門部分には開口方向にむけて30cm大の小石が散乱していたが、積んだ状況は見られない。墓道埋土には黒色腐植土の堆積は無く、赤褐色土によって充塡している。

(4) 遺　　物

玄室内、左袖石前の隅角に正置して出土した土師器壺909以外に副葬、供献されたことが確実視される遺物の出土はみなかったが、北側16号周溝内に2号墳供献土器の可能性をもつものがある。

909は8.8cm、高さ14.6cm、胴部最大径12.8cmを測る。外面のほぼ全面に丹塗り磨研を施し、内面胴部上位には皺状に粘土の重なりがみられる。910は石室内の埋土から出土した須恵器坏蓋である。

3．3号墳

(1) 位置と現状

尾根先端部に位置し、最先端の9号墳と近接する。墳丘の遺存は良く、丘陵を断ち切るように南西部に馬蹄形状の地山成形がみられた。石室は天井部が破られ、玄室内に墳丘盛土とともに流入した石材は小さく壁体構築に用いたもので、天井石は見受けられなかった。墓道に2.7×2.0mの長方形プランの攪乱がある。

(2) 墳　　丘

地山成形

地山成形による馬蹄形状の溝掘削と墳丘基底面の整地が明瞭にみられる。馬蹄形状の周溝掘削は尾根線を断ち切るIII、IV区では検出されたが、II区の丘陵斜面にかけては次第に不明瞭になって消えていく。Cトレンチで石室中央より8.7mの距離に変換点（周溝掘り込み上端）が検出された。IV区ではこの周溝掘り込みがわずかに開口部へ回りこみながら西側丘陵斜面に延び、広範囲に及ぶものと考えられる。

溝の墳丘側の立ち上がり上端はCトレンチで石室中央より4.8mの距離に確認された。III、IV区ではこの上場から周溝最下の基底面までの傾斜に凸凹がみられる。基底面近くには周溝に沿う幅30cm程の溝状落ち込みを検出した。埋土は炭化物を含む暗色の黄褐色土で流水を受けたように円形が連結したプランを呈す。III、IV区では墳裾に平坦面が造りだされ、そこから丘陵斜面には急勾配で落ちていく。III区の墳裾平坦面は北側へ張り出し、そこに焼土壙083が掘り込まれている。

中央部の基底面整地による平坦面はIII区では水平に近いが、IV区では南西方向の丘陵斜面にむけて傾斜がみられる。I区、II区では丘陵の方向とは逆行して傾斜し、最下に淡黒褐色土が堆積する。前代の遺構覆土の可能性があるが、現況からみて北側へ張り出す尾根筋があり（付図、現況図）、II区付近は独立丘陵状に高所を占めていたと思われる。さらに、I区、II区ではAトレンチで観察されるように最下の黒褐色土が途切れる位置から急角度に削り出され落ちていく。

墳丘

遺存は比較的良く、地山から1m程度の盛土がみられる。墳丘規模が主軸方向に11.5m、直行方向に12.9mの円墳であることが判明した。墳形は西側の開口部にかけて寸詰まりするが周溝内の遺物出土状況（Fig.63）からも流失によるものでなく、概ね図上の位置にあるものと考えられる。

中央部の墳丘基底面から施された盛土はIII、IV区では周溝内に墳裾が達し、Cトレンチでは石室中心から6.6mの位置に求められる。盛土は石室側にかけて石室構築とともにその安定をはかる密な積み方を行い（第1次墳丘）、仕上げに天井石の被覆と、墳形を整える（第2次墳丘）、通常の工法が認められる。Cトレンチ最下には旧表土は残さないが、35層には細い横筋状に炭化物が多くみられる。この上に先ず、24、26層以下の第1次墳丘を行う。上層の赤褐色系の盛土に対し黄褐色系を基調とし、細かい単位がみられる。その裾は地山成形による周溝上端の位置にほぼ一致する。第1次墳丘のなかでも31、28層以下は地山下部の明黄褐色系の硬質土を用いるが、その上面は石室掘り方内に沈み込んだためか石室方向に下降している。

Bトレンチでは丘陵斜面の勾配が急なため墳端は判然としないが、概ね石室中心から6.6mの位置に求められ、Cトレンチから正円形に近い墳形でめぐる。最下に旧表土を残し、石室中心から4.0mの位置から地山成形によって削り落とされる。第1次墳丘の裾部がこの旧表土が途切れる位置まで盛られ急勾配の形状をなす。

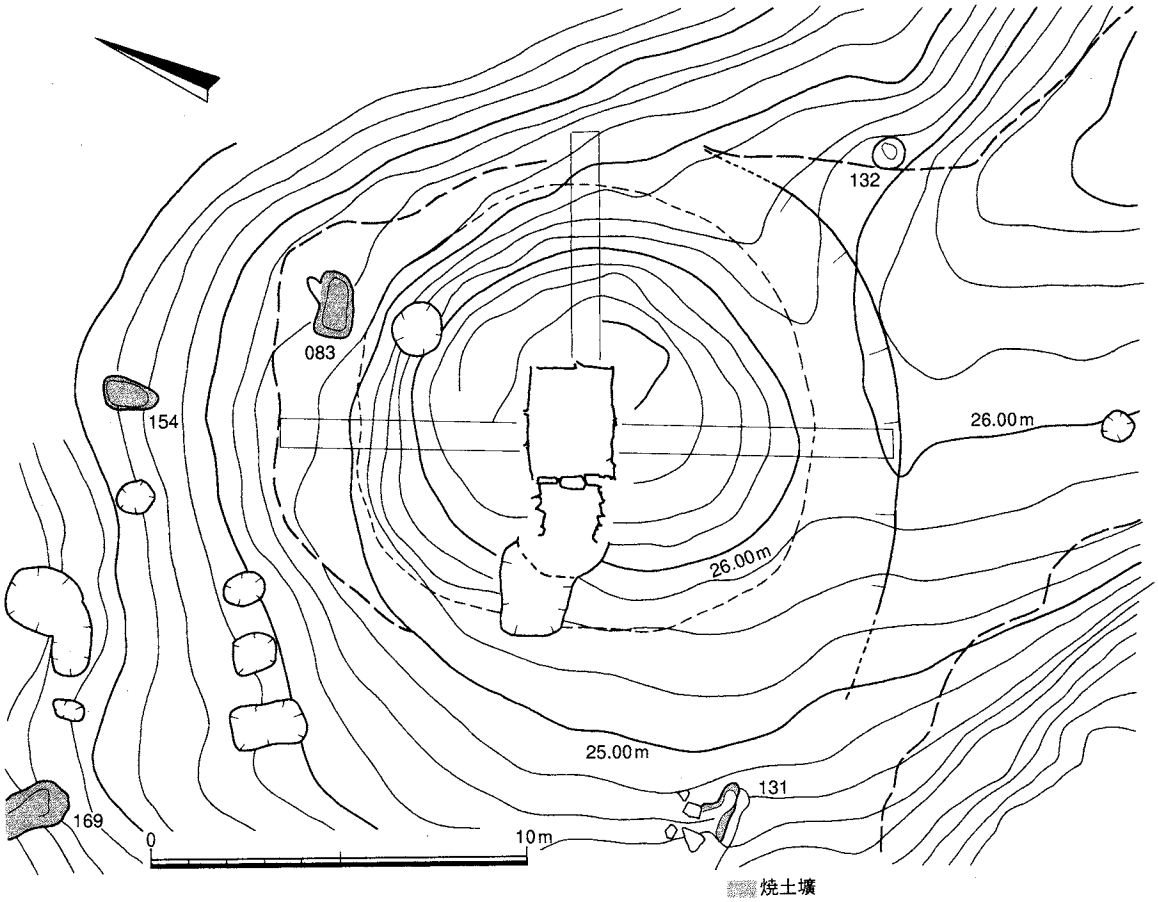


Fig. 57　3号墳 墳丘遺存図（1/200）

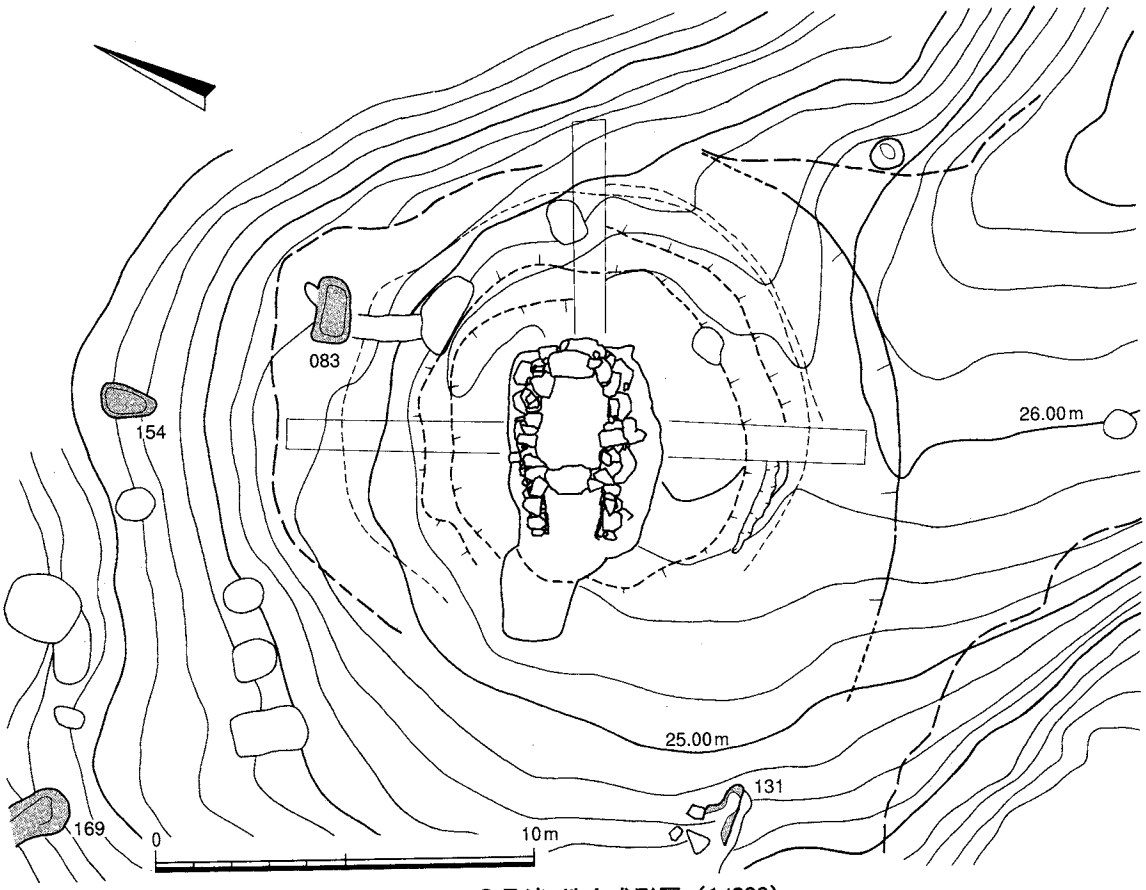
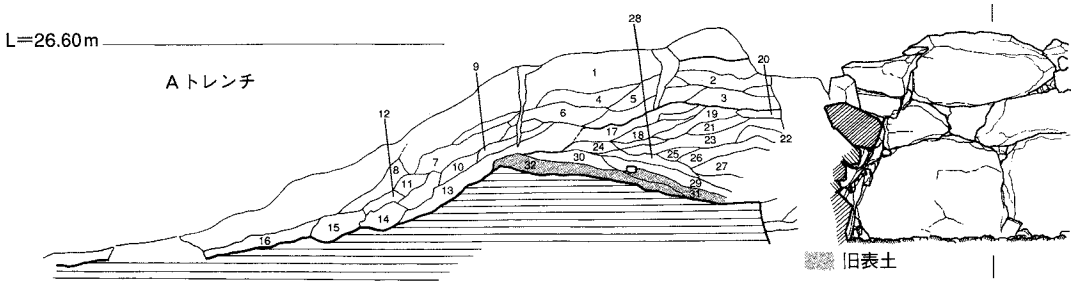
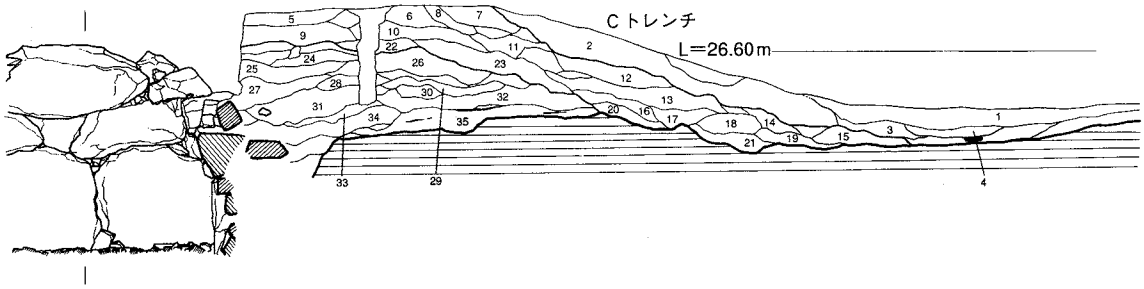


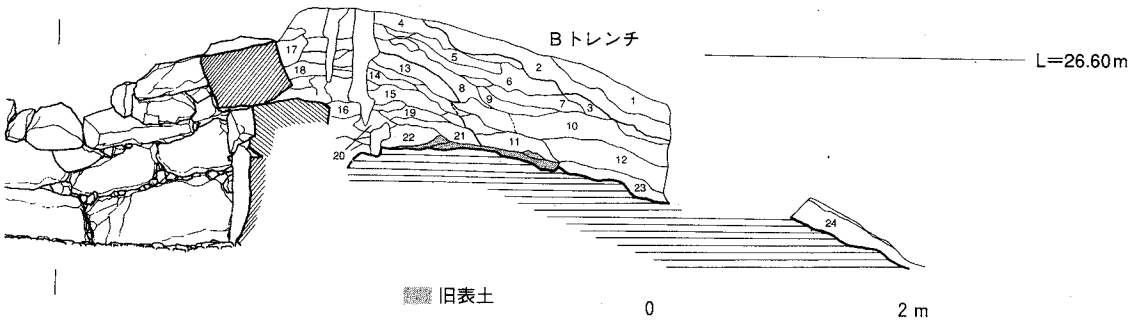
Fig. 58　3号墳 地山成形図（1/200）



1. 暗赤褐色土（もろく、墳丘の２次堆積）
2. 赤褐十黄褐色砂質土（しまりなく、もろい）
3. 赤褐十黄褐色砂質土（しまりなく、もろい）
4. 赤褐色土（もろい）
5. 赤褐十黄褐色砂質土
6. 明黄褐色砂質土（硬質）
7. 赤褐色～黄褐色土（木根による攪乱多くサラサラしている）
8. 明黄褐色砂質土
9. 黄褐色土
10. 暗黄褐色土
11. 淡黒灰十黄褐色土
12. 黄褐色砂質土
13. 黄褐十赤褐色土
14. 淡黒灰色土（炭化物多く含む）
15. 黄褐色土（土壌化し粘性をもつ）
16. 黄褐色土（しまりがない）
17. 黄褐十赤褐色土（砂質）
18. 黄褐十赤褐色土（黒灰褐色土若干含む、旧表）
19. 黄褐色砂質土
20. 淡黒灰色土（炭を含む）
21. 淡黒灰色土
22. 黄褐十赤褐色土（淡黒褐色土を若干含む）
23. 黄褐十赤褐色土
24. 黄褐十赤褐色土
25. 黄褐十赤褐色土（白色軟岩を若干含む）
26. 黄褐十赤褐色土
27. 赤褐十黄褐色土（炭を若干含む）
28. 黄褐十赤褐色土
29. 赤褐十黄褐色土
30. 赤褐十黄褐色土
31. 黄褐十淡黒灰色土（炭を含む）
32. 淡黒灰色土（旧表）



1. 暗赤褐色土（上部は腐植土、墳丘の２次堆積）
2. 赤褐色土（もろく褐色をおびる。墳丘流土）
3. 暗赤褐～褐色（周溝埋土）
4. 淡黒褐色土（周溝埋土、腐植土）
5. 黄褐十赤褐色土
6. 黄褐十赤褐色土（上部は墳丘の２次堆積の可能性あり）
7. 黄褐十赤褐色土
8. 明黄褐色土
9. 黄褐十赤褐色土（砂質、サラサラしている）
10. 黄褐十赤褐色土（６、22、23と層界は不明瞭）
11. 黄褐十赤褐色土（淡黒褐色のブロック含む）
12. 黄褐十赤褐色土
13. 黄褐十赤褐色土
14. （暗）黄褐色土（墳丘の２次堆積の可能性あり）
15. （暗）黄褐色土（墳丘の２次堆積の可能性あり）
16. 赤褐色土
17. 赤褐色 砂質土（赤味が強くサラサラしている）
18. 淡赤褐色土（粘性をおび、硬質）
19. 赤褐色土（白色脈を含み地山に近い）
20. 赤褐色砂質土
21. 明黄褐色土
22. 黄褐十赤褐色土
23. 黄褐十赤褐色土
24. 黄褐十赤褐色土
25. 黄褐十赤褐色土
26. 黄褐十赤褐色土
27. 黄褐十赤褐色土
28. 黄褐色砂質土（地山の軟岩）
29. 暗褐色砂質土（炭化物含む）
30. 黄褐十赤褐色土
31. 黄褐十赤褐色土
32. 黄褐十赤褐色土
33. 明黄褐色砂質土（地山の軟岩が崩れたもの）
34. 黄褐色砂質土
35. 黄褐色砂質土



1. 暗黄褐色土（表土、墳丘流土）
2. 暗黄褐色土（１より黒味の強い腐植土を含む）
3. 赤褐十黄褐色土
4. 赤褐色土（汚染されていないが、上部は２次堆積か）
5. 黄褐色土ブロック
6. 淡黒灰色土（赤色土を小ブロック状に少し含む）
7. 赤褐十黄褐色土
8. 赤褐十黄褐色土（暗く褐色系に近い）
9. 淡黒褐十赤褐色土
10. 赤褐十黄褐色砂質土（しまりがなくサラサラしている）
11. 赤褐十黄褐色砂質土（しまりがなくサラサラしている）
12. 赤褐十黄褐色土（しまりがない）
13. 赤褐十黄褐色土
14. 赤褐色土
15. 淡赤褐色土
16. 黄褐十赤褐色土
17. 赤褐十黄褐色土
18. 淡赤褐色土
19. 黄褐十赤褐色土
20. 黄褐十赤褐色土
21. 赤褐十黄褐色土（地山の白色脈ブロック含む）
22. 黄褐十赤褐色土
23. 赤褐十黄褐色土（しまりなく、12と近似）
24. 赤褐色土（墳丘流土）

Fig. 59　３号墳 墳丘断面図（1/60）

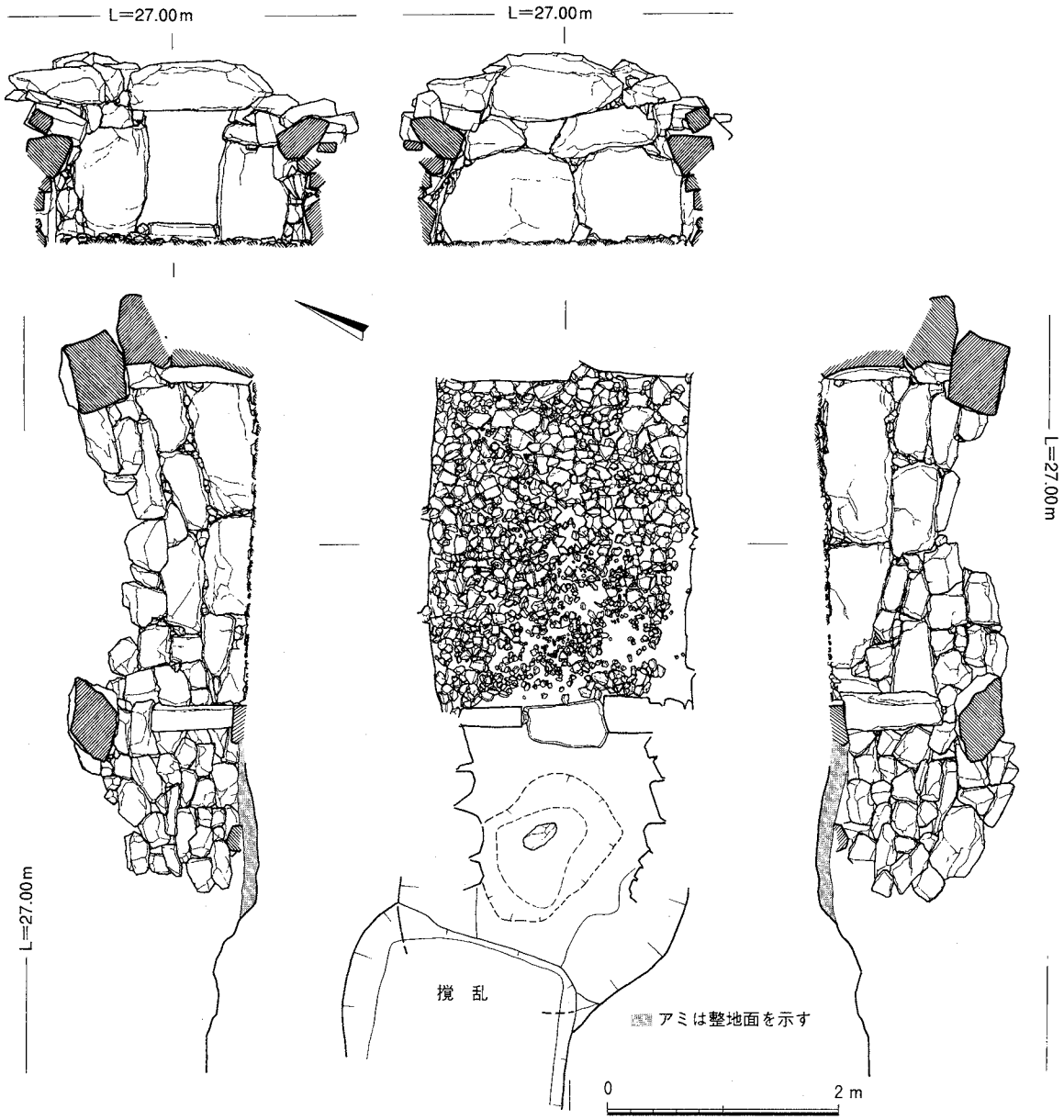


Fig. 60　3号墳 石室実測図（1/60）

Aトレンチでは墳裾は石室中心から6.3mの位置に認められる。先述したが、最下の淡黒灰色土（31、32層、旧表土）は石室側へ下降し、石室中心から4.0mの位置で急角度で削り出される。第1次墳丘の裾はこの位置にみられ急勾配に積まれる。第1次墳丘中、特に、17、19、20層以下では明黄褐色系の硬質土層になる。

(3) 埋葬施設

埋葬施設は主軸方位をN－65°－Eにとり南西方向に開口した竪穴系横口式石室である。墓道まで含めた主軸長は5.5mをはかる。石室は左右シンメトリカルなプランを呈し、設計に極めて合致したものと思われる。石室を構築する石材はすべて花崗岩を用いる。

石室掘り方

奥壁側で3.5m、墓道まで含めた主軸長が6.0mの長方形に近いプランに掘り込まれている。深さは

90cmほど掘られているが、地山が低い北側では浅く、掘り込み上面のレベルは腰石の中位になる。奥壁と左側壁側では掘り方近くに腰石を据えるのに対し、右側壁側では中央で外側へ張り出した弧形をえがいたプランで掘り方と腰石の間に隙間がある。

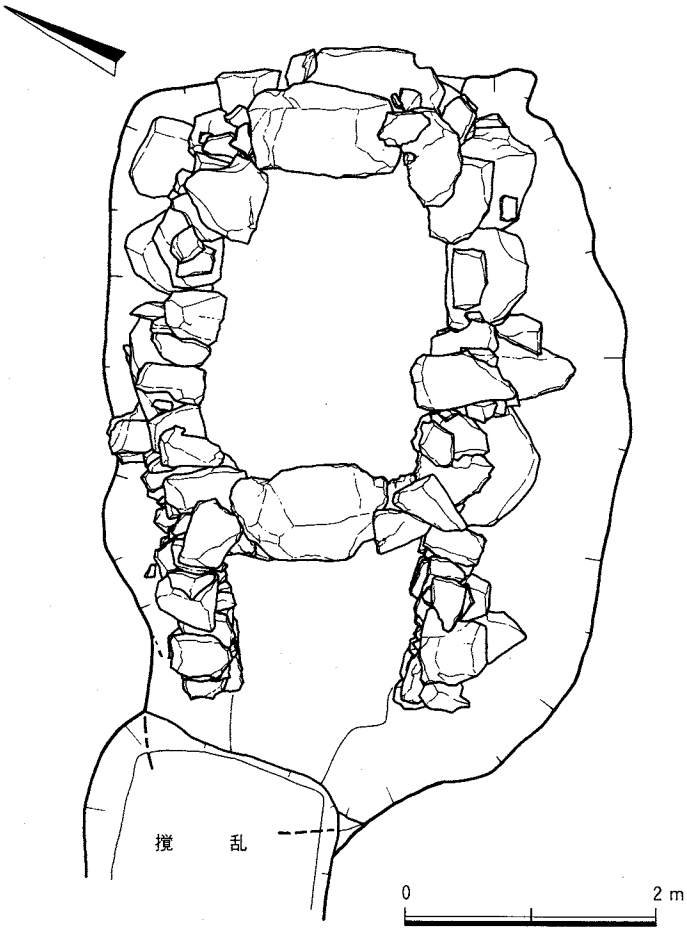


Fig. 61　3号墳 石室俯瞰と掘り方実測図（1/60）

玄室

奥幅、2.20m、前幅2.25m、左壁長2.80m、2.80mの整然とした長方形プランを呈す。奥壁は腰石２石を据え、両側壁の腰石に挟み込まれ、上面の高さは両側壁より20cm程高い。その上位３段目まで壁体は遺存するが、壁体の傾斜角度からさらに１段以上は積まれるものと思われる。３段めには横長の大き目の１石をのせ横位の右隅角に力石が用いられている。左側壁の腰石３石はいずれも横長の石材を用い、幅、高さともに玄門側へ減じていく。１、２段目の上面は比較的、目路がとおり、玄門近くでは長さを調整するためか２段目以上小石を充塡している。右側壁も同様に腰石３石を用いるが、２石が横長であるのに対し、玄門側のものは極端に小さくして壁長を揃える。目路は１～３段目の上面いずれも良く通る。中央から玄門側への壁体に用いた石材は奥壁側に比べ、小さなものが用いられる。玄門部は左右に両者ともに幅55cmの偏平な石材を用いて袖部を構築し、その上に右側で１、左側で２石の小石を置き冠石を構架する。左右隅角の袖石上位には力石の使用がみられる。なお、右側の冠石下に置かれた小石は圧力で割れ、閉塞石実測時には安全のため除去した。

敷石は玄門側の右隅に欠くもののほぼ全面に残る。奥壁側に大きめの石を用いる他は10～15cm大のものを敷き、その上に全面にわたって、小さい玉石がまかれている。床面には鉄刀、刀子の副葬品が出土したが土器類はみない。

横口部

埋葬施設が竪穴系横口式石室の形態をとるため、玄門から墓道までの間を横口部と呼称する。横口部の左右両側壁には玄室の側壁ラインより４～50cm内側に積石が構築され更に、墓道方向へわずかに狭まる。積石は不揃いな大きさの小塊石を用いた目路を通さない乱雑な積み方である。基底面は石室掘り方による地山面が中央で窪むが、その上に赤褐色粘質土を厚さ10cm程盛って整地し、平坦に均す。この整地面中央に敲打痕のある石が置かれていたがその意味は不明。

墓道

横口部に連結して開口方向へ上がっていく。土層堆積から３層と７、９層の層界が追葬時の掘り直しによるものとみられる。墓道から横口部までは３層でいっきに埋められているが横口部の左側壁から閉塞石までの埋土が異なり、最終追葬前のものが残るものと考えられる。

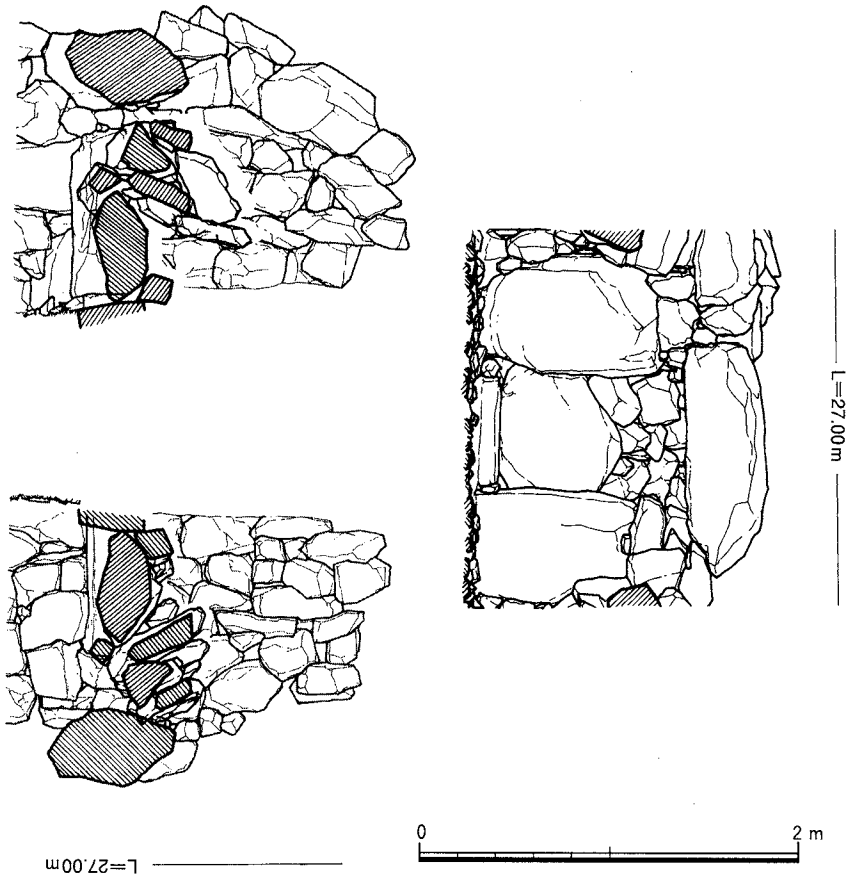


Fig. 62　3号墳 閉塞石実測図（1/40）

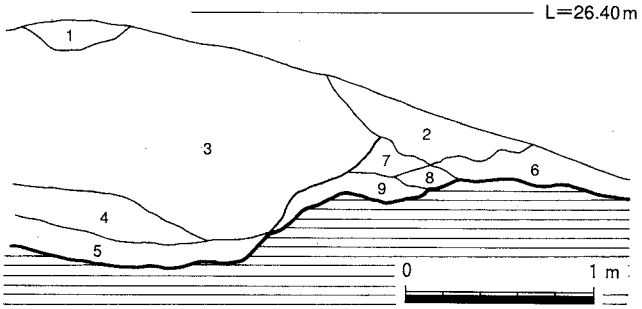
閉塞施設

玄門の仕切石上に横幅90cm、高さ65cmの楕円形に近い偏平な大石を立てかけてのせ、背後の上部のみに塊石を並べ積み重ねる。

(4) 出土遺物

出土状況

玄室内から出土した遺物は3000、3002の刀子と3100の鉄刀の鉄器のみである。鉄刀(3100)は右側壁に沿った敷石直上近くから、水平の状態で出土した。鋒を袖石側に向ける。刃部と茎の境近くに3002の刀子が同じレベルで出土した。3000の蕨手刀子は奥壁近くの中央部から、敷石のほぼ直上レベルで出土した。



1. 赤褐色土（3との層界は明瞭）
2. 暗赤褐色土（赤褐色土と褐色土が混り、粘性がある。）
3. 暗褐色土（前庭～墓道の埋土。赤色粘質土をまだらに含む、青灰粘土を若干含み、固さがやや軟質。）
4. 赤褐色土（3とほぼ同じ。粘性をおび、やや硬化する。）
5. 赤褐色粘土混り褐色粘質土（閉塞石側はとくに赤褐色粘質土の割合が多く層界が明瞭）
6. 黄褐色～褐色砂質土（均質）
7. 黄灰色風化礫ブロック混り淡赤褐色土（9層と近似）
8. 黄褐色～褐色粘質土（6層と近似）
9. 淡赤褐色土

Fig. 63　3号墳 墓道土層断面図（1/40）

土器類はそのほとんどが周溝内からの出土である。特に、IV区からIII区にかけて多く、その中、墓道脇に須恵器坏、小壺、土師器坏片が集中し、須恵器甕片は広範囲にみられる。耳環4000はIII区の表土から、ガラス玉7006は墓道表土から出土した。

Fig. 64　3号墳 石室内遺物出土状況図（1/40）

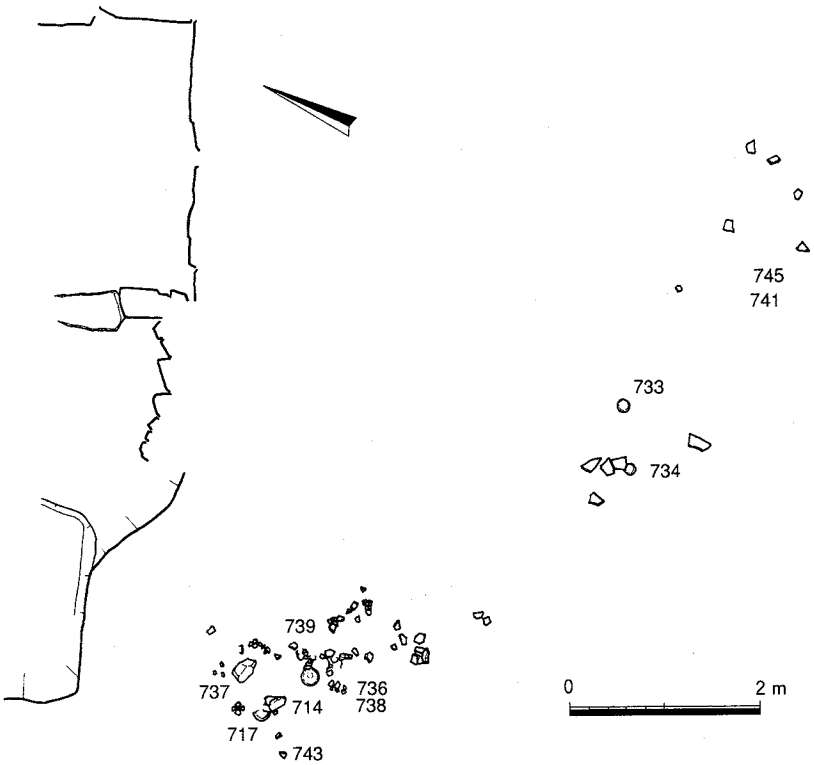


Fig. 65　3号墳 Ⅳ区周溝内遺物出土状況図（1/80）

遺物

（周溝内出土）

Fig.66で図示した土器類はすべてⅣ区周溝内出土である。須恵器坏類には法量、器形から図上のセットで分けられる。743坏蓋は口径16.0cmで体部と口縁部との境に明瞭な段がつく。717坏身は受部径15.6cm、器高6.6cmを測る大形品である。返りは長く直に近い立ち上がりである。743、717ともに灰白色をした極めて軟質の土器で焼成のうえからも近似する。734と738のセットは器形、手法の点で近似するが、前者が口径12.5cmであるのに対し後者は15.5cmを測り法量に差がある。蓋の体部と口縁部の境は形骸化した沈線になっているが、口唇部には浅い段をもつ。なお、738と714には同じヘラ記号を付し、714は完形である。737、739は短頸直口の小壺である。体部のやや上に緩い屈曲を有し、上部にカキ目を施す。740のはそう口縁には細かい櫛歯波状文が施されている。736は胴部径が15.3cmの小形の提瓶である。胴部外面のほぼ全面にカキ目が残る。取手は付かない。744は土師器の坏である。器面が剝落し調整が不明である。746、747は器台と思われ、外面に沈線と細かい櫛歯の状波状文を施す。746は灰色、747は暗青灰色を呈す。742の甕口縁部にはカキ目後斜めの刻みを連続させる。745は口径18.0cmを測り玉縁状の口縁端部以下にカキ目を施す。胴部外面には木目直行の平行タタキとカキ目、内面に同心円の当て具の痕跡を残す。741の甕体部の外面には木目直行の平行タタキが残り、内面は同心円文の当て具痕がカキ目とナデによって大部分消されている。

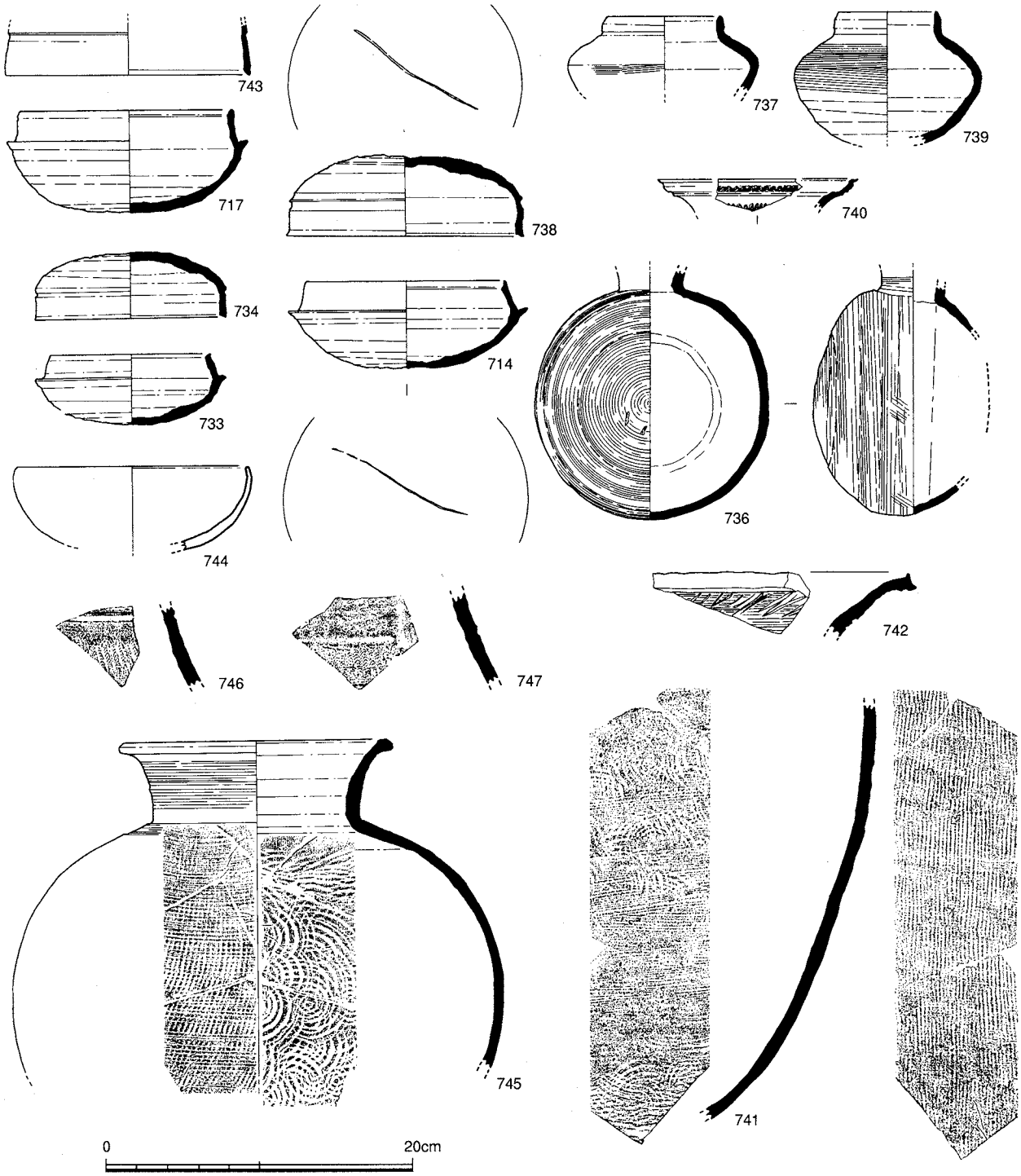


Fig. 66　3号墳 周溝内出土土器実測図（1/4）

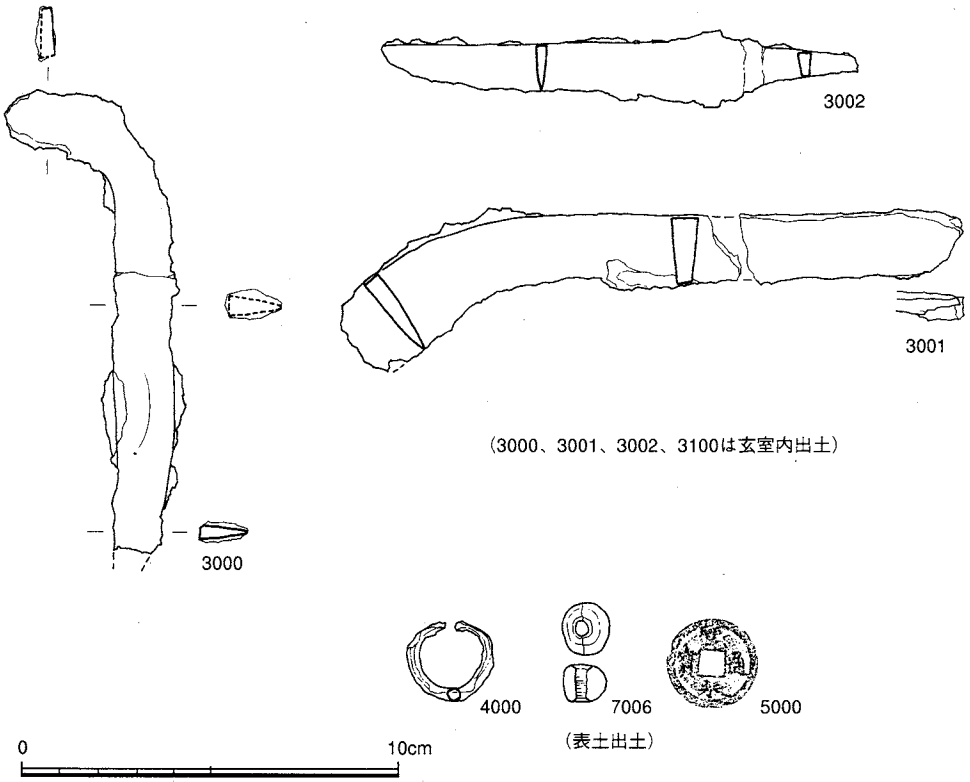
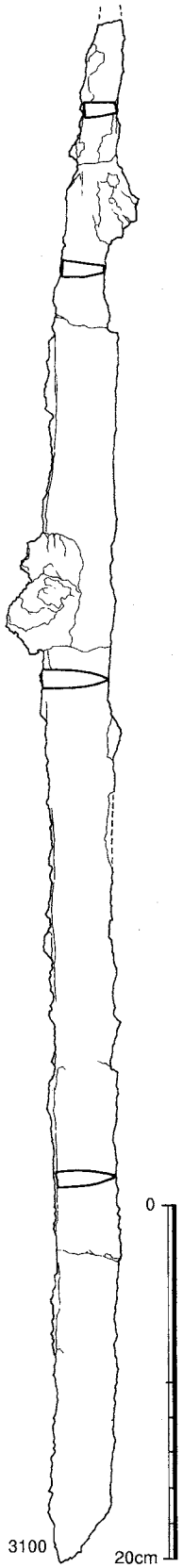


Fig. 67　3号墳 出土遺物実測図（1/2・1/4）



（玄室内出土）

先述したが、遺存する玄室内の副葬品は鉄器のみである。3001の鉄鎌は玄室内埋土中からの出土で原位置を保っていない。3000は柄を刃部の棟側に曲げた蕨手刀子とみられる。刃部先端が欠損するが、遺存する全長12.0cm、刃部長9.0cmを測る。3002の刀子は完形で、全長12.7cmを測る。茎へは段状の関を有して移行する。3001は幅1.8cmの長方形板の先端を幅広に曲げた曲刃鎌である。切先が欠損するが、断面の切刃は曲げた部分のみにみられる。柄に固定する端部の折り曲げは背側に造っている。3100は全長86.6cmを測る完形の直刀である。刃部長69.0cm、棟は平造である。茎へ棟側が緩やかに移行するのに対し、刃側は段を有した関がある。茎長は17.6cmを測り端部を欠損する。目釘穴は銹で現状では判然としない。

（表土出土）

4000の耳環はIII区表土からの出土である。遺存状態が悪く細身になっているが、径2.3cmを測る。銅芯で表面は剝落している。7006墓道上の表土から出土したガラス玉である。白色を呈し孔内に捲いた痕跡を残す。5000の寛永通宝の他、土師皿片、染付皿も出土し、近世の信仰がみられる。

4．6号墳

(1) 位置と現状

丘陵の北東斜面に位置する。10号墳と極めて近接し、現況ではその墳端間が約2mに見取れた。北側墳端に丘陵の傾斜変換点があり、緩斜面になっていく。下方の緩斜面に位置する7号、8号墳とは急斜面の北側へ派生した尾根続きに縦列した配置をとる。東側には浅い谷を挟んで、4号、5号墳が占地する。

本墳は急斜面上にありながら、20.25～17.50mのコンター内に比較的墳丘が良く残り下方に墳丘の流失が考えられるものの径7mのコンターに平行した方向にやや長い円墳と識別された。馬蹄形状の地山成形も観察され、石室から約7mの上方から行っているようにみられた。玄室は天井石は無く、石室の一部が露呈する。

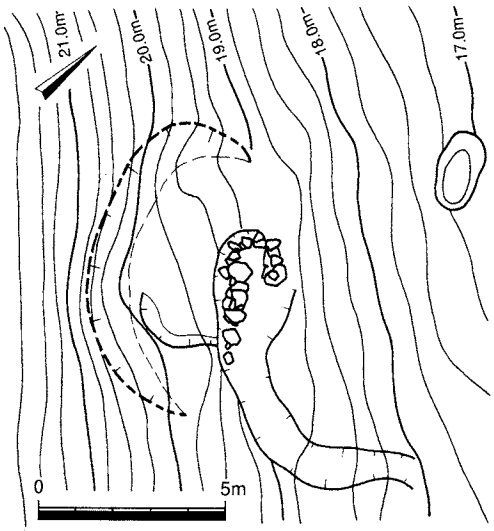


Fig. 68　6号墳 地山成形図（1/20）

(2) 墳　　丘

地山成形

石室は丘陵斜面の等高線に平行して構築している。10号墳の主軸方向より東にふれているのは東側の谷筋に等高線が入り込む地形に沿ったものである。この等高線に平行した方向に馬蹄形状の溝が斜面高所に掘削されている。

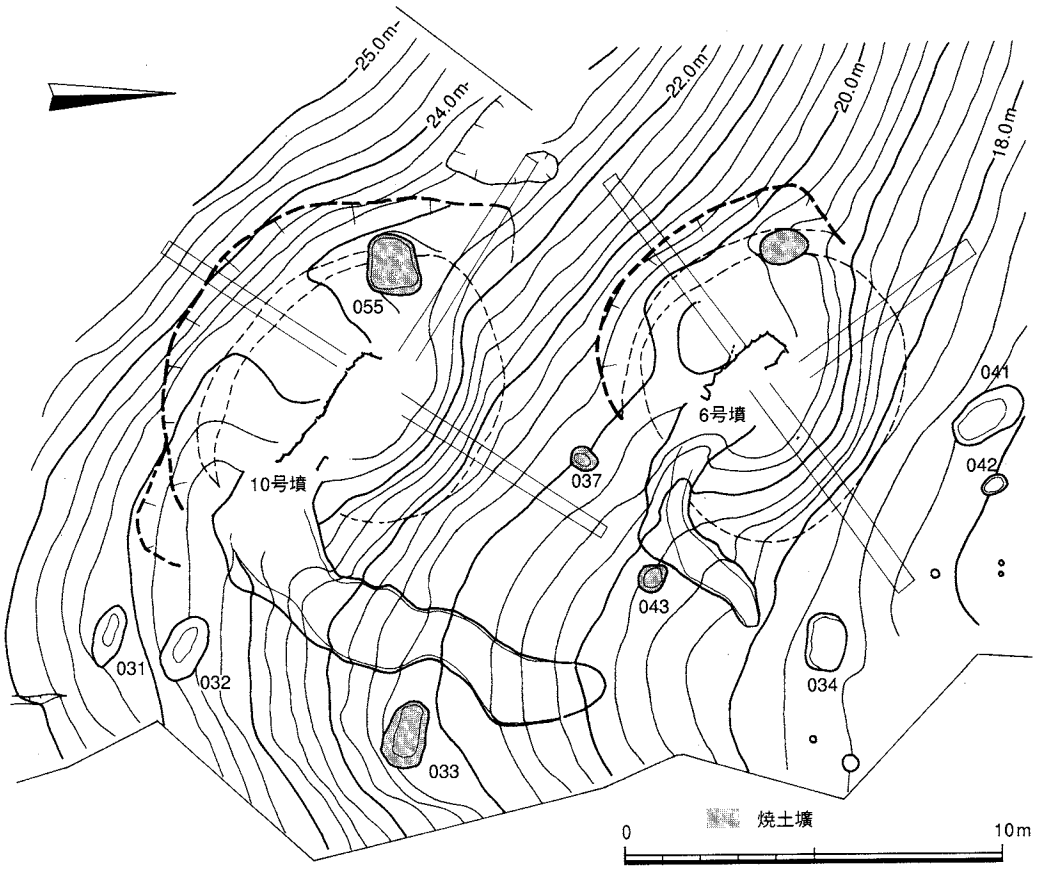


Fig. 69　6号、10号墳 墳丘遺存図（1/200）

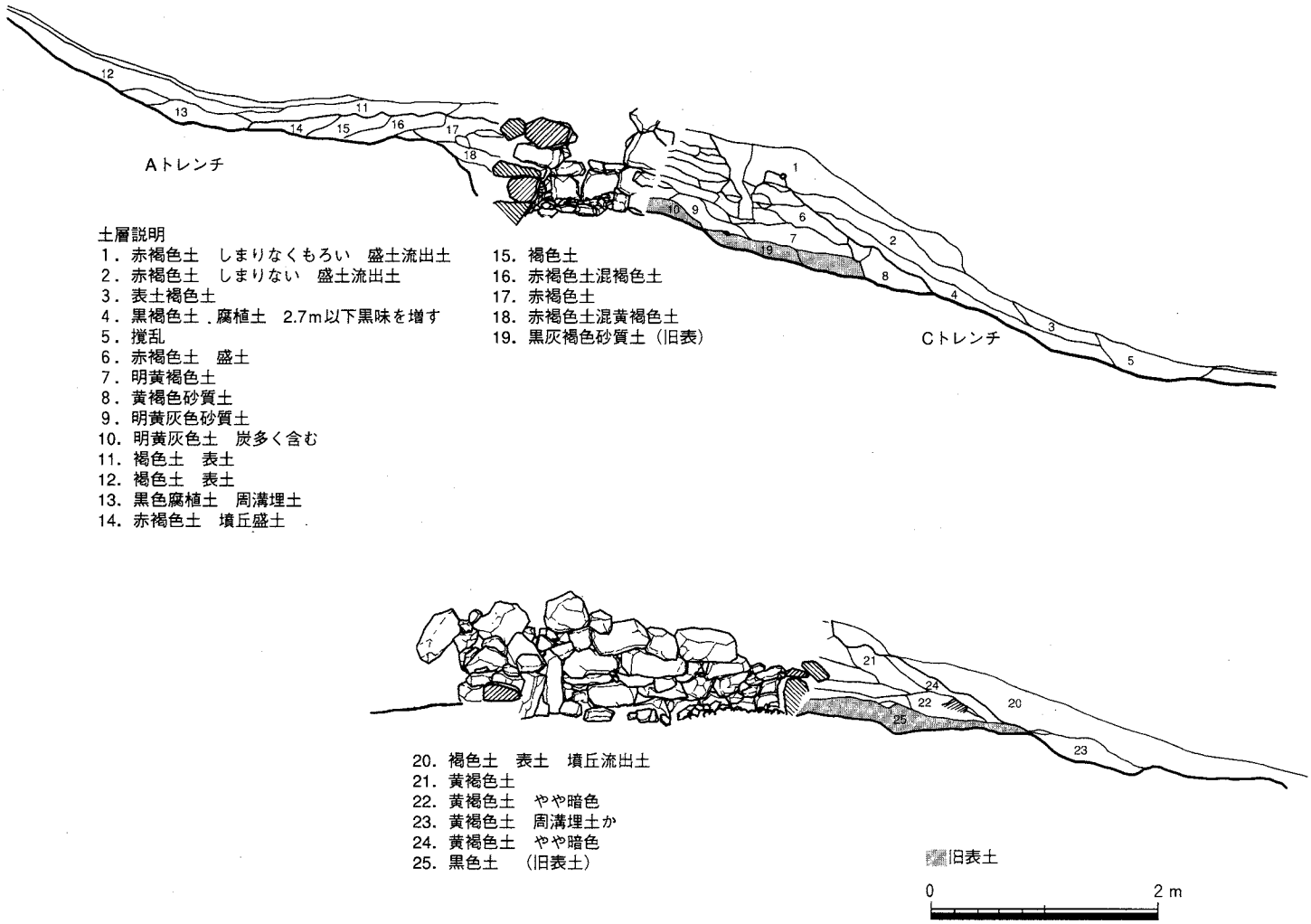


Fig. 70　6号墳 墳丘トレンチ土層断面（1/60）

検出された掘削の上端は石室主軸直行方向に中心から4.5mの距離で、20.75mの等高線に沿うものである。しかし、不明瞭であるがさらに高所からはじまる地形の変換がみられ、石室中心から5.5m以上の範囲域におよんでいたものとみられる。傾斜角度は約35°で南北方向の外幅7.8mを検出した。内側の墳丘基底面の成形は旧地形が急斜面な為、北側へ緩やかに下降する成形にとどまる。そのためIII、IV区では丘陵裾部の緩斜面域と合致してしまい、地山成形の範囲が不明瞭なものになっている。なお、下方のIII、IV区最下層には旧表土を残している。

墳丘

墳丘は馬蹄形状周溝内の整地面を基底にして盛土を行うが、高所のI、II区では周溝最下部に黒色腐植土が堆積し、墳裾の検出が容易であったのに対し、下方のIII、IV区では盛土の流出により困難をきわめた。

土層観察からAトレンチでは周溝最下部のレベルまで墳丘が認められ、その上層に13層の黒色腐植土（周溝埋土）が堆積する。墳端までの距離は石室中央より3.0mを測る。盛土は周溝基底より30cm程上までしか遺存しない。石室近くから徐々に積み重ねられた層序がみられたが、単位が大きく、一気

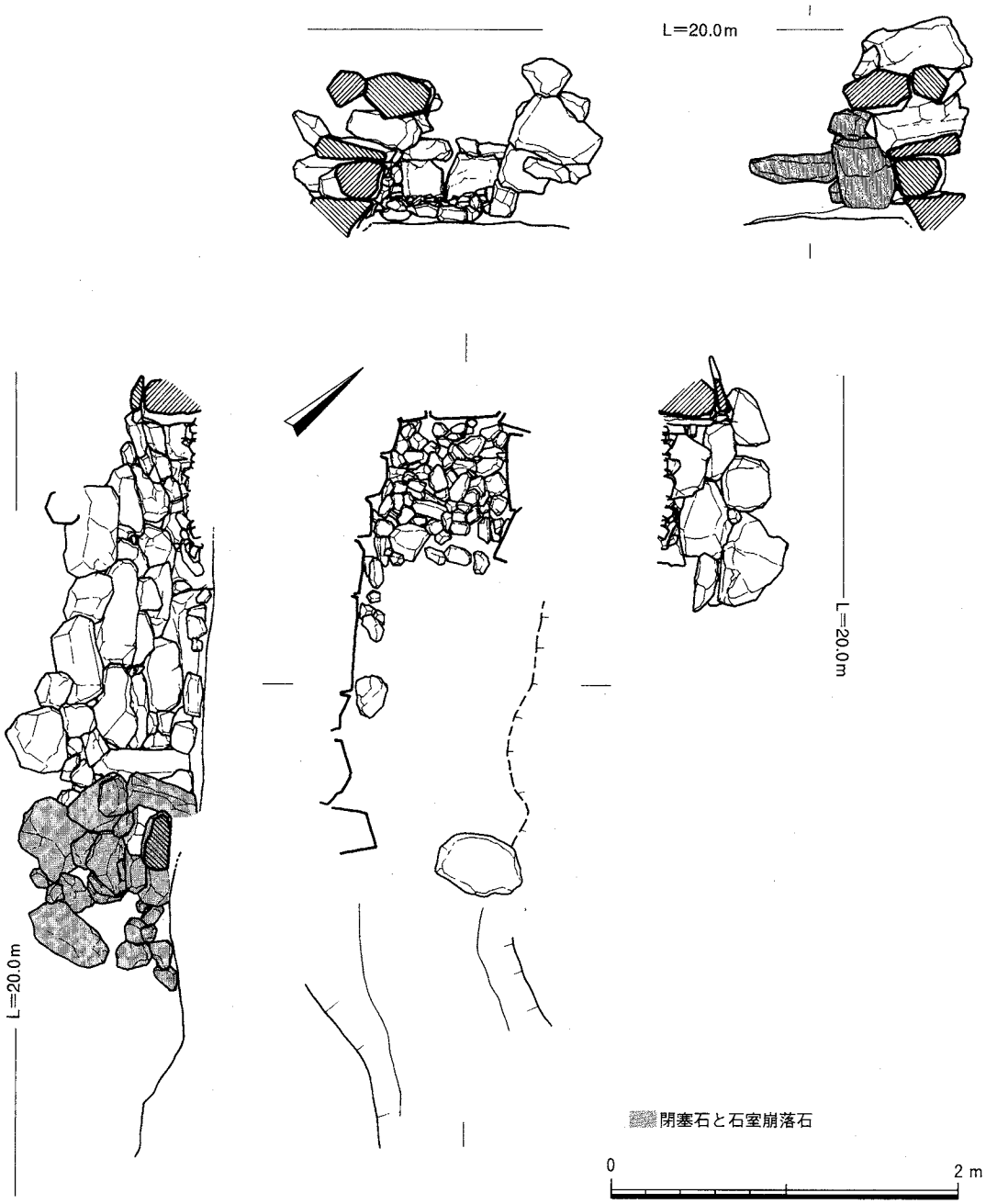


Fig. 71　6号墳 石室実測図（1/40）

に行われた感がある。反対側のCトレンチでは最下層に旧表土を残し、その上に地山下部の明黄褐色砂質土（7層、9層）を用いた大きい単位の盛土のせ、平坦面をつくる。さらに、その上部にはAトレンチに比べ崩落防止を意識したためか密な単位で盛土を積み上げていく。墳端は8層までと考えられ、石室中央からの距離は3.1mを測る。Bトレンチでは層厚20cm程の旧表土を残し、その上に大きな単位の黄褐色を基調とする土色の土をのせていく。墳端は旧表土が削り落とされる位置までと考えられ、石室中心から3.7mを測る。この墳端から浅い周溝がみられるが、その埋土の22層はII区でみられた黒色腐植土ではなく盛土に近いものにかわっている。

Bトレンチ付近の墳端の一部に人頭大の石が検出されたが、散在しており、明確な列をなさない墳

端をきめる程度のものであろうか。II区周溝内に1.3×0.9mの不整形土壙が検出された。埋土に炭を多く含むものの焼壁はなく深さ5cmほどの浅いものであった。

(3) 埋葬施設

埋葬施設はN－34°－Wにとり、北東方向に開口する横穴式石室である。石室の崩壊が著しく、斜面の下降する東側にむかって、壁体も傾き、右側壁の大半を失っている。この石室の崩落によって、石室壁体の検出が困難を極め、誤認をくりかえし、トレンチの設定や石室図面作成等でミスをおかした。

石室掘り方

高所を占めるI、II区では地山成形によって比較的、水平に近い平坦面が造られ、そこに左側壁から奥壁にかけての石室掘り方が掘削されている。この範囲の石室からの隙間はほぼ等間隔である。深さはAトレンチで80cm以上が確認された。奥壁から右側壁にかけての成形面は旧表土を残して東側へ下降し、石室掘り方はその高所の旧表土上に腰石をのせる浅い掘削しか行われていない。そのため右側壁は安定せず崩落も著しい。玄室内に腰石を安定させる為の浅い掘り込みが検出されたがかなり不明瞭な部分がある。

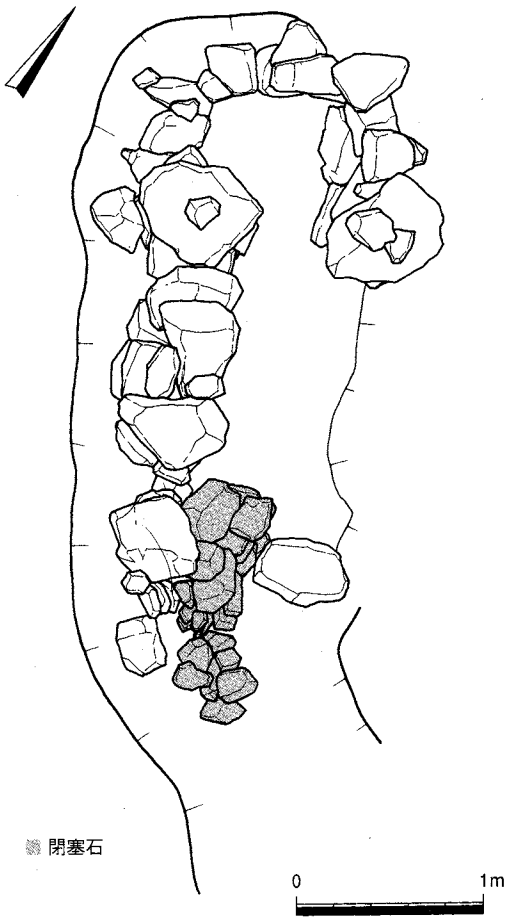


Fig. 72　6号墳
石室俯瞰と掘り方実測図（1/40）

玄室

奥幅0.57m、左側壁長2.43mを測る無袖の狭長プランを呈す。奥壁は小振りな塊石2を使用し右側壁とは直行するが、左側壁のラインからはやや開く。左側壁は8個の腰石を用いて構成するが、玄門側2石のラインは内側に入りこむ。当初、玄門に出土した偏平な石を仕切石に見立て左側壁からこの石に連結した立石に袖部の可能性をもったが、石室プランが明らかになるとともに仕切石と考えた石は、位置と下底のレベルから閉塞石ないし右側壁が崩落したもので、立石は閉塞石であることが判明した。玄門には一段下がる掘り込みがみられ、左側壁の端を回り込んで石室掘り方に連結している。残りが良い左側壁は地形の傾斜方向する東側に向かって傾倒し、不安定な状態になっていた。中央部の横長石材を用いた一部に目路が通る他は、大きさも不揃いで雑な積み方をしている。敷石は奥側一部に良好に検出された。10cm大の小石が多く用いられている。

墓道

玄門から先述の東側谷部に下降しながら折れ曲がってとりつく。幅1.2m、深さは南側の高所で約25cm、北側の立ち上がりは斜面の流出により不明瞭となっている。玄門近くでは黒色腐食土の埋土であるが、下降するに従い、黒味を無くし、不明瞭になってくる。墓道内には破損した遺物が延長方向に流出したように出土した。墓道傍には焼土壙037、043が検出された。

6号墳の上方には同じく谷部に沿った10号墳からの墓道が延びてくる。この6号、10号墳に接続した墓道は丘陵裾部を8号墳から4号、5号墳に延びる墓道にとりつくものと考えられる。

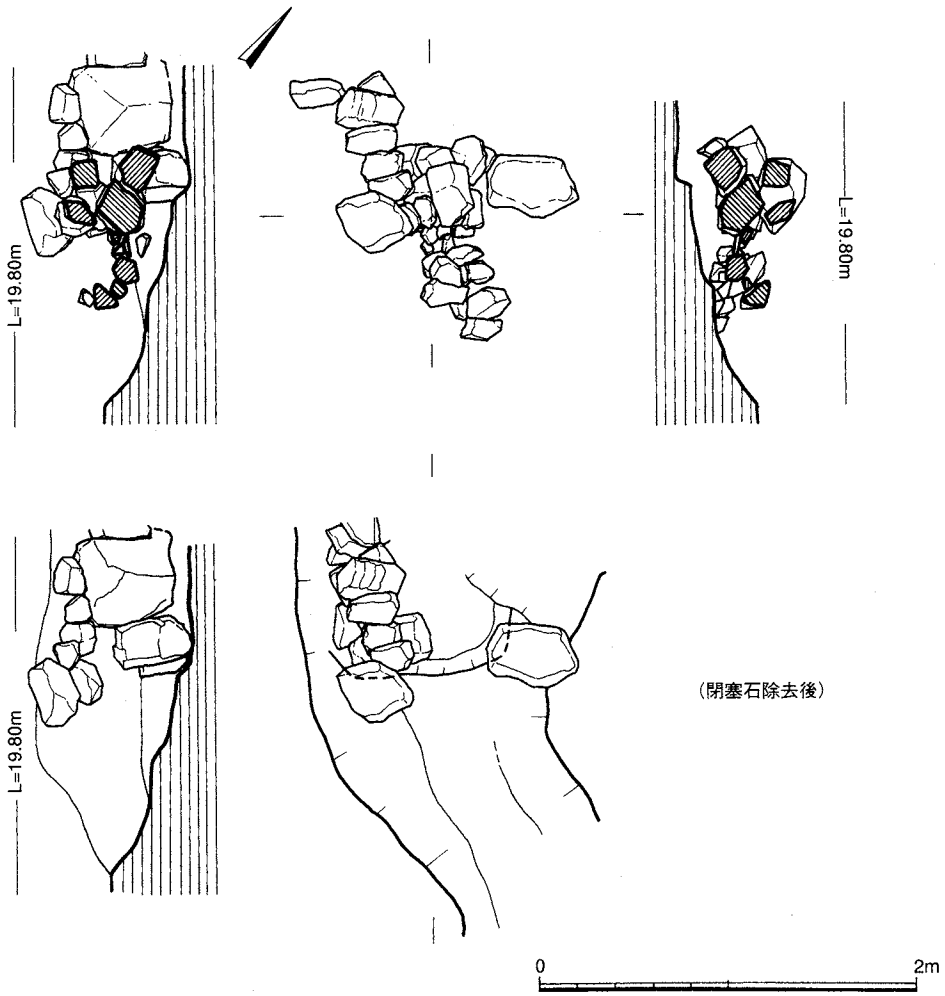


Fig. 73　6号墳 閉塞石実測図（1/40）

閉塞施設

玄門には石室壁体と閉塞石が崩落したものが入り乱れていたが下部は石室側に20cm大の石を用い、背後には10cm以下の小石が積まれ鉄滓や土器片を若干まじえていた。閉塞石は10～30cm大入り交じり積んでいた。その背後に横長の大石が据わり、石室の天井石（冠石か）が崩落したものと思われる。

遺物

（出土状況）

図示した遺物の出土地点の詳細はFig.74に記載している。墳丘内からはＩ区閉塞石脇から須恵器甕412、須恵器坏身406、374と土師器小形甕の底部が出土した。位置とレベルから周溝際の墳丘下部に埋置されている。甕412は潰れた状態でその掘り方は判然とせず、体部際に土の違いが不明瞭ながら見える程度である。破片は周辺の表土や閉塞石近くの墓道内からも出土したが、墳丘崩壊時に散乱したものが多いと思われる。坏406、374は完形で406は正置、374は倒置していた。

II、III区の石室奥壁近くの墳丘内からは土師器小甕片39^、須恵器甕409が出土した。甕409はII区からIII区にかけて破片が散乱していた。出土レベルは墳丘下部にあり、II区で旧表より10～20cm上、III区では口縁部が旧表より６cm浮いていた。

墓道からは須恵器坏404、405、403、土師器408、386、須恵器提瓶384、411、須恵器甕410が出土し

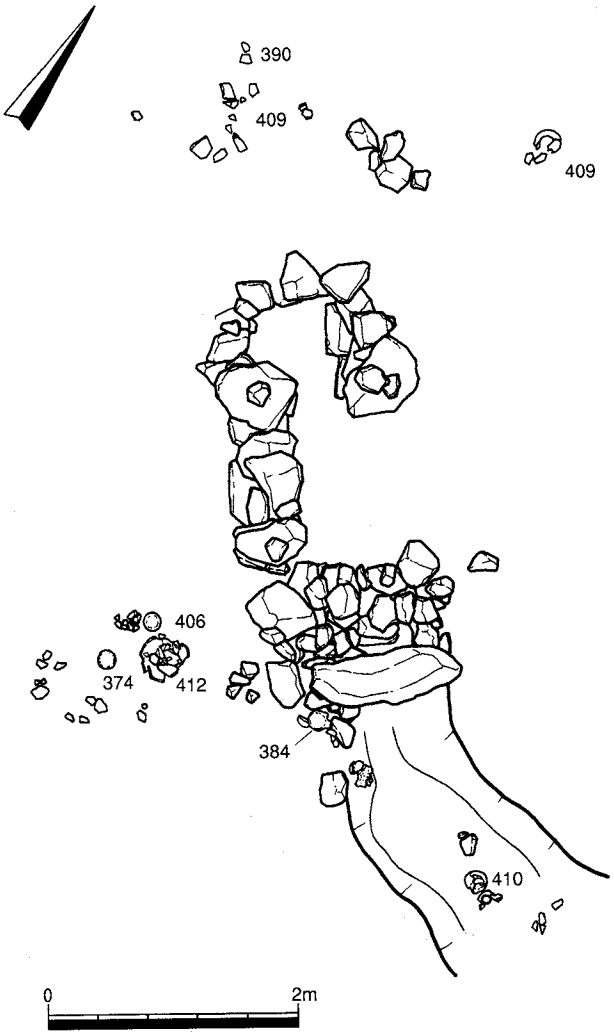


Fig. 74　6号墳 遺物出土状況図（1/60）

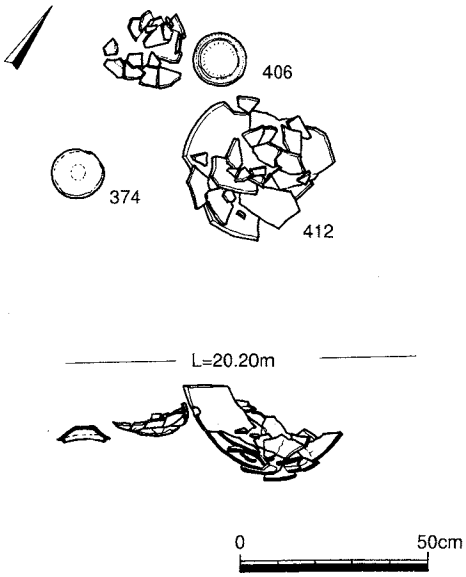


Fig. 75　6号墳 Ⅰ区墳丘内
遺物出土状況図（1/20）

た。この中坏404、403、提瓶411の少量が上方の10号墳Ⅲ、Ⅳ区の表土から出土し、散布されていたと考えられる。上方から墓道への流入も考えられるが、破片の割合、403、411のように墓道下底からの出土を考慮すると墓前祭祀されたものを周辺に散布したものであろう。坏405の破片はⅠ区周溝からも出土している。墓道からの出土量は少なくコンテナ1箱に満たない。

周溝からの出土はⅠ、Ⅱ区に限られ、北側斜面では流出したものと思われる。須恵器坏405、402、400は墳丘内出土の甕412近くから破片で出土した。

遺物

（須恵器）

須恵器坏蓋は404の天井部に丸みを持つものと、405の平坦になったものが出土したが、ともに口径12.4cm程である。坏身は400、401が他より古い器形をなすと思われる。400は口径14.3cmを測り、外底部に丸みをもつ。401は口径14.7cmを測り、返りは細身で急な立ち上がりである。内底に当て具の痕跡を残す。以外の坏身の口径は13cm台に収まり、外低中心には若干のナデを加えた程度の未調整に近い部分を残す。403、374は逆台形にちかい体部で外低が突出し、ヘラ削りの範囲も体部の1/3以下である。407は器高が低く、返りは短い。調整に特に粗雑な感を受ける。

須恵器提瓶の384、411はともに完形に近い。384は体部中心の円形接合面が剝落している。径18cmの円形の体部に全面にわたってカキ目を施す。頚部にヘラ記号を有す。偏平な片面周縁に斜行連続文を施す。411は器高22cmを測り、径18cmの円形体部をなす。頚部は体部と屈曲して取り付けられ偏平

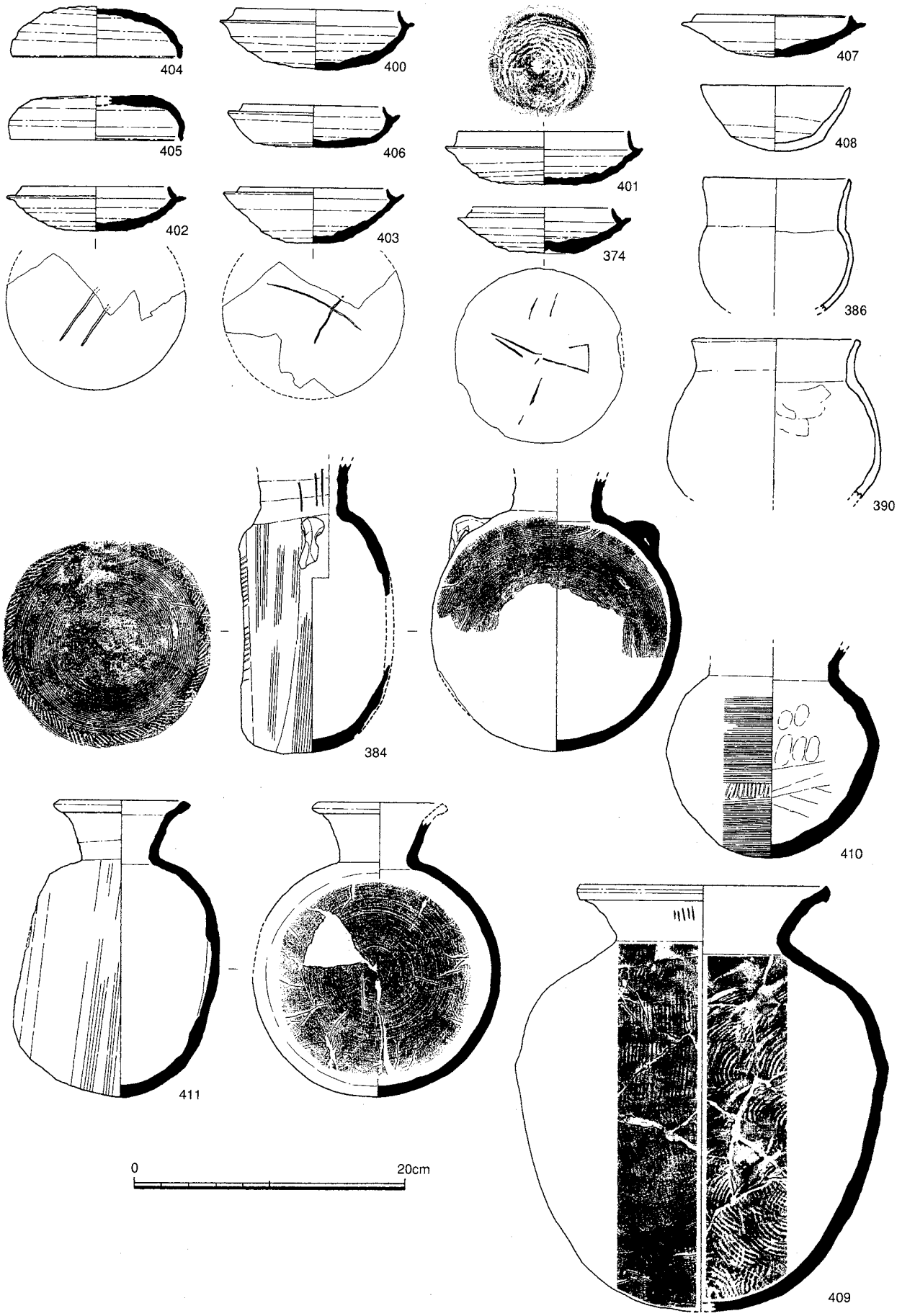


Fig. 76　6号墳 出土遺物実測図1 (1/4)

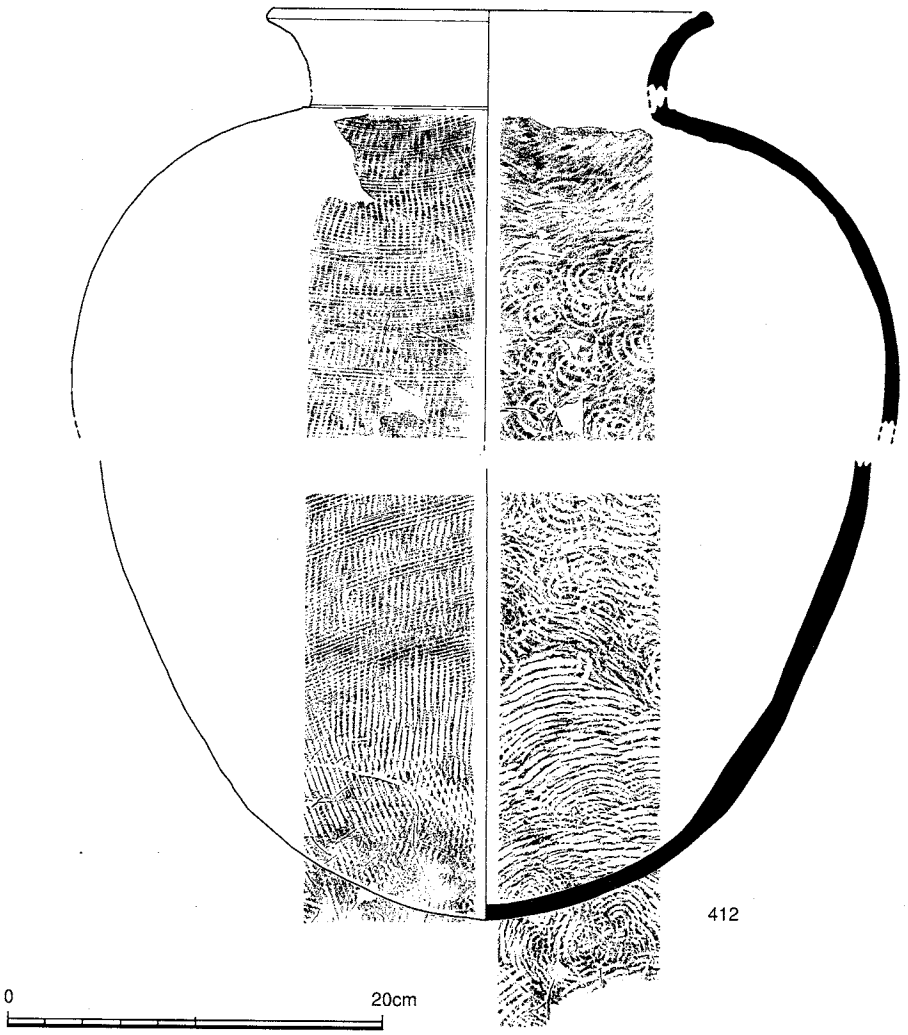


Fig.77　6号墳 出土遺物実測図２（1/4）

遺物出土地点
須恵器坏類
404　Ⅰ区表土、墓道上層、10号墳Ⅲ区表土
405　Ⅰ区表土、Ⅰ区周溝内、墓道（下方）
402　Ⅰ区表土、Ⅰ区周溝内、Ⅰ区墳丘中
400　Ⅰ区表土、Ⅰ区周溝内
406　Ⅰ区墳丘内
403　墓道（閉塞埋土中）、墓道、10号墳Ⅲ区表土
401　Ⅰ区周溝、Ⅰ区表土
374　Ⅰ区墳丘内
407　石室流土中
土師器
408　墓道
386　墓道
390　Ⅱ区墳丘内
須恵器提瓶
384　墓道
411　墓道、墓道Ｂ区下層、墓道、墓道Ａ区上層、10号墳Ⅳ区表土
須恵器甕
410　墓道
409　Ⅲ区墳丘内、Ⅰ区墳丘内（表土の可能性有り）、
　　Ｂトレンチ周溝埋土（墳丘内の可能性有り）Ⅲ区表土、Ⅱ区墳丘内
412　Ⅰ区墳丘遺物群、Ⅰ区表土、Ⅰ区墳丘内、
　　Ⅰ区表土、墓道、墓道（上層）

な片面にはカキ目は施されず、回転ヘラ削りの痕跡を残し、中心部はナデ押さえ。

410の器厚な体部はコマ状の器形をなし、尖り底に近い。体部のほぼ全面にカキ目を施し、一部平行タタキ痕を残す。内面には粗くナデ痕がみられる。409は灰白色を呈した軟質の須恵器甕である。体部外面には平行タタキとカキ目を施し、下位はナデ消される。内面には同心円文の当て具の痕を底部まで残す。412の外面には平行タタキ痕ナデを施し、内面には青海波文と同心円文の当て具を使い分ける。

土師器

408は接合面はないが高坏の坏部と思われる。器面が剝落し調整不明。赤褐色を呈す。386は広口壺は口縁部と体部の境が不明瞭になっている。器面は荒れているが、外面はミガキと思われる。390の小形の甕も口縁部と体部の境は判然とせず移行する。内面ナデ調整。

5．7号墳

(1) 位置と現状

丘陵北側の裾部に位置し、8号墳と近接する。おおよそ標高18.0mの等高線のラインを境に北側へ緩斜面になる地形変換点がみられ、この本墳南側の緩斜面を地山成形し墳丘盛土を造り出す。しかし、現状では馬蹄形状の掘削ラインは不明瞭であった。西側に丘陵斜面を削り出した造成面がみられるが、ここでは、小石室を埋葬施設とする14号墳や焼土壙、柱穴が検出された。丘陵裾部をまわって、本墳と8号墳との境に重機の通路となった痕跡が見られ、本墳北側の墳端が幾分削られている。

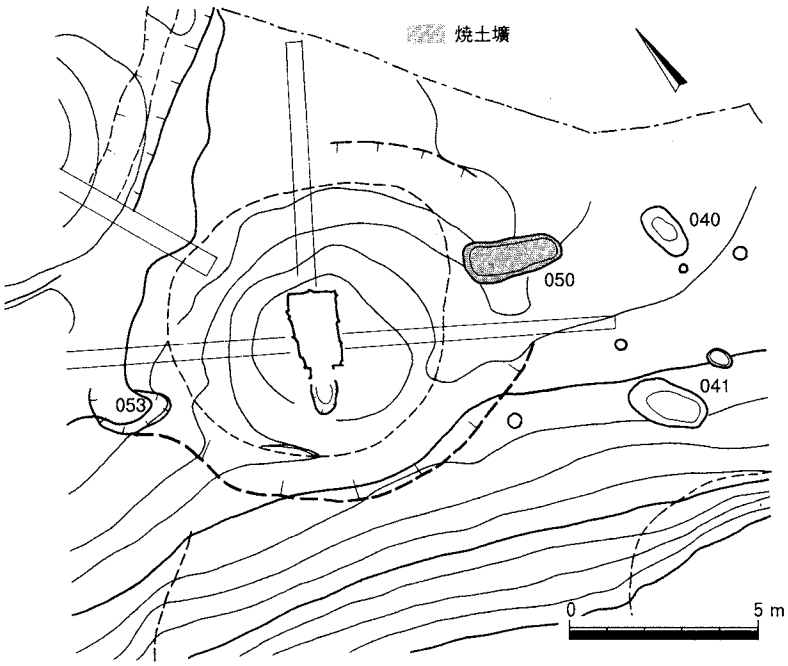


Fig. 78　7号墳 墳丘遺存図（1/200）

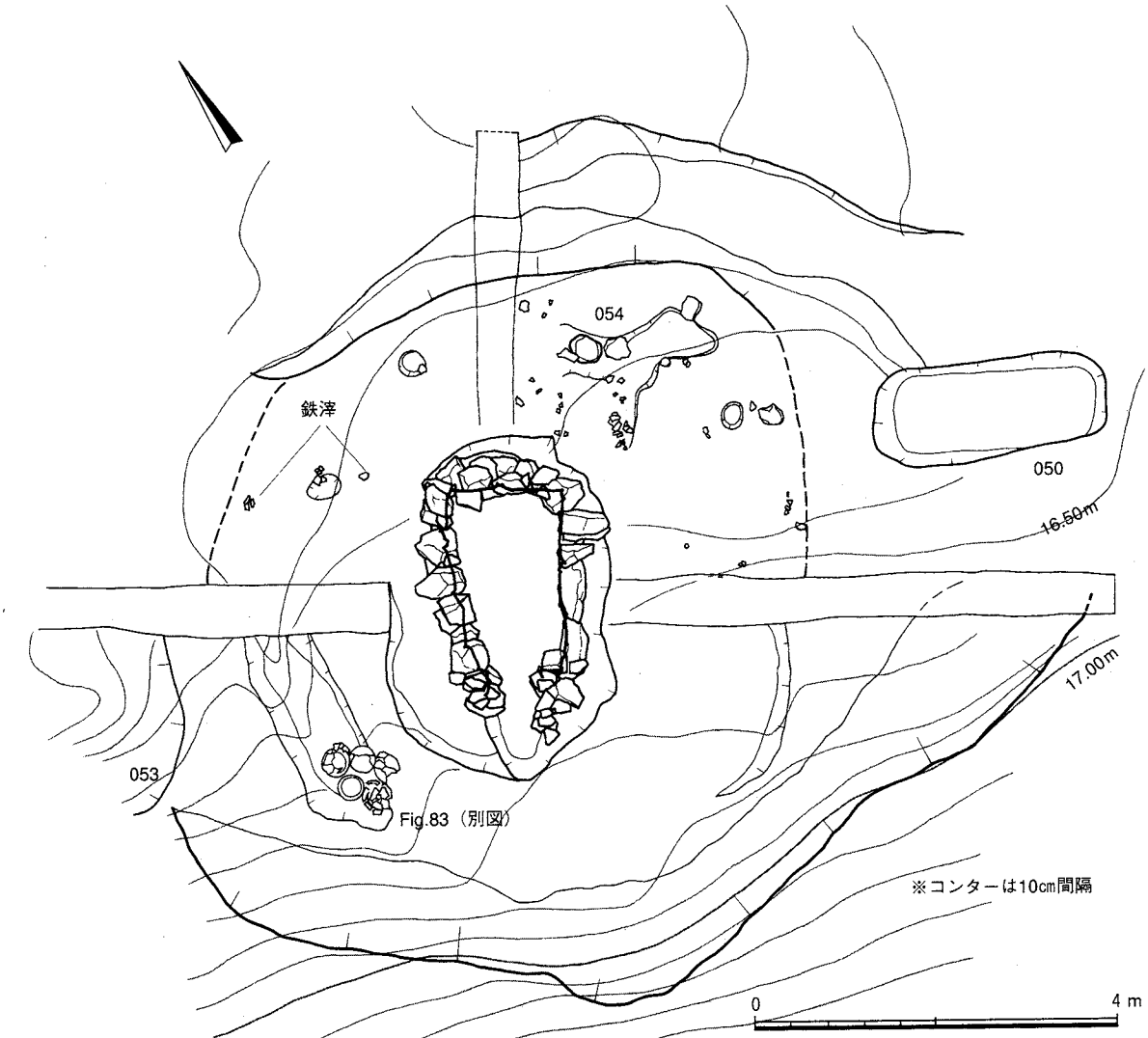
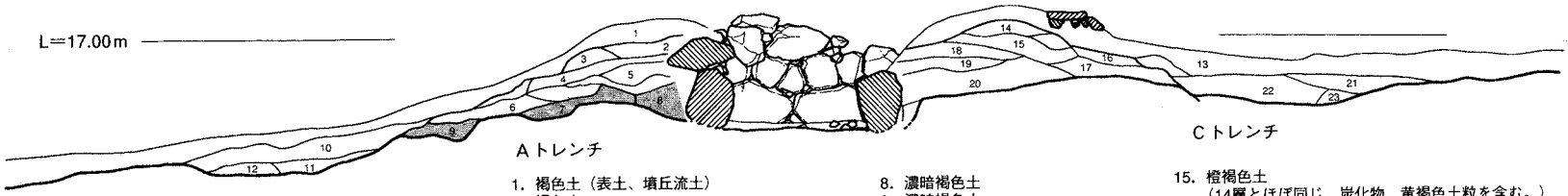
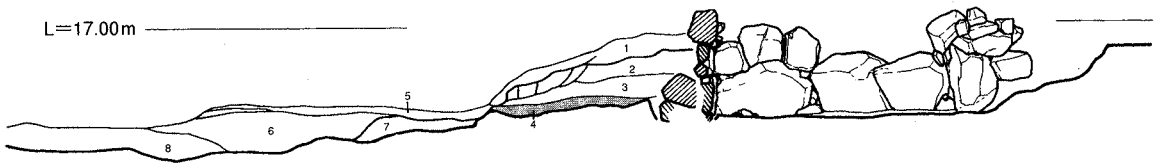


Fig. 79　7号墳 地山成形図（1/80）



1. 褐色土（表土、墳丘流土）
2. 褐色土
（1層より明るみをおびる。
木根による撹乱でしまりが悪い。）
3. 褐色土
4. 明褐色土（砂質土。軟質。境界は漸移的変化）
5. 暗褐色土
6. 暗茶褐色土
7. 濃暗褐色土（層界が凹凸状）
8. 濃暗褐色土
9. 濃暗褐色土
10. 褐色土
11. 暗褐色土
12. 明褐色土
13. 褐色土（表土層）
14. 明褐色土
（やや粘性があり、しまりが良い、
砂粒混じる。）
15. 橙褐色土
（14層とほぼ同じ。炭化物、黄褐色土粒を含む。）
16. 暗褐色土（やや粘性があり、砂粒を少し含む。）
17. 褐色土（砂粒を含む。）
18. 褐色土（砂粒を含む。）
19. 暗褐色土（やや粘性があり、軟質）
20. 暗褐色土（土器片含む）
21. 褐色土（やや暗）
22. 褐色土
23. 褐色土（層界不明瞭）



旧表土

1. 淡赤褐色土（しまりなく、腐植土が若干入る。流土）
2. 明褐色土（しまりなくサラサラしている）
3. 明黄褐色砂質土（マンガン斑文が入る。硬質）
4. 黒褐色土（しまりない、腐植土。旧表）
5. 腐植土
6. 暗褐色土（周溝埋土）
7. 褐色土（比較的硬質）
8. 褐色土（しまりが悪い）

0　2 m

Fig. 80　7号墳　墳丘土層断面図（1/60）

墳丘規模は現状で墳端までの径が約６ｍ、さらに西側に周溝1.5mが加わるものとみられた。

石室は天井石はなく玄室プランが判る状態で露呈していた。石室は８号墳とは逆方向に近い南の丘陵側に開口するため、谷筋に想定される墓道には東西方向に回り込んで取りつくものと考えられる。

(2) 墳　　丘

地山成形

先ず、南側の丘陵斜面を馬蹄形状に掘削している。その範囲は石室主軸方向に中心から4.8mの距離からＩ区では西側に広がり、その延長に土壙状の落ち込み053が検出された。Ⅳ区でも焼土壙050をとりこんで大きくひろがり、主軸直行方向に対しては径約12mの丘陵斜面掘削が認められる。Ⅲ区でも浅い周溝が検出され周溝は全周するものと考えられるが、Ⅱ区では削平を受けその延長はみられない。

墳丘基底面の整地は北西方向へ緩やかに下降する平坦面を造り出し、低所のⅡ区、Ⅲ区では旧表を残す。周溝掘削によって旧表が途切れた形状は隅丸方形に近い。Ⅲ区の旧表上には土器片が散乱し、不整形の落ち込みがみられ小形の焼壁を有した054が検出された。Ⅱ区の旧表上からは鉄滓が少量であるが出土した。鉄滓については他の古墳出土のものをまとめて（Ｐ－148）で述している。Ｉ区では周溝に沿った内側に深さ５cm程の浅い溝状の落ち込みが検出された。

054（Fig. 85）

旧表土中で検出され上部には旧表土とともに須恵器片や土師器高坏片が落ち込んでいた。径40cmの円形プランを呈す。焼壁がみられる北側の壁面はオーバーハングし、基底面が下がる。この基底面の落ち込みには炭が詰まる。Ⅱ区の旧表土上からの鉄滓の出土を考慮すれば製鉄関連の施設の可能性がある。

050（Fig. 84）

今回の調査で出土した焼土壙については27．焼土壙（Ｐ－153）にまとめて記載しているが、説明上050についてはここで行う。Ⅲ区周溝内で検出され、西側の短辺付近は墳丘盛土が被る。長軸長255cm、短軸長105cmを測り、東側の短辺がやや狭まる長方形プランを呈す。深さ70cmを測り、基底面は東辺側に緩やかに上がる。壁面は直に近い立ち上がりで上部に崩落が見られるものの全周、還元した硬化焼壁となっている。土壙内下部に木炭が良好に遺存していた。径10cm程の木炭が長軸に沿って出土したが、その下に直行する木炭も若干見られるため井桁状に組んでいた可能性がある。土層はレンズ状の堆積で埋められた状況はみられない。下層の炭層は東辺側に偏り、壁面近くでは上層まで立ち上がり、形状からも東辺側にに木炭を掻き出していたものと考えられる。土壙内中位のレベルから提瓶（1232）が出土した。

墳丘

盛土は地山から60cm程しか遺存しない。Ａトレンチでは褐色系の土色をした盛土を積み浅皿状の周溝内への盛土はみられない。従って、地山を切り込んで造り出した墳端は石室中心から4.0mの距離を測る。Ｃベルトでは高所の地山成形により旧表土はほとんど残さず、その上に比較的単位の大きい盛土を積む。墳端は周溝内に黒色腐植土を含まず、盛土と地山との区別が極めて困難であったが、概ね石室中心から4.6mの位置にあるものと判断された。Ｂトレンチでは先述したように墳端付近が大きく削平を受けている。盛土は旧表を残した上に施し、地山成形による周溝内に７層の盛土が入る。墳端は石室中心から4.4mを測る。以上から本墳は主軸方向に径7.8m、直行方向に径8.6mの東から北西方向の地形の傾斜方向にやや長い楕円形プランを呈する。なお、Ⅲ区の墳端ラインは掘りすぎによるもので、050に近接する位置まで張り出すものである。

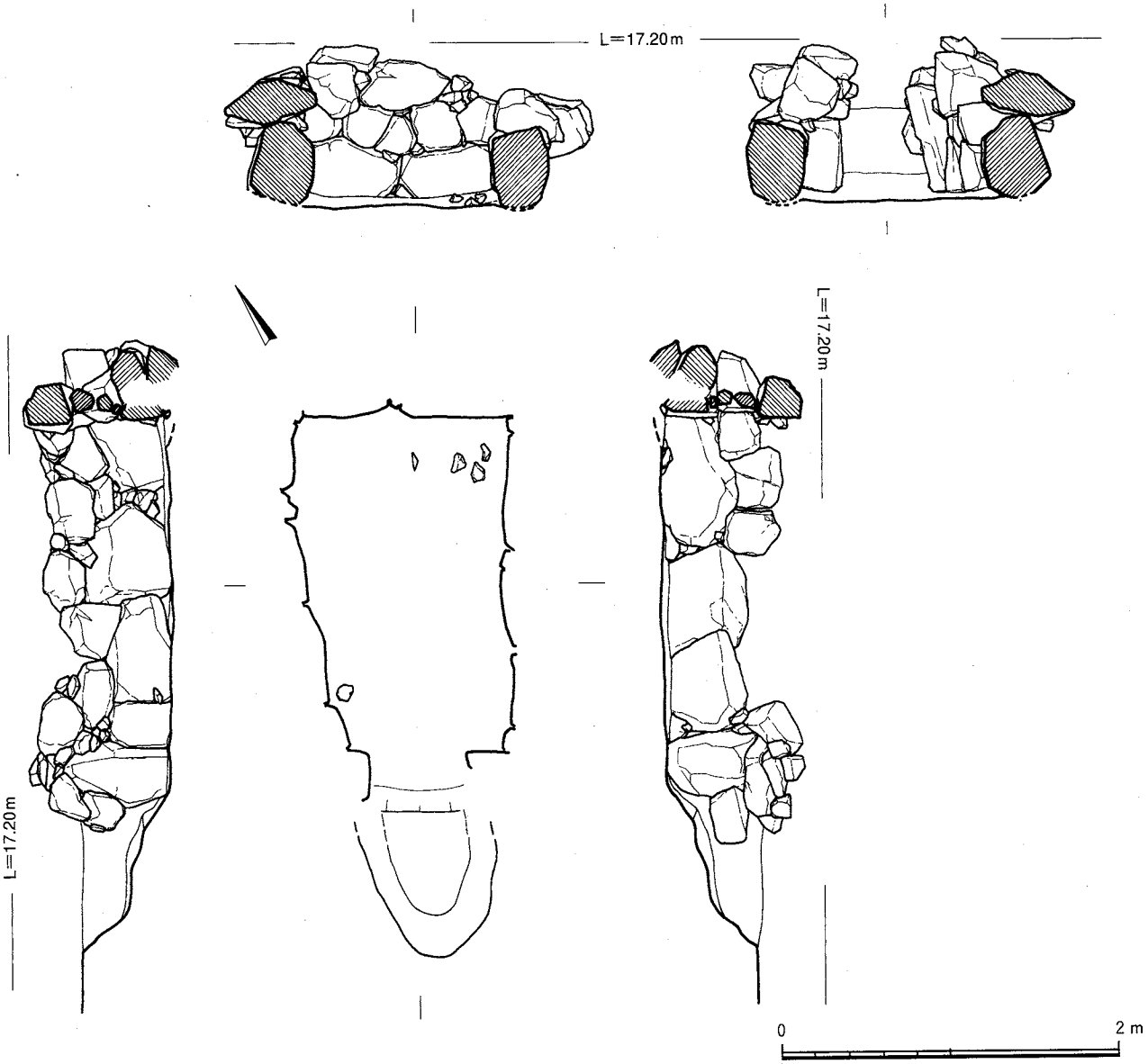


Fig. 81　7号墳 石室実測図（1/40）

(3) 埋葬施設

石室はN－33°－Eを主軸方向にとり南西に開口した竪穴系横口式石室である。開口方向を丘陵斜面に向けて墓道を想定する上で注意される。

石室掘り方

旧表土もしくは地山から掘り込む。奥壁から右側壁にかけては腰石から約30cmの隙間がみられ、墓道にかけてすぼまっていく。左側壁は旧表土を石室側へわずかに掘り込んで腰石を据えている。旧表土が比較的厚いII区では不明瞭となる。I区墓道にかけても緩やかな立ち上がりで腰石から50cm程離れた掘り方上端が検出された。

玄室

奥幅1.21m、右側壁長1.96m、左側壁長2.00m、前幅0.90mを測る羽子板プランを呈す。奥壁は腰石2の上に30cm大の小振りの転石をのせて目路を通し、さらに中央に横長の石を上に構築する。右隅角には2段目に、左隅角には3段目に力石の使用がみられる。右側壁は奥壁から直角に折れ直線的な

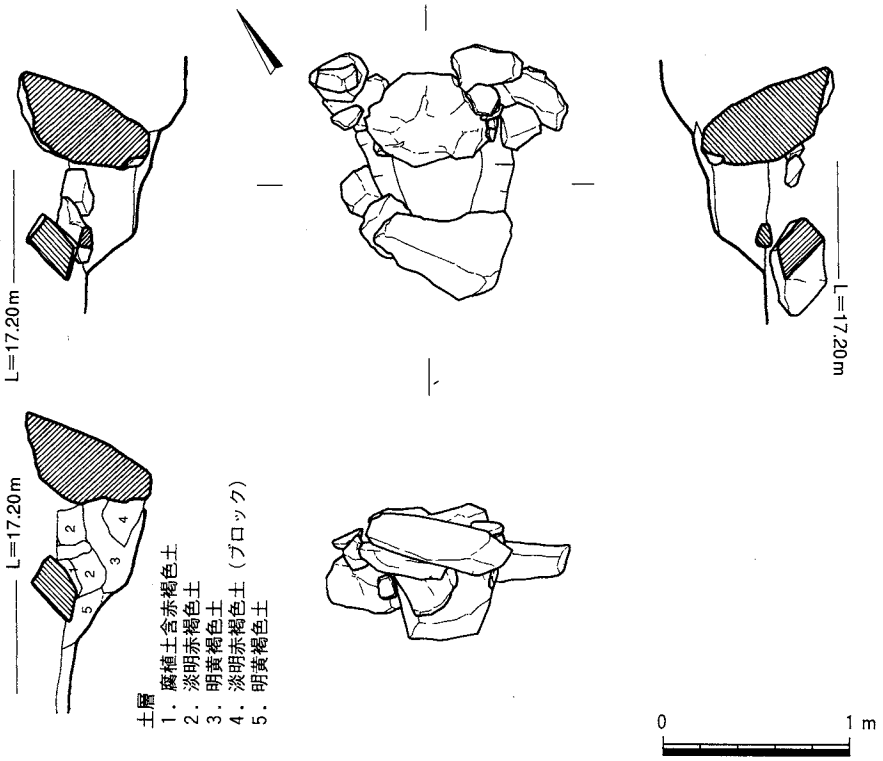


Fig. 82　7号墳 閉塞石実測図（1/40）

ラインで腰石３を据える。腰石上面のレベルはほぼ揃い奥壁側に小転石がわずかにのこっている。左側壁は奥壁から鋭角に折れ玄門側にすぼまるラインに腰石３を据える。（玄門側の腰石は割れている）腰石上面の高さは揃わず、その上に40cm大の転石をのせる。玄門には両袖石が遺存する。右袖石は側壁から20cm突出するのに対し、左袖石は側壁のライン上に近いため片袖にみえるが、その位置には棒状の側壁腰石より一段高い袖部を意識した石材が用いられている。右袖石上には偏平な小転石が２枚のるが、墓道にかけての積み石はこれ以上みられない。左袖石上も横口部の貼石状の石材との間に充塡された小石が遺存するくらいである。

横口部、墓道

玄門から墓道にかけては袖石に連接して玄室床面から25cm浮いた小転石が見られる位で、短い貼り石の横口が連結していた可能性もあるが上部が欠落するため不明である。墓道は墳丘盛土と近似した赤褐色土で埋めているため、その検出が難しかったが、開口方向に向かってすぼまる短い上り勾配のものと見なされた。

閉塞施設

現状で横口部を閉塞する立石の右側面に小石が散乱していた。この小石は立石の上面とほぼ同一レベルで積石はみられない。この小石に混じって鉄滓も出土している。立石は幅65cm、高さ75cmの大きさで袖石に立てかけている。その背後の墓道掘り方に沿って転石がみられたが、墓道内の下部には出土しない。

遺物

（出土状況）

Ⅰ区墓道脇の墳丘盛土下部から４組の須恵器坏のセットと坏身が出土した。掘り方は検出されず、黄褐色の盛土中に並べて置かれていた。Ⅱ区墳丘内からは遺物が少ないが、鉄滓が墳丘基底面の旧表

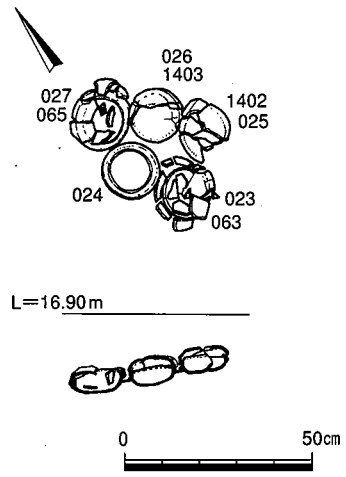


Fig. 83　7号墳 墳丘内
土器出土状況図（1/20）

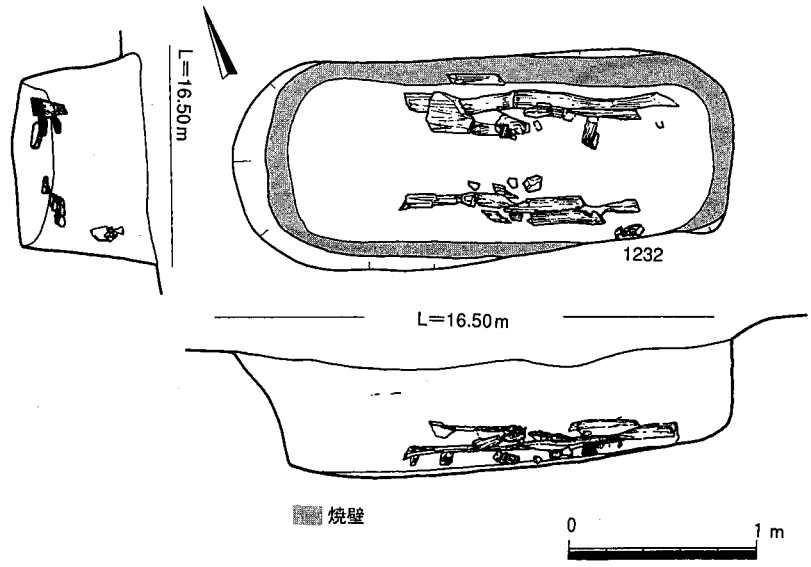


Fig. 84　050 実測図（1/40）

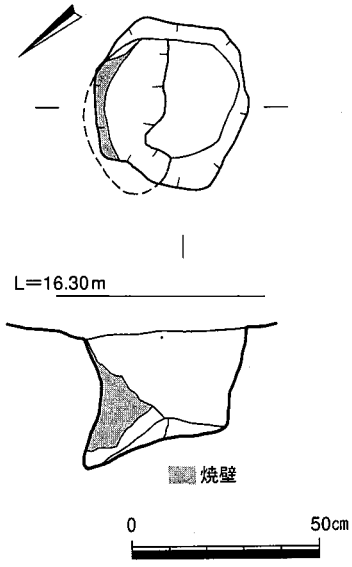


Fig. 85　054 実測図（1/20）

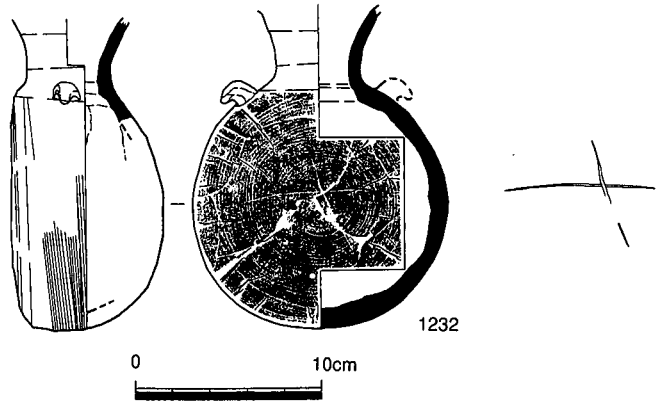


Fig. 86　050 出土遺物実測図（1/4）

中から出土した。III区の旧表土上では炉状の焼土壙054周辺とCトレンチの墳端近くに土師器甕、高坏、須恵器甕、坏片の集中がみられた。須恵器坏身の1401がCトレンチでほぼ完形に接合できたが他は破砕された土器片が散布していた。鉄鎌3004はIII区の右室近くに旧表から24cm浮いて出土した。滑石製紡錘車6016、平玉7004はIII区Cトレンチ周辺の周溝内から、滑石製紡錘車6019は須恵器甕片に混じってIII区旧表土上から出土した。

（遺物）

023、063、027、065、026、1403、1402、025、024はI区墳丘内に埋置された状態のセットで図示している。024には蓋はつかない。焼成は近似し、何れも極めて脆弱で、器面は灰色を帯びるが、器胎は黒色を呈す。蓋の天井部と口縁部の境は沈線化し、身の立ち上がり端部は浅い沈線で段を有すもの（063、024）と丸く収めるものある。出土遺物内で064が口径12.8cm、ヘラケズリが体部の1/3の範囲に収まるなど新相を示す。1406の甕は外底の全体に平行タタキ痕を残す。1400の胴部外面は粗いハケ目、内面は頸部付近を強いナデ上げ、中位は板ナデを施す。鉄鎌3004は刃部先端を欠損し、基部は全体を折り曲げる。6016の滑石製紡錘車には削りの痕跡を残す。

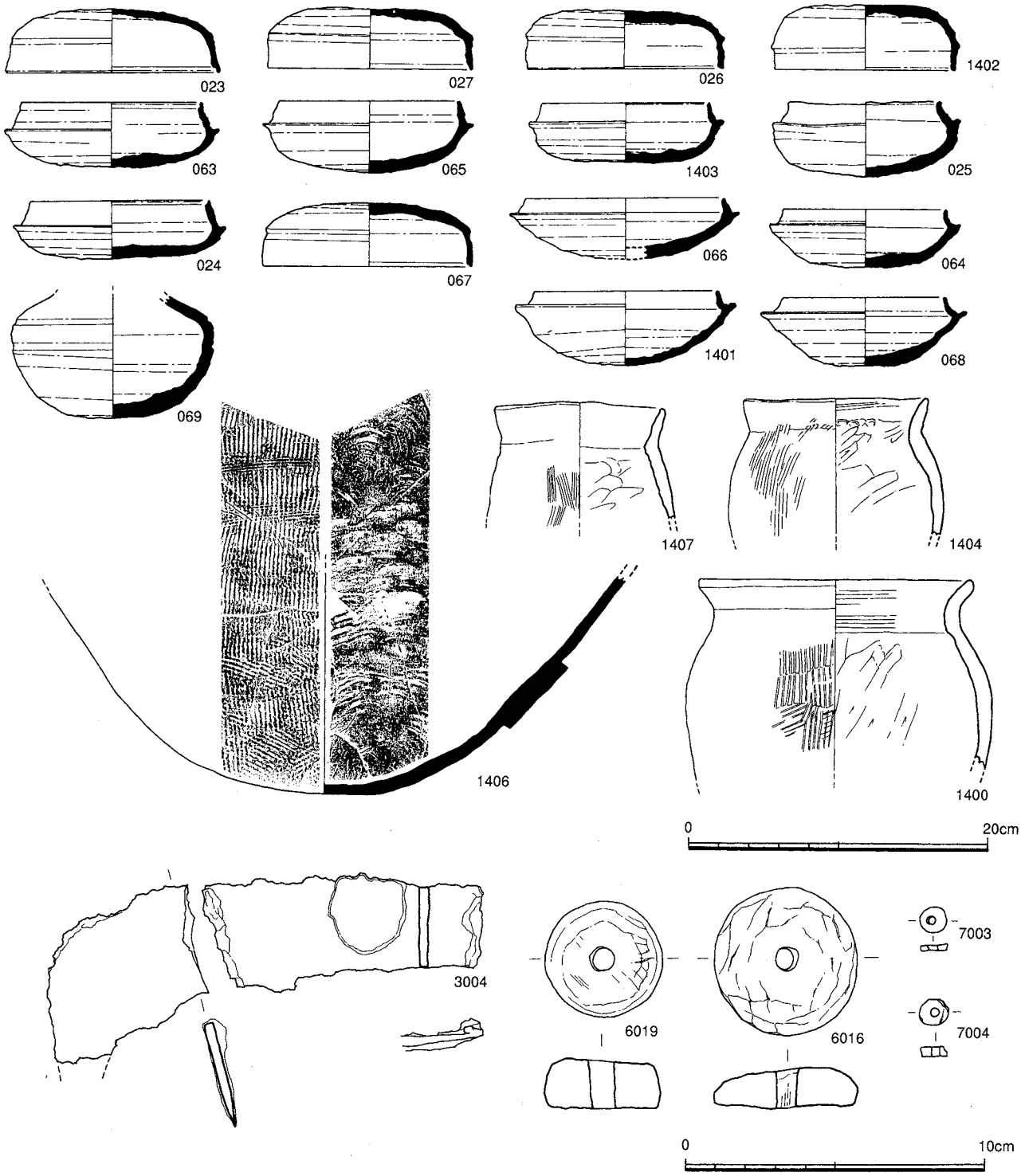


Fig. 87　7号墳 出土遺物実測図（1/4・1/2）

6．8号墳

(1) 位置と現状

丘陵北側裾部に位置し、調査区北端になる。現況では近接する7号墳との間が重機の通路によって削平を受けているが、その相互の墳端は約2mの距離しかなく、周溝が切り合うものと考えられた。地山成形は南側の丘陵斜面を削り出すものと考えられたが、14号墳や焼土壙群が検出された斜面から造成の痕跡がみられ、8号墳築造に伴う成形面は不明瞭であった。

本墳の北西側に溜め池のラインに沿うような南西方向に派生する高まりがみられ、約1mの比高差で崖状に削られ、14×4mの長方形の平坦面を作っている。この高まりには丘陵尾根線の方向から奇異な感を受けトレンチを入れた結果、溜め池側から8号墳の立地する谷部へ傾斜する粘土と砂の互層が観察された。(Fig.89) 溜め池の旧地形が不明であるが、調査区東側の隣接地に西側へ派生する尾根があり、この延長の高まりに溜め池の谷部から土砂がオーバフロートしてきて形成されたものか。

(2) 墳　　丘

地山成形

南西側の丘陵斜面の削り出しによって、盛土の確保と周溝の形成が行われたと考えられるが緩斜面であることと西側の削平により不明瞭となっている。等高線の流れから概ね石室主軸方向のBトレンチの延長で石室中心から11.5mの位置から掘削の痕跡が認められ、下端が038際の8.5mにくる馬蹄形状の地山成形があるものとみられる。周溝はⅠ区、Ⅳ区では墳端を回らずに石室主軸に近い方向で延

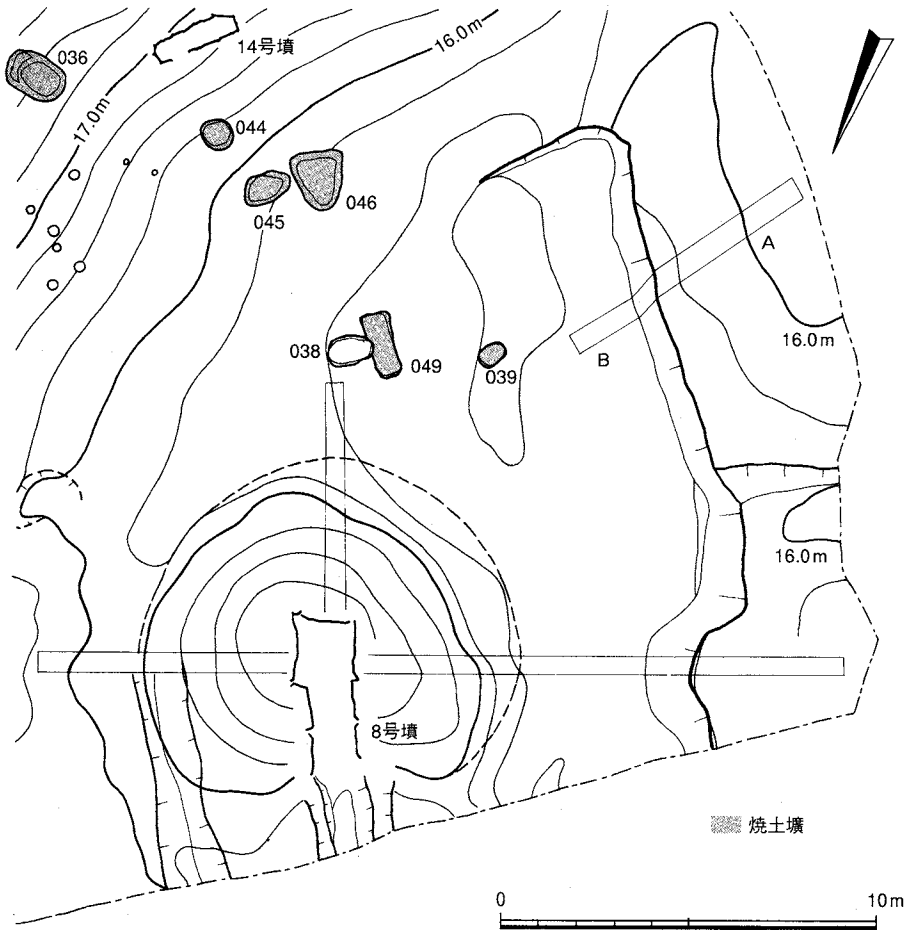


Fig. 88　8号墳 墳丘遺存図 (1/200)

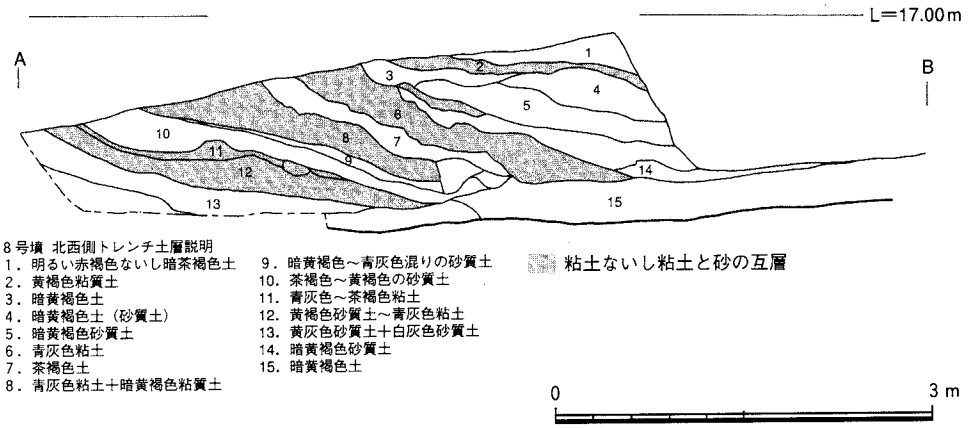
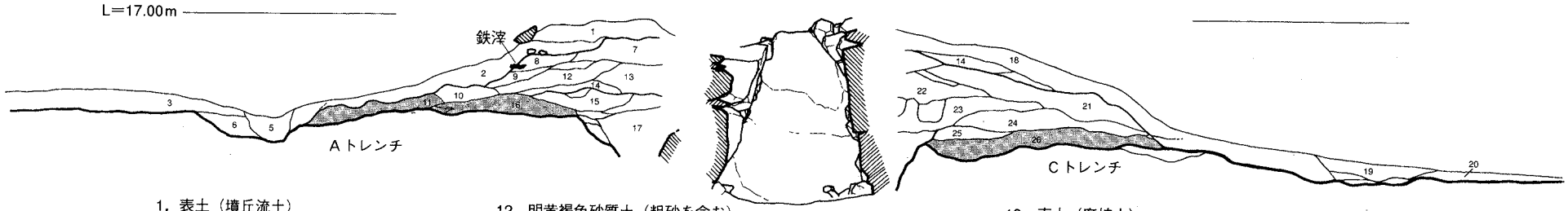


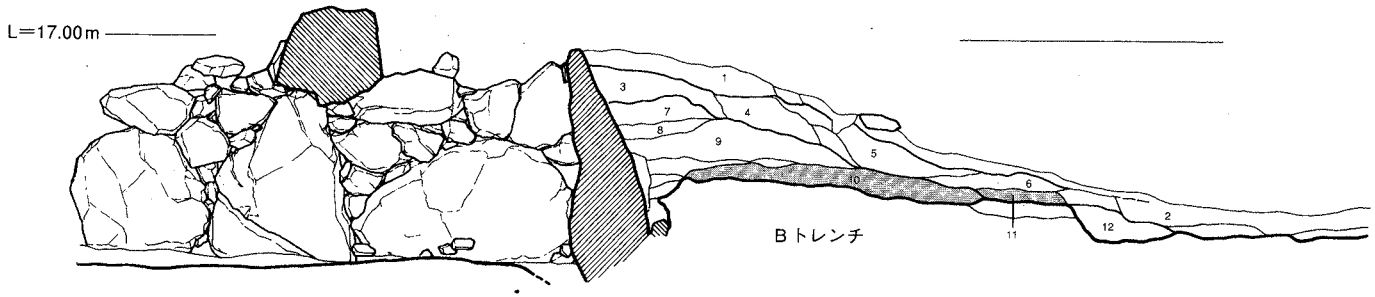
Fig. 89　8号墳 西側高まり土層断面図（1/60）

051
151
16.00m
15.30m
15.80m
156
B
C
A
D
15.50m
15.50m
※コンターは10cm間隔
焼土ブロック
0
4 m

Fig. 90　8号墳 地山成形と遺物出土状況図（1/80）



1. 表土（墳丘流土）
2. 表土（墳丘流土）
3. 表土（褐色土）
5. 黒色腐植土
6. 明褐色土（しまりなく粒子が細かい）
7. 明黄褐色砂質土（粗砂を含む）
8. 黄褐色砂質土（粒子は比較的細かい）
9. 明褐色砂質土（木根多く入る）
10. 暗褐色土（黒味は弱く軟質）
11. 暗～黒褐色土（腐植土。土器片を含む）
12. 明黄褐色砂質土（粗砂を含む）
13. 黄褐色砂質土（5㎜大の礫を含む）
14. 明黄褐色土（硬質）
15. 明黄褐色土混り黄褐色砂質土
（ブロック状に黒～暗青灰色土を含む。
13層との層界は比較的明瞭。
明褐色土は粘質をおび硬質。）
16. 暗褐色砂質土（旧表）
17. 明黄褐色砂質土混り暗褐色砂質土
（暗褐色土の割合が多く土色は暗い。）
18. 表土（腐植土）
19. 暗褐色土（腐植土、周溝埋土）
20. 黄灰褐色土
21. 褐色土
22. 黄褐色砂質土（硬質）
23. 明黄褐色土（硬質、砂質土）
24. 暗褐色砂質土（粗砂礫含む）
25. 灰褐色土（しまりがなく均一、焼土を含む）
26. 暗褐色～黒褐色腐植土（焼土を含む。旧表）



1. 褐色土（表土、腐植土、流土）
2. 暗褐色土（表土、しまりなし、腐植土）
3. 黄褐色砂質土（しまりなし）
4. 黄褐色砂質土
5. 褐色土
6. 黄褐色土（細粒、しまりなし）
7. （灰）褐色砂質土（粗砂を含む）
8. （灰）褐色砂質土（粗砂を含み固くしまる）
9. （灰）褐色砂質土（粗砂を含み固くしまる）
10. 黒褐色砂質土（粘性をおびる）
11. 暗褐色土（しまりなく細砂質）
12. 褐色斑文混り明褐色砂質土（層界が明瞭、硬質で地山に近い）

0　2 m

Fig. 91　8号墳　墳丘土層断面図（1/60）

長して行く。

墳丘基底面の整地は本墳が谷近くの緩斜面に占地するため大部分に旧表土を残した水平に近い平坦面がとれている。Bトレンチの主軸方向に石室中心から4.7m、主軸直行に8.5mの範域に西から東へ緩やかに傾斜する墳丘基底面が造られ、II区では周溝への落ち際が極めて不明瞭になっている。墓道両脇は急傾斜で東側への谷部へ落ちていく。

整地面の旧表土上にはIII区からIV区の一部にかけて土器片が散布し、深さ10cm程の浅い不整形の落ち込みや051の焼土壙から掻き出されたと思われる焼土、炭が検出され鉄滓も若干出土した。また、旧表土中には黒曜石の母岩（151）や石器が出土している。

051（Fig. 94）

III区墳端近くで旧表土除去後検出された。長軸長95cmの歪みのある楕円形プランを呈す。深さ25cmが遺存し、一部に焼壁がみられる。西壁は地山成形による斜面に沿って流失したものか、立ち上がりを失う。埋土は上層に軟質の黄褐色土、下層に黒色炭層が堆積する。

墳丘

墳丘形成にあたり、石室近くに丘陵裾部に堆積する灰白色系をした粗砂質の土を用いて硬質に締め（1次墳丘）、その上に黄褐色系の土で墳丘の形を整える。（2次墳丘）概ね2段階の工程が明確に観察された。Aトレンチでは石室掘り方内から旧表土上面のレベルまで明黄褐色の粗砂質の土で固く充塡し、その上を7、8層まで硬質の黄灰色粗砂質土で盛る。さらに黄褐色系の土を被せ墳形を整えるが、土の締まりは緩い。墳端は地山成形による周溝下端とほぼ一致し、石室中心から4.9mを測る。Cトレンチでは21層以下に明黄褐色粗砂土を用いているが（1次墳丘）、盛土の単位は比較的大きい。上層（2次墳丘）は流出が著しく、積土の単位が判別し難い。墳端は地山成形によって造り出され、石室中心から5.3cmの位置にくる。19層は周溝埋土の黒味が強い暗褐色土であるが、立ち上がりが弱く、III区では墳端をとりまくもののその外郭をつかめなくなった。Bトレンチでは7、9層以下に褐色粗砂土用いて硬質の1次墳丘を築きあげ、その上に褐色ないし黄褐色の軟質の盛土が積まれている。このトレンチにおいても細かい単位の盛土はみられない。墳端は地山成形による周溝内に12層の盛土を流入し整える。石室中心から5.6mの距離を測る。

以上から、本墳は主軸直行方向に10.2m、主軸方向がやや短いが正円に近い円墳である。

(3) 埋葬施設

埋葬施設はS－69°－Wに主軸方位をとる片袖の横穴式石室で、北東の谷部に向けて開口しいる現状では冠石と羨道部天井石が遺存していたが、玄室内の敷石は皆無に近く荒されていた。

石室掘り方

3.4×5.4mの長方形に掘られ墓道に連結する。片袖の石室であるため掘り方も右側壁側は墓道と直線的に連接するが、左側壁側は墓道へ屈曲する石室の形状に合わせた掘り方になっている。石室はまず奥壁の腰石を入れたものと考えられ、安定を図るためか掘り方との隙間はほとんど無い。奥壁側が直に近い立ち上がりの掘り方であるのに対し、両側壁側は角度をもって掘られている。左側壁側はプランが広がり、壁面は2段掘り状になっているが、腰石の設置時に崩落したものと思われる。

玄室

奥幅1.61m、前幅1.7m（石材の形状によって幅広くなっているが、右側壁のラインから推せば1.6m前後）、右側壁長1.52m、左側壁長1.82mを測る方形プランを呈す。奥壁は床面からの高さが1.7mの三角形をした巨石に近い石材を用いている。玄室側に平坦面を向け、直に近い壁面をつくる。両側壁の角度から推せば天井までの高さは2.0m前後になろう。基底は両側壁の腰石に挟み込まれて据え

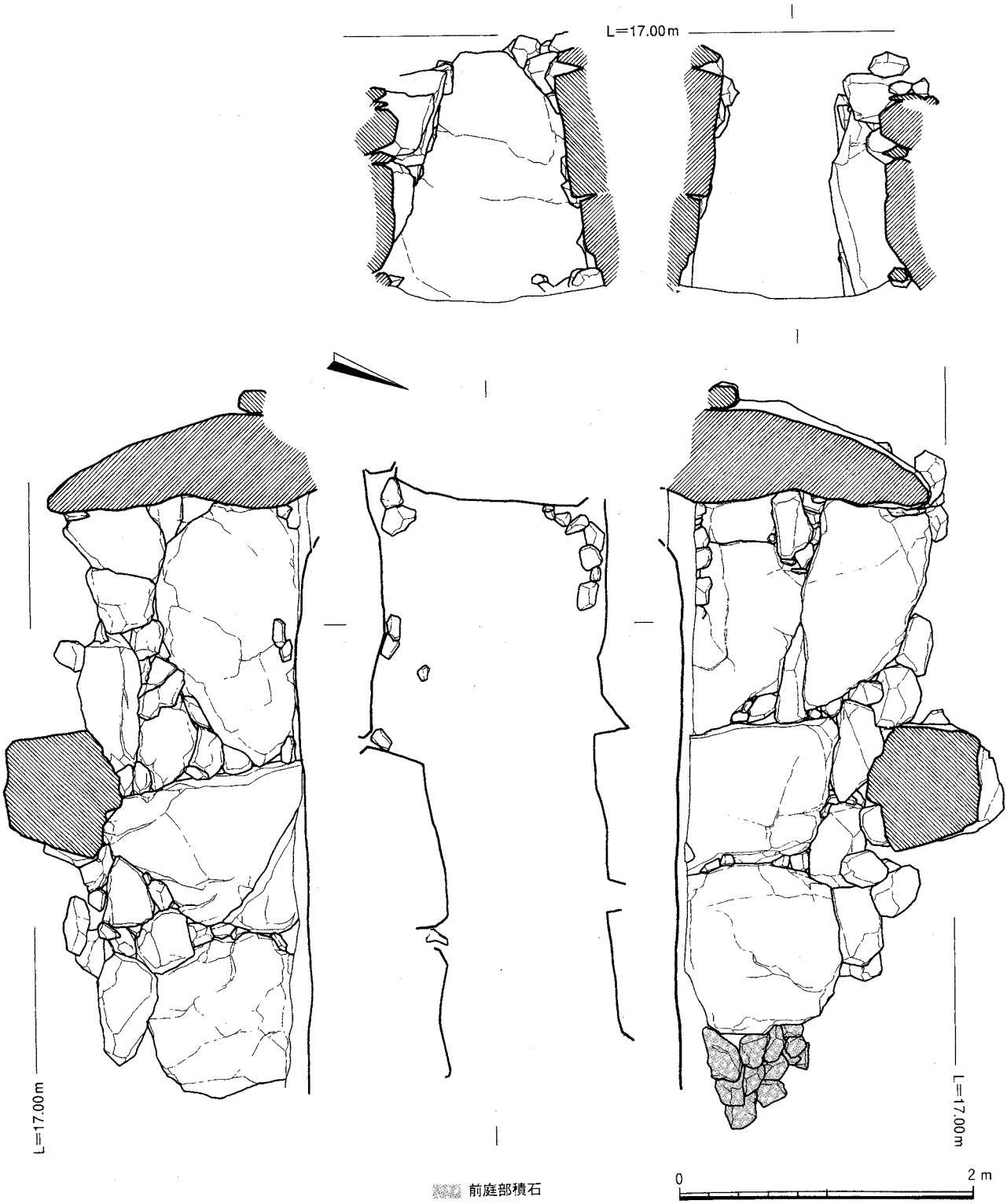


Fig. 92　8号墳 石室実測図（1/40）

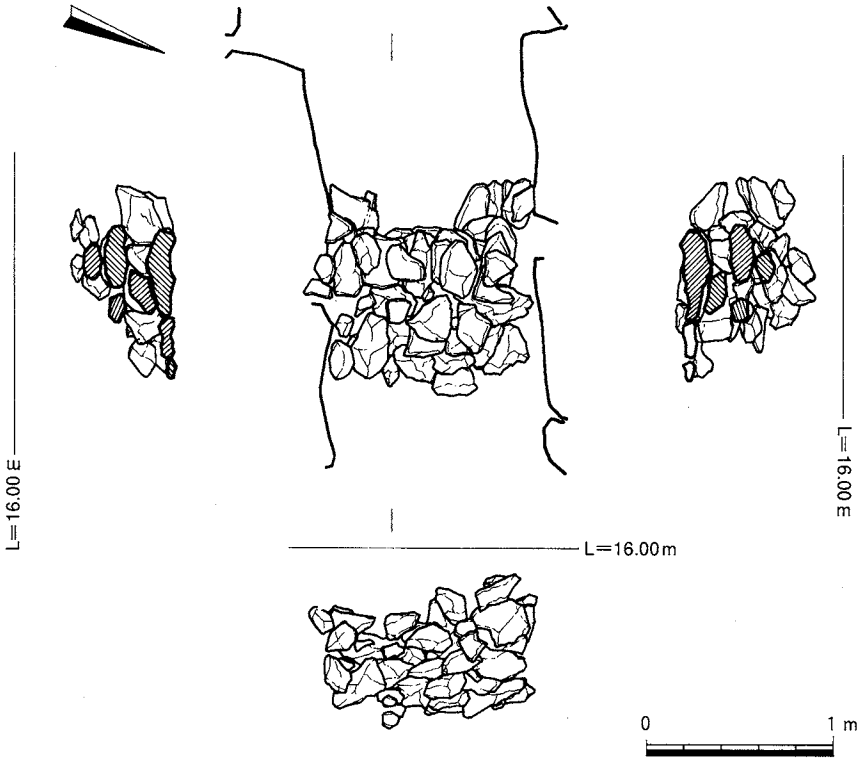


Fig. 93　8号墳 閉塞石実測図（1/40）

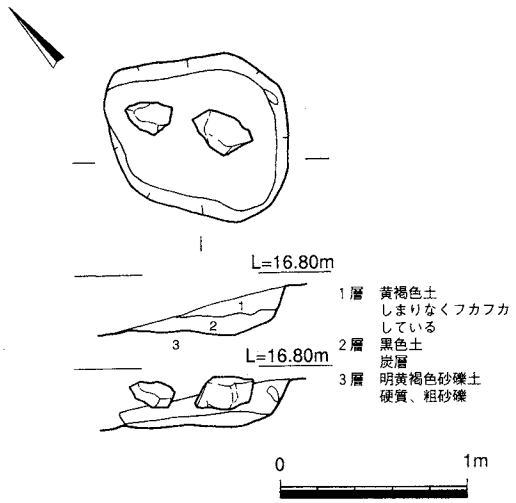


Fig. 94　051 実測図（1/40）

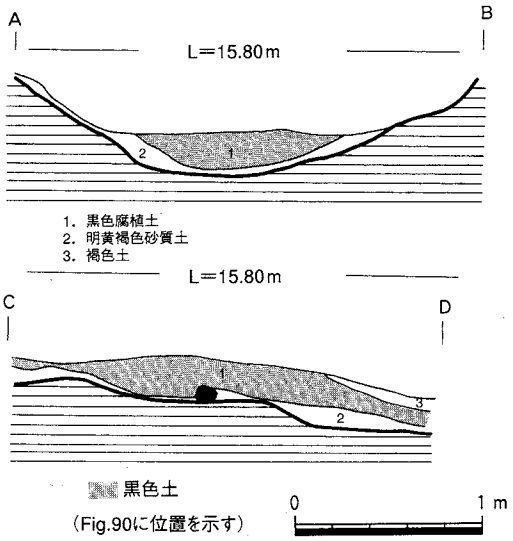


Fig. 95　8号墳 墓道土層断面図（1/40）

られるが、側壁のラインとは直行しない。右側壁は横長の石材1を腰石にして、2段目までが遺存する。2段目の奥壁近くの上面レベルは奥壁と合致するが、玄門側にそのレベルは下降していく。左側壁も横長の大張りの腰石1を置き袖石との間に小転石を充塡して目路を揃え2段目の塊石を積み上げる。左袖部は羨道部を兼ねた大石1を用い、上に元 石を構架する。玄門幅1.15m、基底面から冠石までの高さ1.25mを測り、玄室との天井比高差は80cm位になろう。玄門の仕切石は失っている。

羨道

両側壁ともに腰石2で構成し、右側壁長2.05m、左側壁長2.10mのほぼ同距離を測るが、玄室の側壁長に違いがあるため、羨門部で右側壁が短くなり、これに前庭部の積石が連接する。右側壁の腰石

の高さはほぼ同じで、その上に転石を2段程積み上げる。羨門を構架する天井石が崩落しているが、冠石の高さから遺存する積石にのるものと考えられ、基底面から約1.50mを測る。冠石も幾分ずれ動いているが、羨門側の天井が少し高くなっている。左側壁は袖石と羨門側の石の高さに違いがあり、大きいが不揃いの転石を充塡している。

墓道

墓道の掘り方は石室掘り方に連接する幅2.0mの落ちと羨門から続く段落ちの2段掘りが検出された。基底面は羨門から徐々に下降して谷部へ向かう。埋土は最下に明黄褐色粗砂土の墳丘盛土の流入と思われる土が堆積し、内側の段落ちは黒色腐植土が堆積する。石室掘り方掘削と同時に墓道が掘られ、石室構築後と追葬時に掘り直されたものと考えられるが、追葬時毎の掘り直しを示す堆積は確認できなかった。墓道からの出土遺物は少量であるが、鉄滓を若干含む。

前庭部側壁

羨道部右側壁に連接して裾広がりに配置された積石を検出した。左側壁には無く、延長の外護列石も検出されない。30～40cm大の転石を用いて石室掘り方内の埋土に貼り付けるように角度をもって積まれている。羨門側で4段が遺存し、石材の基底は北側へやや上がっていく。

閉塞施設

羨道部の中ほどに2～30cm大の塊石を用いて積み上げ、70cmの高さまで遺存する。配置による石材の大きさの違いは見受けられない。最下に仕切石が配置されていた可能性があるが、誤って確認せず除去した。

(4) 遺　　物

出土状況

玄室内は荒らされ、原位置を保つ副葬された遺物は出土していない。周溝内からは少なく、Ⅰ区に土師器甕片が出土した。墓道からは須恵器提瓶片を含む小片少量が出土したにすぎない。墳丘内からは基底面である旧表上を中心に破砕された遺物が出土した。Ⅰ区石室掘り方上面から土師器甕片が少量出土した。Ⅱ区では旧表上面から土師器片に混じって弥生中期土器片が出土している。Ⅲ区からⅣ区Cトレンチ周辺では焼土、炭に混じって土師器甕片を主に土器片が比較的多く散布する。炭、焼土は地山面に不整形に落ち込む。Ⅳ区では前庭積石傍から高坏片、旧表土から20cm浮いた盛土内や石室掘り方上面から須恵器坏片（169、176、170、179を含む）が出土した。

須恵器甕片は表土、Ⅰ区周溝から若干出土した程度で、周溝、基底面の旧表土上には土師器甕片が多い。なお、基底面の旧表中からは黒曜石の母岩を含む縄文時代の石鏃や剝片が出土した。周辺表土からは瓦器椀、土師皿、寛永通宝が出土し、中、近世の信仰が伺える。

遺物

（須恵器）

坏蓋は体部と口縁部の境に沈線状の段を有し、口唇部にも浅い沈線状の段を有するもの（173、176、174）と体部と口縁部が湾曲して移行し、口唇部は丸く収めるもの（169、168、171）に分けられる。前者に含まれる174は体部の沈線状の段が極めて不明瞭で、口縁部へも湾曲して移行する新相を示す。坏身は外底が丸く移行し、体部のヘラケズリの範囲が1/2程の170、179、167と外底が平坦で体部のヘラケズリも縮小した175、178に分かれ、172は中間的である。177の台付壺外面のカキ目は中位がナデ消される他全面に残す。156の高坏は2段透かしを3方に刻む。脚部下位には櫛歯波状文を施す。180の土師器小形壺は外面にハケ目、内底に強いナデがみられる。

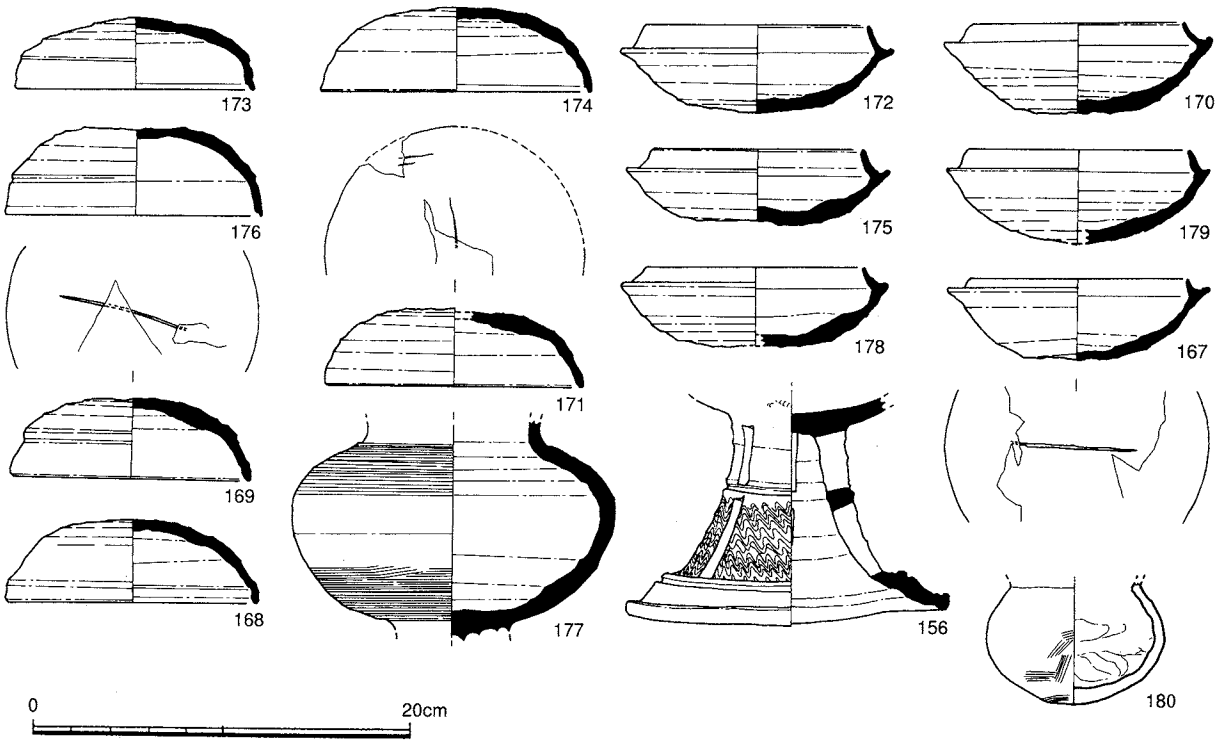


Fig. 96　8号墳 出土遺物実測図（1/4）

8号墳

遺物出土地点

須恵器

173　表土、III区盛土中、Aトレンチ墳丘中、Bトレンチ

174　表土墳端、I区盛土中、III区盛土中、Aトレンチ墳丘中、Bトレンチ

176　IV区石室掘り方上面、IV区盛土中、表土

169　Cトレンチ表土、I区周溝埋土内、IV区盛土中、IV区墳丘中、Cトレンチと旧表中

168　表土、II区周溝埋土

171　Cトレンチ墳丘上面、Cトレンチ墳丘中、IV区表土、Cトレンチ、IV区墳丘中

172　羨道埋土中、閉塞石付近、7号墳III区表土、7号墳III区周溝付近、7号墳II区表土

175　IV区表土中、III区盛土中、IV墳丘中

178　IV区墳丘中、III区石室掘り方上面、表土

170　Cトレンチ墳丘中、IV区墳丘中

179　IV区墳丘中、I区周溝内

167　Aトレンチ墳丘中、II区周溝埋土中

177　Bトレンチ、I区表土墳裾、I区周溝黒色土中、Aトレンチ墳丘中、III区旧表中、7号墳Aトレンチ周溝表土

156　IV区前庭積石上

土師器

180　Bトレンチ旧表直上、Aトレンチ墳丘中、Bトレンチ墳丘中

7．9号墳

(1) 位置と現状

尾根の最も先端に位置する。約15m離れた3号墳と近接し、尾根線に沿って縦列した配置をとる。その間は比較的緩やかな勾配であるのに対し、9号墳を境に尾根は急傾斜で下降している為見かけ上、高い墳丘にみえる。

墳頂の西半は削平を受け平坦面を呈していた。石室は天井石が外され石室内は完全に埋没し、石室の形状、開口方向は不明であった。天井石の中には楔を打ち込んだ痕跡を残すものがある。

(2) 墳　　丘

地山成形　先ず、丘陵尾根線を切断するように、南東部に馬蹄形状の周溝が掘削されている。周溝はCトレンチで外周が石室中心から7mの距離に、幅2.4mで検出された。外周の掘削はさらに広範囲にわたるとみられ、地形変換が不明瞭であるため、識別が難しいが石室中心から半径約10mに及ぶであろう。周溝はⅣ区では回り込まず、開口方向と同方向に延長していく。

墳丘基底面の整地は尾根線の方向に向かって緩やかに傾斜する面を削り出している。従って、低所のⅠ、Ⅱ区のみ旧表土を残す。その形状も尾根に合わせ、Ⅲ区が広い平坦面になっている。Cトレンチでは石室中心から5.0mの範囲まで墳丘基底面が造られ、そこから外へ周溝を掘削する。Bトレンチでは石室中心から5.6mの位置で旧表土が途切れ周溝が掘り込まれるが外周立ち上がりは丘陵斜面によって流失している。Aトレンチ付近は調査区際が崖状に削られているため墳端の地山成形に未確認の部分があるが石室中心から3.9mの位置で旧表土が途切れ外方の墳端へ緩やかに移行している。

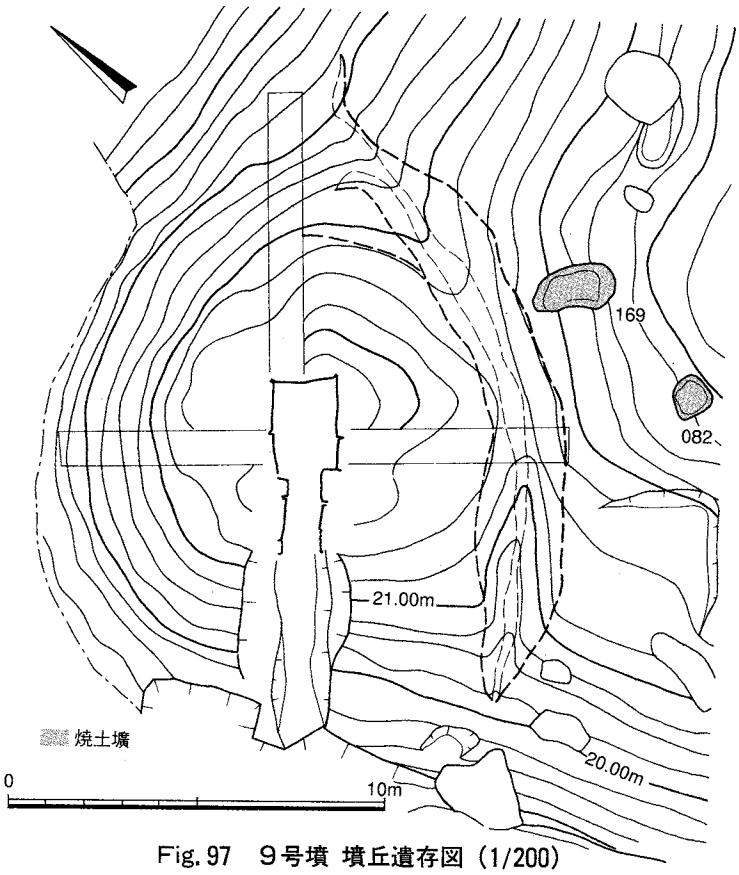


Fig. 97　9号墳 墳丘遺存図 (1/200)

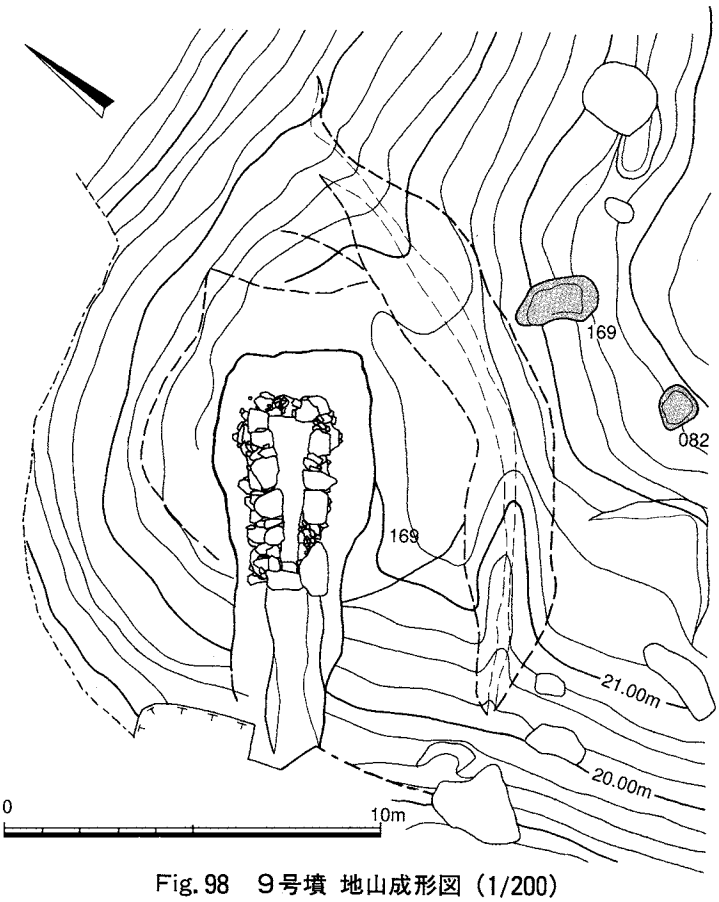


Fig. 98　9号墳 地山成形図 (1/200)

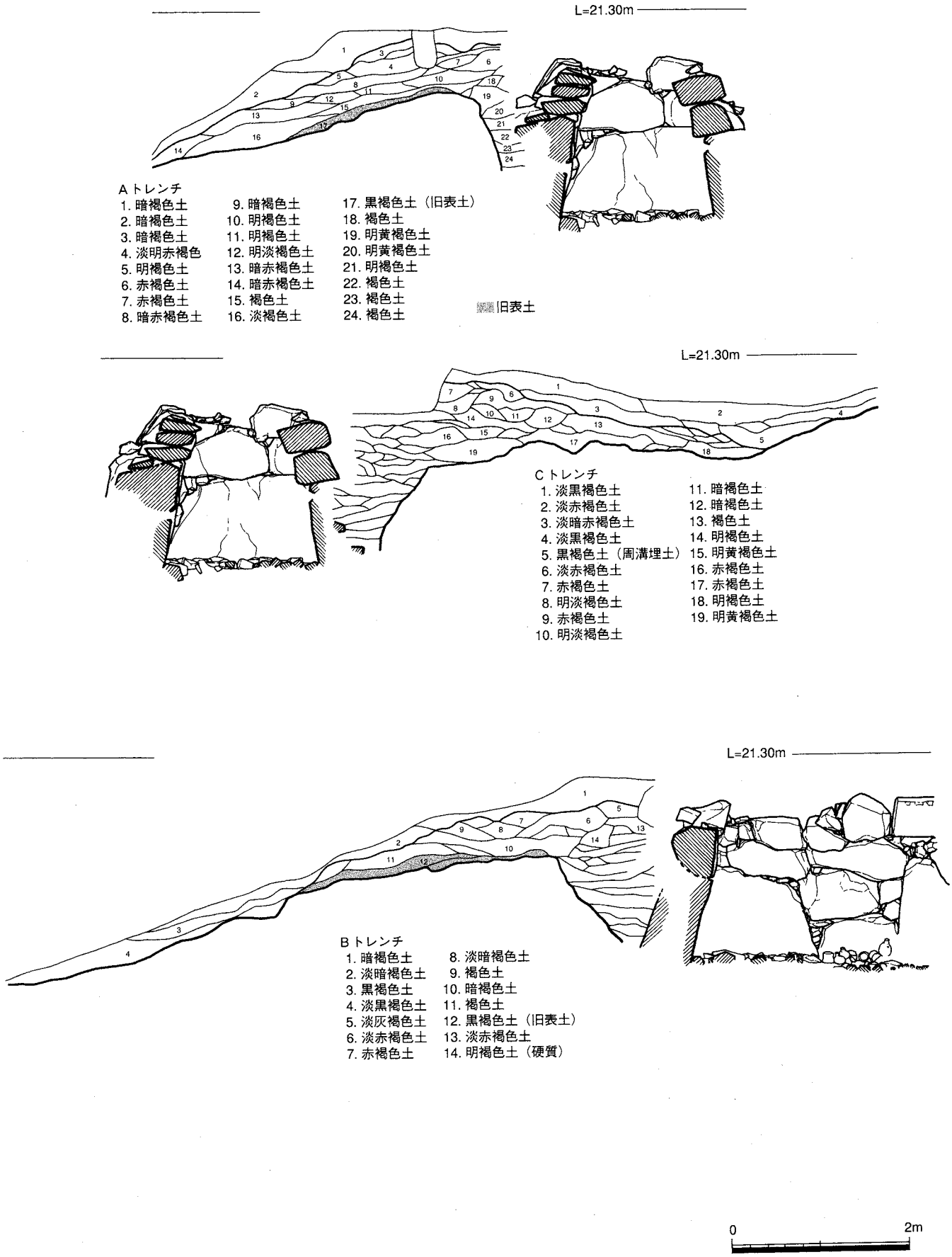


Fig. 99　9号墳 墳丘土層断面図（1/60）

墳丘　地山から80cmの盛土が遺存する。トレンチからの観察では石室近くに比較的密な盛土が積まれているのが判別できる。Aトレンチでは石室掘り方直上から3層まで細かい単位の盛土がみられる。Bトレンチでは5、6層以下に築造段階による大きな差違は認められないが、5、6層のように石室近くを風化岩粒が混じる土で固く締める。Aトレンチでは3、5層以下石室近くには赤褐色や褐色土を用い、その背後に明色の風化岩粒を多く含む土を盛る。

Cトレンチでは地山成形による周溝内まで墳丘がみられ、墳端は石室中心から5.8mを測る。Bトレンチでも旧表土が途切れた位置よりやや外方まで墳端が延び、石室中心から墳端まで6.2mを測る。Aトレンチでは墳端を確認していないが、I、II区の延長から6.5m付近を回ると考えられる。従って、下方のI、II区への墳丘流出が考えられるものの径12.3mの円墳に復元できる。

(3) 埋葬施設

主軸方向をN－50°－Eにとり、南西方向に開口する両袖横穴式石室を埋葬施設とする。

石室掘り方　奥壁から右側壁にかけて、石室より約1mの間をおいた広めの掘り方範囲が検出された。掘削は斜めに掘り込み、基底近くでは腰石の際近くに狭めている。深さは約130cmに及び掘り方の上端が腰石上面より高く2段めの中位から上位にくる。

玄室　石室平面プランは長方形を呈し、奥幅1.65m、右側壁長2.30m、左側壁長2.42m、前幅2.32m、前幅1.55mを測る。壁体の積石は比較的目路が通り、持ち送りの角度も緩やかになっている。

奥壁は床面からの高さ90cm、上面の高さが平坦な腰石1を据える。腰石は両側壁を挟み込ませ安定させる。其の上段に2石の転石をのせるが目路は通らない。遺存する隅角に力石はみられない。右側壁は腰石2を置くが玄門側の腰石上面は低いため、袖石側に小石を充塡した1段をのせ、目路を通す。2段目には横長の転石をのせ上面の目路は羨道側壁まで通る。左側壁は上面のレベルが揃う腰石2を置き、その上部に60～70cm大の転石をのせた3段目までが遺存する。袖石側の2段目には小転石2をのせ目路を通す。左右袖石は大きさ、配置に差違がある。右袖石が大きく、玄室側へ張り出した配置をとるため玄室左右側壁長に12cmの開きがある。右袖石上の小塊石上部に楔痕を有し切断された石材が積まれている。この石材は方形で上面が平坦な冠石状の形状をなすが遺存する羨道部や左側壁のレベルと合致しない。

床面は2面の敷石とその上に2面以上の整地面が考えられる。遺物の出土状況から整地面は上面敷石上17～25cmと5～10cmに推定されるが、玄室内埋土掘り下げ時において土の差違を見出していない。敷石は第1仕切石まで詰め、玄室内には2面の敷石が検出された。奥壁側には重なった敷石が多く、当初2面の敷石を想定していたが、玄門付近を中心に払われた敷石が重なっているものである。上面の敷石は左側壁から奥壁際にかけては大振りの石を配す。中央部から玄門にかけて敷石が欠落している。下面の敷石は玄門側で検出されたが上面の敷石下に延びず、左側壁際の上面の敷石の基底とほぼ同じレベルになる。従って奥壁側は払われ敷き直された可能性もある。

羨道　羨道部左側壁は腰石に横長の石材1と小転石1を用いてその上に40cm大の小石を整然と積む。羨門には構架した天井石が遺存する。羨道右側壁は大きめの石材が多用され、袖石側の3段目は玄室右側壁と横位の目路が合う。羨門脇にずらされた天井石があり、レベルから遺存する側壁上につまれていたものである。床面には袖石から羨道よりに横長の石材を用いて配された第2仕切石と3石を組み置いた第1仕切石が検出された。仕切石間0.9mには大振りの敷石を詰める。

墓道　石室掘り方から羨門付近にかけて狭まり、その延長は概ね羨門幅で南西方向の谷部に向けて直線的に走行する掘削がみられた。断面形はV字形に近く、基底面は12°の傾斜で下降していく。

閉塞施設　積まれた閉塞石は無く、羨門から2mの範域の墓道内に流出した転石が多く出土した。

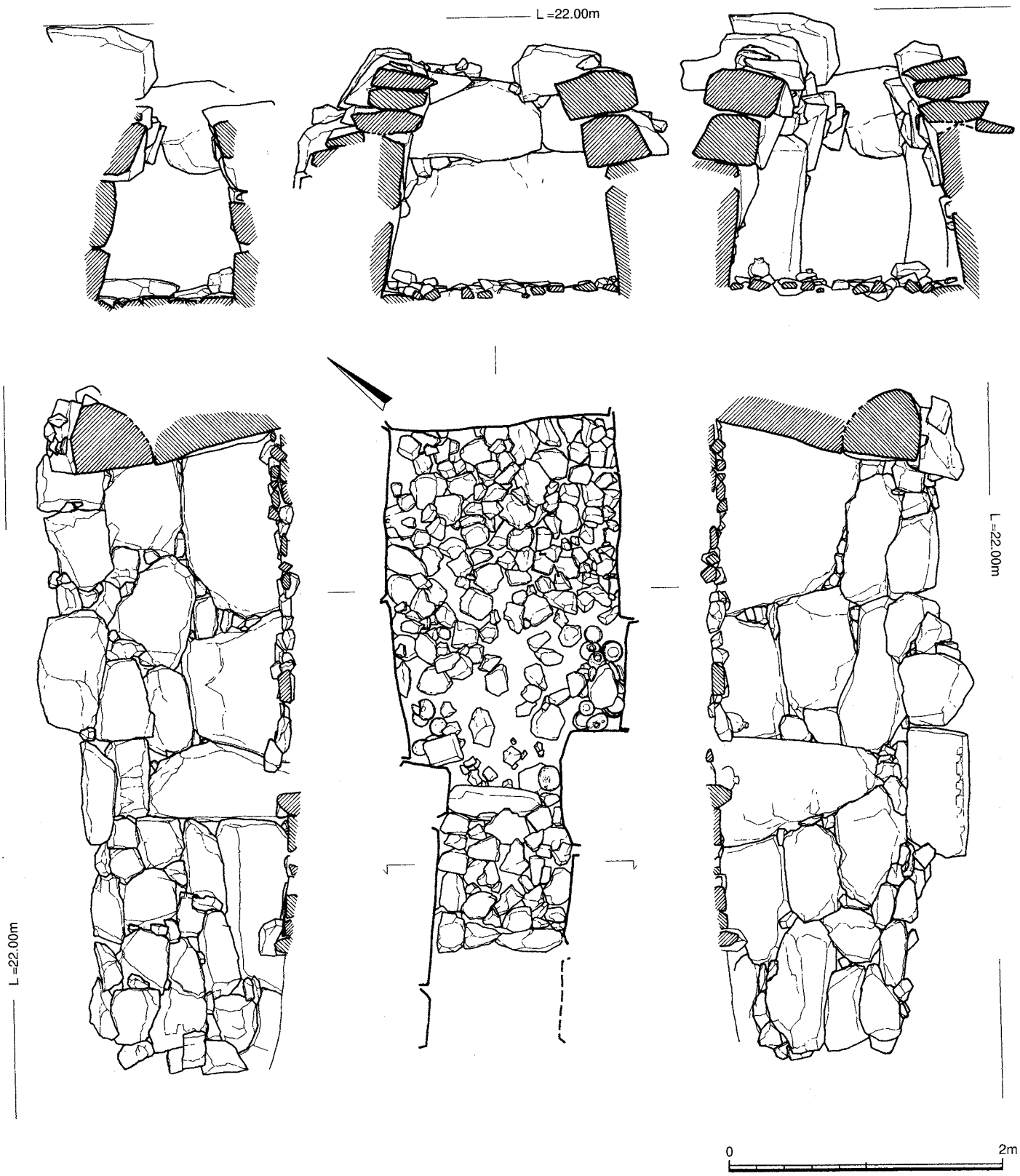


Fig. 100　９号墳 石室実測図（1/40）

大きさは30cm大のものが多く、墓道内埋土の上層に多く含まれる。鉄滓が転石に混じって出土している。

(4) 遺　　物

出土状況　遺物は玄門寄りの両側壁に沿って、完形総数54個体が出土した。出土レベルに差違がみられ、概ね4面の床からの出土に分類できる。上位からの出土は上面の敷石より17～25cm上（第1面）から、中央部に3個体のみ出土した。上面の敷石より5～10cm上(第2面)の出土遺物は多く、左右両側壁際から出土した。左側壁際から須恵器坏869、769は身蓋セットで、壺774は袖石近くから出土し、下に下面の坏が重なり合う。右側壁際には提瓶、平瓶を置き、土師器坏754、坏身758、土師器高坏756は散乱した状況で坏身762と土師器坏763は重なりあって出土した。上面の敷石直上（第3面）の右側壁際から鞘尻を奥壁に向けた鉄刀が出土した。鉄刀上には一部、上面の敷石が被り、把頭周囲に平瓶768、小壺778、坏871、779が重なりあって出土した。下位には下面敷石上の遺物が密集する。鞘尻近くにに刀子3036が出土した。左側壁では袖石近くに刀子3013と坏800、801が身蓋セットで、坏身802、803、804が乱れた上面の敷石下で袖石側へなだれ込んだ状態で出土した。新相の坏800、801が同時期と考えられる遺物より下がったレベルで出土したのは第2面の形状を示すものと思われる。下面の敷石上（第4

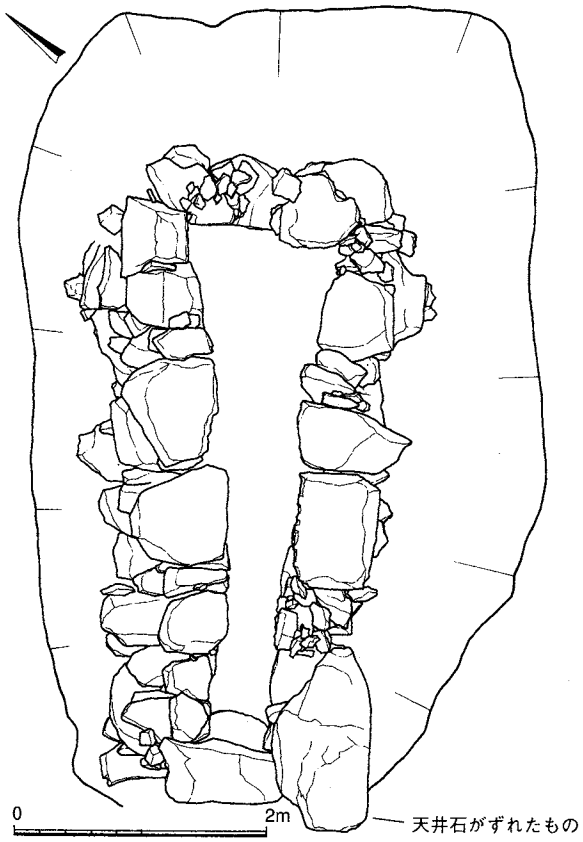


Fig. 101　石室俯瞰と掘り方実測図（1/60）

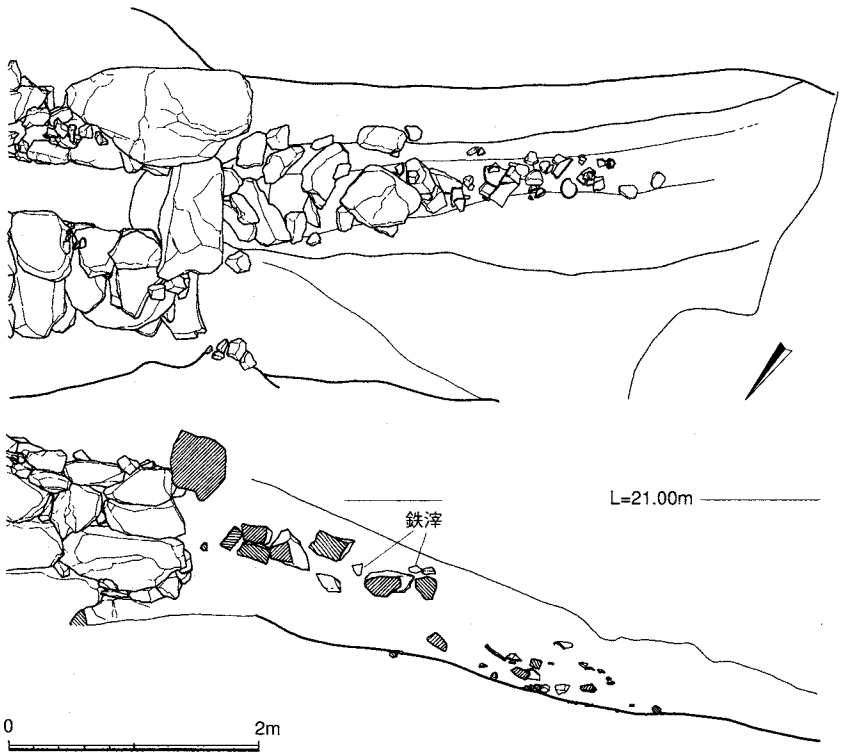


Fig. 102　9号墳 墓道実測図（1/60）

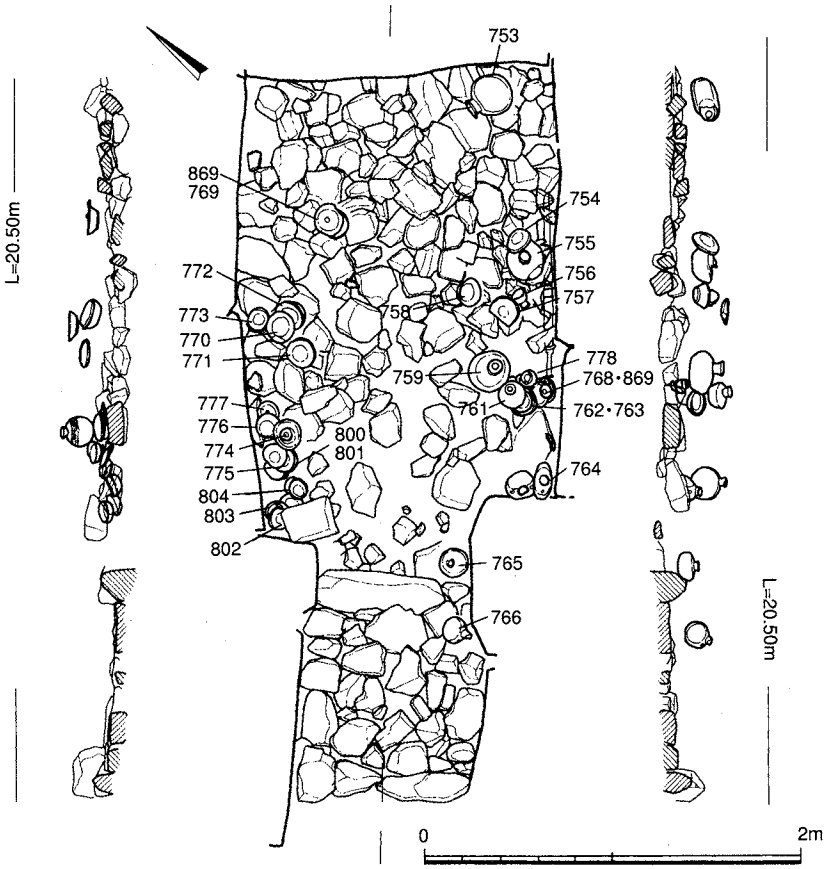


Fig. 103　9号墳 石室内遺物出土状況図（第1面・第2面・1/40）

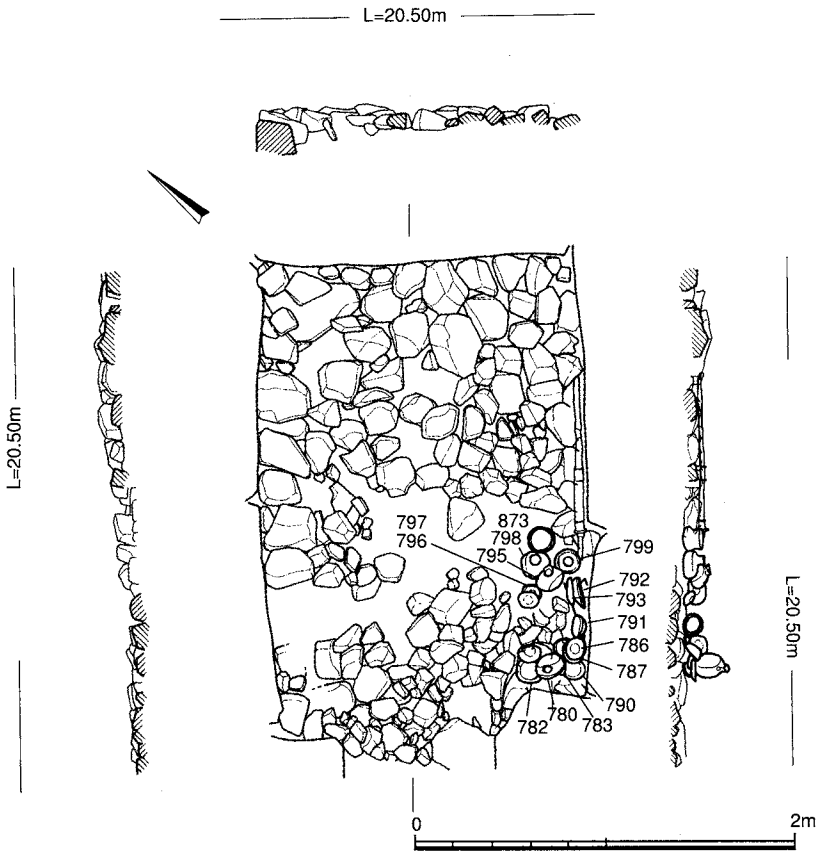


Fig. 104　9号墳 石室内遺物出土状況図（第3面・第4面・1/40）

面）からは玄門右隅角から寄せられた状態で出土した。密集した坏の上に提瓶780が重なり鉄鏃は下から出土した。まとめると以下のようになる。

第１面　　坏蓋757、坏身770、平瓶、761、

第２面　　坏蓋771、772、869、坏身758、762、773、769、土師器坏754、763、提瓶753、766、長頸壺774、平瓶755、759、768、鉄刀、刀子、耳環

第２～３面　坏蓋777、800、804、坏身802、803、土師器皿776、土師器坏775小壺778、提瓶764、780、平瓶765、768、刀子3112

第３面　　鉄刀3105、刀子3036、耳環4002

第４面　　坏蓋796、797、792、794、786、坏身793、787、788、790、785、789、782、801、小壺799、土師器壺873、提瓶795、鉄鏃3032、3113、3114、3035、3115

羨道部埋土から耳環4001が、墓道の先端崖面近くで鉄鏃3032が出土した。いずれも玄室内から引き出されたものか。

墳裾、周溝からの遺物は小片、少量で、墓道から須恵器甕片、坏、高坏が出土した。甕片876は羨門から約1.5m離れた位置の下位より墓道の延長方向へ連なった状態で出土した。

(5) 遺　　物

（須恵器） 坏蓋　概ね４類に分類できる。

Ⅰ類　口径が大きく天井部にまるみをもつ。口径14.5cmの784、偏平な器形であるが、他に比べ口径が大きく（13.5cm）口唇部に沈線上の段を有す783がある。

Ⅱ類　口径が小さくなり（12.5cm前後）天井部が偏平になるもの。789、794、786が含まれ、同じヘラ記号を有す。789は天井部が回転ヘラケズリによって調整され丸みをもつ。

Ⅲ類　口径11cm前後に縮小し、天井部が未調整に近く粗雑化するもの。(804、781、796、797)。

804は802、803と近接して出土し坏身になる可能性がある。797は出土状況から蓋とした。

Ⅳ類　宝朱つまみをもち、短い返りがつくもの。777のみである。

Ⅴ類　つまみを有し、口縁端部を折り曲げたもの。869、800、771と772、757につまみの形状、と器高を主に分けられる。757は器高がとくに低く、口縁端部は短く丸く収める新相を呈す。第１面から坏身770とともに出土し、出土地点からも最も時期が降るものである。

坏身　Ⅰ類　受け部径13～14cmに含まれるもの。790は底部が丸く、返りも長い古相を示す。

Ⅱ類　791は口径12cm、返りは短く、底部は平坦でヘラの切り離し痕を残す。

Ⅲ類　返りを有さないもの。871、779は重なりあって出土し、状態から坏身とした。口径10.5cm後、色、焼成が近似する。802、803は平坦な底部で802の底部にはハケメが残る。

Ⅳ類　高台がつくもの。(758～770) 口径に差違がある。770は口径15.4cm、高台が厚く短い。灰白色を呈し、軟質である。

壺　778、799は鉄刀の柄頭近くから出土した。778は胴部上位にカキ目、799は櫛歯の列点文を配す。774の胴部上位には櫛歯による列点文を３条施す。底部は剝落している。

（土師器） 坏872、763は外面を朱塗りし、口縁部ヨコナデ、体部下位をヘラ磨きする。内面に放射状の暗文を付し、763は口縁端部近くに鋸歯文の暗文を施す。皿776、754は体部上位をヨコナデ、外面下位は不明。高坏756外面は朱塗りで外面はミガキを施すとみられるがその単位は不明。壺873は第４面からの出土。

提瓶　体部側面が湾曲して張り出す780、795、と偏平な764、753、766がある。764は斜行連続文を周縁に施す。外面に溶融した灰被りする。

平瓶　胴部が球形に近い798、768と胴部肩が張り出し平底の759、765、755がある。761は第１面から出土したが底部が丸くカキメを残す。

（墓道出土土器）　玄室内で出土した遺物のほぼ全時期を含むが、層位から時期差は見出せない。

(6) 鉄　　器

鉄刀　把頭を欠損するが、茎までの全長99.5cmを測る。把頭は形状を留めておらず、切羽からはみ出した部位や鳩目金具に付着したものは木質のみで金属は無い。漆塗りの木装と思われる。懸緒孔には金銅装の鳩目金具を付ける。切羽も金銅装で把に対しほぼ直角に取り付ける。把間には表層に漆膜がある糸巻きが遺存する。茎との間の木質部分が無くなり、空隙に土が流入して形状を歪ませている。茎には目釘穴が２箇所に見出せる。鍔は厚みがあり、銹によって膨れ上がる。レントゲンにより花弁状の象嵌が見られるが、詳細は分析、保存処理後に委ねる。脛巾も銹によって形状に不明な点があるが、鞘口金具の上から巾1.2cmのものが巻かれているものとみられる。鞘口近くと鞘の中位から把よりに各２個所に環状の細い金具を取り付ける。何れも金銅装で堅固に締める機能からは責金物であるが配置は足金物と同様である。鋩はカマス口の直線的な形状で、刀身は銹で不明瞭であるが平造りの可能性がある。

3107（鳩目金具）は厚さ0.3～４mmの長方形の金銅板の短辺両端を折り曲げて厚みを持たせ、次に長辺を円形に巻き合わせる。切羽3108は長軸長5.0cm、短軸長4.2cmを測る倒卵形を呈す。責金物3109、3110、3111は断面蒲鉾状で3110、3111はずれ合う合わせ目があるが、3109には合わせ目は見られない。

鉄鏃その他　7007は玄門の下面敷石上（第４面）から出土した碧玉製管玉である。4001、4002ともに銅芯金張りである。3112、3036、3033は玄門右隅角の下面敷石（第４面）から、3037は上面敷石の鉄刀鞘尻近くから出土した。3036は把縁装具に鉄板状のものを巻いている。3033は両側面に関が見られ、茎に巻いた痕跡がわずかに残る。鉄鏃3012は墓道から、他は玄門右隅角の下面敷石上（第４面）から出土した。3012、3115の鏃身は頸部と近い幅であるのに対し、3113、3114、3035はやや幅広の柳葉形を呈す。

以上、遺物の整理から先の床面の時期を比定すると以下のようになる。（　）内は小田氏、牛頸窯址の編年である。

第１面……坏蓋Ⅴ類（新相）、坏身Ⅳ類（新相）……（Ⅵ～Ⅶ古期）

第２面……坏蓋Ⅴ類、坏身Ⅳ類……（Ⅵ期）

第２～３面……坏蓋Ⅲ類、Ⅳ類、坏身Ⅲ類……（Ⅳｂ～Ⅵ期）

第４面……坏蓋Ⅰ、Ⅱ類、坏身Ⅰ、Ⅱ類……（Ⅲｂ～Ⅳａ期）

従って、鉄刀3105が、上面の敷石（第３面）に置かれた時期はⅣ期と考えられる。

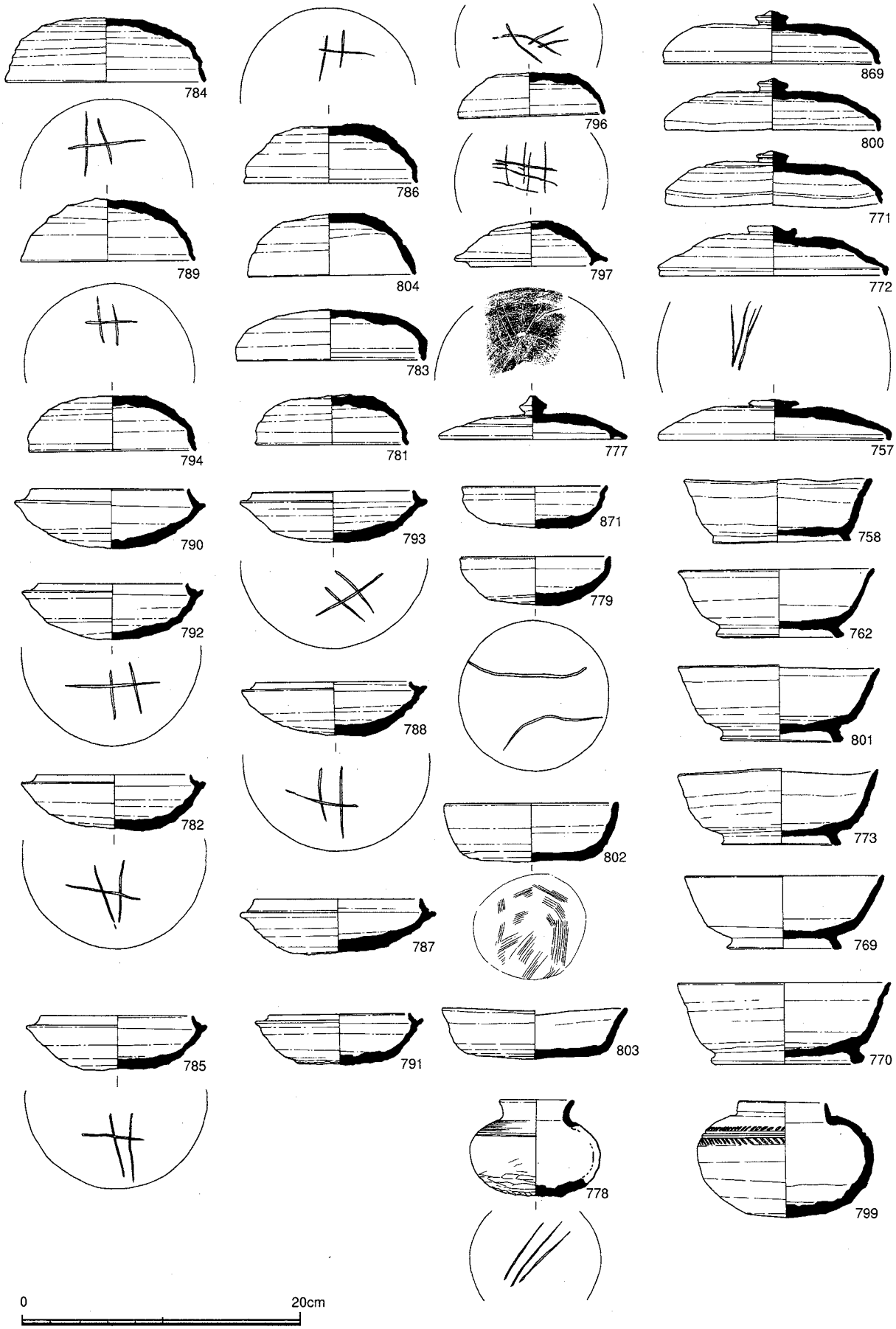


Fig. 105　９号墳 石室内出土遺物実測図１（1/4）

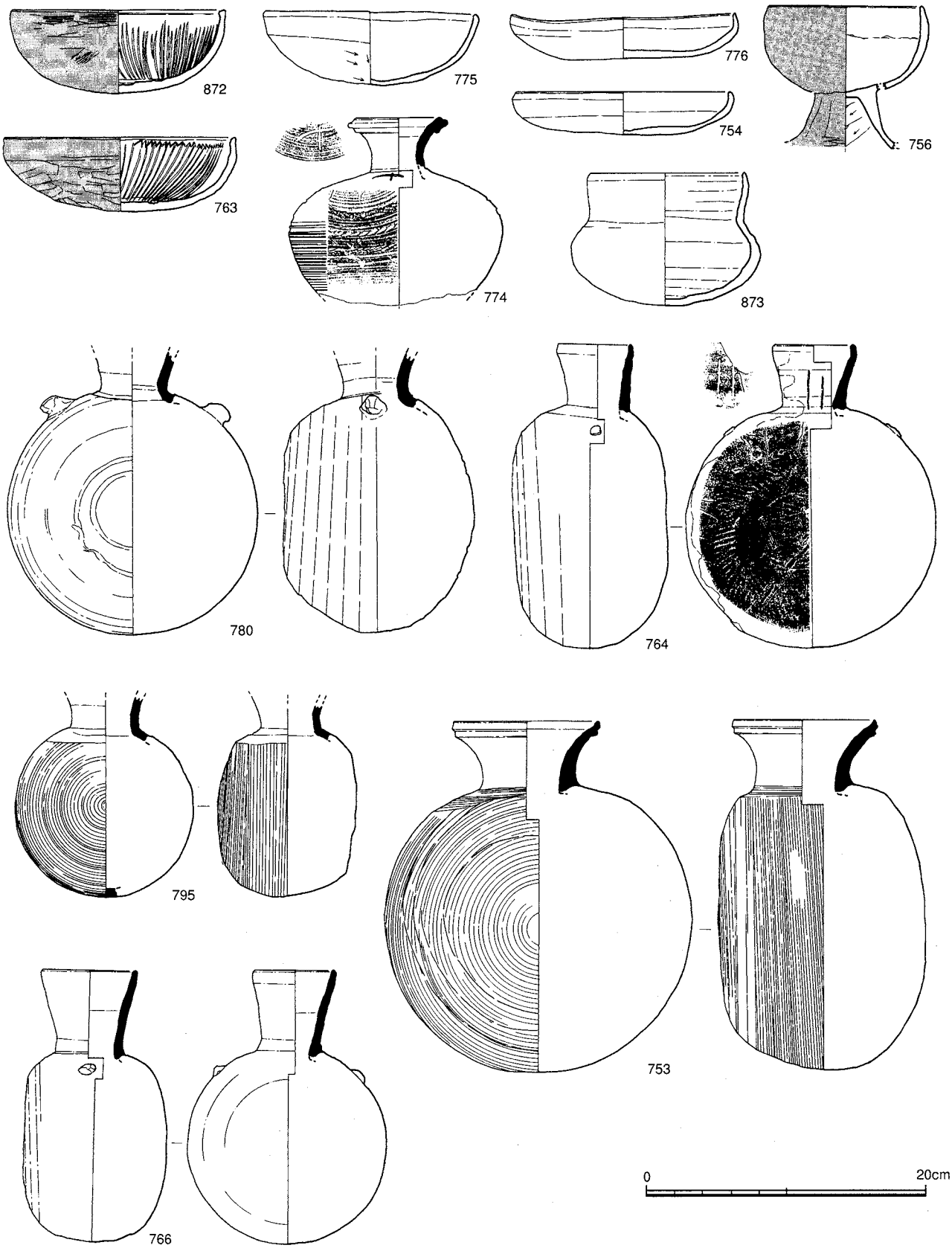


Fig. 106　9号墳 石室内出土遺物実測図２（1/4）

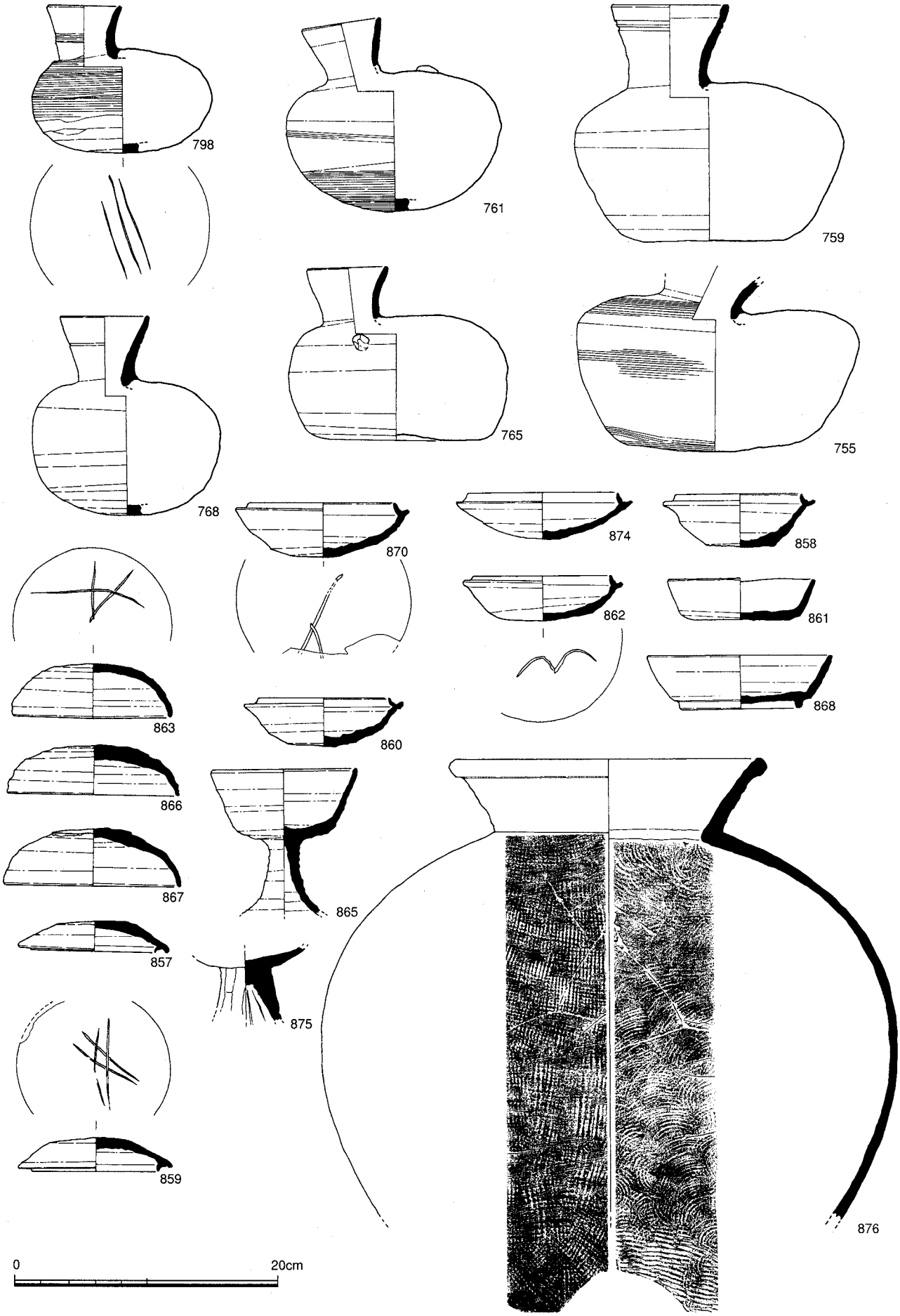


Fig. 107　9号墳 石室内出土(平瓶)と墓道出土遺物 (1/4)

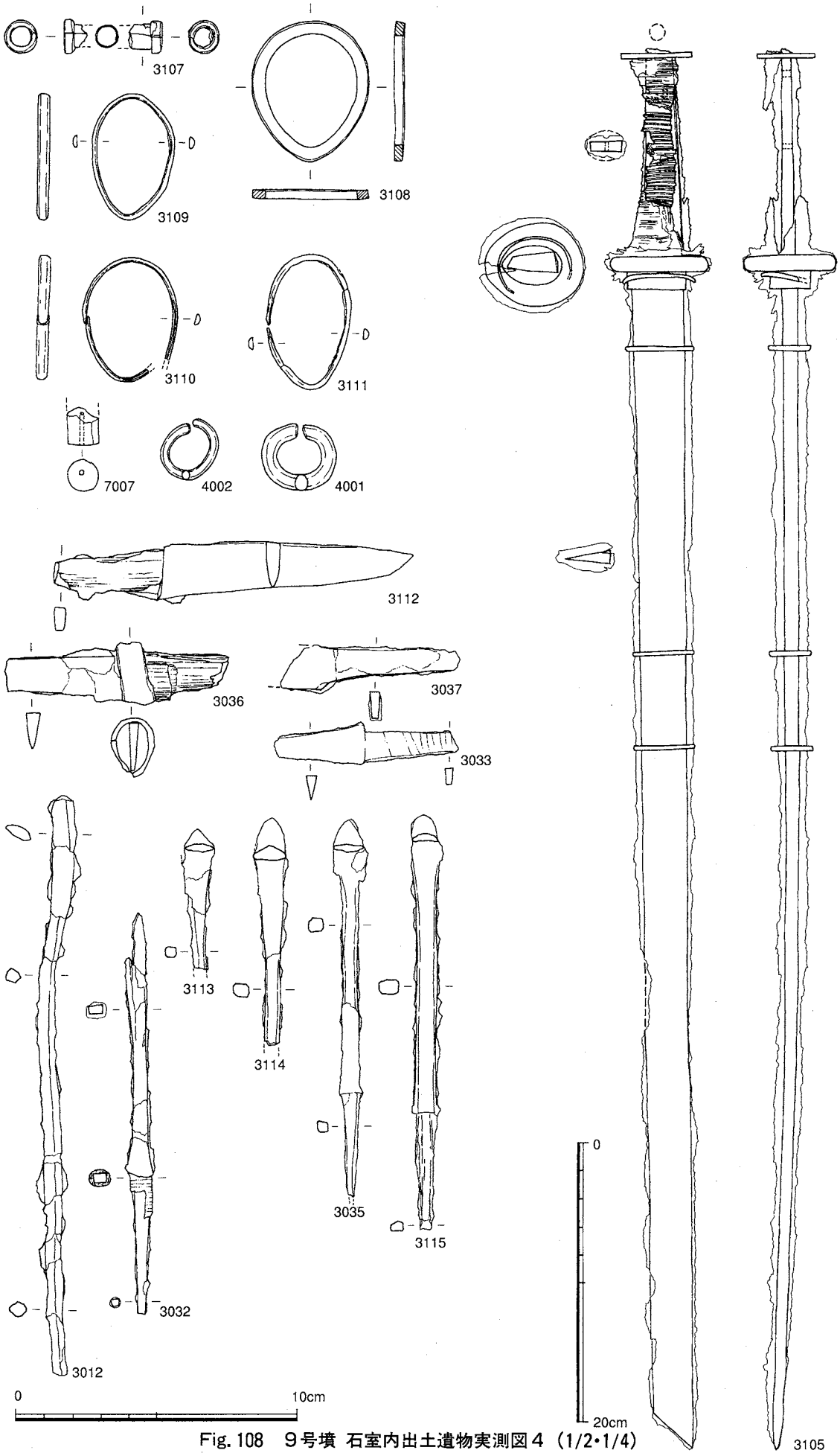


Fig. 108　９号墳 石室内出土遺物実測図４（1/2・1/4）

8．10号墳

(1) 位置と現状

丘陵北東斜面に位置し、下方の6号墳と墳端が2～3mの距離をおいて近接する。東側に浅い谷が入り込み、調査によって、ここに6号墳と連結する墓道が設けられている事が判明した。地山成形による馬蹄形状の溝は石室中心から約7mの位置からの掘削が認められ、石室より上方には墳丘の高まりは低く、下方斜面は流出により墳端が不明瞭であるが遺存は良好であった。石室は天井石が無く、露呈していたが、埋没し、その形状、開口方向等は不明であった。

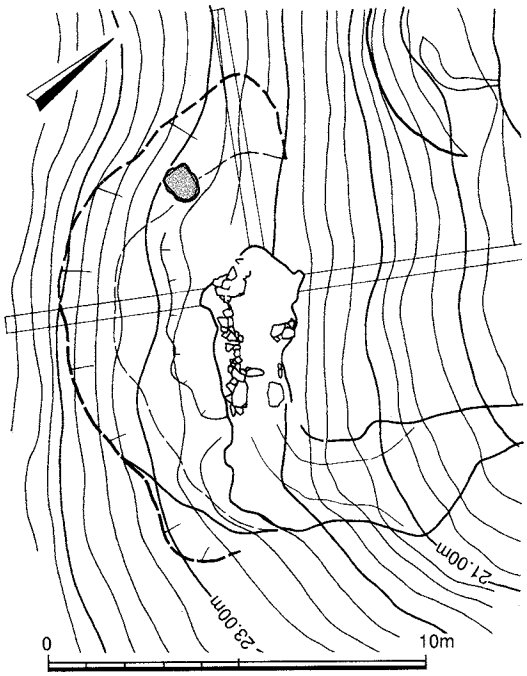


Fig. 109　10号墳 地山成形図（1/200）

(2) 墳　　丘

地山成形　馬蹄形状の溝は石室上方の斜面に半円状に検出された。明瞭な地形変換が認められたのは石室中心より5～7mの楕円形状の範域であった。しかし流出し掘削の肩が不明瞭な部分は更に1～2m広がる。石室南側のⅠ、Ⅱ区の墳丘基底面は平坦に近く造られ、石室掘り方に沿った落ち込みが検出された。Ⅰ区ではこの落ち込み内に土器片が供献され、Ⅱ区では敷石（022）が検出された。Ⅱ石室より下方の斜面では旧表を残し、わずかに緩斜面になる程度の基底面の整地で、その範囲は不明瞭であるがCトレンチでは石室中心より3.4mの位置まで旧表を残した整地面が認められ、途切れた位置より周溝埋土の黒色土が石室中心より5.1mの距離まで堆積している。

墳丘　墳丘は遺存が良好なⅢ、Ⅳ区で約70cm認められる。上方のⅠ、Ⅱ区では地山成形による石室側の周溝立ち上がりは無く、盛土は周溝下端から石室側の平坦な整地面上に築造される。Aトレンチでは石室中心から3.1mの位置に墳端が認められる。

Bトレンチでは地山成形による周溝立ち上がりが不明瞭になり、石室側に緩やかに下降していく整地面が造られ、この斜面上に墳丘が盛られている。墳端は3層に墳丘流土を含む可能性があるが、概ね石室中心より4.4mの位置に求められる。石室より下方Ⅲ、Ⅳ区の急斜面では盛土の流失が多く墳端の確認が難しいが、石室中心より3.4mの旧表上まで墳丘が盛られている。

墳丘盛土は黄褐色砂質土を多く用いて、下方のCトレンチでは大きな単位で盛り上げていく。

以上の観察を考慮した墳丘は主軸方向に7.5m、直行方向に6.5mのやや楕円形のプランになる。

(3) 埋葬施設

本墳は等高線にほぼ沿ったN－46°－Wに主軸方向をとる無袖の横穴式石室で南東方向に開口する。

石室掘り方　左側壁側の石室腰石から30～40cmの隙間をあけて掘削され、地山と近似した明黄褐色砂質土を埋土に用いる。石室が倒壊している奥壁から右側壁にかけては明確な掘り方は無く、旧表をわずかに掘削し、腰石を据えた程度であろう。地山成形によって造り出された基底面の左右側壁でのレベルに大きい比高差があるため、掘り方の深さに差違が生じ、右側壁は倒壊し易い状態にあったものと考えられる。

玄室　玄室と羨道部は明らかに大きさの異なる石材を用いて区別する。玄室は30cm大の小振りの転石で構築し、地形の傾斜方向に倒れかかり不安定な状態である。奥壁の約半分と右側壁は消失してい

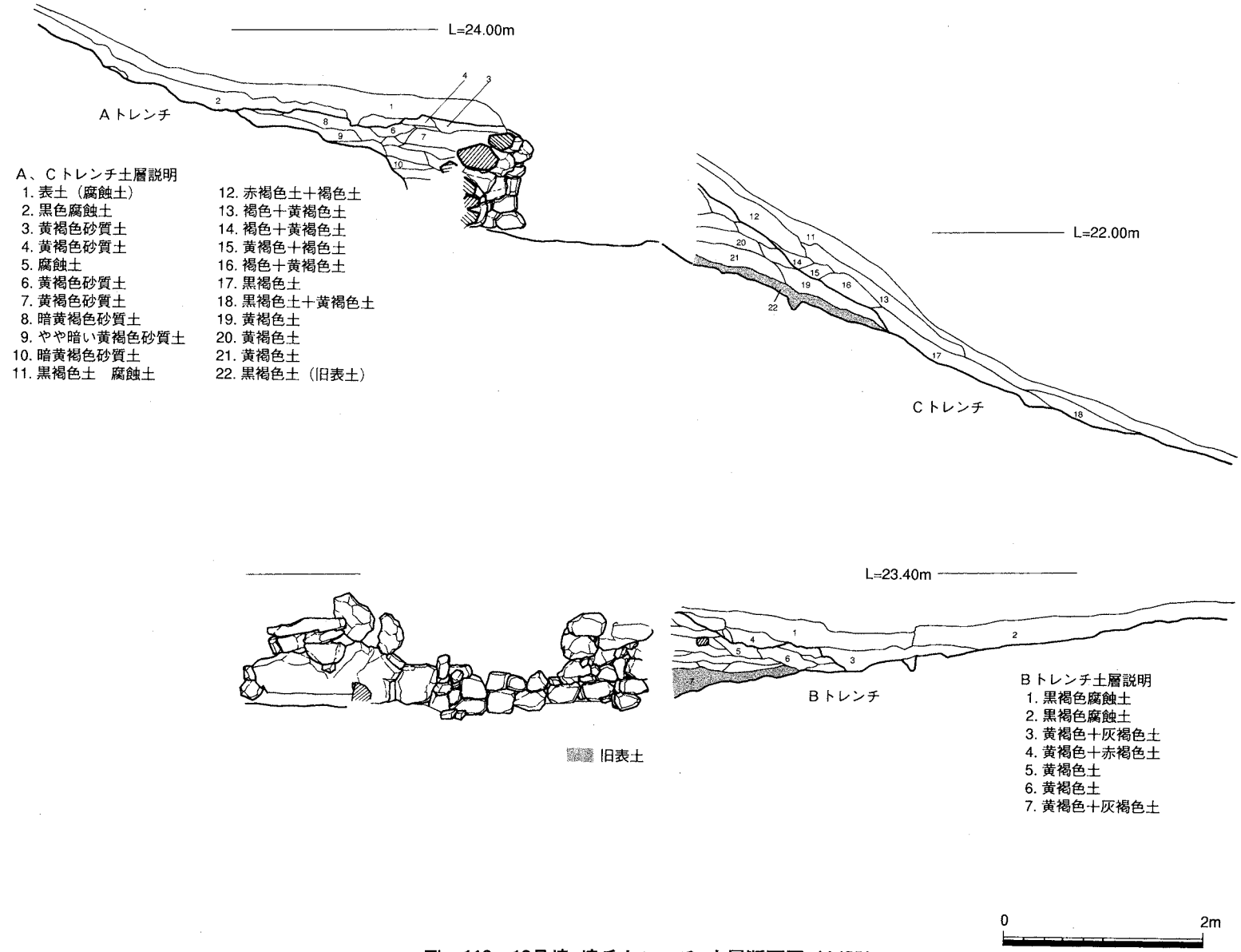


Fig. 110　10号墳 墳丘トレンチ、土層断面図（1/60）

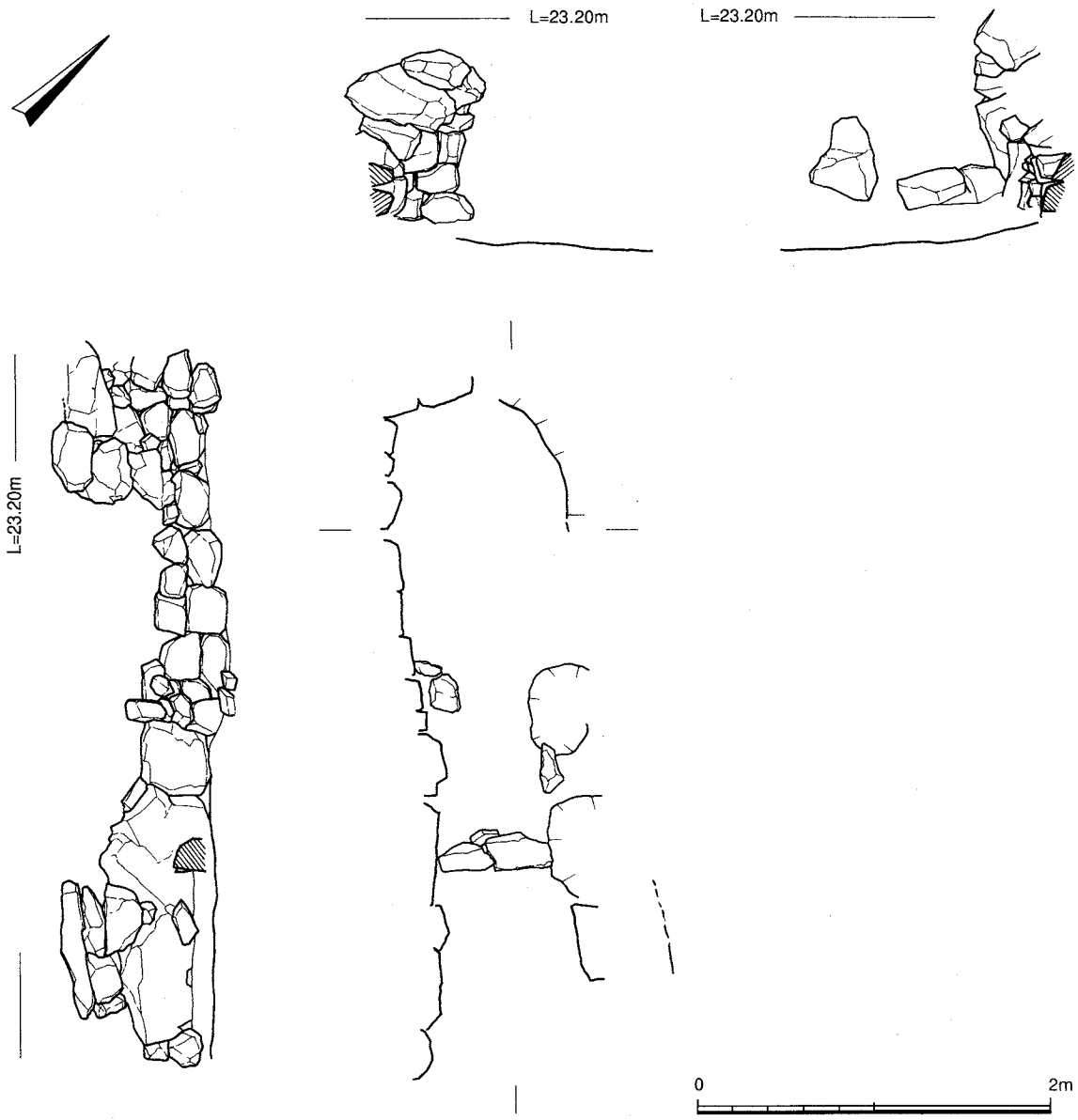


Fig. 111　10号墳 石室実測図（1/40）

る。上述のように右側壁は浅い石室掘り方のため不明瞭で、羨道部から復元すると遺存する奥壁に1石が加わった幅と思われる。左側壁には40cm大の石材を張り出させ羨門を配置する。左側壁長1.80mを測る。2段目の石材は腰石より更に小振りの転石を用いる。奥壁は左側壁から鈍角に広がり、隅角は奥壁と側壁を交錯させた力石状に積み上げ、直に近い立ち上がりをみせる。床面の敷石は無くなっている。

羨道　左側壁長1.92mを測る。石材の掘り抜き穴や遺存する右側壁の1石から羨門にかけてやや広がるプランをなすと思われる。羨道床面は玄室より約10cm高い。

Fig. 112　10号墳 墳丘内と墓道内遺物出土状況図（1/60）

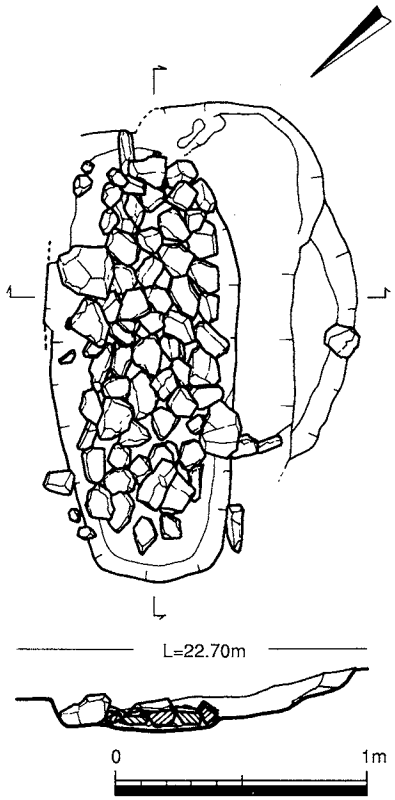


Fig. 113　022 実測図（1/30）

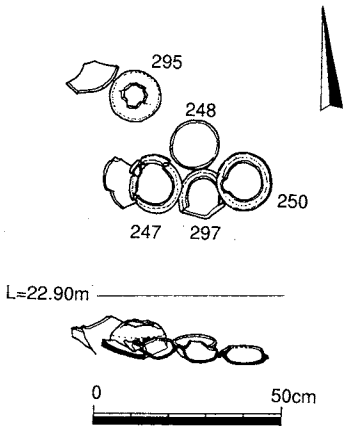


Fig. 114　10号墳 墳丘内供献遺物出土状況図（1/20）

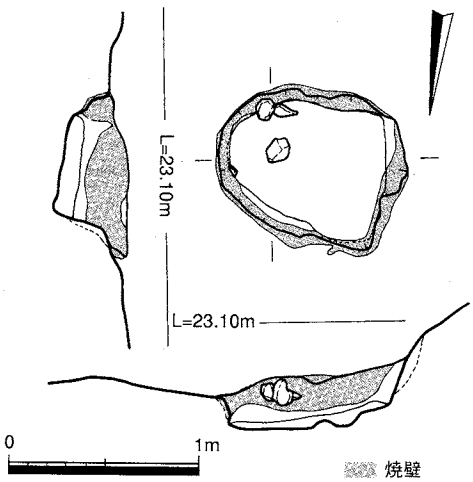


Fig. 115　055 実測図（1/40）

墓道　羨門から湾曲しながら谷部へ向かい、下方の６号墳の墓道と連結する。深さ10cm程で次第に浅くなり、不明瞭となる。羨門近くでは崩壊した石材とともに多くの土器片が出土した。

閉塞施設　崩落した壁体の石材と混在した石が散在するが、積んだ形状は無く、閉塞石と考えられたのは１石のみである。平坦な基底面で高さ40cmの直な面を玄室側に向ける。その前面に基底を深くした小振りの石が仕切石状に組み合う。

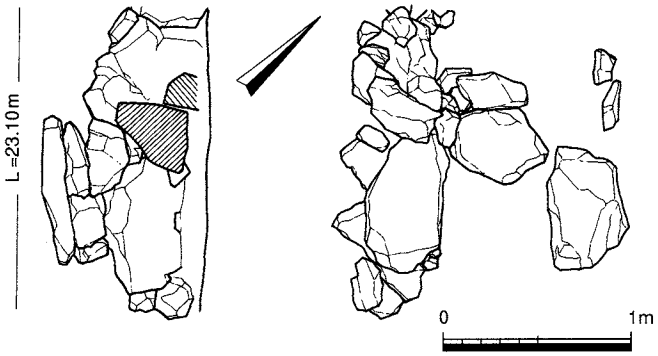


Fig. 116　10号墳 石室閉塞石実測図（1/40）

022（小石室）　墳丘盛土を除去する時点でII区の地山基底面近くから検出された。10号墳石室主軸方向と同じ向きに敷石が見られる。主軸長1.55m、短軸長0.5mを測り側壁に配置したとみられるやや大きめの石材が長辺に２石ある。北側の短辺側は敷石が乱れている。掘り方は極めて不明確であるが、西側長辺に敷石から30cm幅をおいた落ちがみられ壁体の石材を配置していた可能性がある。規模から後述の小石室と同じ規模のものである。副葬品は無い。

055（焼土壙）　II区周溝内から検出された。周辺に炭が散布し、一部墳丘下に入るとみられる。主軸長1.0m、西側で深さ40cmを測る。壁体は全周焼けて硬化する。

(4) 遺　　物

出土状況　Ｉ区石室掘り方周辺の基底面近くに小礫を混じえて破砕された土器片が多くみられた。その中には須恵器坏片の他土師器壺（300）、須恵器平瓶（274）、甕片等を含む。須恵器坏蓋248、坏身297、247、250土師器壺300は並べた状態で配置されていた。300の坏蓋は倒置、坏身247は1/4を、土師器壺300は口縁部を欠損していたが、周辺に散布された土器片が接合する。

墓道には須恵器坏片の他平瓶312、提瓶313を含む土器片が羨門近くに多く出土し、下方に流下して須恵器甕片がみられた。また、墓道にはかき出された耳環や鉄器を含む。

遺物　土器の出土地点は以下の通りである。

須恵器坏蓋　290　IV区表土、295墓道、291IV区表土、248Ｉ区墳丘内、298墓道、302IV区表土、墓道下層、296　IV区周溝、Ｉ区墳丘内、Ｉ区表土、Ｉ区基底面、Ｉ区周溝内　299　Ｉ区表土、IV区表土　304Ｉ区墳丘内　292IV区表土　297　Ｉ区墳丘内、墓道上層、Ｉ区表土　247Ｉ区墳丘内　306　Ｉ区表土、墓道上面、Ｉ区墳丘内　250Ｉ区墳丘内　208墓道　307墓道　303Ｉ区墳丘内、Ａトレンチ表土、Ｂトレンチ表土　300Ｉ区墳丘内、IV区周溝埋土内　293IV区表土　301　６－10号間墓道、IV区墳丘内、305Ｉ区周溝内、Ｉ区墳丘内　308Ｉ区表土、IV区周溝、294　IV区表土、311、IV区表土、墓道、Ｉ区墳丘内、309Ａトレンチ墳丘内、Ｉ区表土、IV区周溝、墓道、274Ｉ区墳丘下部、234Ａトレンチ周溝、312　墓道、IV区周溝内　Ｉ区墳丘内、313墓道、310墓道

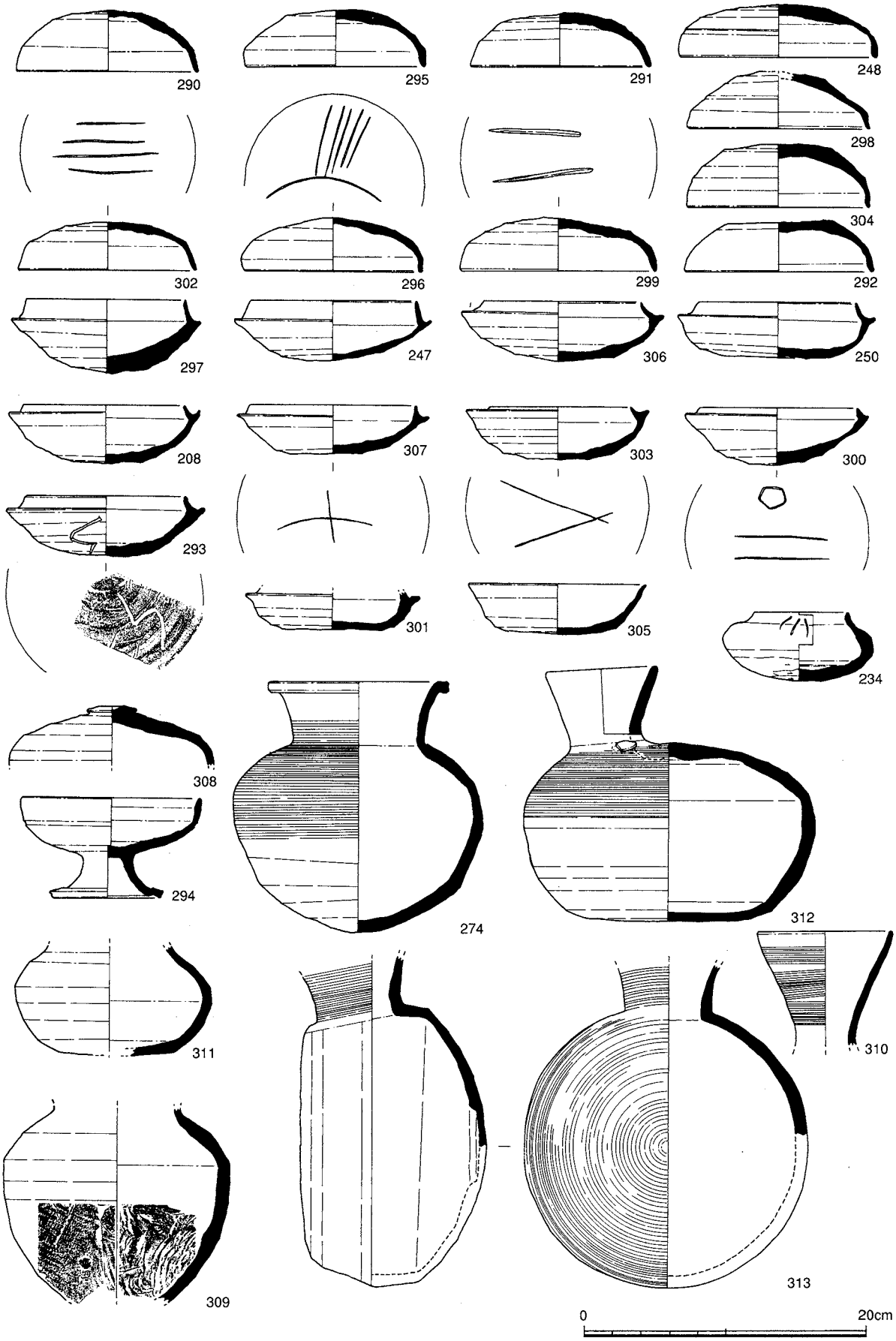


Fig. 117　10号墳 出土土器実測図１（1/4）

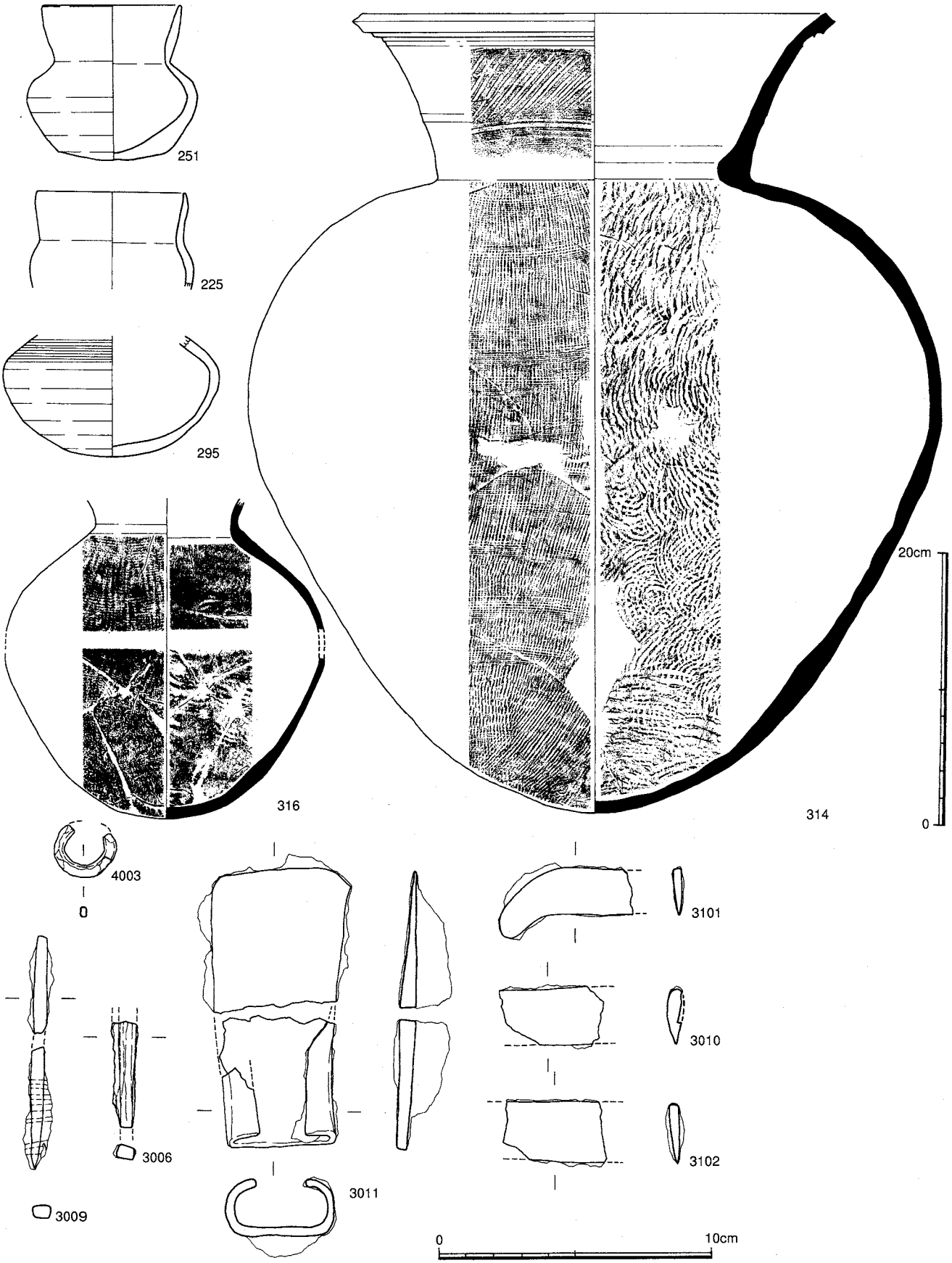
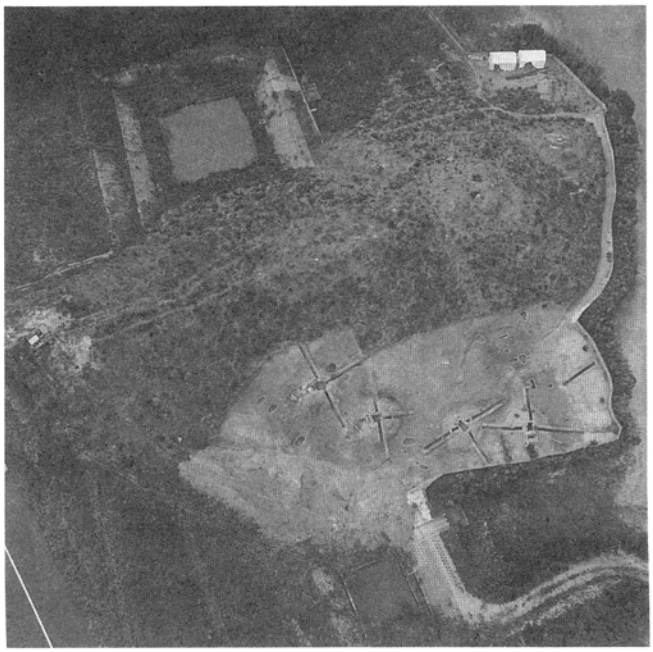


Fig. 118　10号墳 出土遺物実測図２（1/4・1/2）

土器　坏蓋248は天井部と体部の境に沈線を有す古相を示す。299も天井部から緩やかな稜をもって口縁部へ移行する古期のタイプである。他は口径12.5cm前後のものが多く、291のように天井部にヘラの切り離した痕跡をもつものがある。304は天井部が平坦となり作りも粗雑である。坏身297、247、250は坏蓋248とともに一括に埋置していた。立ち上がりが長く、297は器厚で、ヘラケズリもやや粗雑であるが、250は体部が偏平で底部にはヘラケズリ調整がなされ古相を残す。307、303、300は返りが短く、307は底部に粗いヘラケズリ痕を残す。305は坏蓋の可能性があるが、口唇部がわずかに外反して細くなることや底部を作り出したようなヘラケズリがみられる。以上の遺物Ⅲｂ～Ⅳｂに属するであろう。308は有蓋高坏の蓋。低平な中央を窪ませたつまみを有す。234短頸壷は偏平な器形を呈し、３条のヘラ記号を有す。309壷は体部外面の上位にカキ目、下位に平行タタキ痕を残す。294高坏は体部と底部の境に一条の沈線を巡らす。274広口壷は灰白色を呈し軟質。312平瓶はボタン状の取っ手が一対つく。311は偏平な体部をなし、胎土は砂粒を多く含み粗い。313提瓶は体部片面にヘラケズリを施し平坦に成形する。310壷口縁部の外面にはカキメが施される。316甕は灰白色を呈し軟質。314甕は口縁部に斜行連続文を施す。251土師器小形壷は底部が平底に近く、カキメを口縁部から体部にかけて施すが不明瞭になっている。明黄灰色を呈し、胎土は細かく精良。外面体部の剥落が著しい。225土師器広口の小形壷は赤褐色を呈す。295は先述の一括埋置されていた土師器壷である。口縁部を欠損し、外面体部が剥落している。体部上位にカキメを施し、底部はやや尖り底に回転ヘラケズリで成形する。外面に一個所黒班を呈す。

耳環　4003は墓道から出土した。外径2.2cmを測るが外表の大部分が剥落している。銅芯金張り。

鉄器　3009、3006は羨道部から出土した鉄鏃茎の端部付近である。木質が残る。3011は墓道から出土した袋状鉄斧である。袋部の折り返しは右側で本来の形状を留めている。3101は墓道から出土した鉄鎌先端部である。3010、3102も鉄鎌と思われる。3010は石室内の埋土中から、3102はⅠ区表土から出土した。



ph. 2　6、7、8、10号墳 墳丘遺存状況

9．15号墳

(1) 位置と現状

尾根線上に位置し、現況ではその存在は知られず、墳丘、石室はかなり破壊されていた。2号墳と墳端を接し、石室主軸方位も同じくする。北側は緩やかに下降していく斜面で墳丘が調査によって判明したが、石室南側は削平され、表土下地山になる程削平されている。

(2) 墳　　丘 (Fig.50)

地山成形　狭い尾根筋の項部を造成し、平坦面を築く。石室が尾根筋の中心から外れる為、石室以北では比較的広い平坦面がとれているのに対し、以南では後世の削平を考慮しても傾斜は急な基底面の成形であったと考えられる。石室北側のAトレンチの観察では石室中央から2.8mの位置まで平坦面がみられ、墳端の北側へ旧表土を残し、緩やかに下降していく。石室南側のCトレンチでは地山上に墳丘盛土は堆積せず、後世の削平による地山の形状しかみられない。石室中心から5mの位置で緩斜面に地形変換している。東側の2号墳との間に周溝が検出されたが、位置から2号墳の周溝と重複している可能性がある。Bトレンチで観察された石室中心から2.7mの位置の周溝は配置から2号墳に属するもので、その上面に15号墳の成形面があるものと思われる。II区で検出された周溝の延長は15号墳に属し、埋土内の石や遺物が15号墳側に回り込む。

墳丘　上述のようにI、II区の一部に墳丘が遺存する。Aトレンチでは盛土は約30cm遺存する。石室中心より5mの位置まで旧表を残し、墳丘を盛り上げ、石室中心より3.4mの位置までは密な単位で積む。Aトレンチで観察された墳端の延長はII区の周溝やIII、IV区の地山変換点を考慮すると石室寄りになる可能性

(3) 埋葬施設

玄門から右側壁にかけて崩壊し欠落する。主軸をS－60°－Eにとり北西方向に開口する横穴式石室と考えられる。

石室掘り方　奥壁側で突出するが、石室に沿って長方形に掘られる。上端は石室から約40cm隙間があき、壁体の2～3段目の高さになる。深さ50cm以上を測る。

玄室　奥幅1.2m、左側壁2.38mを測り、長方形プランを呈す。腰石に低い小振りの転石を3石配し、その上に腰石より大きい石材をのせる。左側壁も腰石に低平な小振りの転石を6配し、上部には大きさが不揃いの石が積まれ、4段が遺存する。玄門側に比比較的小振りの石が配される。遺存する左袖部も玄室の壁体同様に高さ20cm程の低平な腰石1に小転石を重ねる。敷石は大きめのものを混じえるが上面は高さは揃う。玄門側の敷石が剝がされ欠落するが、玄門左隅角に須恵器坏、平瓶、提瓶等が寄せられていた。

羨道部　遺存しないが左袖部周辺に深く荒らされた痕跡が無いことから短い貼石状のものが連結していた可能性がある。

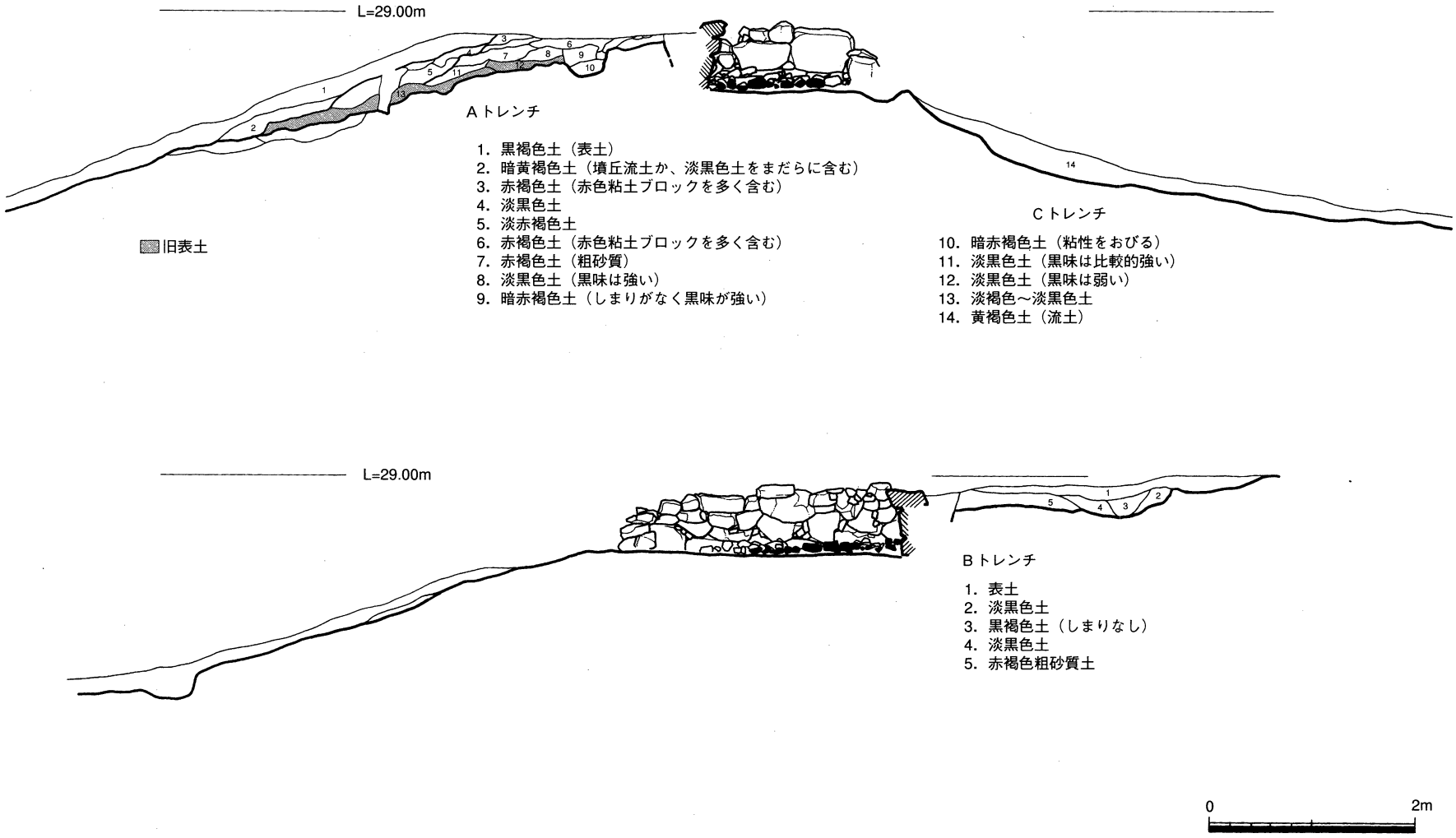


Fig. 119　15号墳 墳丘トレンチ土層断面図（1/60）

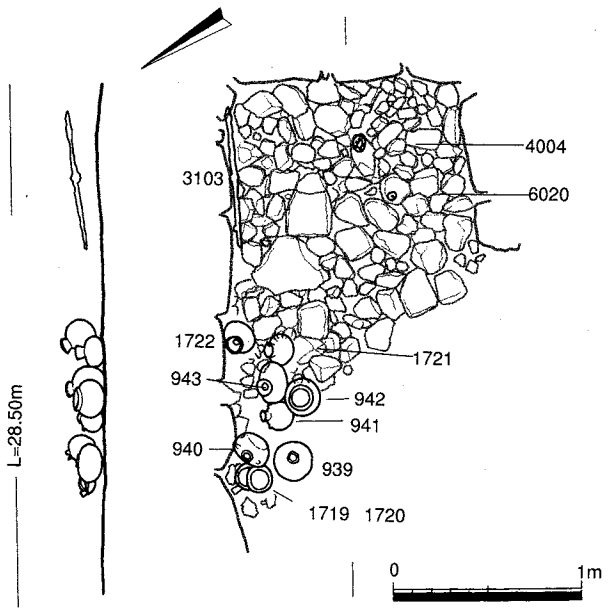


Fig. 120　15号墳 石室内遺物出土状況図（1/40）

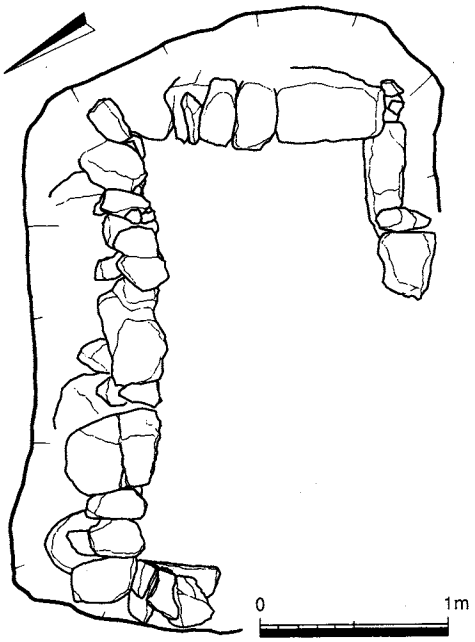


Fig. 121　15号墳 石室俯瞰と掘り方実測図（1/40）

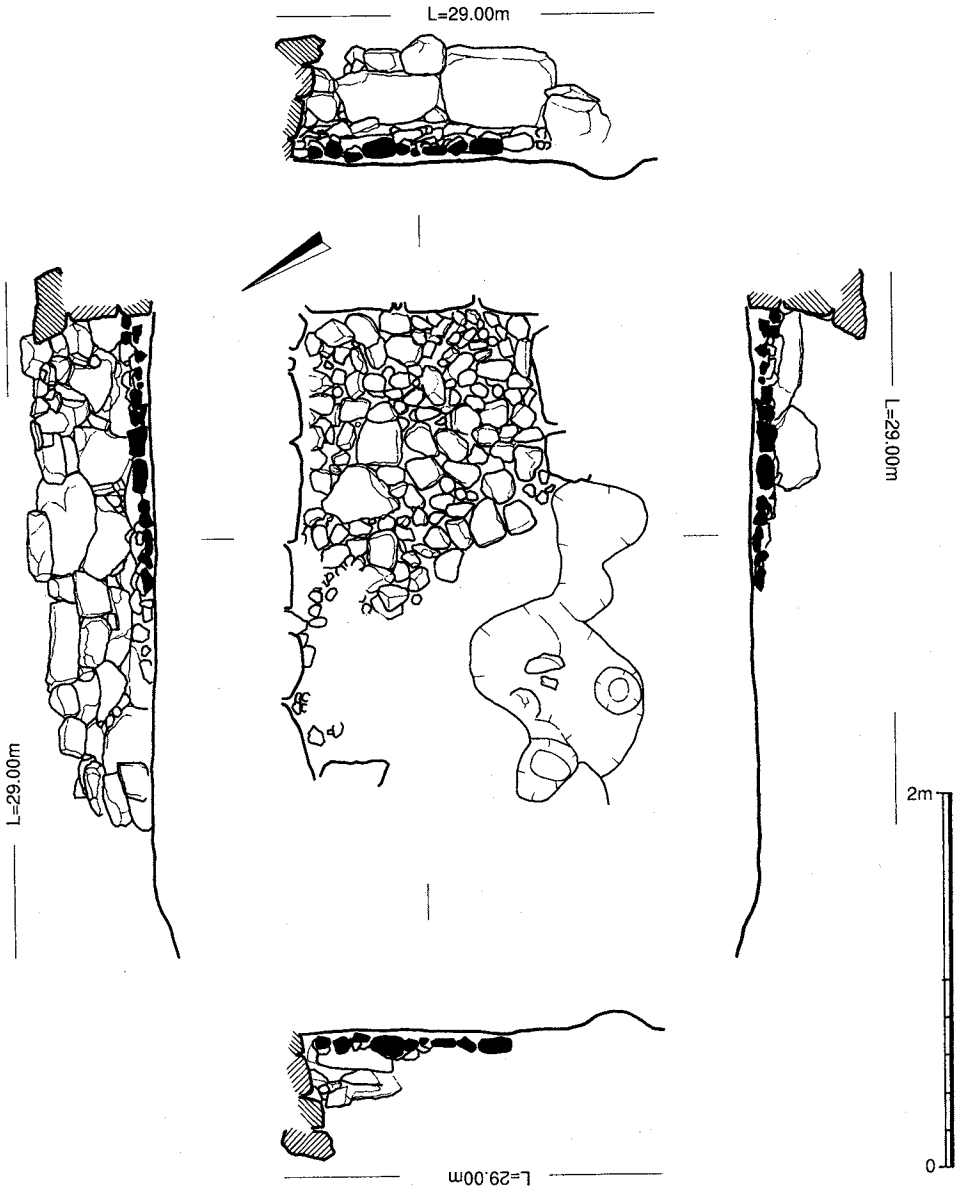


Fig. 122　15号墳 石室実測図（1/40）

(4) 遺　　物

出土状況

石室左袖石の隅角から坏身２個体が正置で重なり、周囲に提瓶４、甕１、平瓶１、土師器壺１が出土した。すべて正置に近い状態であった。坏と同レベルで密着して鉄斧3017も出土した。奥壁よりの左側壁際にそって、鉄刀が鋌を奥壁に向けて副葬され、離れて中央よりに鍔が出土した。鍔の下に重なって耳環、ちかくに滑石製紡錘車も出土した。いずれも敷石直上からの出土である。石室外からはⅠ区墳丘上、墳端周溝内とⅡ区周溝内から比較的多く出土した。Ⅱ区からは２号墳のものを含む可能性がある。

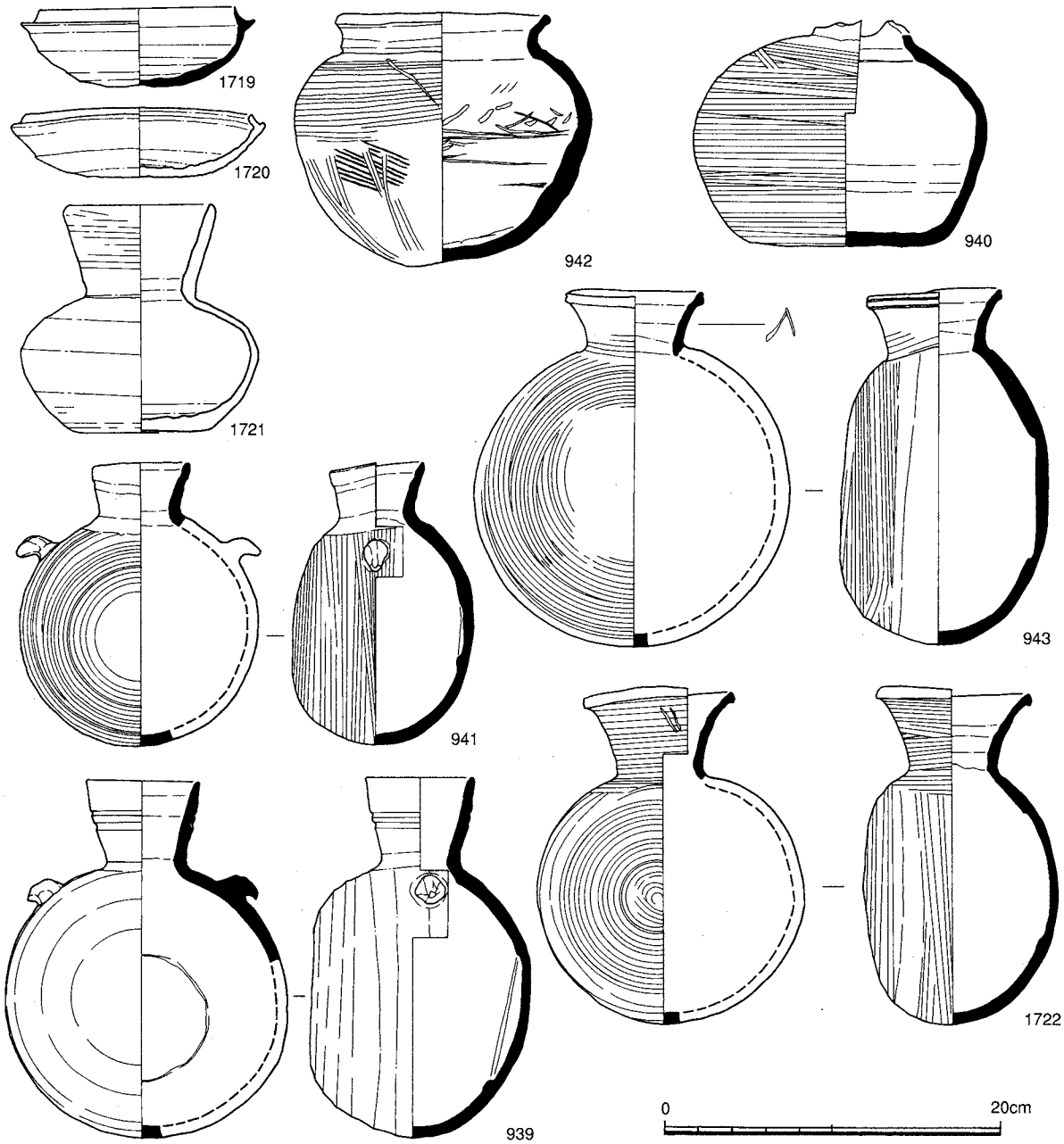


Fig. 123　15号墳 出土遺物実測図１（1/4）

(5) 遺　物

（石室内） 1719は受部径14.0cm、体部が深い。1720は土師器の坏身である。砂粒を多く含み褐色を呈す。返りは厚く短い。992は外面体部の上位にカキメ、下位に縦位のハケメを施す。内面にはヘラ状工具で横位に回し引き掻いた痕を粗雑に残す。940平瓶は底部までカキメを残す。943提瓶は頸部下カキメをほぼ全面に残す。黄灰色を呈し軟質。取手はつかない。1722提瓶は口縁部を含む全面にカキメが施される。口縁部にヘラ記号を有す。941は小形の提瓶。939提瓶は口縁下に2条の沈線を配す。体部は片面を平底状にヘラケズリで成形する。カキメは施さない。胎土は砂質できめが粗い。

以上の時期はIIIｂ～IVａ（IVｂに近い）期のものと思われる。

耳環 4004、4005は風化が著しいが、4004は鉄地金銅張りと思われる。4006は細身で銅芯金張りである。

石器 6020は滑石製紡錘車である。周縁に筋状の擦痕が残る。

鉄器 3103鉄刀は全長77.0cmを図る。鋩は一部欠損するが、ふくら刀であろう。刀身は断面平造りで、刀部に関を有して湾曲した茎に移行する。茎は錆が著しく、現在では目釘穴が不明確であるが1個所可能性がある小孔がみられる。3104は鉄製鍔金具。長軸長7.6cmの倒卵形をなす。周縁は肥厚させ、不揃いな梯子形の透かしを6孔穿つ。3017は袋状鉄斧である。

（墳丘、周溝内出土遺物） 1711、1709口唇部に段を有した古相のを示す。1711はⅠ区墳端から出土したが小片、1709III区周溝内で2号墳の遺物を含む可能性がある。1738は天井部が高く丸い。口径14.0cmを測る。Ⅰ区墳端から出土した完形に近い。1737、1741はIVａ期に含まれ、量としてはこの類が最も多い。1745はⅠ区墳端から出土。天井部外面にはヘラケズリ調整953、1739はIVａ期（IVｂ期に近い時期に含まれる。1749はⅠ区墳端表土から出土。外面頸部に鋸歯文を施す。945はII区周溝内に2号墳の方から横転した状況で出土し完形。外面体部上位のタタキ痕とカキメはナデ消され、下位は回転ヘラケズリを施す。内面には巻き上げの痕跡を残す。1751の体部外面には4条の沈線が巡る。Ⅰ、II区表土、IV区周溝から出土。1742は淡赤褐色を呈した土師器坏。Ⅰ区墳端から出土。944の土師器壷はII区周溝内から出土し完形に近い。

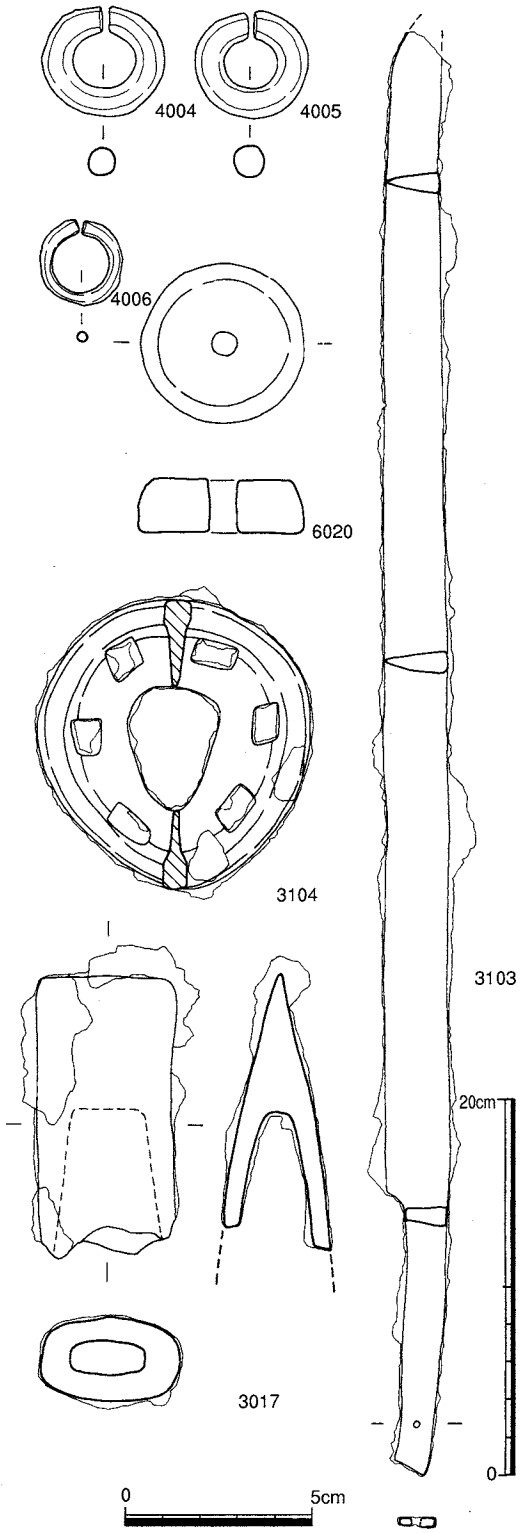


Fig. 124　15号墳 出土遺物実測図２（1/4）

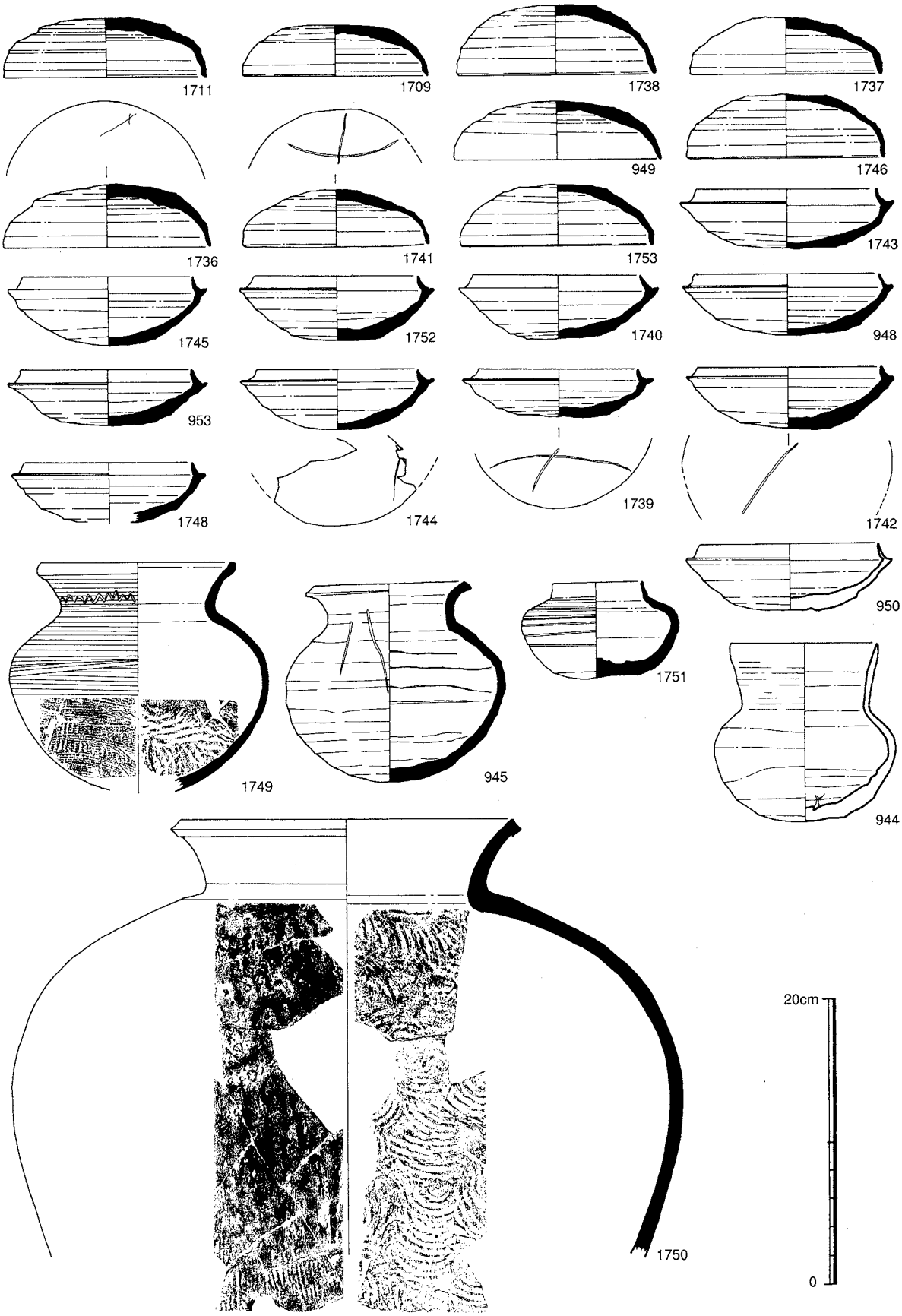


Fig. 125　15号墳 出土遺物実測図３（1/4）

10. 小石室

内部主体に横穴式石室を構築した古墳以外に小規模な竪穴式石室をもつ、「小石室」が11基検出された。以下のとおり概ね3類に分けられる。

Ⅰ類

径6m前後の低墳丘を築造し、内部主体に主軸長2m、短軸長0.6m程の竪穴式石室を構築する。壁体には小転石を4段程積み上げ天井石を被せる。床面には敷石を配す。――14、16、17、19、20、21号

II類

墳丘は確認されていないが、内部主体に主軸長1.8m、短軸長0.7mの竪穴式石室を構築する。腰石に大きめの石材を配す。――18号

III類

主軸長が1m以内でⅠ、II類に比べ更に小規模な竪穴式石室を内部主体とする。腰石に大きめの石材を使用するのはII類と同じである。――23、24、27、28号

その配置にも差違がみられる。Ⅰ類は第2次調査の11号、12号、13号墳でもみられたように横穴式石室を内部主体とした古墳に付随した分布をするのに対し、III類は周辺域に構築されている。以下、個別に説明を行う。

11. 14号墳

(1) 位置と現状

丘陵北側斜面に位置する。現況ではその存在は知られていなかったが、周辺の丘陵裾部が広く造成され、緩斜面をなしていた。本調査によって周辺には焼土壙群の他、柱穴も検出され弥生中期の土器片が出土した。

(2) 墳　　丘

墳丘は確認できなかったが、地山成形による段落ちが石室南側に検出された。しかし、周辺の造成面と重複し、古墳に伴う範囲は不明瞭である。周溝を設けた造成は図示（付図）した位置より更に南外方であろう。

(3) 埋葬施設

主軸方位をN－47°－Wに向けた竪穴式石室を内部主体とする。頭位は石室プランと遺物の出土位置から北西に向けていたと考えられる。

竪穴式石室　北辺壁長38cm、南辺壁長34cm、主軸長176cmを測る。腰石の高さ、大きさは不揃いである。北辺左隅角と南辺隅角に石英質の石を用いている。敷石は小礫がわずかに散乱する。

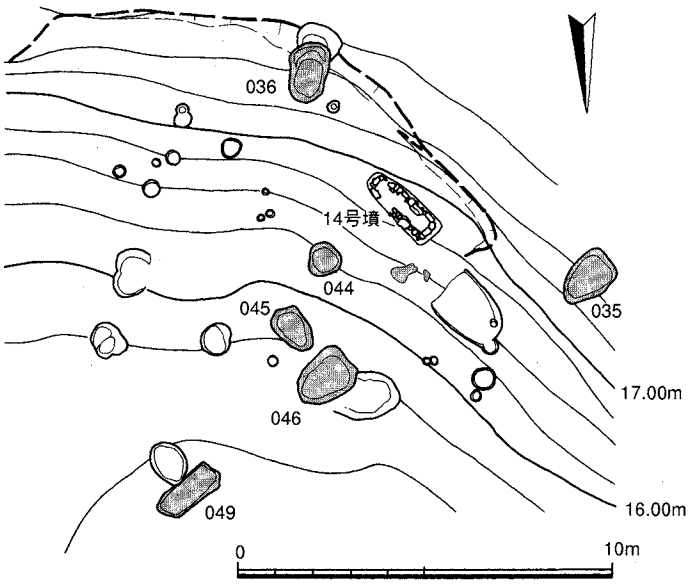


Fig. 126　14号墳 地山成形と周辺遺構配置図（1/200）

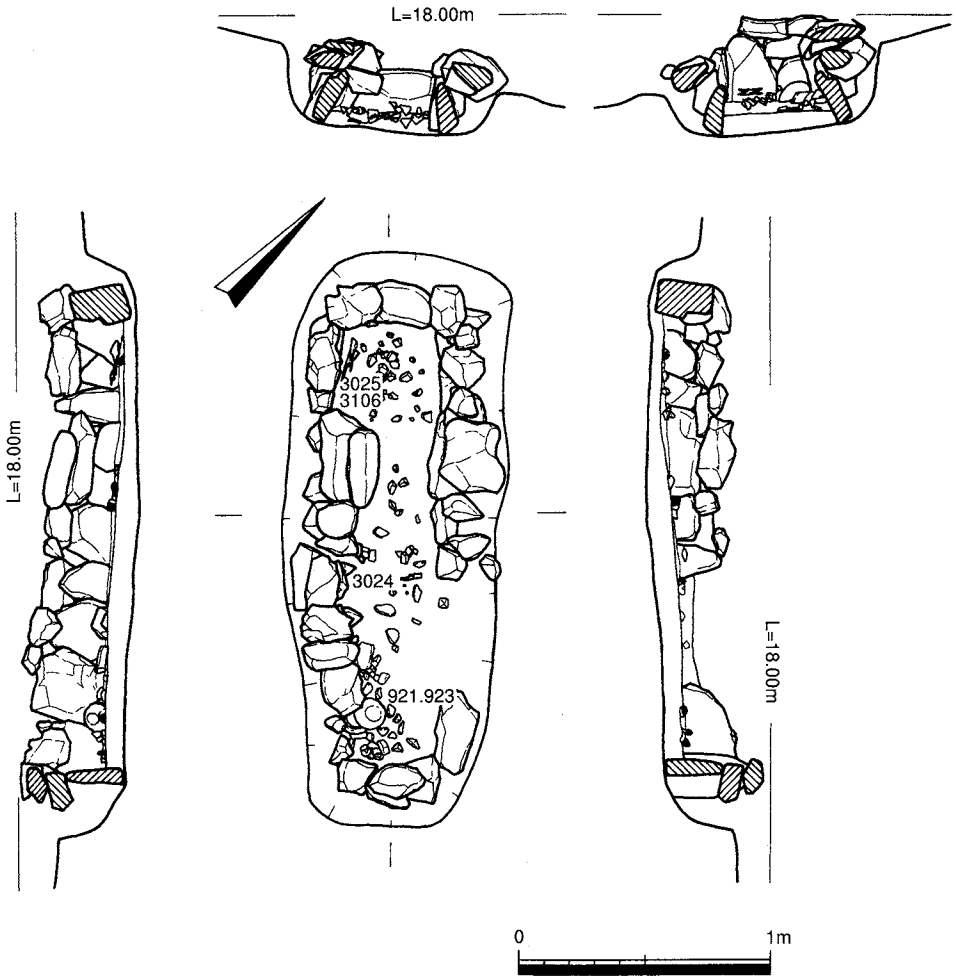


Fig. 127　14号墳 石室実測図（1/30）

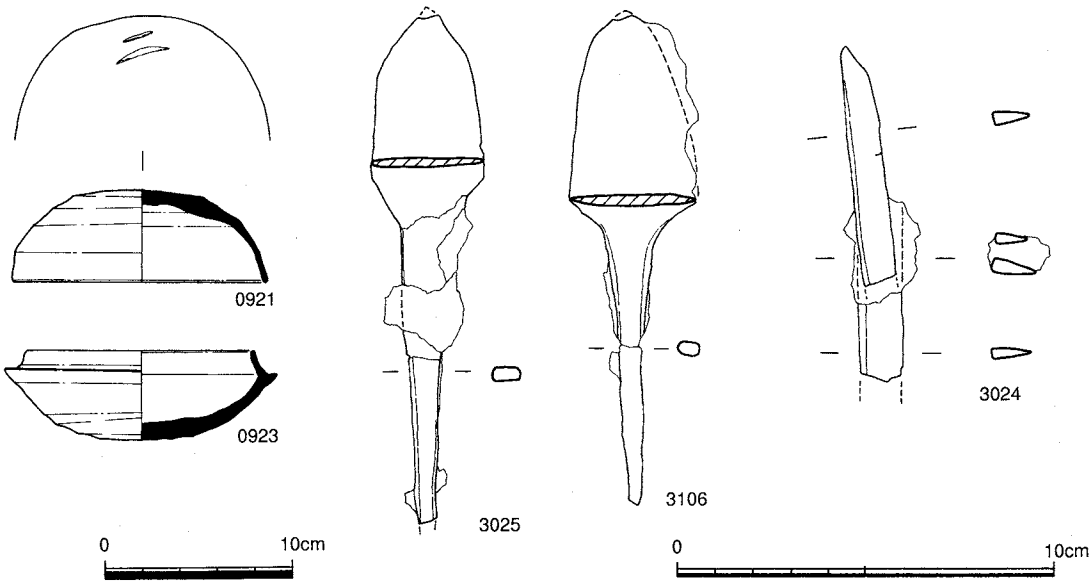


Fig. 128　14号墳 出土遺物実測図（1/4・1/2）

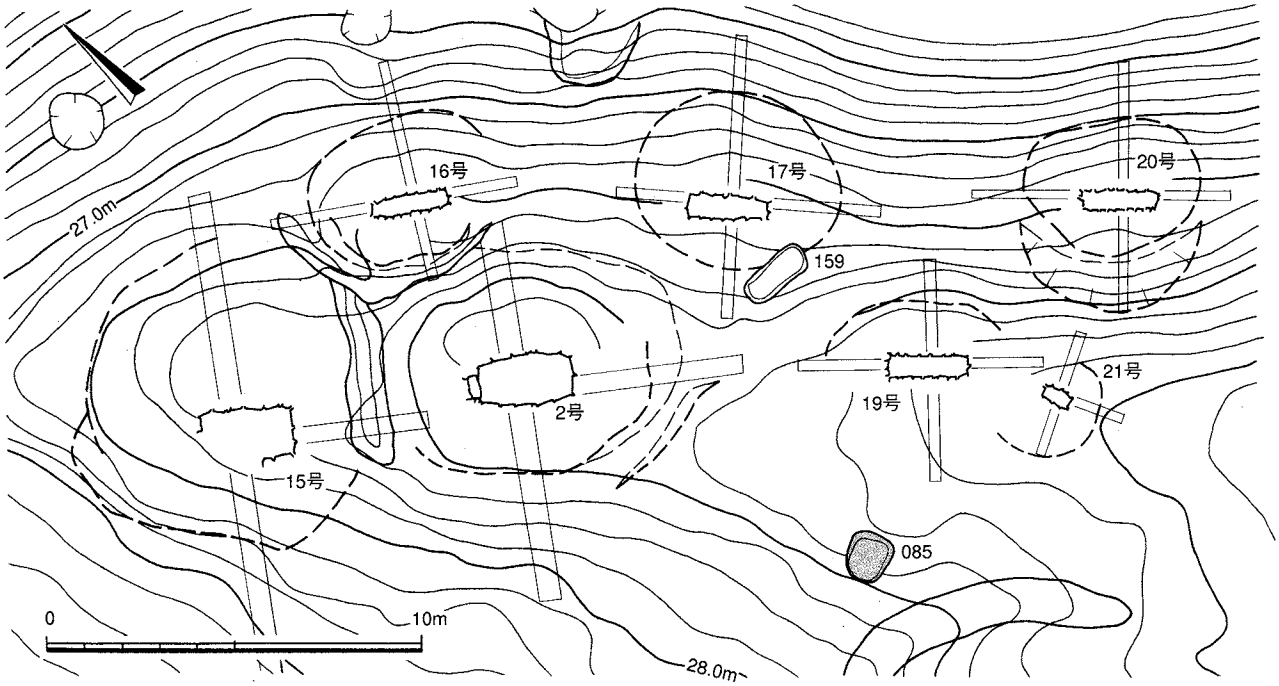


Fig. 129　16、17、19～21号墳 墳丘遺存図（1/200）

(4) 遺　　物

出土状況　奥壁左隅に鉄鏃（3025、3106）が重なって、中央に刀子（3024）、前壁左隅に坏蓋、身（921、923）がセットで出土した。

遺物　坏蓋は口径13.5cmを測り、ヘラケズリの範囲は1/3以下である。Ⅳa期に属する。3025、3106は広根式の鉄鏃である。関部の形状、茎の長さに差違がみられる。3024の刀子は折損し、銹着しているが形状から2個体の可能性がある。

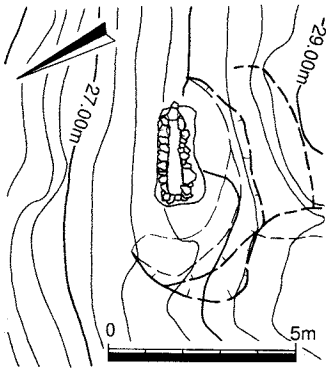


Fig. 130　16号墳
墳丘遺存図（1/200）

12. 16号墳

(1) 位置と現状

尾根線上の小石室　調査区南西際の尾根線上に集中した小石室が検出された。尾根線に縦列して構築された2号、15号墳の位置から降った東斜面に16、17、20号墳がほぼ等距離の間隔を置き縦列して築造されている。石室の主軸方位は地山成形時において基底面が地形に制約され、等高線に沿った方向をとる。

尾根線上には2号、15号墳の延長に19号と21号墳が近接して築造されている。21号墳は極めて小規模な石室内に土師器甕を2個体合わせ、それを須恵器甕で取り巻く特異な形態をなす。小児用と考えられる。頭位は遺物の出土状況、石室の形態から17号墳以外は南東方向の尾根筋に沿った高所に向きをとり、横穴式石室の2号、15号墳と同様である。

(2) 墳　　丘

地山成形　丘陵斜面を馬蹄形状に削りだして基底面と周溝を造るのは横穴式石室の古墳同様である。馬蹄形状の周溝はAトレンチで石室中心から2.3m離れた位置から掘削が認められ、Ⅰ、Ⅱ区に延長が検出された。2号墳Ⅰ区の墳端に接し、本墳が後出のものと判断された。下端は石室中心から1.5mの位置に見出され、そこから緩斜面の基底面が造成されている。石室下方のCトレンチでは石室中

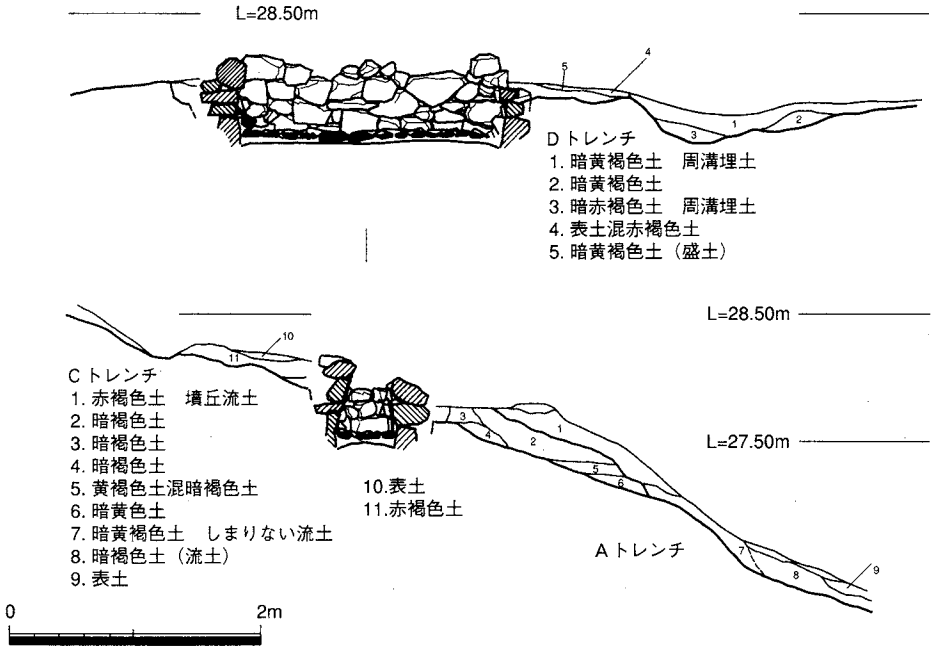


Fig. 131　16号墳 墳丘トレンチ土層断面図（1/60）

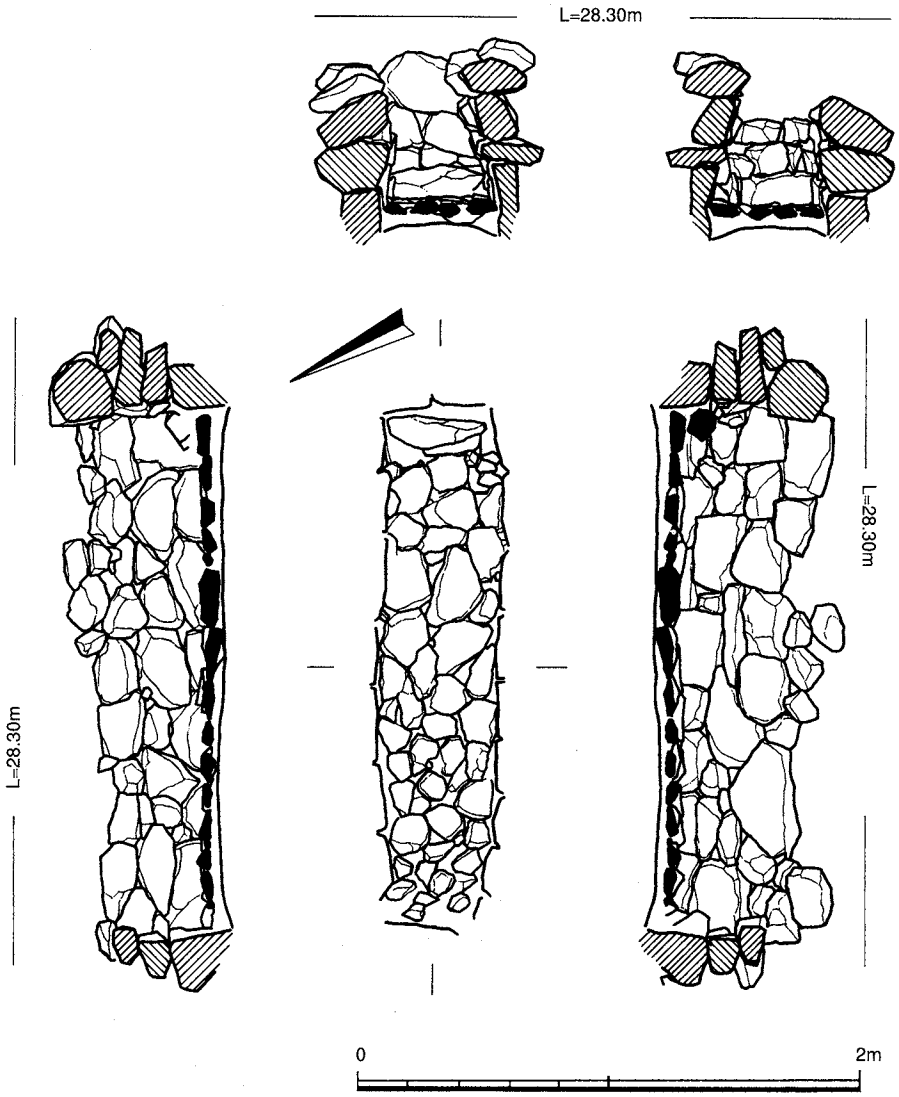


Fig. 132　16号墳 石室実測図（1/30）

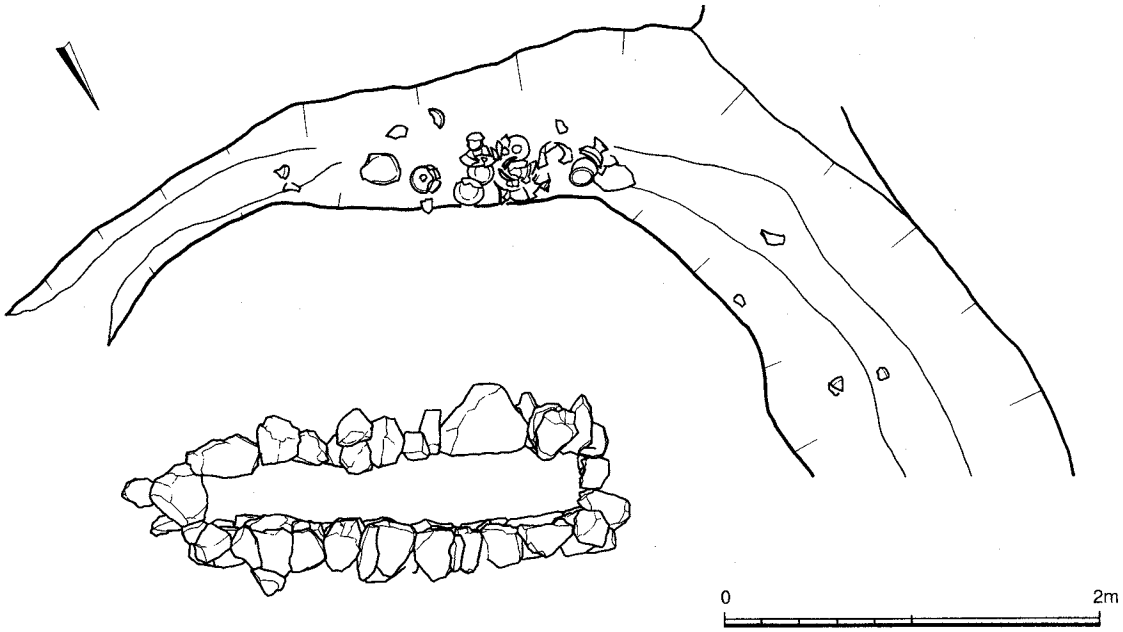


Fig. 133　16号墳 石室俯瞰と周溝内遺物出土状況図（1/40）

心から2.4mの位置まで墳丘基底面を削り出している。

墳丘　本墳は径3.8mの円墳であることが確認された。

Ⅰ、Ⅱ区では遺存が悪いが地山成形によって造り出した基底面上に10cm程みられた。下方のⅢ、Ⅳ区では比較的残りが良く、Cトレンチでは基底面上の石室中心から2.3m位置まで墳丘が確認された。基底には旧表土は無く、類似した暗褐色土を盛る。

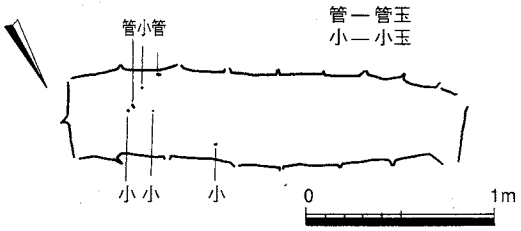


Fig. 134　16号墳 石室内
玉類出土状況図（1/40）

(3) 埋葬施設

主軸方位をS－65°－Eにとる竪穴式石室である。東側短辺幅43cm、西側短辺幅38cm、主軸長208cmを測る。石室掘り方際に石室を構築しているが、斜面下方の北側に側壁は倒れているため、南側側壁との間に隙間があく。最下部を含め20～30cm大の小振りの転石を用い、壁体を直に立ち上げたとみられる。敷石は全面に残り、奥壁際に枕状の石が置かれている。

(4) 遺　　物

出土状況　石室内からは奥壁寄りの敷石上から管玉3、小玉7個が出土した。高所のⅡ区、馬蹄形状の周溝内からは図示した須恵器坏、高坏、土師器甕が集中して出土した。遺物は完形ないし近いものである。落下した状態がみられ、2号墳端と接した範囲内であることや2号墳Ⅰ区表土と接合するものもあり、2号墳に属した遺物と考えられる。

遺物　Ⅱ区周溝内から出土した遺物は、状況や遺物時期からも2号墳に属するものが多いと思われる。坏蓋1002、1006天井部と口縁部との境に屈曲があり、口唇部に面をつくる。Ⅲa期にあたる。坏身1005は立ち上がりが細長く、偏平な体部をなす。Ⅲa期か。1009、994、992、1003は口唇部を丸くおさめた坏蓋でほぼ完形。1004～1007の有蓋高坏はいずれも明赤褐色を呈し、焼成が同じである。1004、1008が宝珠形、993が円柱状のつまみを有す。996の短頸壺は肩部が張り上位にカキ目を施す。完形で

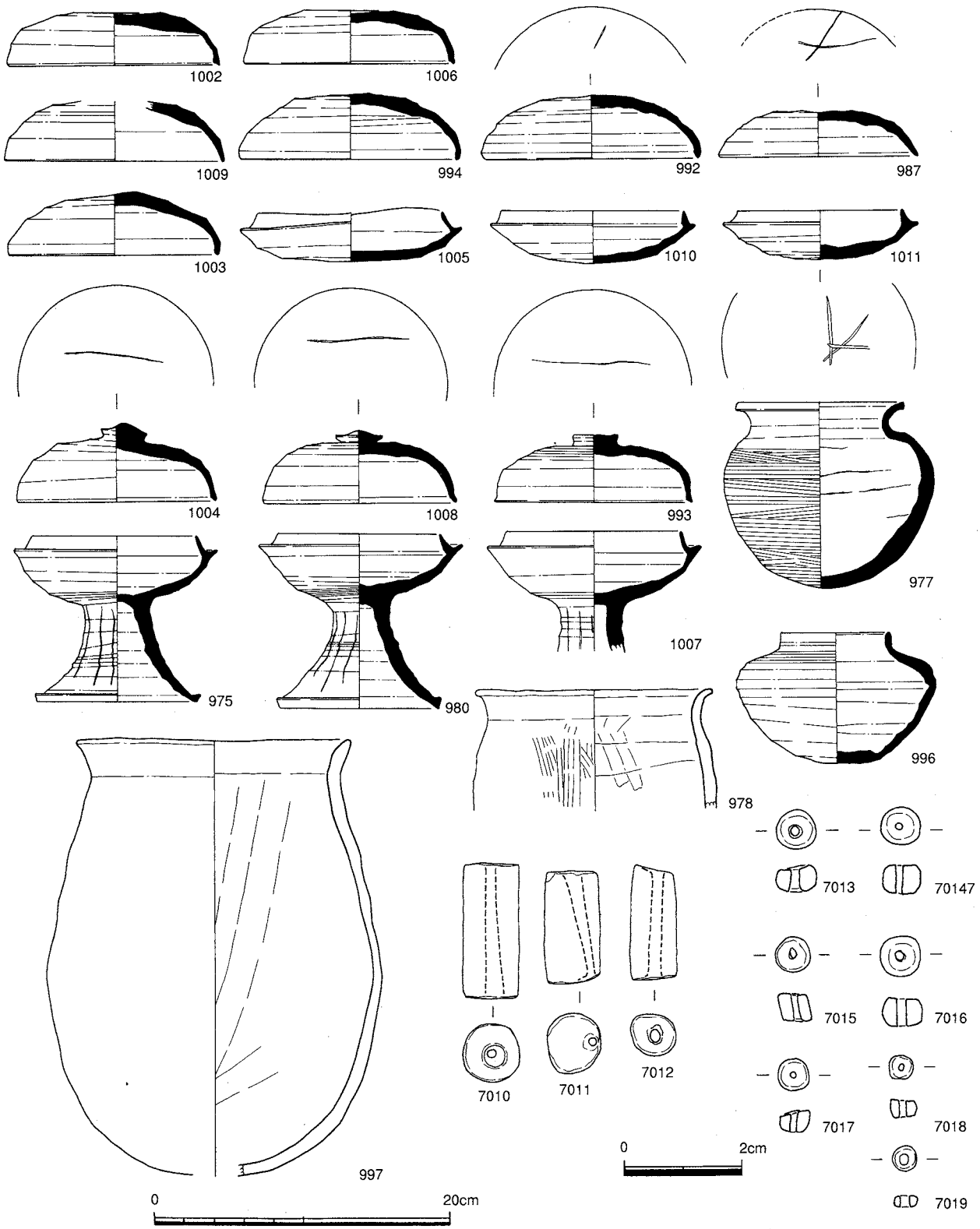


Fig. 135　16号墳 出土遺物実測図（1/4・1/1）

ある。977は胴部外面にタタキ痕を、内面に粘土巻き上げ時の接合痕を残す。997の土師器甕は密集した土器の最下に横転していた。完形にちかい。以上の遺物は2号墳に属していた可能性が高い。
967、1010、1011は密集した遺物群より離れた周溝内から出土し、小片である。16号墳に伴うものであろう。Ⅳa期に属す。

玉類は石室内から出土。7010～7012は硬玉製管玉。7013～7018はガラス製小玉。半透明で青～紺色に発色する。7019は瑪瑙製小玉。淡紅色を呈す。

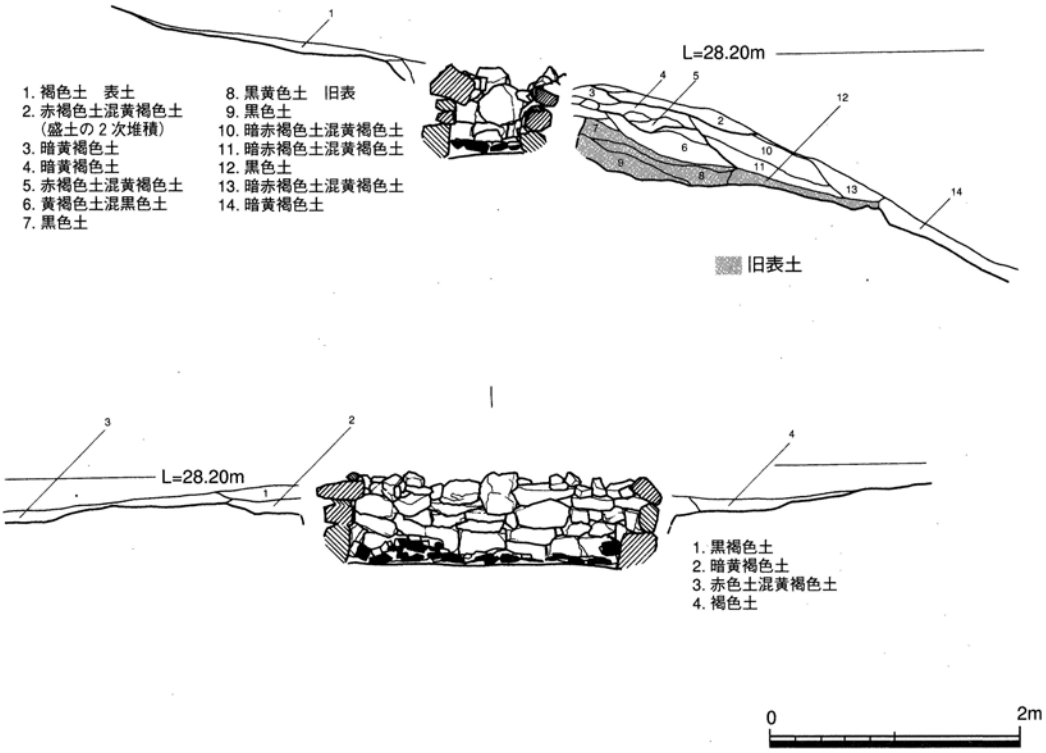
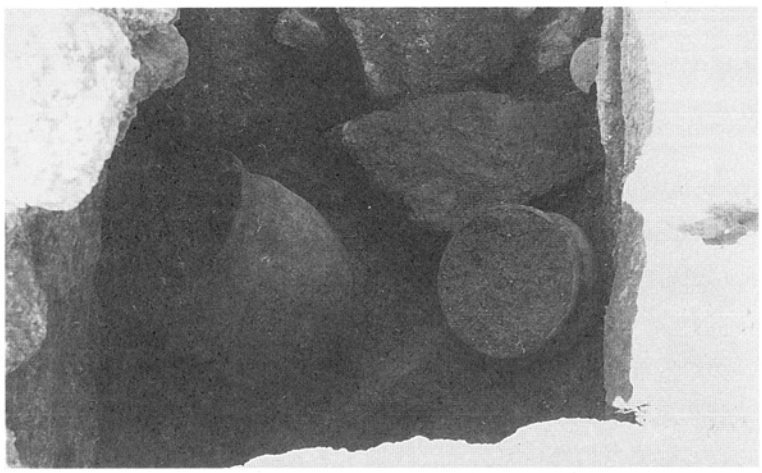


Fig. 136　17号墳 墳丘トレンチ土層断面図（1/60）



ph. 3　17号墳 石室内遺物出土状況

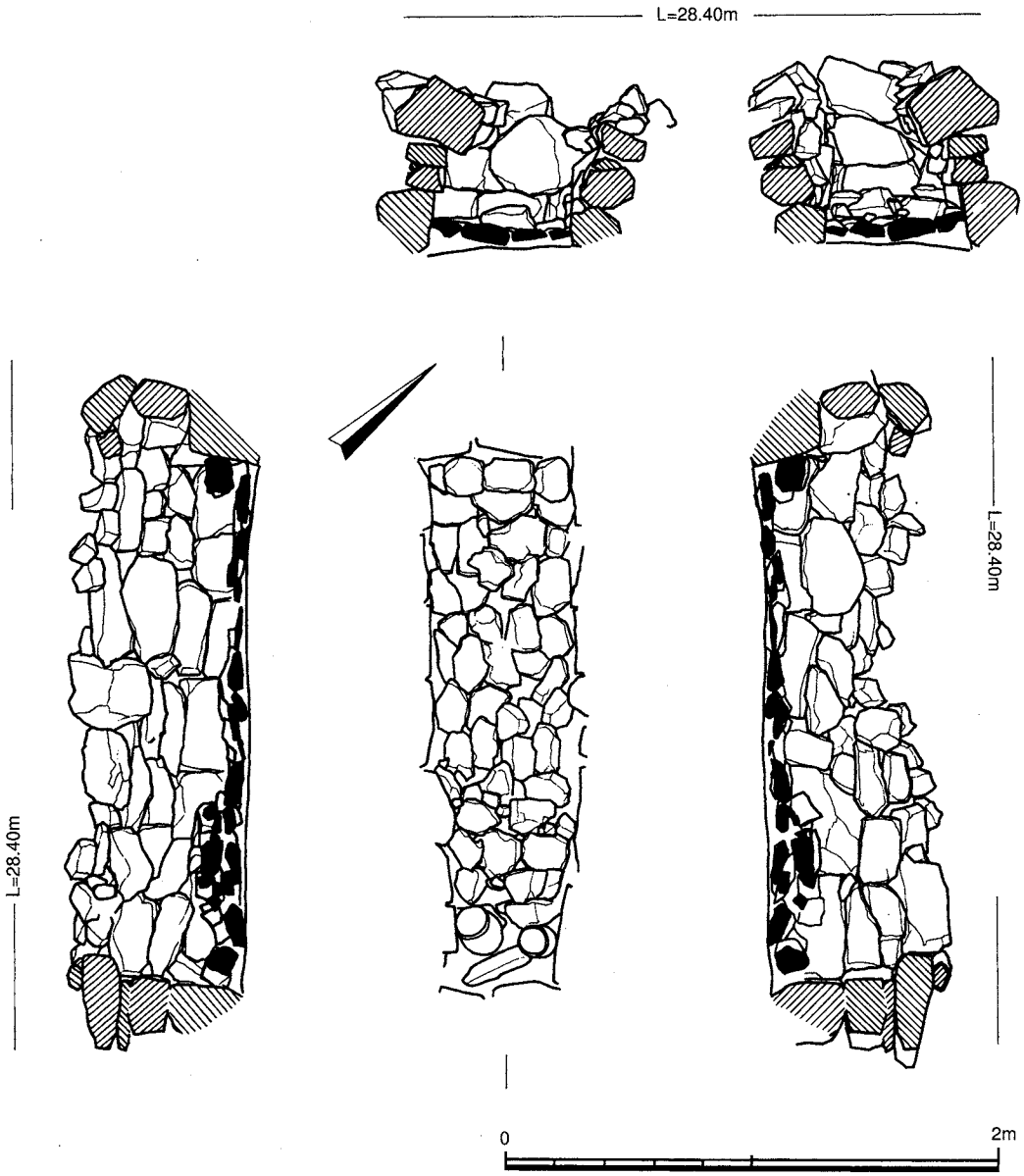


Fig. 137　17号墳 石室実測図（1/30）

13. 17号墳

(1) 位置と現状

16号墳と縦列して北側丘陵斜面に築造されている。腐食土の表土直下から天井石が検出された。石室の遺存が最も良好に遺存する。

(2) 墳　　丘

馬蹄形状の周溝は石室中心から南東方向（Aトレンチ）へ3m前後の位置から掘削されている。石室以北では墳丘が約40cm遺存する。Cトレンチでは石室中心より3mの位置まで基底面が造りだされ、最下に旧表土とみられる締まりの無い黒色土が堆積する。盛土は石室寄りに細かくつまれている。石室以北の墳丘が不明確であるが、径4.8m前後の円墳と考えられる。

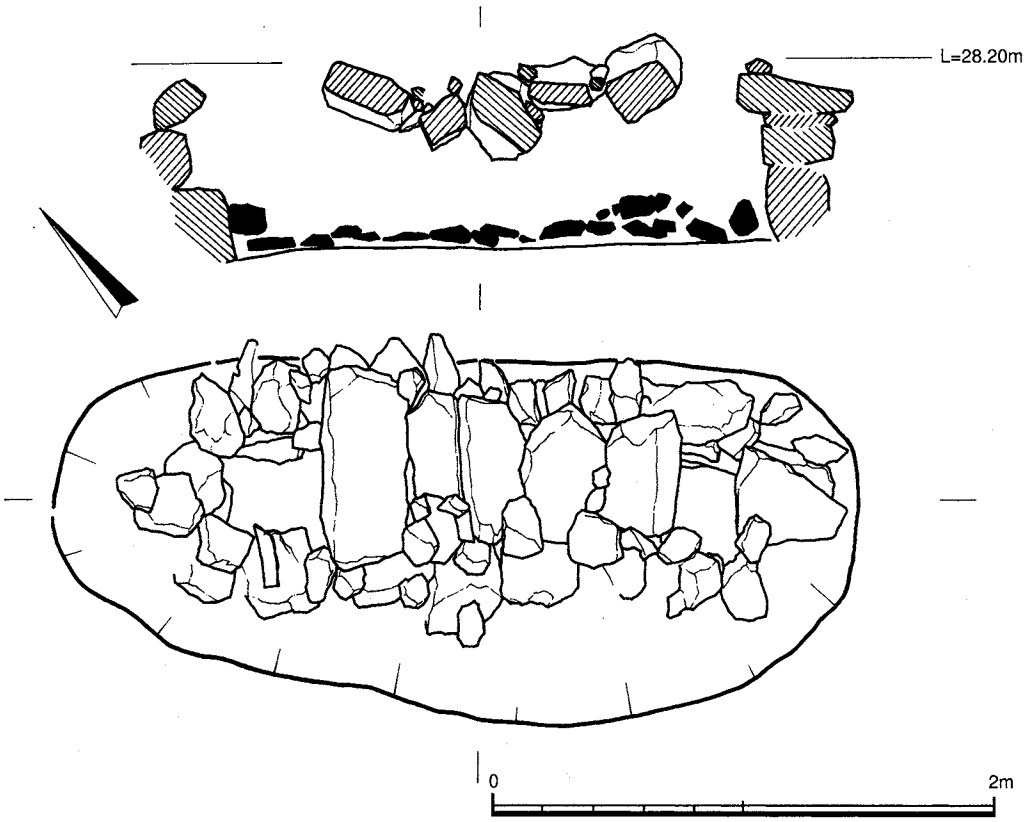


Fig. 138　17号墳 石室俯瞰と掘り方実測図（1/30）

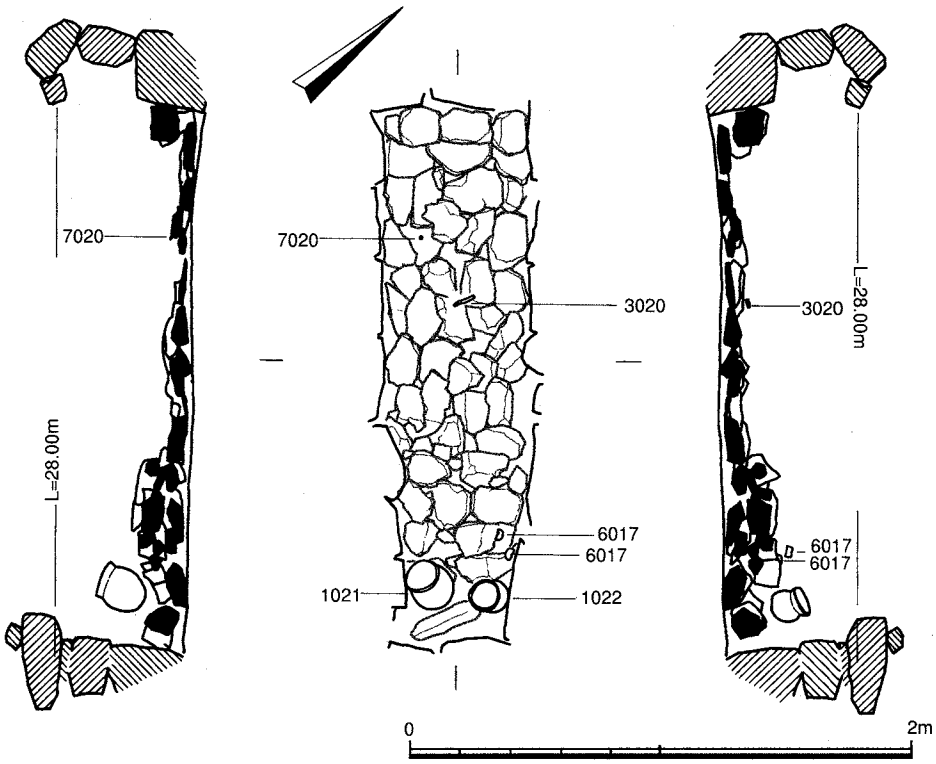


Fig. 139　17号墳 石室内遺物出土状況図（1/30）

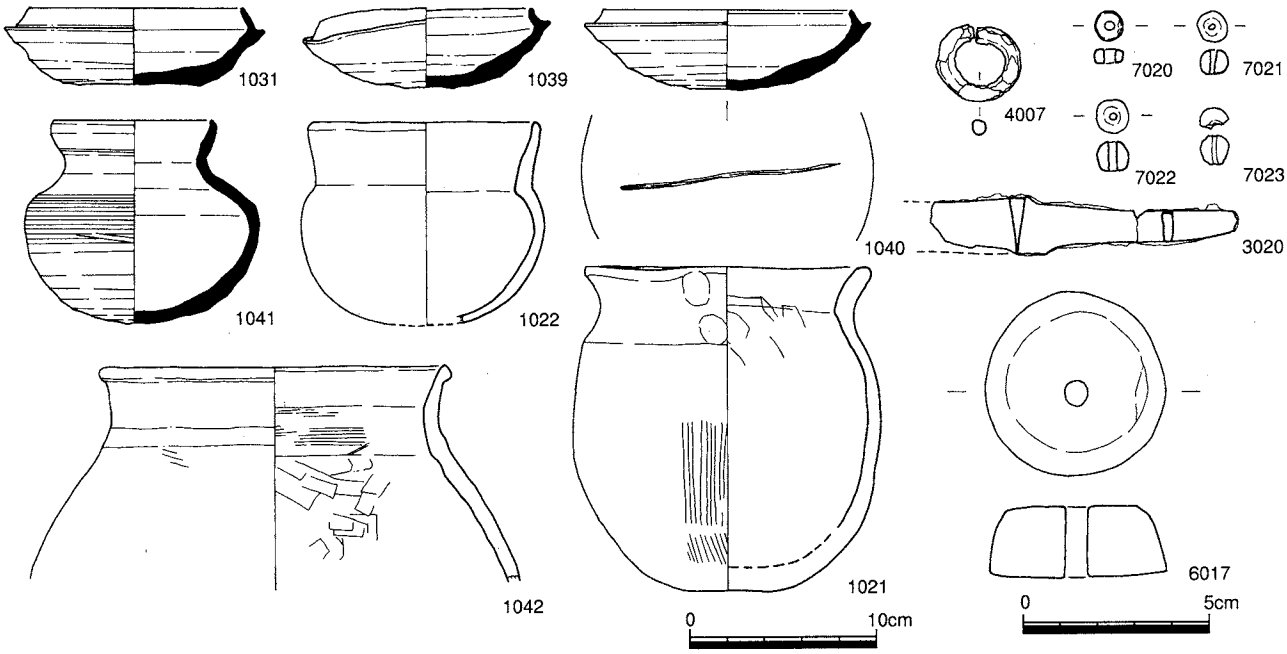


Fig. 140　17号墳 出土遺物実測図（1/4・1/2）

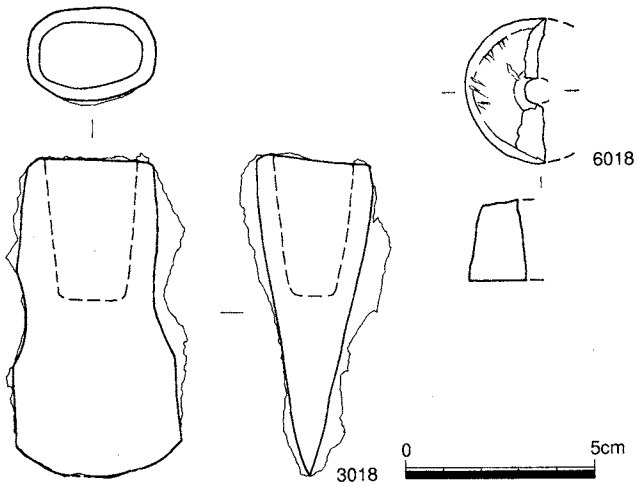


Fig. 141　17号墳 石室外出土遺物実測図（鉄器・石器 1/2）

(3) 埋葬施設

主軸方位をN－51°－Wにとる竪穴式石室を内部主体とする。西側短辺幅58cm、東側短辺長40cm、主軸長214cmを測る。天井石まで遺存し、この類の石室が床面より70cm前後の高さに構築されていたのが判る。石室掘り方は基底面の中央より南側の尾根寄りに掘削している。これは水平に近い基底面で石室掘り方を掘削するためと思われ、従って、墳丘の中心は石室上よりやや北側に外れるであろう。この傾向は16号墳でもみられた。壁体は直に立ち上がっていたと思われるが北側の谷部に大きく圧されている。敷石は全面に残り、奥壁際に枕状に3石を組み重ねる。前壁寄りには重なった敷石がみられ、前壁際の敷石が掻き出された可能性がある。壁際に土師器甕が据え置かれる。

(4) 遺　　物

出土状況　石室床面からは奥壁よりに玉1、中央敷石上に刀子、前壁際に土師器甕2個体と割れた紡錘車が敷石よりやや浮いて出土した。石室埋土の上部から鉄斧（3018）、石室外の天井石近くから破損した紡錘車（6018）が出土した。原位置から流出している可能性があるが、北東の墳端付近から須恵器坏片、南東周溝中から土師器甕片が出土した。

遺物　坏身1030、1039、1040は石室東側の墳丘上から出土し、完形に復元できた。1040は受部径15.4cmと大きく、返りは短いが体部外面にヘラケズリ調整がされ、古相を示す。1031、1039はⅣa期であろう。1041の壺は表土から出土。外面頸部と胴部にカキ目を施す。1022、1021は石室内から出土。1021内面の胴部上位にヘラケズリがされる。1042は周溝から出土した土師器甕。耳環4007は鉄地金銅張り、7002は滑石製臼玉、7021～7023は土玉、3020は刀子で石室内から出土。6018は滑石製紡錘車、3018は全長8.5cmの鉄斧である。

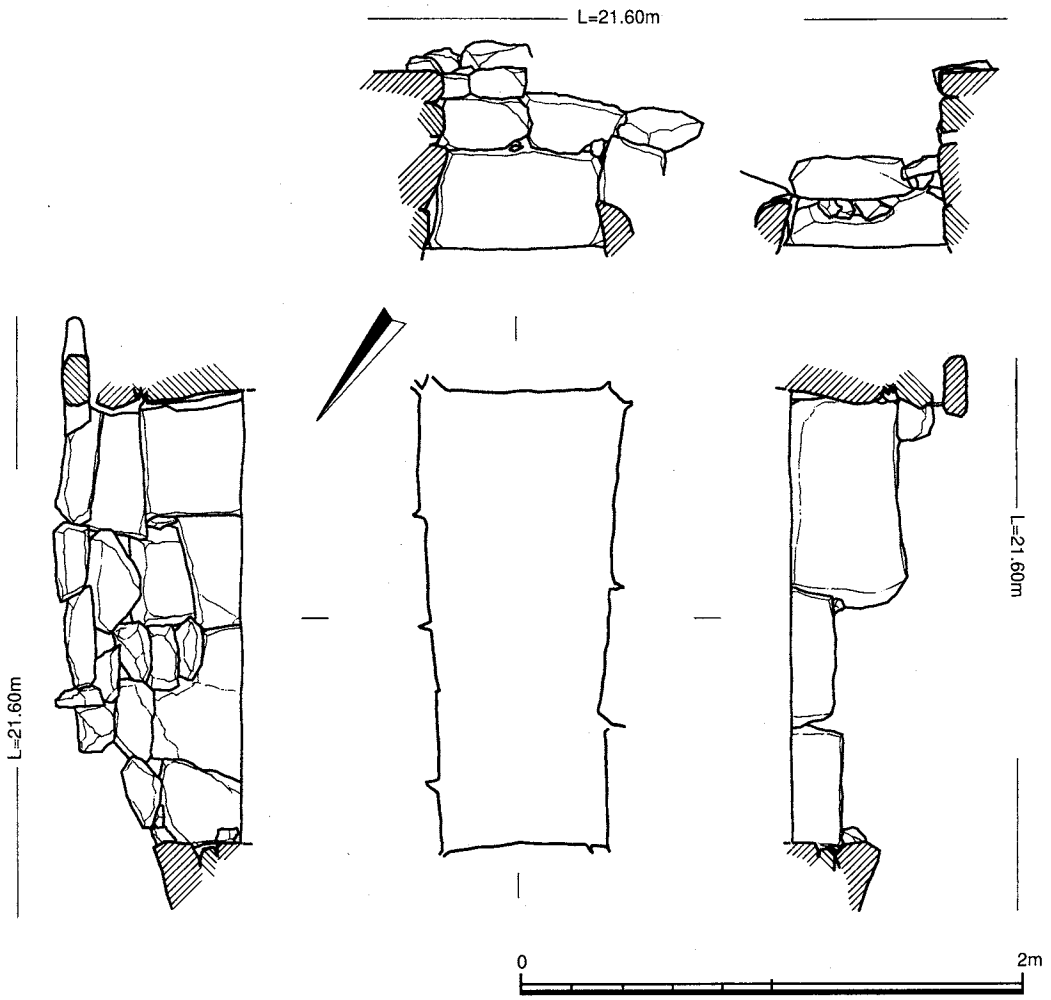


Fig. 142　18号墳 石室実測図（1/30）

14. 18号墳

(1) 位置と現状

丘陵南側斜面で検出された。北側は近接して横口式炭焼窯が検出され、構築時の造成も本墳まで及んでいた可能性がある。南側は現代と考えられる雛壇状の造成がみられる。本墳はこうした状況下ですでに墳丘は除去され、地山成形も不明である。

(2) 埋葬施設

主軸をS－46°－Eにむけた竪穴式石室を内部主体とする。東側短辺長80cm、西側短辺長66cm、主軸長180cmを測る。先にII類に比定した石室形態である。（P－109）、腰石に方形に近い石材を用いる。本墳に伴う出土遺物は無く。時期不明。

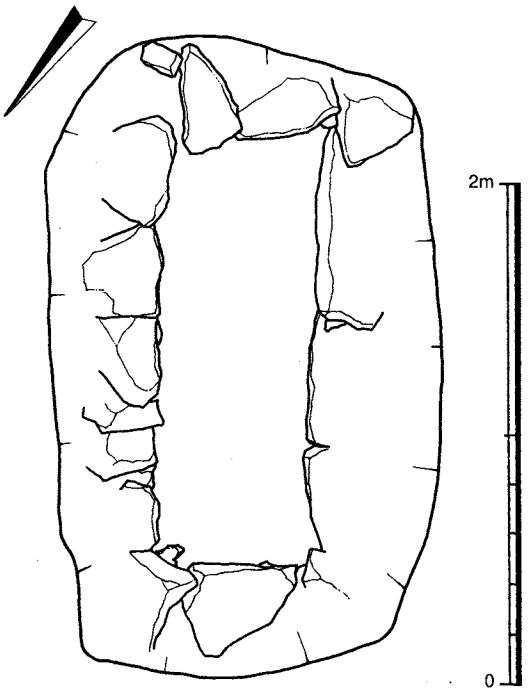


Fig. 143　18号墳 石室俯瞰と掘り方実測図（1/30）

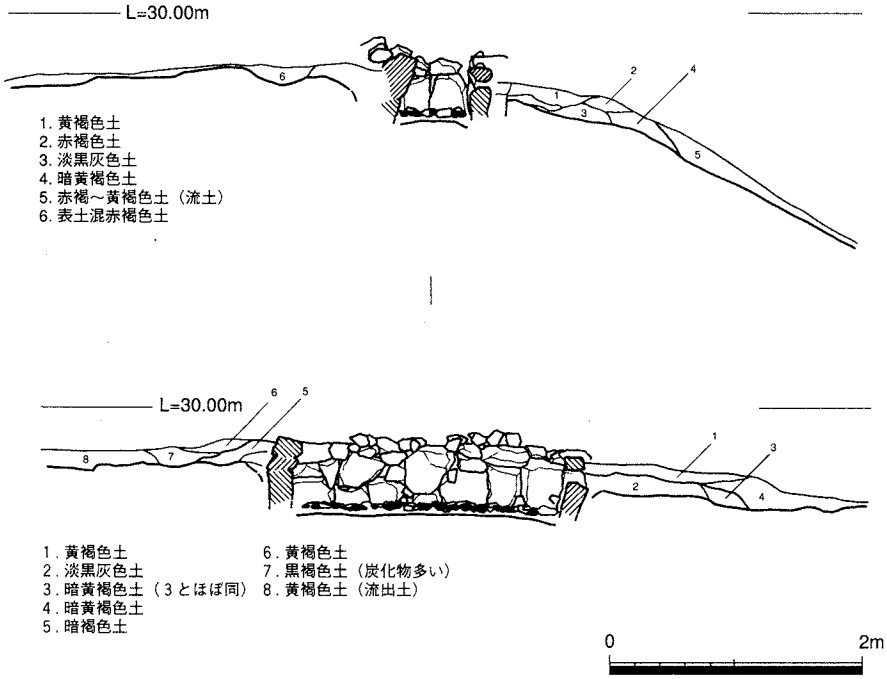


Fig. 144　19号墳 墳丘トレンチ土層断面図（1/60）

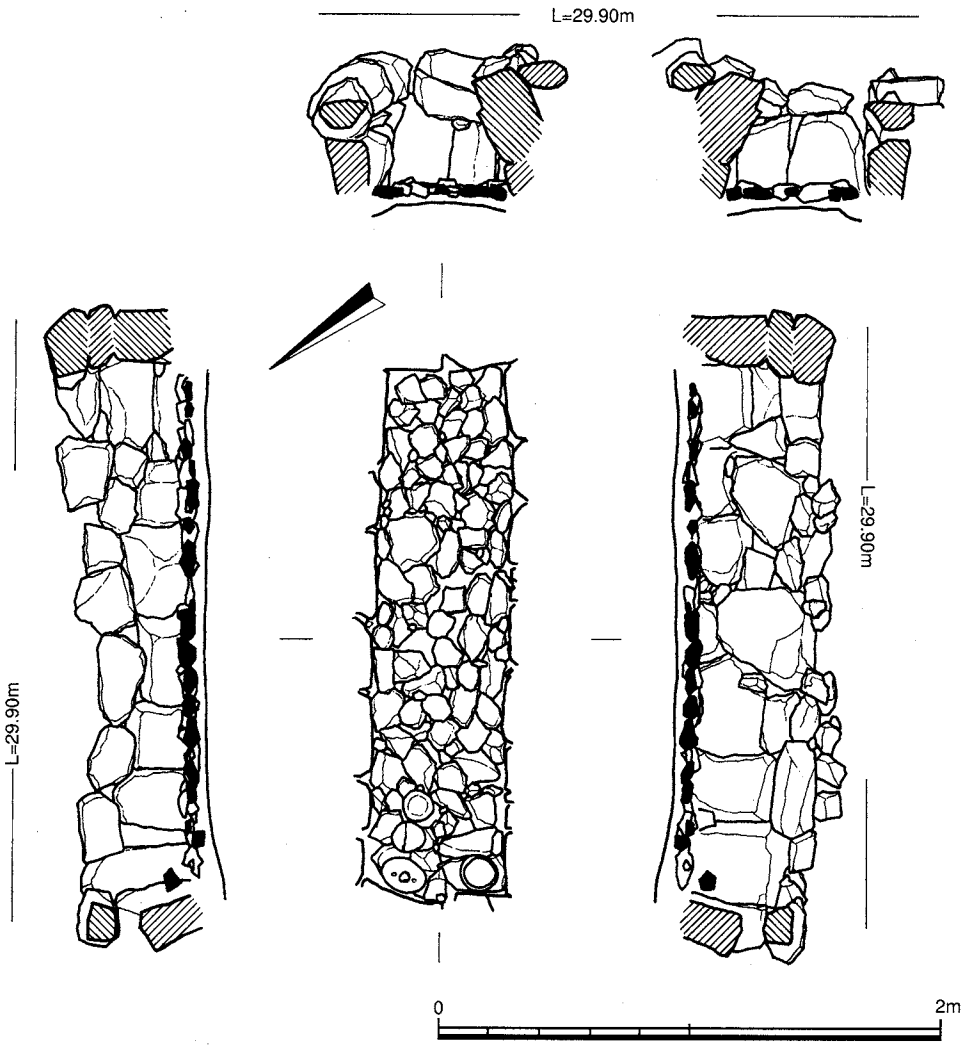


Fig. 145　19号墳 石室実測図（1/30）

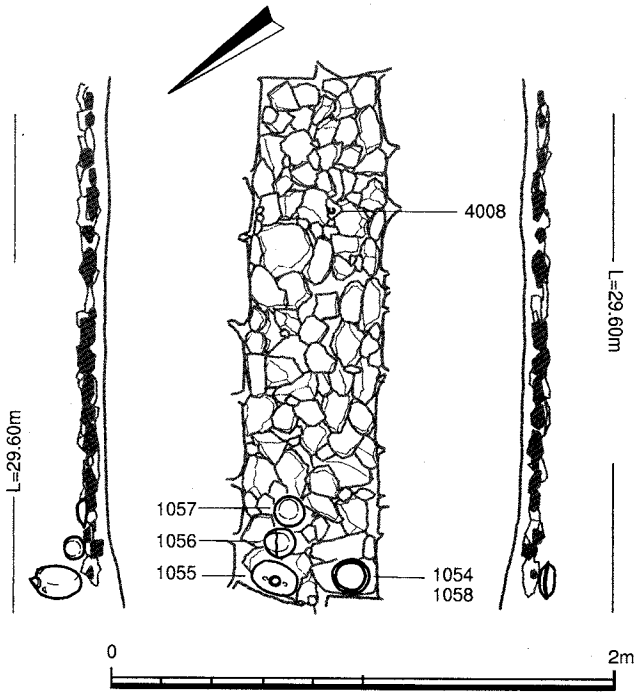


Fig. 146　19号墳 石室内遺物出土状況図（1/30）

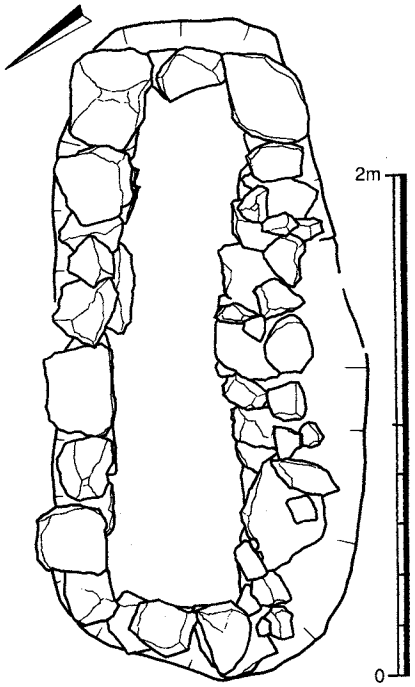


Fig. 147　19号墳 石室俯瞰と掘り方実測図（1/30）

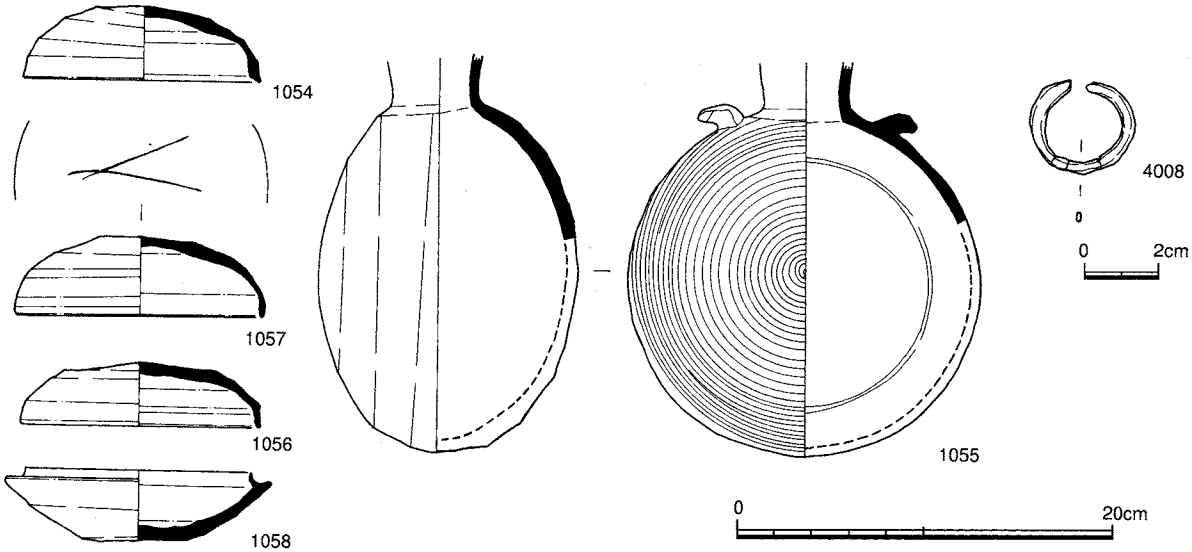


Fig. 148　19号墳 出土遺物実測図（1/4・1/2）

15. 19号墳

(1) 位置と現状

尾根線上に位置し、21号墳と近接する。墳丘は北側の斜面に一部みられるのみで、尾根上の削平は著しい。

(2) 墳　　丘

南側の尾根上では地山成形も不明瞭であるが、北側斜面は墳丘が比較的残りAトレンチでは石室中心から2.0mの位置に墳端が認められる。他の古墳同様径4m前後の規模になろう。

(3) 埋葬施設

主軸をS－55°－Eにとる竪穴式石室を内部主体とする。東側短辺幅46cm、西側短辺幅57cm、主軸

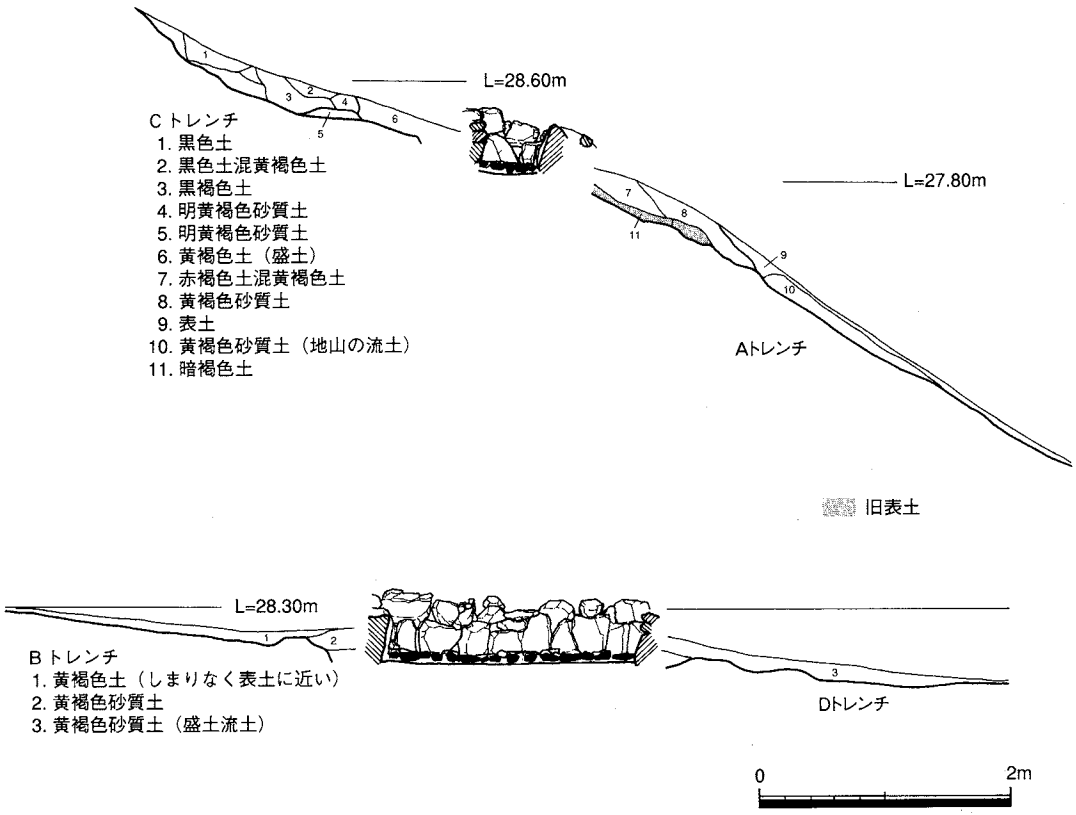


Fig. 149　20号墳 墳丘トレンチ土層断面図（1/60）

長207cmを測る。南側側壁は北側斜面へ圧され、石室掘り方との間に隙間が生じている。敷石は全面に残る。遺物の出土状況から東辺側に頭位を向けると考えられる。

(4) 遺　　物

出土状況　中央より東辺よりに耳環、西辺際に坏の１セットが重なって、提瓶１、坏蓋個体は互いに逆の向きに置かれていた。周辺表土、周溝からは土師器甕辺が出土している。

遺物　図示した遺物はすべて石室内から出土した。坏蓋1057は口径13.2cm、天井部をヘラケズり調整した古相を示す。1054坏蓋は口縁端部が外反し面を作る。坏蓋1056は天井部が平坦になる。以上IVａ期に含まれる。1055提瓶は側面体部も球形に張り、半面にカキメを良く残す。4008耳環は銅芯のみ遺存する。

16. 20号墳

(1) 位置と現状

丘陵北側斜面に位置し、16号、17号墳と縦列した配置をとる。等高線が回り込む谷地形上に築造され、北側へは急傾斜で落ちていく。

(2) 墳　　丘

墳丘は石室主軸方向に4.7m、直行方向に3.5mの楕円形プランをなす。

16、17号墳同様、尾根側に馬蹄形状の周溝を造り出し、墳丘基底面を整地する。南西側に延長したCトレンチでは石室中心から3.0mの位置から掘削が認められる。墳丘は北側斜面に比較的遺存する

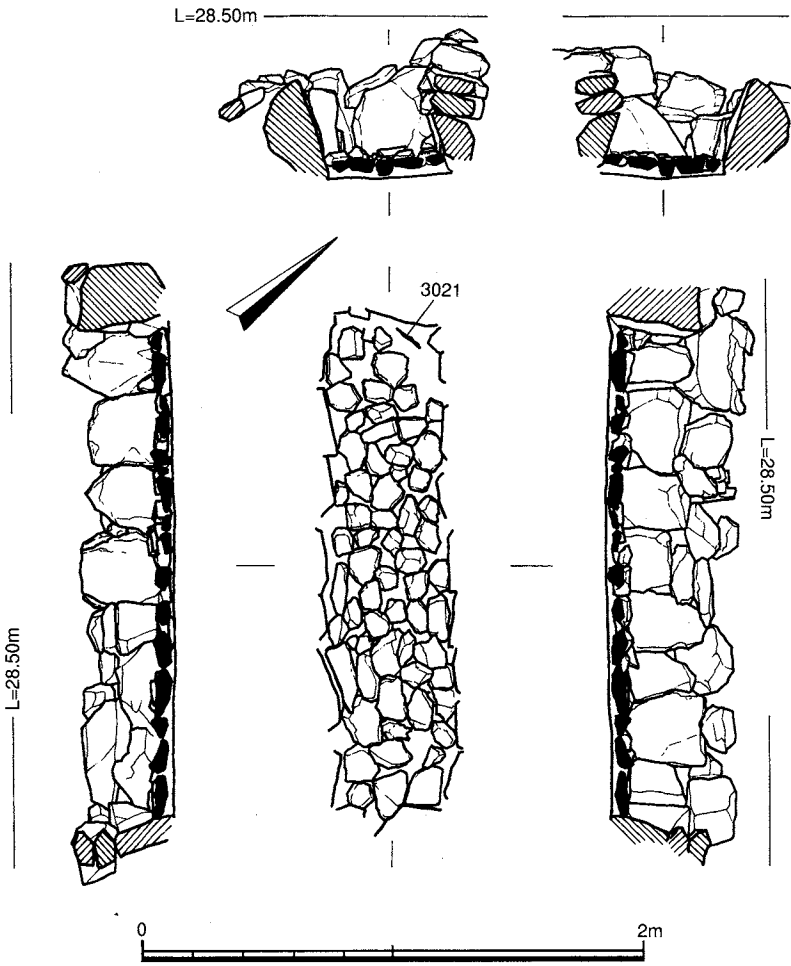


Fig. 150　20号墳 石室実測図（1/30）

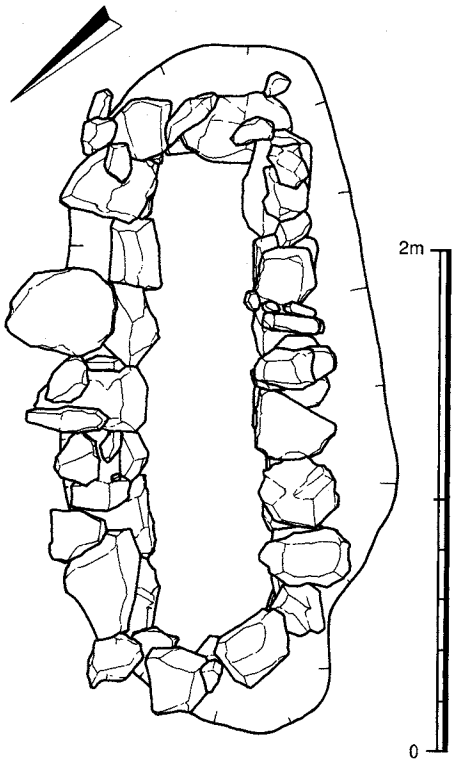


Fig. 151　20号墳 石室俯瞰と掘り方実測図（1/30）

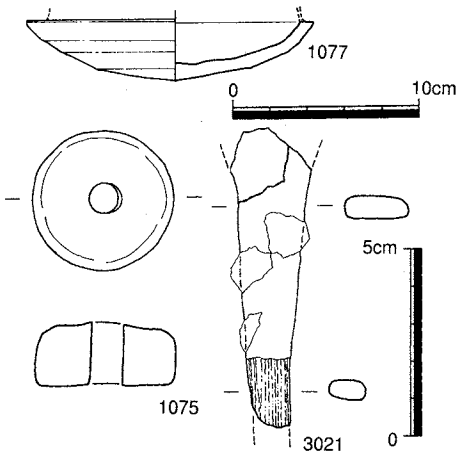


Fig. 152　20号墳 出土遺物実測図（1/4・1/2）

が、流出が著しい。北東方向へ延長したAトレンチでは石室中心から1.6mの位置まで旧表土を残した整地面が造られ、墳丘はその外方まで盛られ墳端は2.0mの位置にみとめられた。

(3) 埋葬施設

主軸方位をS－51°－Eにとる竪穴式石室を内部主体とする。石室掘り方が平坦面の制約から墳丘基底面の中心より尾根側に配置されるのは16、17号墳同様である。東側短辺幅39cm、西側短辺幅43cm、主軸長197cmを測る。壁体は北側斜面の方向に圧されて、南側側壁と石室掘り方との間に隙間が生じている。敷石は刀子が出土した東壁際の一部を欠きほぼ全面に遺存する。

(4) 遺　　物

出土状況　石室内からは東辺際に鉄鏃が床面から出土した。出土遺物は小片少量。墳丘上に土師器高坏、壺片、須恵器坏片が散布する。

遺物　石室内から出土した鉄鏃3021は鏃身を欠くが広根とみられる。坏身1077は表土から出土。明黄灰色を呈し軟質。返りを欠くがIVa期に属するであろう。1075滑石製紡錘車は北側墳端表土から出土。側面に筋状の擦痕がみられる。

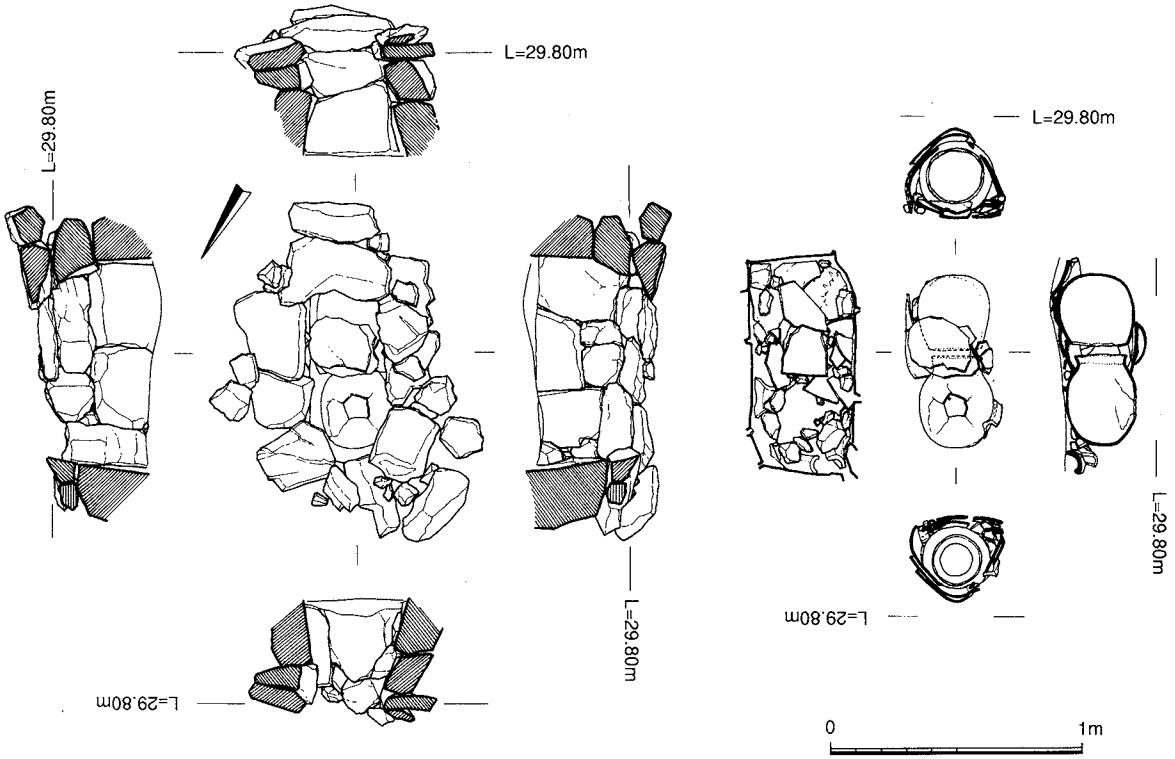


Fig. 153　21号墳 石室実測図（1/30）

17. 21号墳

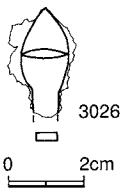


Fig. 154　21号墳
石室内出土鉄器（1/2）

(1) 位置と現状

尾根上に位置し、19号墳と近接する。表土下地山面から検出され、墳丘はほとんど遺存しない。天井石は無く、石室周辺に後述の内部に用いた須恵器甕片が若干散乱していた。

(2) 墳　　丘

墳丘は遺存せず、墳丘基底面の地形変換が石室中心から１～1.5mの範囲に及んで歪な円形プランを為し検出された。形状を留めたものか疑問があるが、この類の古墳中では小規模と考えられる。

(3) 埋葬施設

小石室内に土師器甕２個体を合わせ、さらに、須恵器甕片を床敷と目張りに用いた特異な内部構造をなす。石室は主軸方位をＳ－32°－Ｅに向けた竪穴式石室である。主軸長86cm、短軸長40cmを測る。壁体は腰石を用いて、３段まで遺存する。床面には小石と須恵器甕片（1101）が敷かれているが、全面に及ばず、土師器甕の固定を意図したものがある。土師器甕はほぼ水平に埋置され、下甕は穿孔を上に向け、上甕は口縁部を打ち欠く。口は接せず、目張り状に床敷に用いた須恵器甕と同一個体の破片を巻いている。小児用か。

(4) 遺　　物

北西隅角の床面敷石中に鉄器(3026)が出土した。細根、柳葉形の鏃身とみられる。1096、1097は石室内に置かれた土師器甕棺で、ほぼ同じ体部高を測る。1101須恵器甕は外面胴部上位と内面口縁部に灰釉が垂下する。底部に焼台にした甕片と径12.1～13.2cmの円形の坏状のものが３個所に接着する。

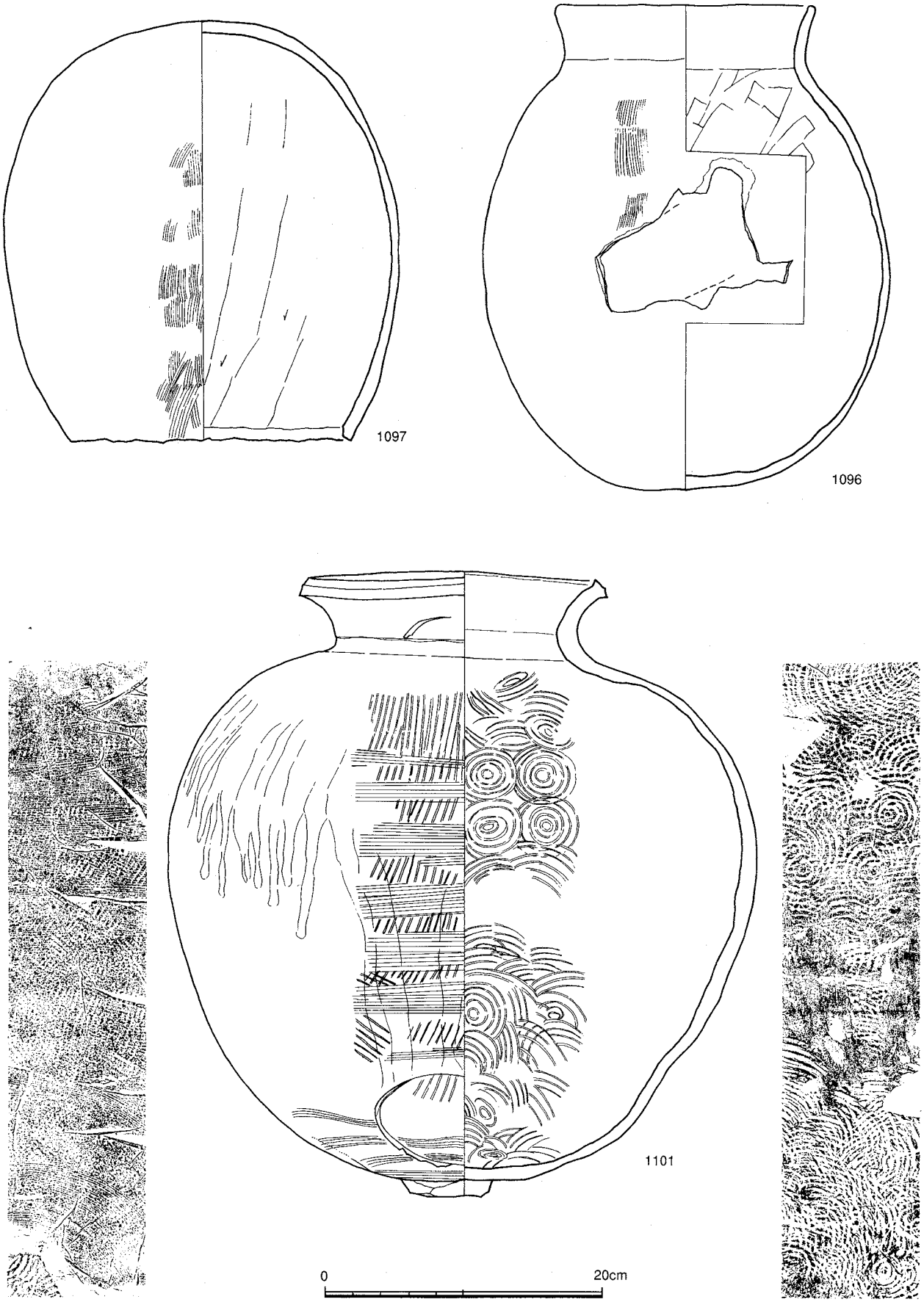


Fig. 155　21号墳 出土甕棺実測図（1/4）

18. 23号墳

石室が極めて小規模となり先にIII類としたものを以下説明する。

調査区南東際の尾根から南西への急斜面上に構築されている。検出された遺構の中では最も高所に位置する。焼土壙094を切るが、石室上部は40cm大の石材2が崩落し、除去後、基底の石室を検出した。石室掘り方は南端が崩落して不明であるが、概ね1.25×0.6cmの略長方形になる。基底2面はほぼ水平。石室は内法65×20cmの長方形に組まれているが、石材の形状は極めて不揃いで、北側短辺の石材は小さく、基底面から浮き、北西、南東の隅角は壁体が接せず、粗雑な感を受ける。石室内からの出土遺物は無い。

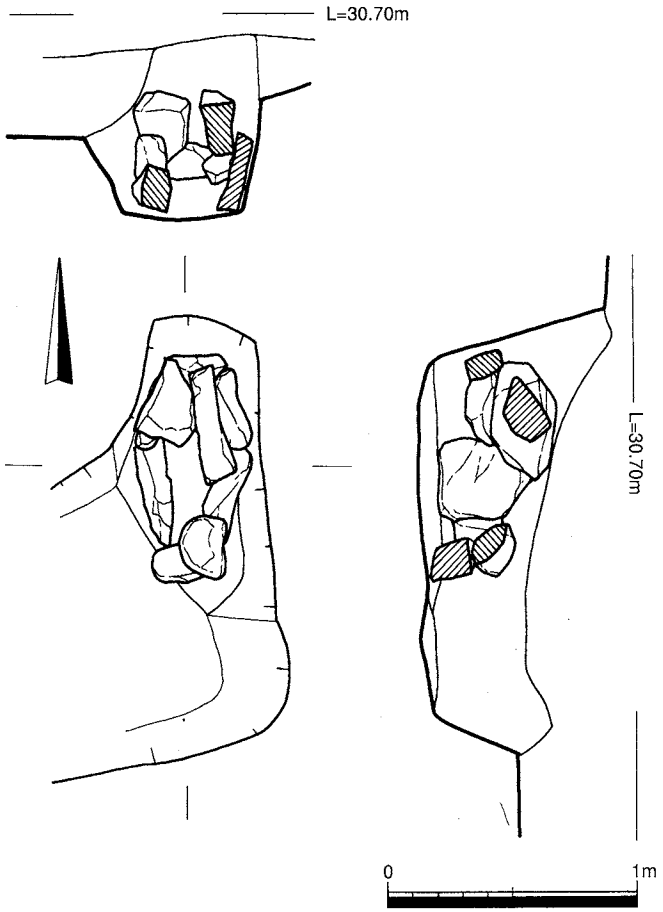


Fig. 156　23号墳 石室実測図（1/30）

19. 24号墳

調査区の南西部、南側丘陵裾部から検出された。周辺では柱穴群が検出された。墳丘は確認できないが、石室側に緩やかに傾斜する整地面の一部が北西部にみられた。石室掘り方は石室より広く掘削されている。石室は主軸方位をN－38°－Eにとる竪穴式石室である。東壁幅25cm、西壁幅20cm、主軸長77cmを測る。天井石3枚が遺存し、天井石間や側壁との間を小石によって目張り状に被せ、または嵌め込む。壁体は腰石上に2段積み、上面は床から45cmを測る。南側側壁の腰石1石が崩落していた。石室内からの遺物は無い。頭位はやや幅広い東壁側と思われる。

20. 27号墳

調査区西際に位置する。谷落ち際で北西や緩やかに傾斜する。検出された石室掘り方は90×50cmの略方形を呈す。石室は本来の形状を留めたものか疑問が残るが、図示したように長軸長60cmの大振りの石材が基底に位置し、その上に小転石が浮いた状態で側壁状に並ぶ。南短辺は長軸長50cmの石材が掘り方上端から斜めに立てかかる。

21. 28号墳

調査区西際で検出され、27号墳、土壙墓156、157と近接する。主軸方向を地形の傾斜方向に合わせたS－42°－Eに向ける。石室掘り方は145×92cmの長方形を呈し、深さ35cmが遺存する。石室は主軸長80cm、東短辺40cm、西側短辺25cmを測る。頭位は幅広くなった南東方向を向くと思われる。側壁は北辺側へ順次小振りの石材を使用する。上面の高さはほぼ揃う。石室内に副葬された遺物は無い。

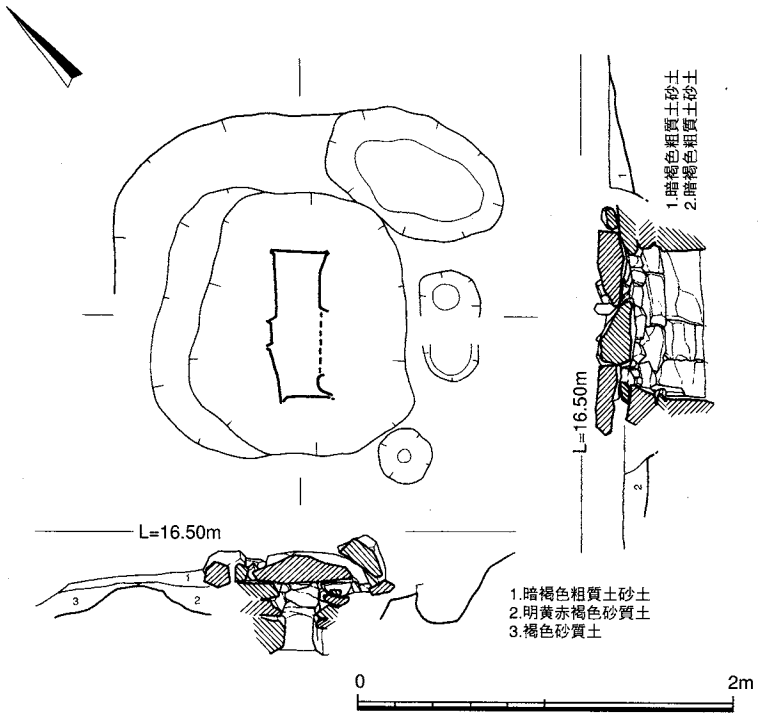


Fig. 157　24号墳 地山成形図（1/40）

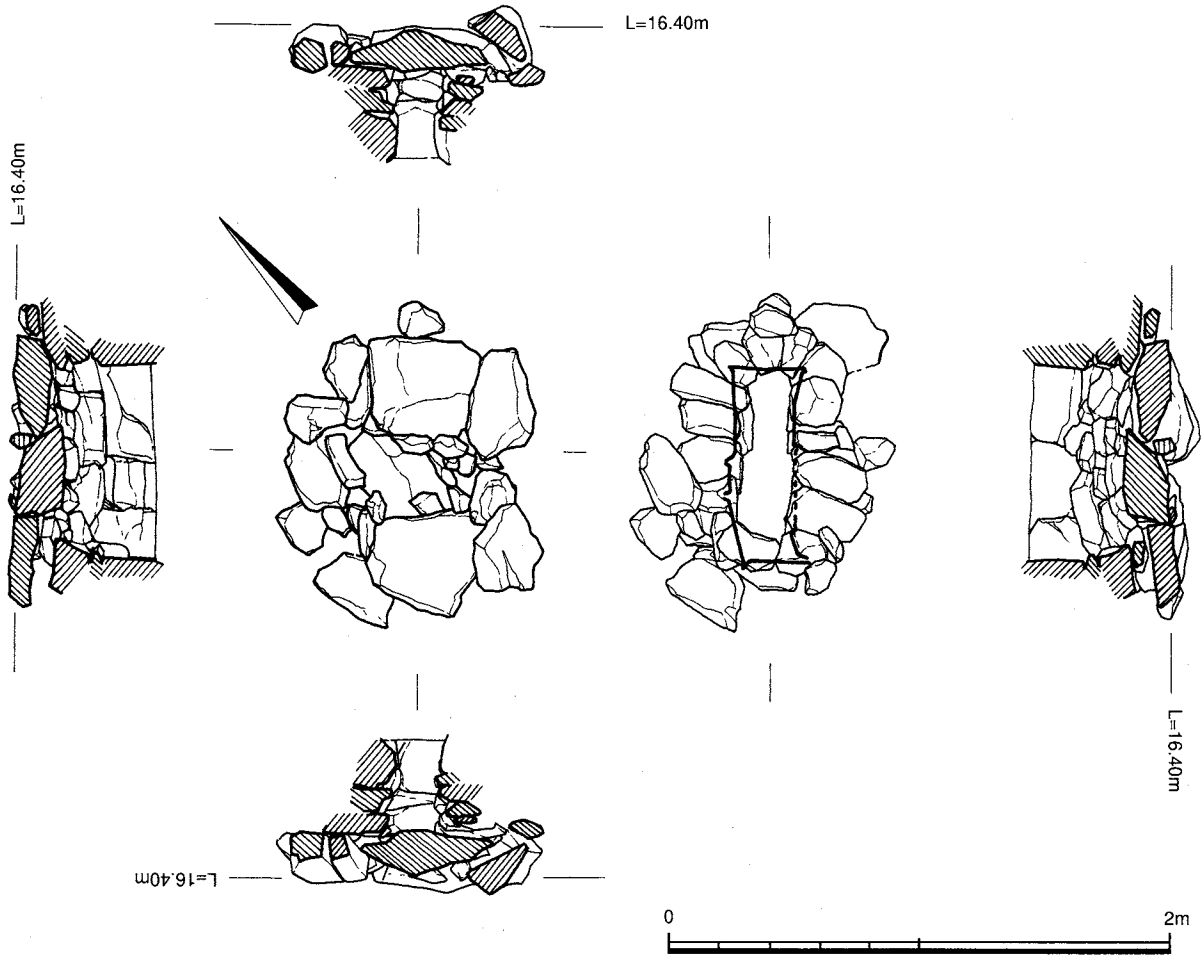


Fig. 158　24号墳 石室実測図（1/30）

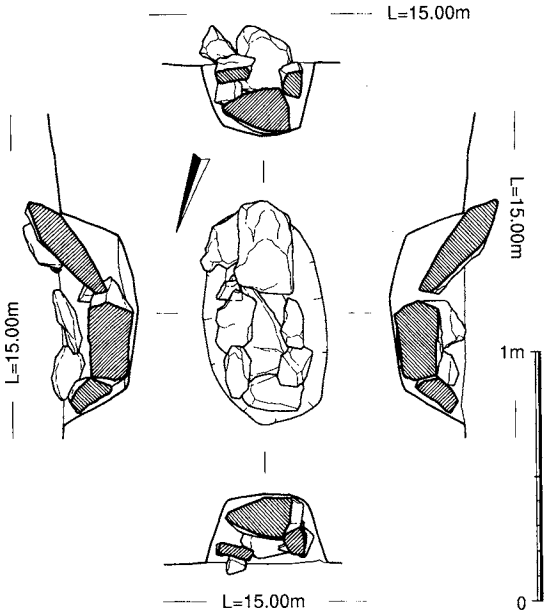


Fig. 159　27号墳 石室実測図（1/30）

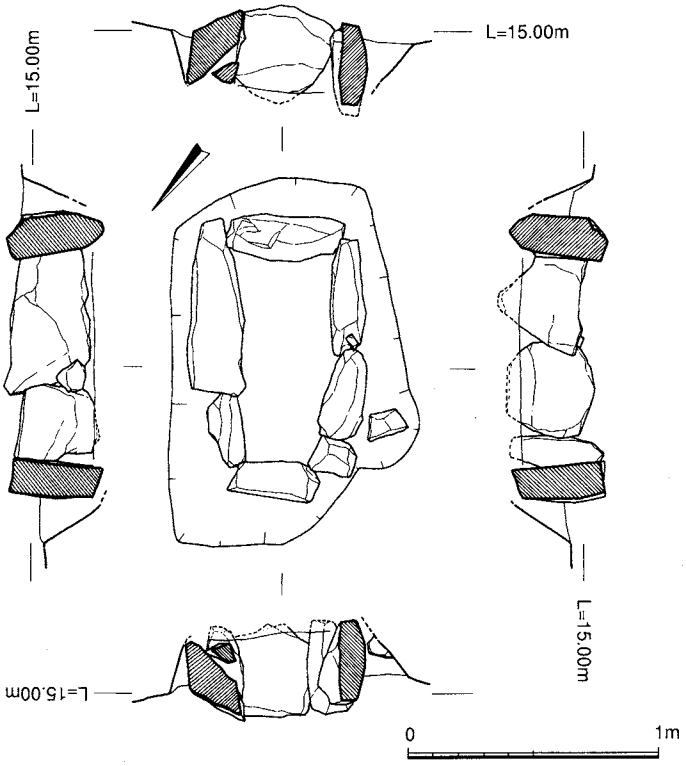


Fig. 160　28号墳 石室実測図（1/30）

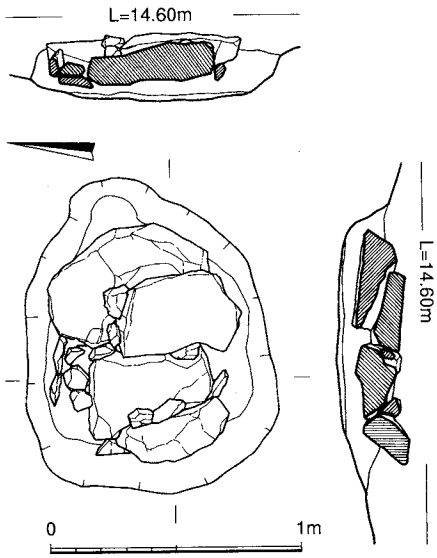


Fig. 161　29号墳 石室実測図（1/30）

22. 29号墳

調査区西際で検出された。天井石状の石材が集積していたが、下部には精査したが掘り込みは検出できなかった。石材の上面のレベルがほぼ揃い、これが基底面になる可能性がある。

23. 土壙墓

調査区の西際で3基（156、157、158）の土壙墓が近接して検出された。丘陵裾部の谷落ち際に位置している。

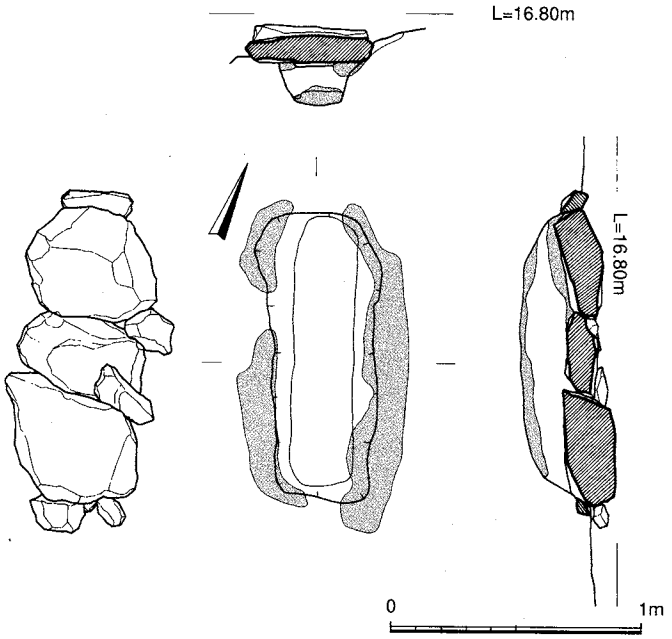


Fig. 162　26号墓 実測図（1/30）

26号墳　調査区西際、丘陵斜面から検出された。主軸等高線に沿ったN－22°－Wにとる。3石の天井石を配し下部に長方形プランの土壙を構築する。土壙の短辺上端には小石を置き、天井石を安定させる。天井石と土壙間には目張りの粘土が貼られ、土壙内にも垂下している。土壙は上端で主軸長120cm、短軸長40cm、下端で主軸長108cm、短軸長24cmをはかる。基底面には粘土がみられるが、目張りの粘土と異なり砂質で、流下して溜まった可能性がある。船底状の基底面から壁は傾斜して立ち上がる。

時期は不明であるが古墳後期以前のものであろう。

156　主軸をS－38°－Wにとり、157と同方向に向く。主軸長140cm、短軸長65cm、深さ15cmを測る。平坦な床面からやや傾斜して壁が立ち上げる。北側短辺際に須恵器坏身が倒置して坏蓋とともに置かれ、南側短辺寄りには須恵器平瓶、坏蓋1、坏身1が配されている。この中坏蓋（1538）は倒置している。

遺物　須恵器坏1542～1541はともに青灰色を呈し硬質な焼き上がりで器形、焼成ともに近似する。口径12.0cm、受部径12.5cmを測り、天井部、底部は回転ヘラケズリによって比較的丁寧に仕上げている。出土位置、ヘラ記号から図示したセットになる。1539は口径9.0cmを測る小形の蓋である。坏身の可能性もあるが、出土状況からも蓋とした。灰白色を呈し軟質。1537平瓶は灰白色を呈し、軟質。口縁部を欠損する。器面が剝落し、調整が不明瞭であるが、体部上位はカキメ、底部から周縁にかけて粗いヘラケズリが施される。時期はⅣaの後半の時期に含まれると考える。

157　156と主軸をほぼ同じくし、並列した配置が為されている。主軸長205cm、短軸長70cm、深さ35cmを測る。基底面は土器が置かれる南辺側へわずかに下がる。南側短辺際に副葬された遺物が集中する。平瓶、高坏は床に接しているが、高坏は傾倒している。高坏の坏部のレベルで坏身2個体が重なって出土した。

遺物　坏は青灰色を呈し、硬質な焼成になっている。天井部、基底ともに回転ヘラケズリによって丁寧に仕上げる。1606は2/3が遺存し、1544近くの埋土中から出土。1545、1544は完形で受部径14.0cmを測る。1546高坏は坏部の体部と底部の境に1条、脚部中央に2条の沈線を配す。外面坏部と脚部内面には同じヘラ記号を付す。脚端部を欠損する。1544は完形で体部から底部までの全面にカキメが施されている。時期はⅣa期で157より古相を示す。

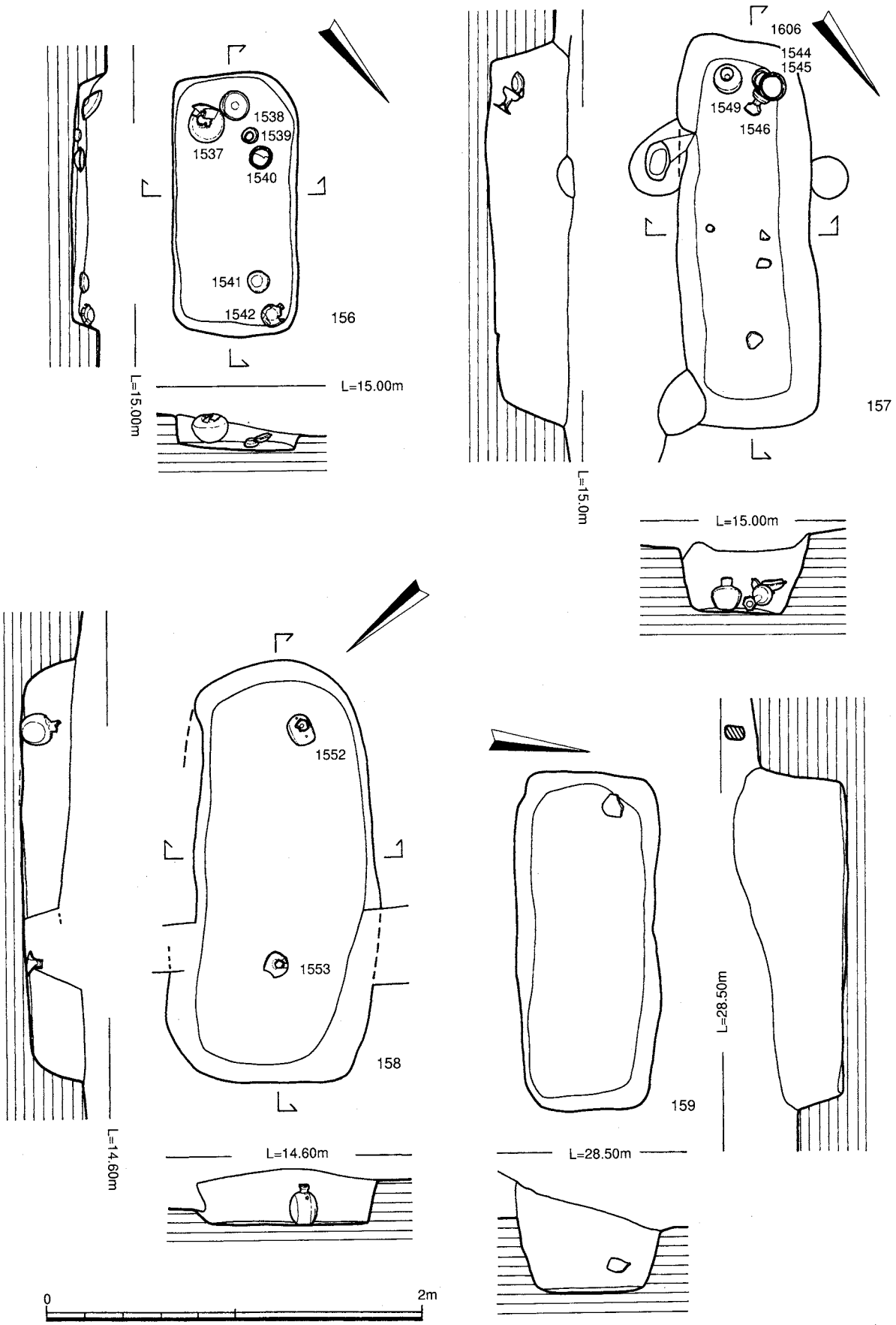


Fig. 163　土壙墓実測図（1/30）

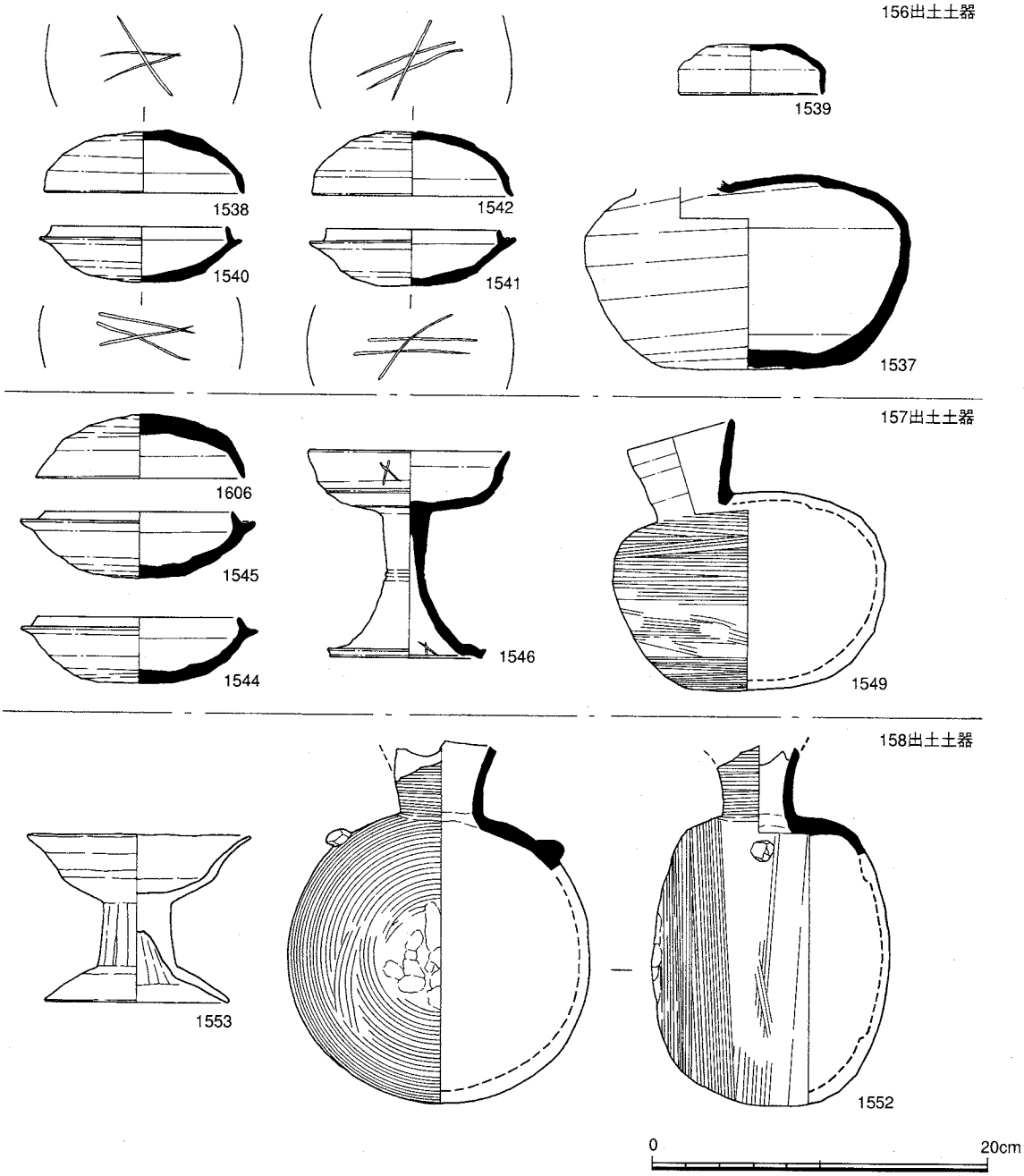


Fig. 164　土壙墓出土遺物実測図（1/4）

158　156、157と直行した主軸方向をとる。主軸長225cm、西側短辺長107cm、東側短辺長85cmを測る。基底面までの深さは25cmで西辺側にやや高くなる。東辺側に口縁部を一部欠く提瓶を、中央より西辺寄りに坏部を欠いた高坏をいずれも正位置の状態で床面直上から出土した。

遺物　1553は土師器高坏である。坏部、脚部は土圧のためか破損していた。赤褐色を呈す。1552は口縁部を破損する。頚部から体部にかけて全面にカキメを施す。取手は短く退化している。Ⅳａ期か。

159　尾根上に位置した17号墳の南東墳端で検出された。上部に土師器甕の細片が密集していた。主軸長180cm短軸長74cmを測る。深さは残りが良い西辺側で50cmを測る。基底面は平坦であるが、東辺側にわずかに高くなる。

24. 竪穴住居跡

丘陵南側斜面の１号墳の墳丘下およびその周辺から竪穴住居跡が検出された。６棟は確認されたが、１号墳築造時の地山成形、製鉄関連の整地、流水による削平等から消滅したものも多いと思われる。検出された住居跡もプランが不明瞭なところが多い。時期は６世紀後半代に限られる。ここでは比較的遺存が良好な２棟について説明する。

164　１号墳Ａトレンチにかかり検出された。１号墳の墳端に位置するが一部墳丘下に入る。南側は段落ちによって消滅している。

東辺長3.6m、壁高60cmをはかり、中央に煙道が竪穴より突出する。主柱穴は竪穴内部からは検出されない。カマドは焚口幅50cm、をとる両袖部が壁際にわずかに残る。袖部は粘土を含む褐色土で構築する。煙道は40°の傾斜で竪穴から80cm外側へ突出している。

遺物　出土遺物は少ない。カマド焚口と周辺から土師器甕片、南側壁際から1562、1563が出土した。1562は須恵器坏蓋。口径13.2cmを測る。天井の項部付近が平坦になっている。1563は土師器甕高坏である。坏部は段を有して口縁部に立ち上がる。時期はⅣａ期の古い段階か。

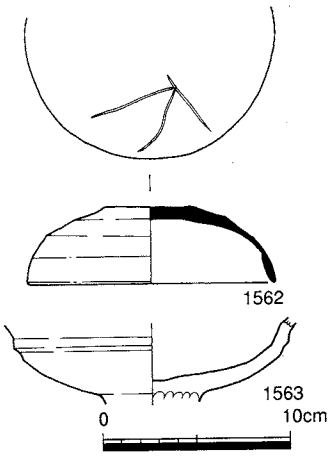


Fig. 165　164 出土遺物実測図（1/4）

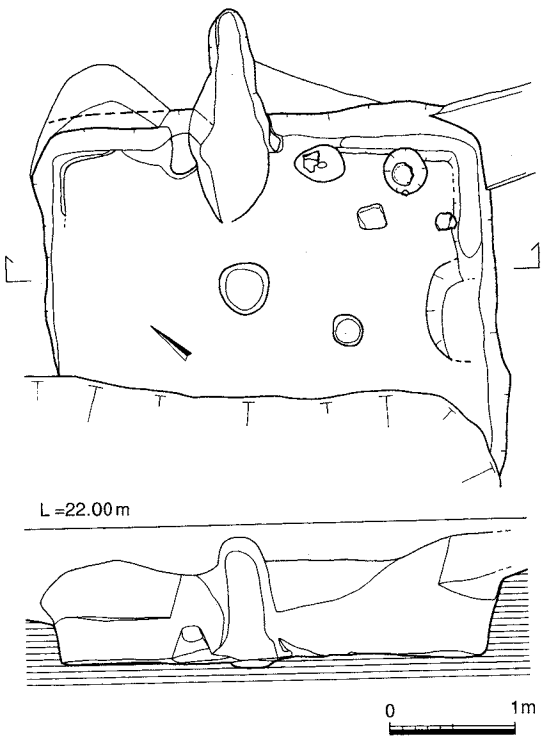


Fig. 166　164 実測図（1/60）

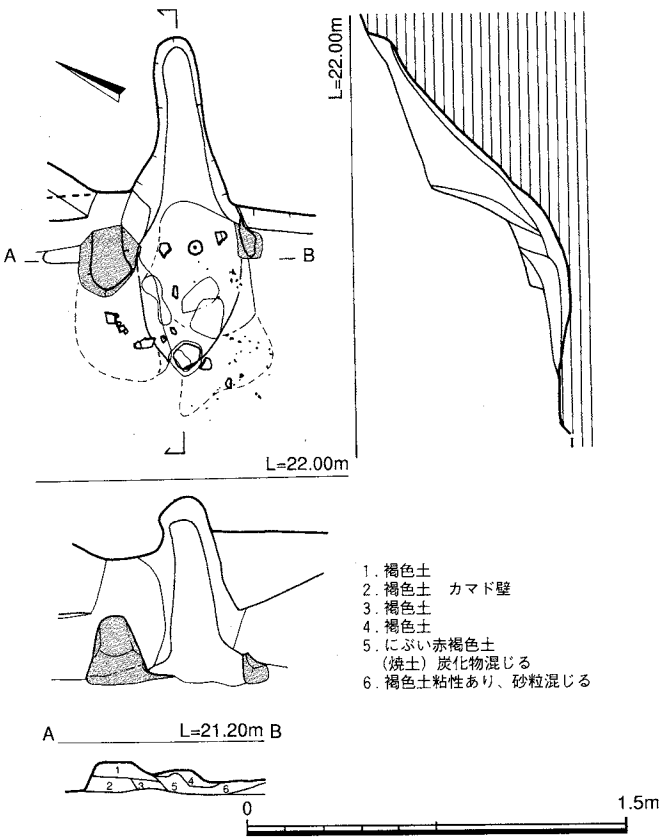


Fig. 167　164 内カマド実測図（1/30）

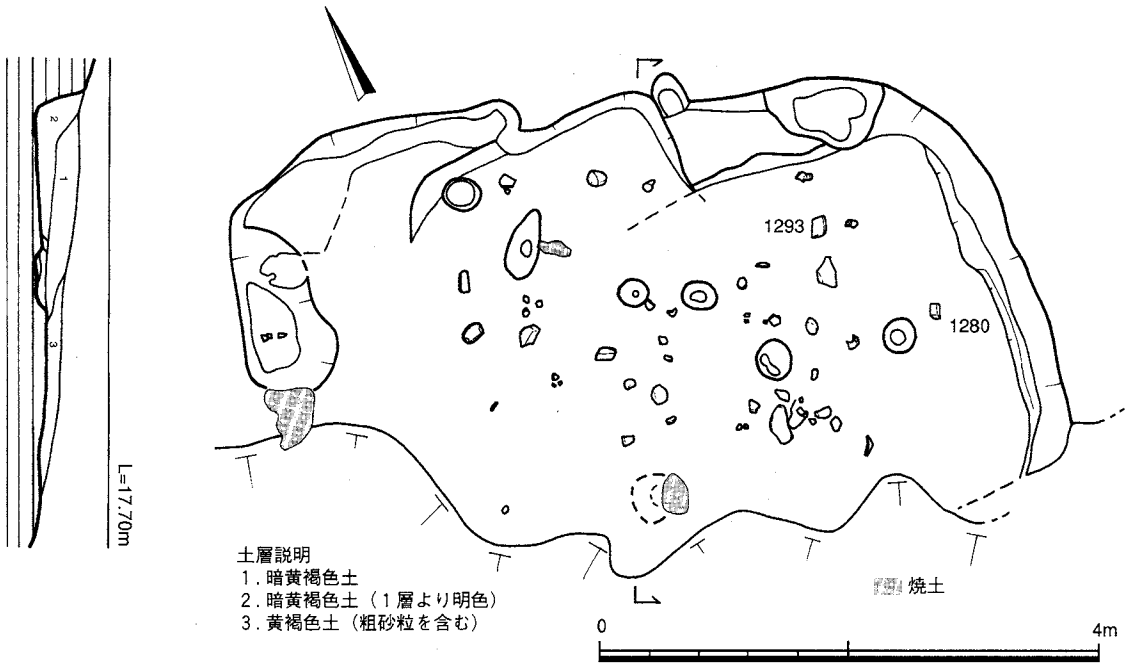


Fig. 168　079 実測図（1/60）

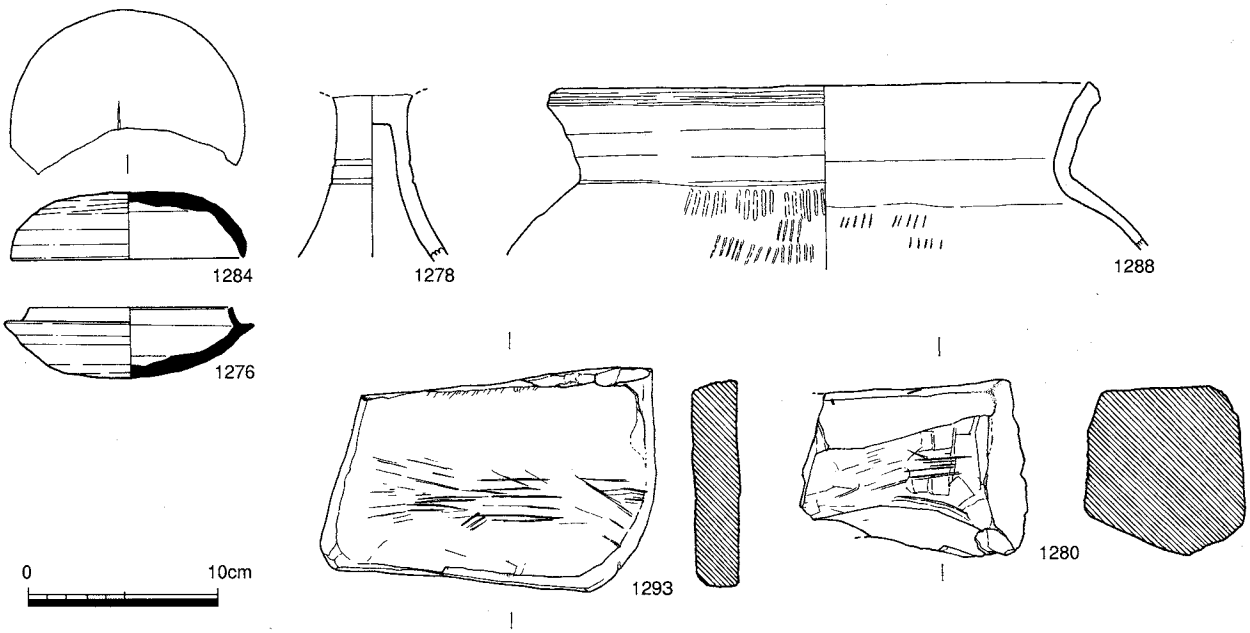


Fig. 169　079 出土遺物実測図（1/4）

079　調査区南際で検出され、南側は谷落ちで消滅している。2棟以上が重複しているが、南側は壁が消滅し、そのプランは判別できない。焼土が壁際から検出されカマドを設けていたことが判る。主柱穴は竪穴内部からは確認できない。

遺物　1284は口径12.6cmを測る。天井部は回転ヘラケズリで丁寧な仕上げ。1276はカマド近くから出土。受部径13.2cmを測る。底部には粗い回転ヘラケズリ痕を残す。1278は土師器高坏。脚部中央に2条の沈線が巡る。1288甕は須恵器の器形を疑似する。口縁端部を段状につくり、外面平行タタキ、内面に直線に近い当て具の文様がわずかにみられる。淡赤褐色を呈す。割愛したが、他に焼けた磨石も出土している。出土遺物の時期はⅣa期に含まれる。1280、1293は砥石。

25. 横口付炭窯（084）

084　調査区西側の、丘陵尾根線南西側斜面に位置する横穴式の炭焼窯である。標高20.4mを基底面として、高低差1.6mにおよぶ。遺構立地は南西に向いた斜面のほぼ中位で、尾根線頂上部からやや急に降りる斜面とテラス部分との地形変換線付近に遺構が作られている。遺構本体の傾斜とテラスの傾斜がほぼ平行で、テラス自体が炭焼窯の築造に伴って作業面として造成されたものである可能性があるが、断定できない。このテラス部分を基底として窯本体と横口を築いており、地表部分の平面状況は焚き口部と、テラスに平行する横口が看取できるのみである。現状は本体奥側が大きく崩壊し、この部分は床面を除いて現状をまったくとどめない。また焚き口部分も若干の崩壊がみられる。

外観　084は地山をくりぬいて築造しているため、地表からは各々の焚き口及び横穴の上端が見られるのみで、窯本体の内部構造は伺えない。外観による観察は、主にテラス部分が中心になる。また調査にあたり、横口を焚き口側から第１横口～第７横口と設定した。

横口はテラスと斜面の地形変換線に平行にならぶ形になり、高さもテラス面からほぼ同じ高さに揃う。この横口の外側に接するように全長7.6m、幅90cm～１m、深さ10～20cmの長楕円形の比較的浅い溝状の側庭部が掘られている。全長にわたってほぼ同じ幅で、床面はテラスの傾きに従って焚き口側に下がっていく。この側庭部の性格や機能ははっきりしないが、考えられる用途の１つとして横口から掻き出した炭の炭溜め場としての役割、もう１つは横穴から窯内部を調節する作業を行うための工人の作業場所としての役割が想定できる。またこの側庭部とは別に、第１、第２、第３の各横口の外側に径50cm～1.2mの土壙が設けられる。この土壙は、第１～第３の各横口外側の高さがテラス基底面よりも低く、横口の出口にさらに一段低い面を必要としたため掘られたものと考えられる。第４～第７横口はテラス基底面より高く、このような土壙は見られない。

本体燃焼部部分は、地形変換線から斜面側を長さ1.8m、幅2.6mにわたって土壙状に掘り下げて燃焼部としている。燃焼部床面はほぼ平坦で、燃焼部と本体焼成部とは段差なく連続しており、窯本体の横穴は焚き口部の掘込みの南東側の壁からほぼ真横に掘り進める形態になる。燃焼部及び周辺を通じて、上部施設を組み立てるまとまった柱穴群は見られない。

内部構造　窯本体及び横口は地山を掘り抜いて築かれており、地山天井が残っている部分から築造当時の形状、規模を比較的容易に推定することが可能である。

焼成部は床面で全長6.8m、幅60～80cm、高さ60～70cm。平面形は長方形で、焚き口部に接して長さ1.8mの平坦面を作り、その奥は緩く上っている。本体主軸の方向はN－64°－W、本体主軸と側庭部との角度差は約10°である。側庭部が等高線とほぼ平行なことから、本体は等高線からやや斜めに掘込まれている。床面の傾斜角は平均で約８°を測り、中ほどでわずかに急になる。本体奥側は特に斜面側で大きく天井部が崩れているが、床面はほぼ当時の状況を残しており，その状況によると、床面は奥壁側でやや広がり、平面形も横口接合部付近を中心にやや崩れて不定形になる。奥壁付近の床面に凹みが見られるが、これは焼成後のものである。また天井部を確認できたのは第１横口から第４横口にかけての３m弱の部分である。断面形は蒲鉾形を呈し、床面は平坦で、両壁から天井にかけてドーム状に丸くおさまる。焚き口部と焼成部奥側の天井部分は崩れ落ちており、残っている天井部分も土圧でわずかにずり落ちている箇所がある。また、焼成部と横口との接合部付近は当然床面幅、天井幅ともに他の部分より若干広がる傾向にあるが、これは築造時の掘り方によるものと、その後の崩壊によるものであろう。また壁面は地山を素で掘って、地山面が露出した状況で使用されており、スサ混じりの粘土などで壁面を新たに構築した形跡はない。

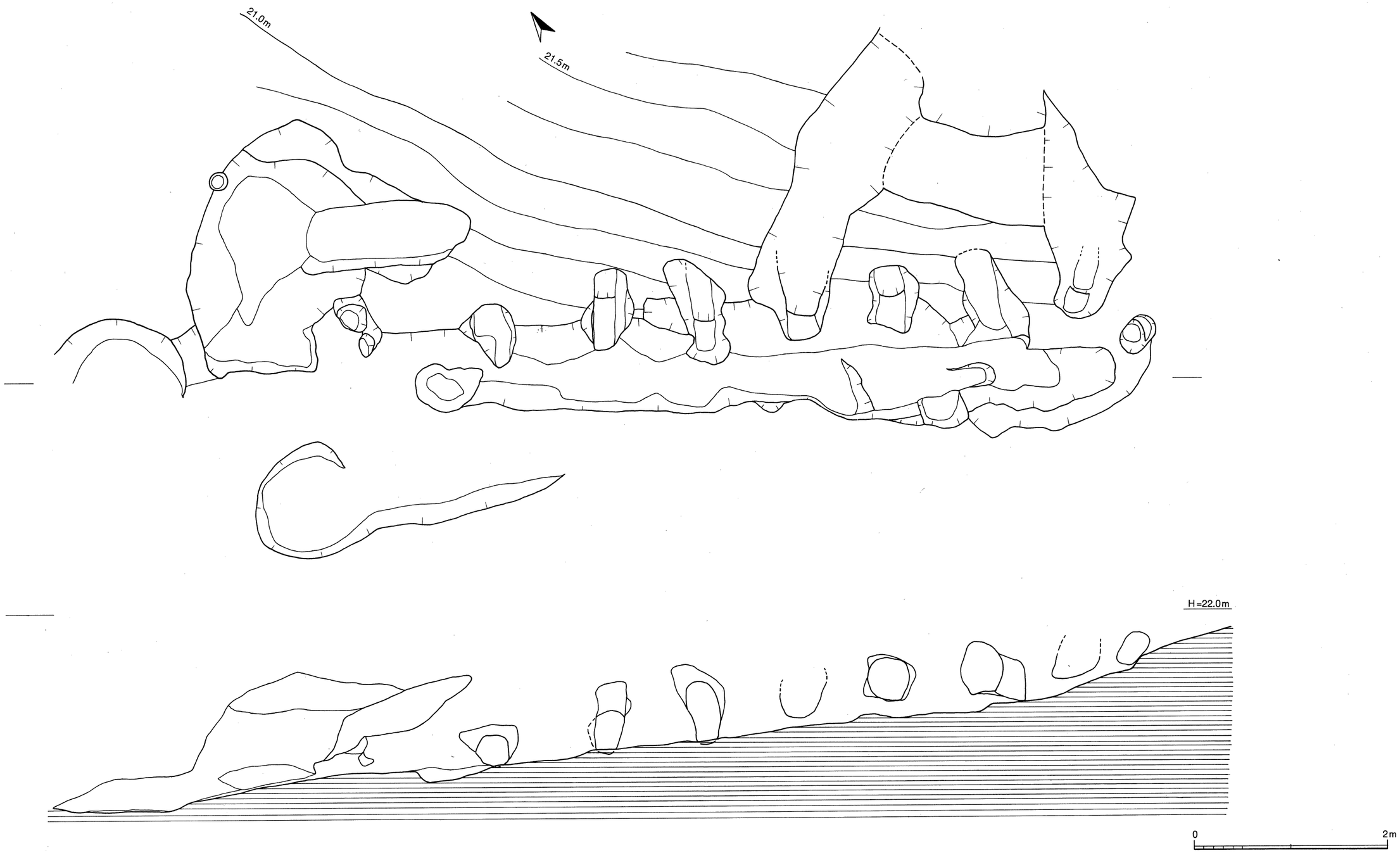


Fig. 170　084 実測図 1（1/40）

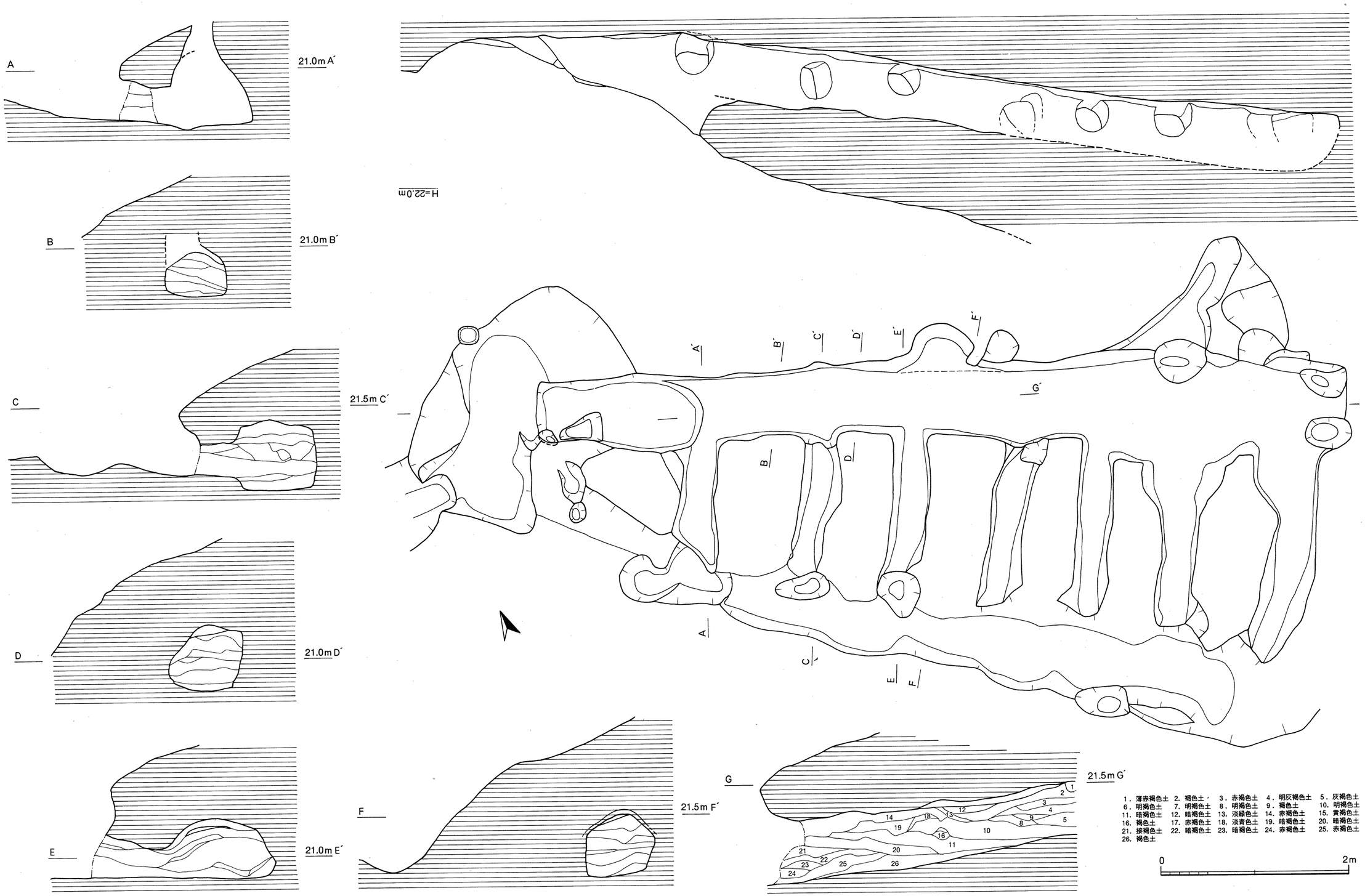


Fig. 171　084 実測図２（1/40）

壁面・天井の焼成度は各部分によって異なる。壁面は第１横口から第４横口付近までかなり強い被熱を受けており、特に横口との接合部分は赤褐色に強く焼けている。本体奥の部分は天井部が崩壊しており詳しい状況は不明だが、埋土中に焼土片が多く含まれていることからこの部分も相当の被熱を受けていることが予想される。天井部は遺存する部分はいずれもかなりの被熱を受けており、特に第２横口から第４横口にかけては厚さ約10cmの還元焼成による硬化面が生成されている。第４横口以奥の天井部分は残っていないが、天井部が強く被熱されていることが予想される。

本体内の土層観察は崩壊を免れた、天井部が残存する部分のみに限られるために十分な資料とはいえない。この限りで埋没状況を見ると、全体に水平堆積の様相を示し、人為的に埋められた痕跡は見られない。埋没仮定は全体で３つの段階に分かれ、まず最下部の焚き口部を含めた部分が埋没する。土砂の流入は奥壁側からと見られ、この段階ですでに本体自体が崩れていたことになる。その上部に第２段階として第１横口付近の天井部崩落に伴うと見られる土砂の堆積が見られる。この層にはやや大きめの地山ブロックと焼土が混入する。その後第３段階として奥壁側からの土砂流入による埋没が進む。埋土はいずれも締まりなく、特に上層はもろい。この土砂の流入はある段階で攪乱上層部分がふさがったために止まってしまい、本体内は一部で上部に空隙が残っている。

また床面直上には厚さ１cm未満の炭化物層が一部で見られたが、操業回数を示す重層的な炭化物の堆積は見られない。

本体からは計７本の横口が穿たれている。横口の長さは、第１横口で1.2m、第７横口で2.2mを測る。窯本体が斜面に角度をもって築かれているため、奥壁側の横口ほど長くなる必要がある。各横口の幅、高さはいずれも確認できる限りで幅30～40cm、高さ30～40cmで断面の形状は略円形を呈する。平面形はほぼ直線的に延びるが、第３、第７の各横口は緩くカーブを描く。また窯本体との接合角度もほぼ一定している。

横口の焼成状況はいずれも、本体に近い部分のみ強い被熱を受けている。横口内部はほとんど熱を受けておらず、炭化物の堆積も見られない。このことから、窯操業時の最も火力の強い焼成段階ではこれらの横口は閉ざされて熱が伝わらない状況になっていたものと考えられる。

横口の土層観察は第２、第３の横口に限られるが、いずれも横口からの土砂の流入が見られ、操業終了時にはこれらの横口は開口していたことがわかる。また本体と同様横口にも人為的に埋められた痕跡は見られない。

この084からは、炭焼窯という遺構の性格もあり、遺物はほとんど出土していない。したがって直接遺構の時期を示す証拠はない。同型式の炭窯の分析例からみると、およそ７世紀代にこの型式の炭窯が操業されているとの分析結果が出されている。その他周囲の古墳の築造状況から見て、084については、７世紀後半～８世紀に位置付けるのが適当であると考える。

横口付炭窯については瀬戸内～中国山地にかけて多く分布し、福岡市域での出土は今回が初めてである。北部九州でも少数に限られることから、今後より多くの資料の増加が望まれる。

26. 製鉄関連遺構・遺物

3次調査では製鉄関連の遺構として1基の製鉄炉と1ヶ所のまとまった鉄滓分布地点を検出し、調査を行った。また古墳の墳丘、石室、墓道から出土した鉄滓も9古墳からにのぼる。以下ではこれらの製鉄関連の遺構、遺物について特記する。これらの調査・整理作業にあたっては大沢正巳、穴沢義功の両氏の多大な協力をいただいた。特に鉄滓の実測、古墳供献鉄滓の解釈に当たっては両氏のご教示を多く仰いでいる。この場を借りて改めて感謝する次第である。

(1) 093

調査区西側の、丘陵尾根の南西側緩斜面に位置する製鉄炉である。検出時には093と112の2つの隣接した遺構として捉えていたが、その後の調査で一体の製鉄遺構を形成することが判明したため、1つの遺構として考える。遺構は谷へ下る斜面のテラス状の平坦面上に位置し、標高は最高点で19.2m、最低点で17.4m、炉床部で18.0m前後にあたる。中央に製鉄炉本体である炉床を作り、その両端に排滓溝を設けるつくりになっている。規模は排滓溝を含めた全長は7.0m、尾根側にある北排滓溝は長さ3.2m、幅4.9m、炉床部は長さ77cm、幅55cm、谷側にある南排滓溝は2.3m、幅1.7mを各々測る。また全体の主軸方向は北東-南西方向で、斜面の傾斜方向に平行して作られている。

北側排滓溝は谷側の排滓溝に比べて一回り大型で深くなる。尾根から落ちる丘陵斜面が平坦部テラスと接する地形変換線付近に端部をもち、そのため丘陵斜面と遺構端部の境界は不明瞭となる。また片来の遺構範囲の外側に幅約6mの落ち込みが見られるが、これは遺構埋没時に削平を受けたものと考えられ、本来の遺構範囲ではないと考えられる。平面形はほぼ円形で、主軸と直行方向にやや広がる感じになる。排滓溝上端、及び床面はそれぞれほぼ同レベルで、特に床面は全体にフラットな作りになり、排滓溝全体としては整った盤形を呈する。また地形全体で尾根側が高くなっているにもかかわらず検出段階では北排滓溝上端は製鉄炉炉床面から低い位置にある。これは検出時には比較的鉄滓の出土が少なかったものの、当初は両側への排滓を意図していたとかんがえられ、築造にあたっては製鉄炉全体の構造を踏まえて計画的に大規模な掘削が行われたものと考えられる。遺構内埋土は、製鉄炉炉床から流れ込む形で黒色土の堆積層が厚さ50cmで堆積し、遺構内はほぼ黒色土で満たされる形になる。本来は排滓溝であるが、鉄滓の出土量は炉床部分及び南側排滓溝と比較して相当少ない。また上層流れ込みの遺物を除いては出土遺物もほとんどない。

中央炉床部は両側の排滓溝よりも一段高く作られ、台状になる。炉床の構造自体は非常に残りが悪く、炉床範囲を現位置で確認することは困難であるが、わずかに遺存する炉床南側部分と、土層観察による下部構造から炉床位置及び炉床全体の規模を推定している。これによると炉床の平面形態はほぼ長方形で炉床南側のコーナーがほぼ現位置で確認できるがやや南側排滓溝に流れている可能性もある。中軸方向の断面では炉床粘土の壁面への立ち上がりはほとんど確認できない。炉床横断面の観察では、炉床両端がわずかに立ち上がるのが確認でき、これを炉壁の位置と推定できる。現状では横断面では炉床はU字形をなし、炉床底部はほぼ水平面となる。両端で緩く立ち上がるが、その上部は不明である。また炉床北側排滓溝への境界は不明瞭で、操業時のものと思われる鉄滓の流れ込みが見られる。この部分には炉底滓を含む大型の鉄滓が集中し、排滓時に炉本体を破壊して内部を取り出そうとした状況をみることができる。また炉床の下部は砂質土を主とする土に炉壁壁体、焼土、炭化物を多く含み、防湿を意図して炉床に敷込んだものと考えられる。この炉床部分からは鉄滓の出土量は比較的少ないがこれは炉床部分を除いて削平を受けているためであろう。

南側排滓溝は幅、長さとも北側排滓溝よりも小型である。平面形態は略長方形で、底面はほぼ平坦

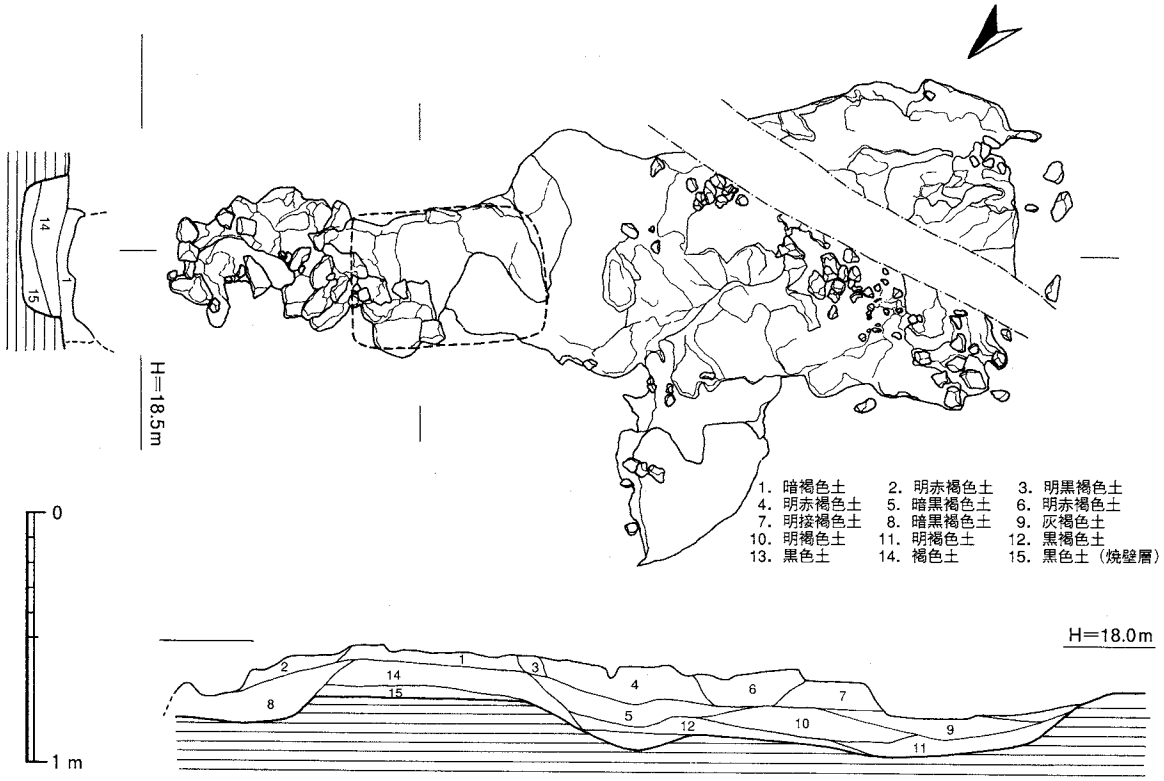


Fig. 172　093炉床・排滓溝検出状況（1/30）

である。全体に整った作りではない。炉床と南側排滓溝との間に略楕円形の掘り込みがあり、排滓溝自体が二段構えの様相である。中間の掘込みの床面は南側排滓溝本体よりも低い。土層観察ではこの掘込みと排滓溝で１つの排滓溝としての機能をもつことから、炉床から排出された鉄滓をいったん直下に落として溜めるものとしての機能をもつと思われる。南側排滓溝からは大量に鉄滓が出土したが、排滓溝内上層にやや大型の鉄滓、下層に小粒の鉄滓が含まれる傾向が見られる。そのほか遺構覆土全体に鉄滓を多く含むが、炉壁をはじめ炉の各部分の滓が攪拌された状況で出土し、炉の操業過程、崩壊過程を合理的に説明するものではない。

093で出土した鉄滓は総量でパンケース20箱を数え、その全てを整理公開することは困難であるため、以下にごく一部の実測図及び観察を記す。個々の鉄滓の観察は表中で行い、ここでは鉄滓全体を関連させた炉の操業の復元につとめる。

炉壁は上段被熱部分、中段ガラス質溶解部分、下段送風孔部分及び下段～炉底滓に分けることができる。上段は被熱して内面やや灰色に焼成しているが、被熱弱く軟質で残りも悪い。2001～2003は他の部分よりとくに風化著しい。中段以下は被熱を十分に受け、内面は程度の差はあるが皆溶解してガラス化する。送風孔の形は滓の形態から見て略円形を呈するものとされる。送風孔付近の滓はいずれも被熱強く、この部分が高温であったことを物語る。2014は滴下する状況が見られ、送風孔直下に位置するものであろう。2015は炉壁下部の滓で、工具痕と見られる凹みがつく。また093出土の鉄滓のなかで特に炉壁部分に胎土、焼成の違いによる２種類の鉄滓が見られる。このうち、胎土が比較的細かいものをＡ胎土、胎土が粗いものをＢ胎土として説明しているが、Ａ胎土は周辺の土質と若干異なり、他地区からの持ち込みの可能性がある。Ａ胎土の炉壁は他に焼成が良好であることから、Ｂ胎土の炉より好条件で操業されたと考えられる。なおＢ胎土は後述する108の炉壁に類似する。

砂鉄焼結塊は、原料砂鉄のうち炉上方で溶解せずに凝結したものを指す。2017～2019のうち2019は

やや溶解が進み、他の２個体よりも下方にあったと推定される。

炉底滓は炉底部に形成された滓で、炉の平面形態を示すものがある。2020は炉のコーナー部で、端部はほぼ直角に折れる。2022は炉底の直線的な縁辺部の形態を呈する。2020～３を含め、093の炉底滓は全体に薄手のものが多い。

炉内滓のうち、2023は一部に砂鉄焼結気味の部分が残り、炉内が十分な高温でなかったことを示す。また2024・５は木炭痕をもつ滓である。2026は「鳥足状」流動滓である。

流出孔滓は流出孔内で固化した滓である。2027は砂鉄焼結状態のまま固化した滓で、炉内の温度が低く十分に砂鉄が溶解しない状態で滓が流出した状況がわかる。また2030は流出孔内に工具を差し込んだ痕跡をもつ滓である。2031は流出孔と流出溝の境界付近の滓で、流出孔から広がる様子が見られる。流出溝滓は小片しか呈示し得ないが、いずれも流動的な様相を示す。

製品としての鉄塊系遺物の出土は多くない。2036は放射状錆割れをもつ典型的なものだが、メタル度は低い。他の遺物もメタル度は低く、093では良質の鉄は生産されていないと推定される。また093では操業時の燃料として使用された木炭が出土しており、2038はおそらく幹の一部、2039は小枝片とみられる。

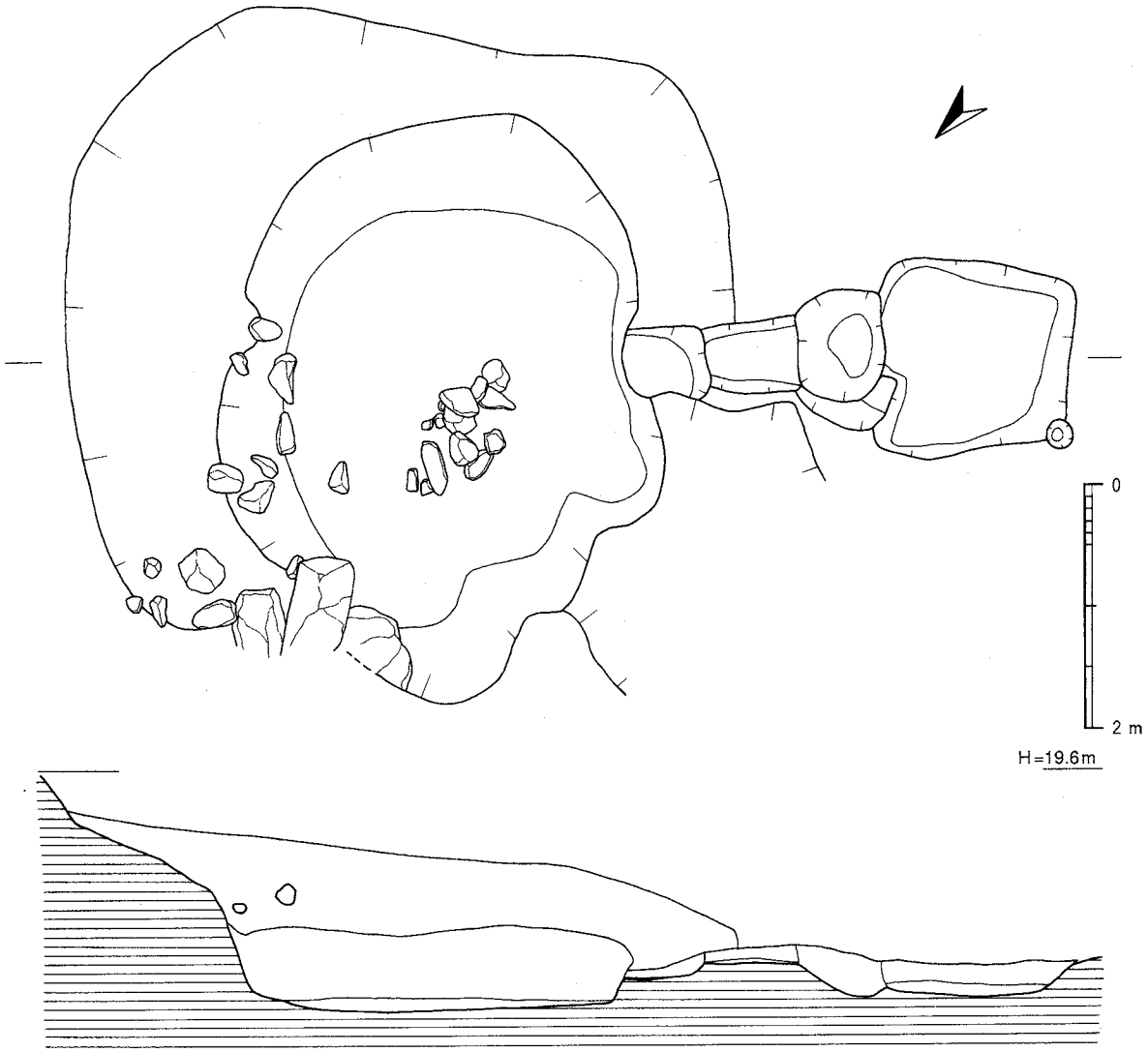


Fig. 173　093 遺構実測図（1/60）

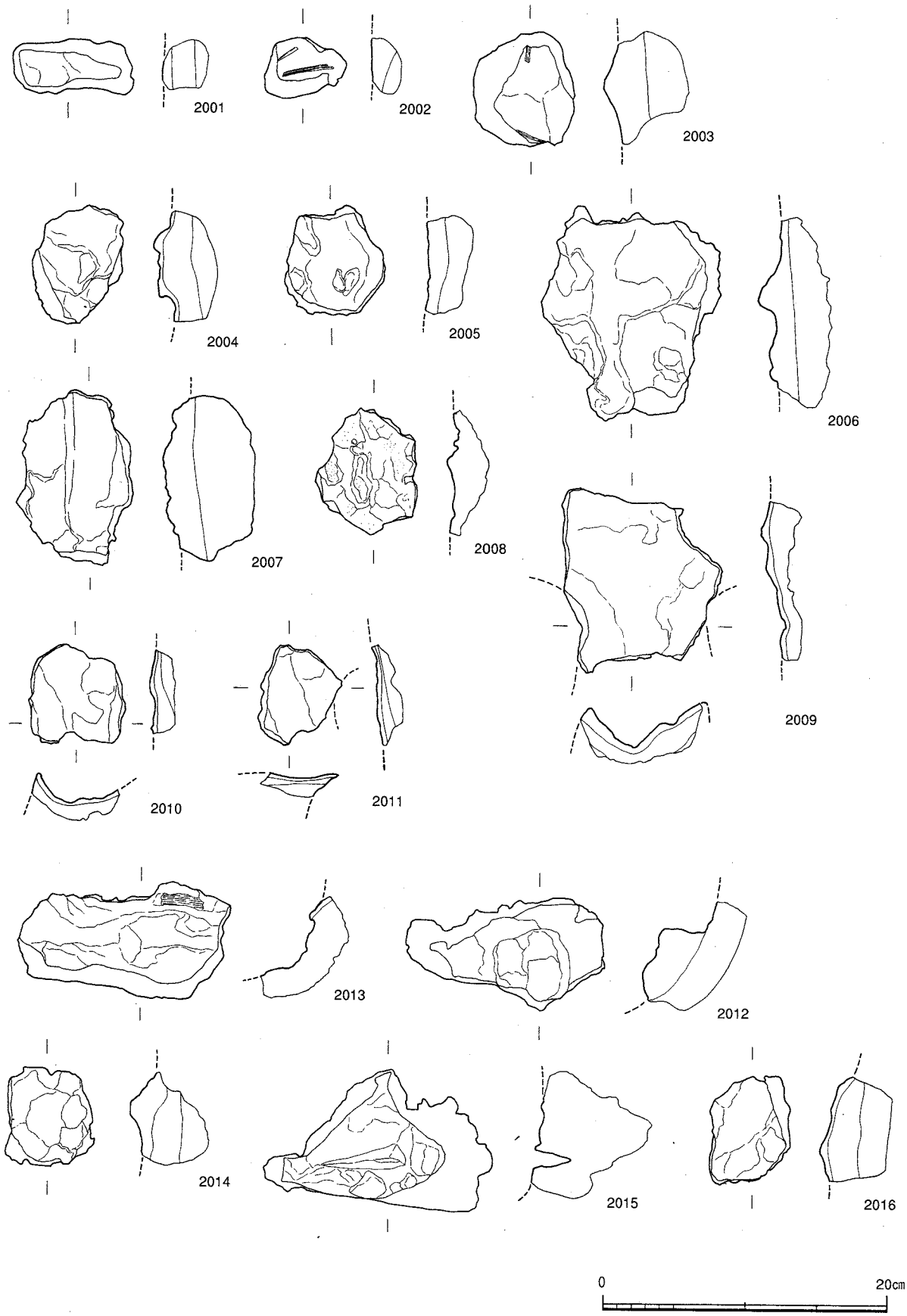


Fig. 174　093 出土鉄滓実測図 1 (1/4)

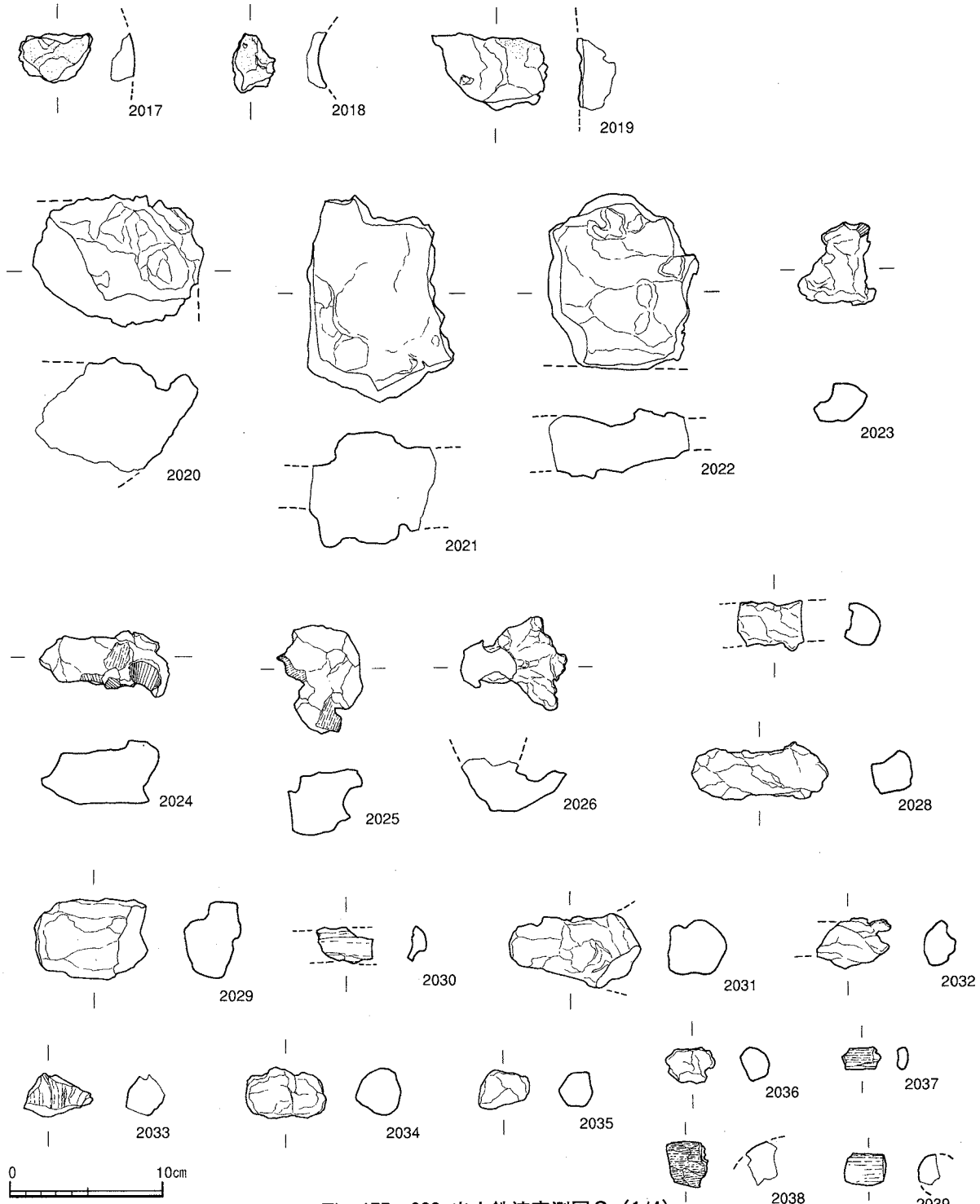


Fig. 175　093 出土鉄滓実測図２（1/4）

以上の鉄滓から見て、093の操業状況は、炉壁のうちA胎土を用いて炉を築いた時期と、B胎土を用いて炉を構築した時期に分けることができる。A胎土炉壁を使用した炉は炉壁の焼成状況から比較的丁寧に操業を行っていたと見られ、時期的に操業当初とみることができよう。B胎土の炉壁を使用した炉は、その後製品の大量生産を意図して拙速な操業を行ったことによるものと見ることができ、鉄滓からみて炉内が比較的低温で、鉄生産としては条件の悪い状況で操業を行っていたとみられる。また炉床の規模が比較的小型であることから、時期が下るとは考えにくく、この方面から操業時期を想定すれば、６世紀と８世紀の中間的な様相、すなわち７世紀という時期を想定できる。

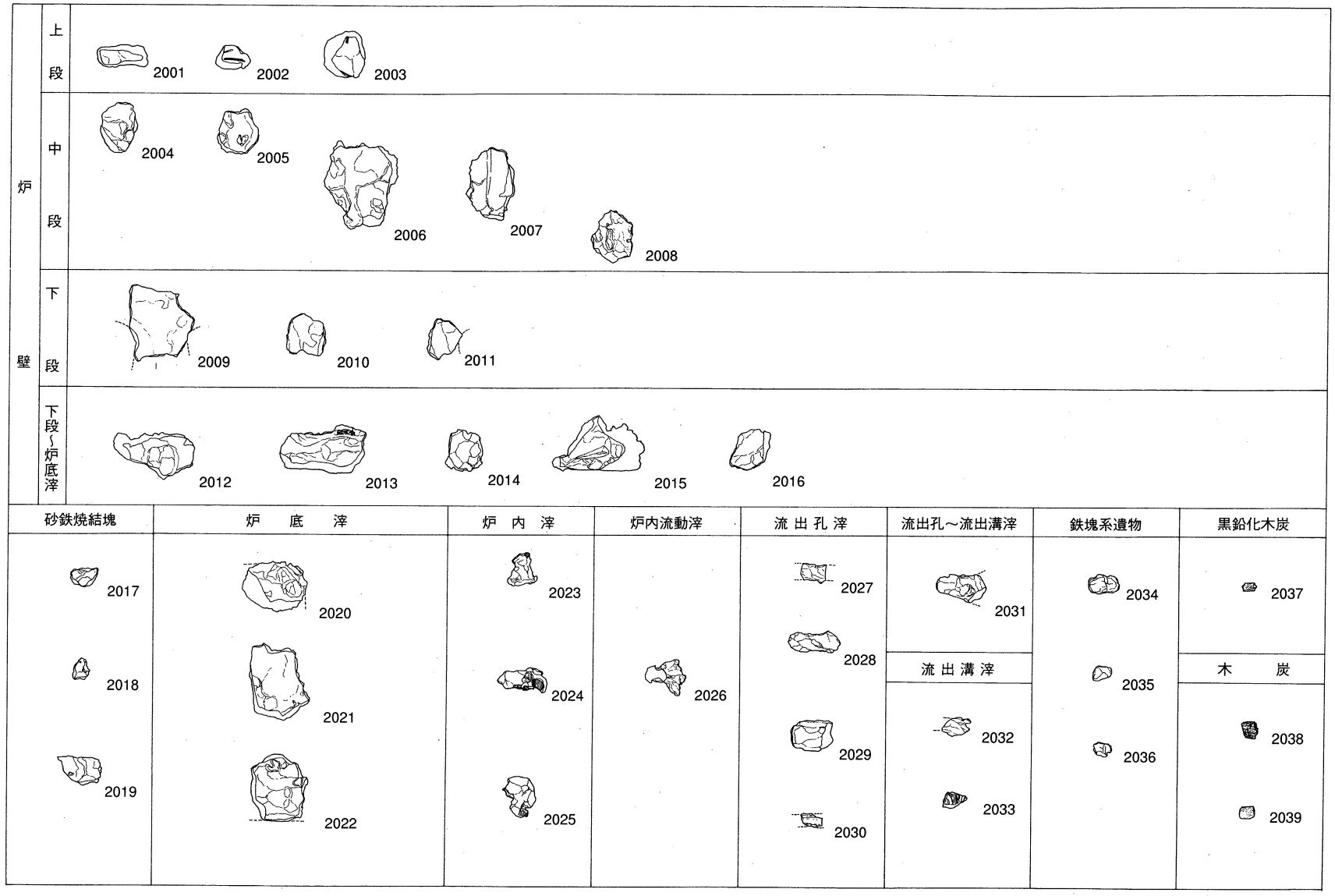


Fig. 176　093 出土鉄滓配置図（1/10）

(2) 108

調査区西側の、尾根西側テラス面の西端に位置する。テラス面のなかでも比較的谷部に近い位置にあたる。検出当初は製鉄遺構としてとらえていたが、調査の結果明確な炉床、排滓溝などの製鉄遺構を見い出すことができず、単なる鉄滓・焼土散布地点の可能性もあるが、出土した鉄滓の量がパンケース20箱以上となり、また大型の鉄滓を含む良好な資料であるため、あえて遺構として報告する。大型の鉄滓がまとまって出土することから、出土した鉄滓に伴う製鉄炉はこの地点に隣接した箇所に存在したことについては間違いないと考えられる。

遺構の範囲は、長径7.5m、短径3.6mの楕円形で、鉄滓・焼土はこの範囲内に散布する。周囲と境界を区切る明瞭な遺構ラインは確認できない。遺構内は鉄滓、焼土、炭が攪拌された状況で、炉床などを示す特異な分布などは見られない。また検出段階では炭化物の集中域が見られたが、いずれも薄く、特別な意味をもつものではない。焼土・炭化物を含めた遺物は平面状に薄く堆積している。

108から出土した鉄滓のうち、主要なものを図化し、観察している。108出土鉄滓のうち多くは近似する操業状態で生じたもので、特に他と異なった操業状態をもつものは見られないことから、以下ではこれらをまとめて述べることとする。

炉壁部の滓は、上段、中段、下段に分けることができる。上段の滓は遺存量が少なく、1点を図化できるのみだが、これによると上段の被熱はあまり強くないことがわかる。中段以下は炉壁内面はガラス化するが、一部温度の低い部分が生じているなど安定した状態ではないことがわかる。2044は中段炉壁だが、炉内面に凹凸が著しい。これは送風によるものではなく、炉構築時の炉壁胎土のムラによるもので、108の炉壁のつくりが粗いことが伺える。

下段送風孔付近の滓は2046、2047、2049があたるが、これらの滓から送風孔の形態を推定すると、2047で2孔の痕跡を確認し、この両孔の間隔は約8cmとなる。また送風孔はやや斜め下方向を向き、炉底に向かって吹き込むようになっていたといえる。また2046の断面形から、送風孔は炉壁方向に対してかなり斜めに取り付けられることがわかる。送風孔の形態は略楕円形と推定される。2049は送風孔直下の炉壁で、送風孔の吹出しによる滴下が見られ、高温状態が作られていたと推定できる。

2051・2は砂鉄焼結塊で、いずれも被熱の弱い炉上方で生成されたとみられる。

2053～60は炉底滓。108出土の炉底滓は比較的大型のものが多く、これらの資料から炉本体の規模をある程度推定することが容易となる。2052・3は炉床と炉壁の接合部の滓で、いずれも炉壁の立ち

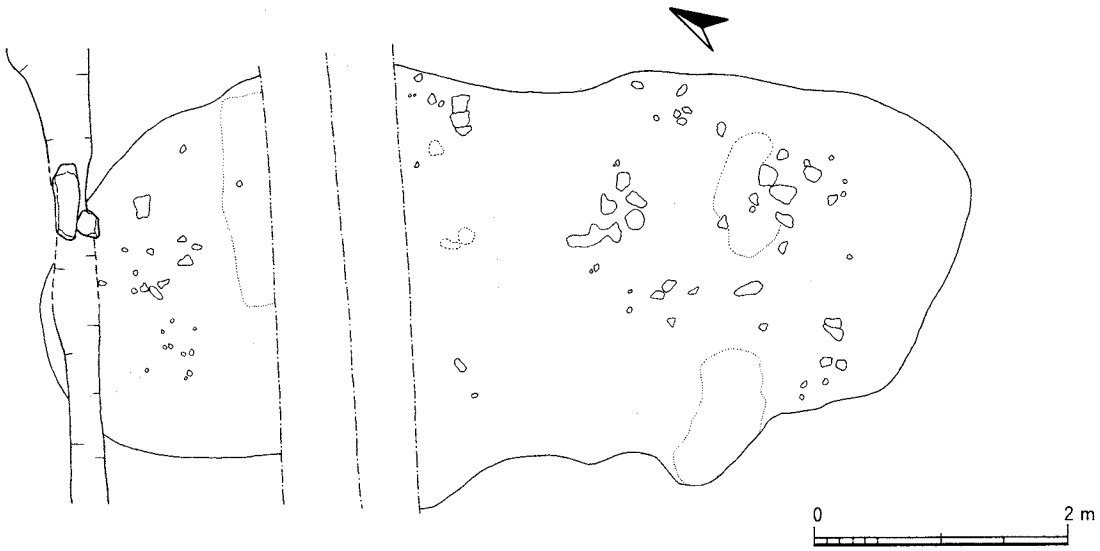


Fig. 177　108 平面実測図（1/60）

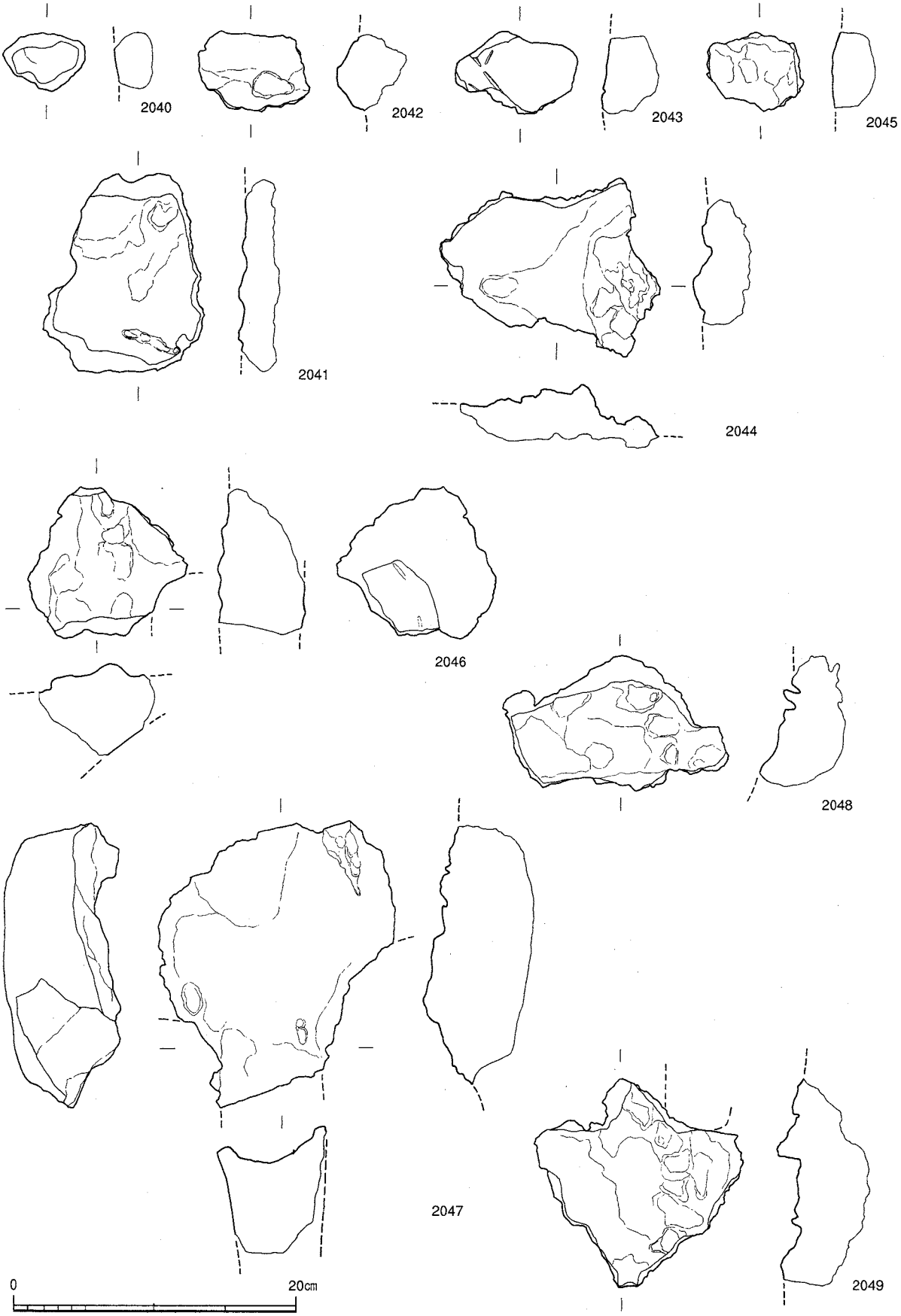


Fig. 178　108 出土鉄滓実測図 1 (1/4)

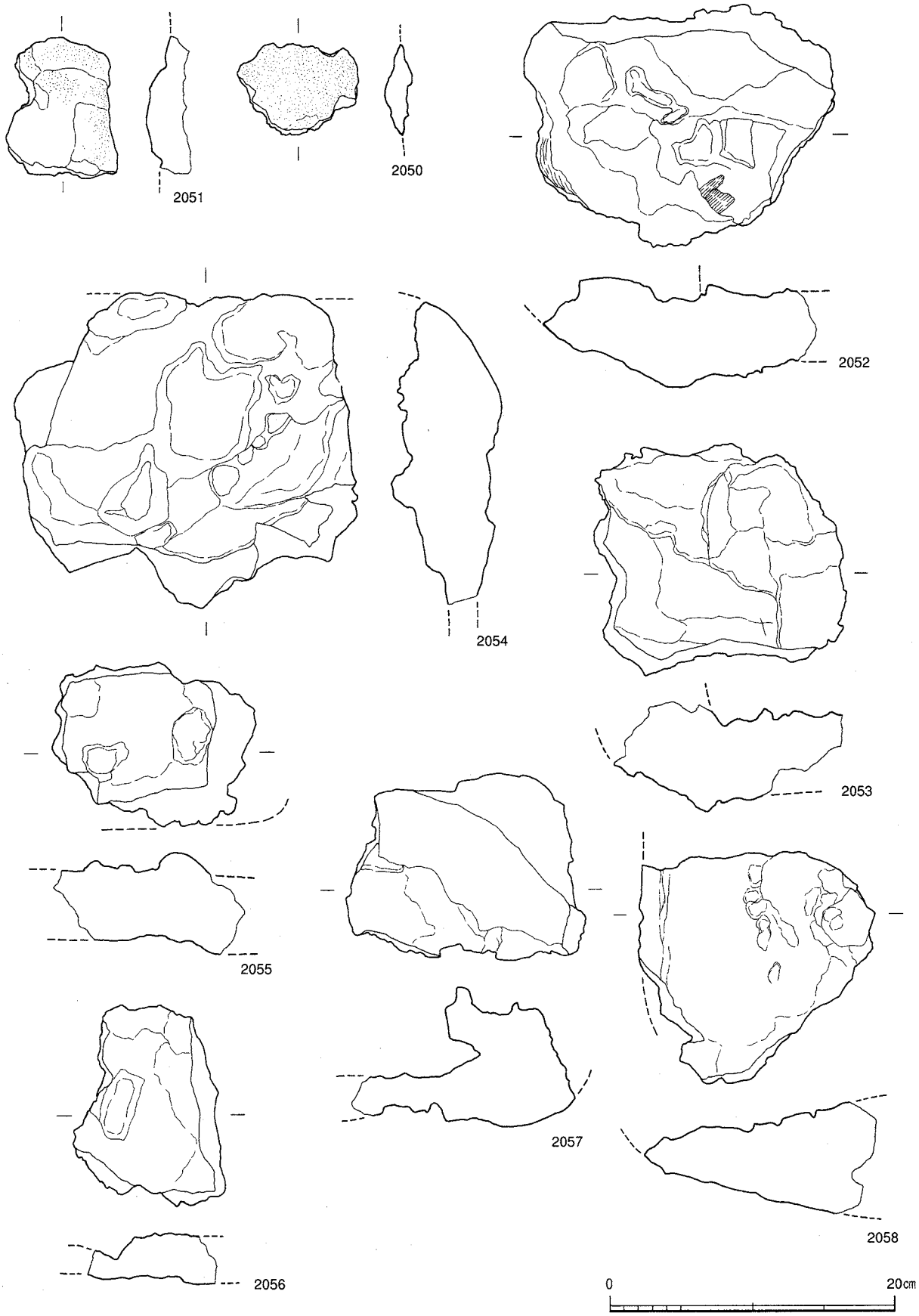


Fig. 179　108 出土鉄滓実測図２（1/4）

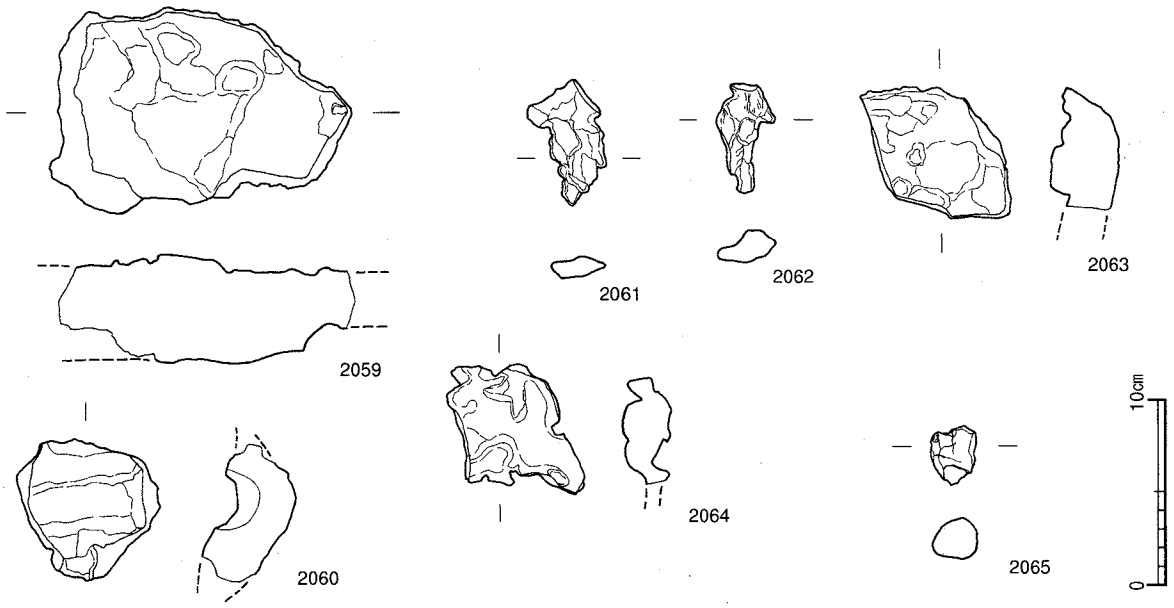


Fig. 180　108 出土鉄滓実測図３（1/4）

上がりを見ることができるが、これによると炉壁は炉床から垂直に立てて構築されており、炉壁と炉床との接合面に沿って滓が潜り込む様子が若干の滓でみられる。2057は炉壁から溶解し滴下した滓が炉壁際に沿って堆積している状況を示す。093と比較すると、093のように炉床部がU字形に形成され、炉壁は炉床から緩く上がっていく形態よりも、垂直な炉壁を築く108の形態のものが後出的な性格をもつ。また2057の滴下した滓の平面形から、炉床のコーナー部分の形態が把握でき、108は強い楕円形コーナーをもつとみられる。表面の滓の流動状況から、流出孔の位置は炉床中央の長軸端に位置すると推定される。全体に108の炉底滓は裏面の凹凸が著しいが、これは前の操業時の滓が残ったままで次の操業を行ったことに因るものとみられ、108はかなり粗い操業を行っていたとみられる。

2061～４は流出溝滓。いずれも流動的な表面を示す。2065は鉄塊系遺物で、メタル度は低い。なお、108では炉壁、炉底滓の出土量に比べ、流出孔滓、流出溝滓などの出土量が少ない。

以上の結果を総合的に概観すると、108は炉の形状や構造など093よりも新しい要素をもち、093の次の段階のものと考えられる。また108は炉底滓などの形状からみてより大型のもので、また炉壁が溶解して炉床に滴下するなどより高温の状況であったこと、また送風孔の取り付けが炉壁に対し外側から斜めにつくられることなども後出の様相を示す。ただし、炉壁胎土は粗末になり、また炉底滓に見られる裏面の凹凸など、炉の操業状況に関しては相当の悪条件下で行われていたとみるのが適当であろう。

108の年代に関しては、093よりも後出であることと、８世紀以降の製鉄炉から出土する鉄滓よりも滓の厚さが薄いなど未発展の様相をもつことから、７世紀後半の時期の可能性が高い。また108が７世紀後半にあたることで、SK084との関連も考える余地がでてくる。この２つの遺構の関連を直接証明する証拠はないが、今後より検討を重ねることでさらに十分なつながりを見い出すことができると考える。

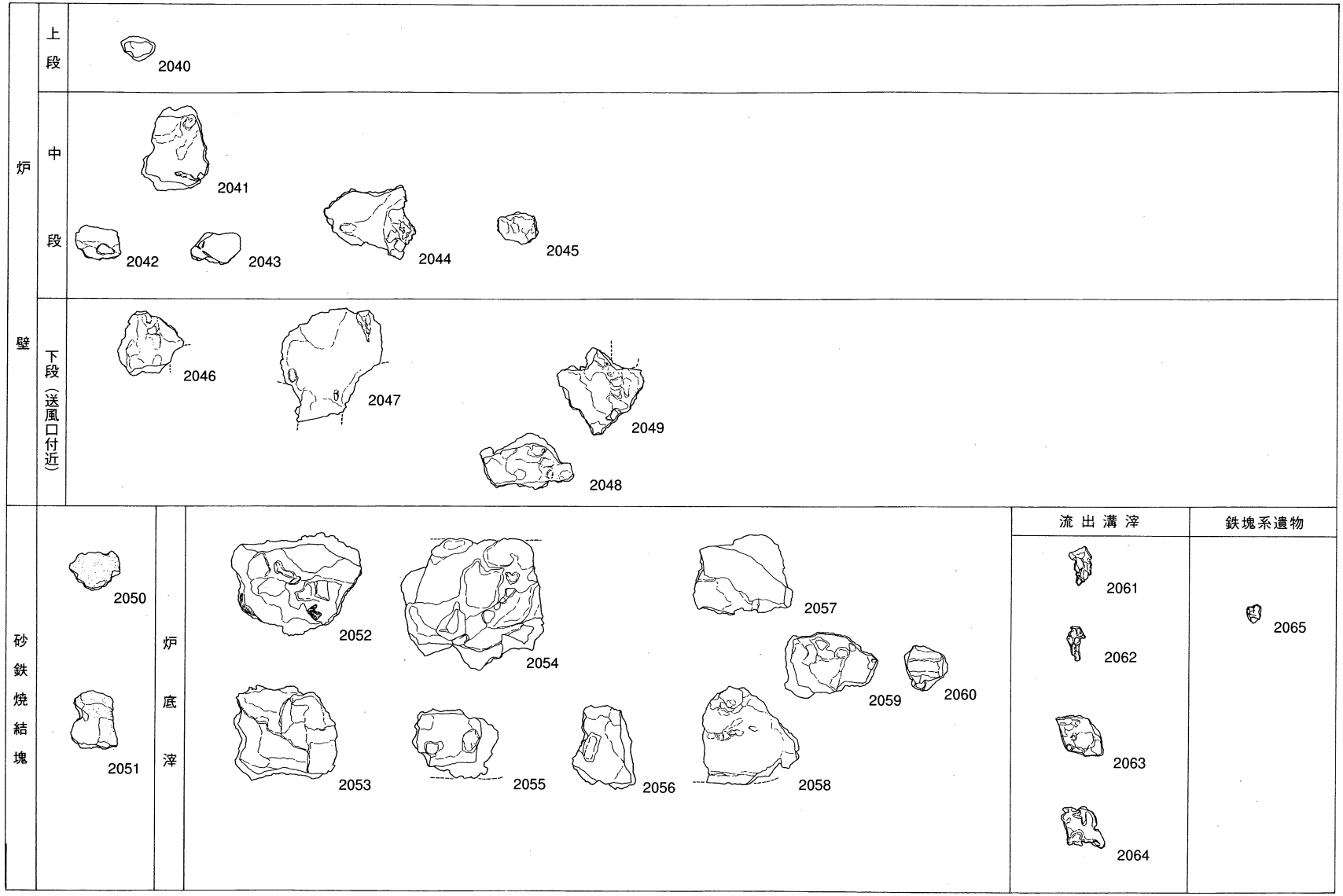


Fig. 181　108 出土鉄滓配置図（1/10）

Tab. 1　093 出土鉄滓観察表

出土遺構	No.	鉄滓種類	縦×横×厚さ(mm)	重量(g)	色　調	特　記　事　項
093	2001	炉壁	38×85×33	102	暗褐色～薄灰褐色～薄明褐色	炉壁頂部やや中央よりの滓。被熱弱く、全体に軟質。壁体は粗砂、小レキを多く含む。風化による欠損著しい。
093	2002	炉壁	42×58×26	43	薄灰褐色～薄明赤褐色	炉壁頂部コーナー寄りの滓。被熱弱く、全体に軟質。壁体は粗砂を多く含み、スサを若干含む。風化による欠損著しい。
093	2003	炉壁	81×70×65	214	薄灰褐色～薄明赤褐色	炉壁上位で、被熱弱く、全体に軟質。壁体は粗砂、レキを多く含み、スサを若干含む。
093	2004	炉壁	83×64×45	200	暗黒褐色～薄灰褐色～明赤褐色	内面はガラス化しており、気泡目立つ。壁体は粗砂、小レキを若干含み、比較的細かい粘土を用いる。
093	2005	炉壁	77×70×34	158	暗灰色～薄灰色	内面は強く被熱してガラス化し、2次的な錆の付着が見られる。壁体は粗砂を若干含む比較的細かい粘土で、スサを多く含む。
093	2006	炉壁	153×126×51	634	暗黒褐色～灰褐色	B胎土。内面は向かって左側が被熱強く、ガラス化する。壁体は粗砂を多く含み、スサを多く含む。
093	2007	炉壁	124×80×65	420	暗黒褐色～灰褐色	B胎土。内面はガラス化しており、2次的な錆化がみられる。壁体は粗砂を多く含み、強い被熱を受ける。
093	2008	炉壁	88×72×34	160	明灰色～褐色～明褐色	A胎土。内面は強く被熱してガラス化が進み、破断面は銀色を呈する。壁体はきめ細かい粘土で、スサを多く含む。
093	2009	炉壁	129×113×42	328	暗青灰色～灰赤褐色	A胎土。内面はガラス化し、通風孔部分は内側へ盛り上がる。壁体は粗砂を若干含み、スサを多く含む。
093	2010	炉壁	71×67×34	80	明灰色～灰褐色～赤褐色	A胎土。内面はガラス化し、金属光沢がみられる。部分的に気泡が多い。壁体は粗砂、スサを多く含む。
093	2011	炉壁	70×59×22	62	暗黒灰色～灰褐色～明赤褐色	内面はガラス化し、平滑で銀色の金属光沢を呈する。壁体は粗砂、スサを多く含む。
093	2012	炉壁	78×140×73	496	黒褐色～灰褐色	炉壁最下部の滓で、内側に湾曲する。炉内面に突出部があり、溶解炉壁と滓の固まりが付着する。壁体は粗砂、スサを多く含む。
093	2013	炉壁	83×150×61	324	黒褐色～灰褐色	内面上半は炉壁部分で、ガラス化し、気泡が見られる。下半部は滓部分で、2次的錆の付着が見られる。壁体は粗砂、スサを多く含む。
093	2014	炉壁	69×59×55	174	暗黒灰色～灰褐色～赤褐色	通風孔下部の滓で、内面表面の荒れ、凹凸が著しい。内面はガラス化が進み、気泡が多くみられる。壁体は粗砂、スサを多く含む。
093	2015	炉壁	100×160×84	746	黒赤褐色～黒紫色～灰褐色	流出孔横に位置し、工具痕が残る。工具は棒状のもので、滓を突いて取り出す状況が見られる。壁体は粗砂を多く含み、やや粗い。
093	2016	炉壁	77×56×60	176	黒褐色～灰褐色～薄褐色	2015の上部位置にあたる。内面下半分は被熱強くガラス溶解化。上部もガラス化する。壁体は粗砂を若干含み、被熱はやや弱い。
093	2017	砂鉄焼結塊	32×47×15	16	暗灰色～明灰色	全体が砂鉄焼結塊で、炉壁は遺存しない。内面は酸化により暗褐色化する。
093	2018	砂鉄焼結塊	39×27×13	12	暗褐色～灰褐色	全体が砂鉄焼結塊で、炉壁は遺存しない。内面は酸化による褐色化と、2次的な錆の付着が見られる。
093	2019	砂鉄焼結塊	50×75×25	92	暗青灰色～明褐色	炉壁に砂鉄焼結塊が付着する。大部分は滓化する。壁体は砂粒を若干含む。内面に2次的な錆の付着が見られる。
093	2020	炉底滓	83×110×77	662	黒色～黒灰色	上部は滓と炉壁溶解部が混合し、一部流動的になる。下部は滓部分で炉壁、炉床に食い込む形状になる。
093	2021	炉底滓	135×96×76	1209	暗紫色～明褐色	炉床中軸付近の滓。上面は2次的な滓の付着が見られる。上面は比較的平坦。下面は炉床粘土の付着が見られる。全体に密で重い。
093	2022	炉底滓	116×98×46	710	薄褐色～薄赤褐色	炉床縁辺部の滓。上面は比較的凹凸少なく、2次的な錆の付着が見られる。下面は炉床粘土が付着し、2次的錆化も見られる。全体に密で重い。
093	2023	炉内滓	52×52×28	72	黒褐色～明褐色	炉内滓で、全体に砂鉄焼結気味である。2次的な錆化が見られ、また部分的に炉壁粘土が付着し、本来は炉壁に密着した状況であったと考えられる。
093	2024	炉内滓	83×42×42	180	明黄褐色	炉内滓で、木炭痕が随所に見られる。一部炉床粘土が付着し、全体に密で重い。
093	2025	炉内滓	70×54×48	172	暗黒褐色～薄褐色	全面に木炭痕が残る。表面は一部流動的な様相を示す。
093	2026	炉内滓	59×69×35	110	黒褐色	炉内流動滓で、鳥足状の特異な形を呈する。下面には砂粒が付着する。
093	2027	流出孔滓	32×44×24	47	黒灰色	流出孔滓で、孔幅30mm前後、全体に被熱弱く、砂鉄焼結塊状になる。上面はやや流動的な様相を示す。
093	2028	流出孔滓	38×88×26	126	黒褐色～明褐色	流出孔滓。孔幅35mm前後。全体に被熱やや弱く、流動的な様相は見られない。下面には砂粒が付着する。
093	2029	流出孔滓	54×72×38	174	黒褐色～明褐色	流出孔滓で、上面は気泡多くやや流動的。下面は粘土が付着する。孔幅50mm前後。
093	2030	流出孔滓	24×37×13	14	黒褐色～暗褐色	流出孔滓の上に工具痕の付く滓が付着する重層形。工具痕は棒状のもので、孔に差し込んだものとされる。孔幅2.5cm以上と考えられる。
093	2031	流出孔滓～流出溝滓	49×86×39	210	暗赤褐色	流出孔と流出溝の境界付近の滓。孔から外へ広がる様相が見られる。状面は流動的で、下面は流出孔の形状を残す。
093	2032	流出溝滓	34×49×21	40	黒灰色	流出溝滓で、上面は流動的で細かいしわがみられる。下面は粘土砂粒の付着がみられる。
093	2033	流出溝滓	29×46×25	40	黒灰色	流出溝滓で、上面は流動的で細かいしわが多く見られる。下面は炉床に食い込んだ痕跡が見られる。
093	2034	鉄塊系遺物	34×52×30	46	暗黄褐色～暗黄赤褐色	鉄塊系遺物。メタル度H(○)。全体に錆化著しく、放射状亀裂も見られる。全面に酸化土に覆われる。
093	2035	鉄塊系遺物	25×33×22	26	明黄褐色	鉄塊系遺物。メタル度H(○)。全面酸化土に覆われる。一部金属光沢面が見え、全体に密度高い。
093	2036	鉄塊系遺物	24×32×19	12	黄褐色	鉄塊系遺物　メタル度H(○)。全体に酸化土に覆われる。
093	2037	黒鉛化木炭	10×25×7	6	黒色～暗赤褐色	黒鉛化した木炭で、上面には木炭状の組織痕が残る。下面は粘土が付着する。
093	2038	木炭	30×27×20	4	黒色	木炭片。復元径50mmの樹枝とみられる
093	2039	木炭	21×27×24	1	黒色	木炭片。復元径25mmの樹枝と考えられる。

Tab. 2　108 出土鉄滓観察表

出土遺構	No.	鉄滓種類	縦×横×厚さ(mm)	重量(g)	色　調	特　記　事　項
108	2040	炉壁	42×58×27	55	灰褐色～赤褐色	内面は灰褐色に被熱しているが、弱く、ガラス化してない．壁体は砂レキを多く含み、スサを含まない。本来の炉壁内面の残りは悪い。
108	2041	炉壁	90×114×29	525	黒褐色～褐色	内面はほぼ全面に砂鉄粒が付着し、一部錆化する。外面には薄く炉壁が付着し、2次的な錆が付着する。壁体は粗砂を多く含み、スサが若干含まれる。被熱弱い。
108	2042	炉壁	57×79×50	142	黒色～灰色～灰褐色	内面は黒色ガラス化し、鉄分が付着する。壁体は砂レキを多く含み、スサを若干含む。
108	2043	炉壁	58×86×40	110	黒色～灰色～明赤褐色	全体にやや被熱弱い。内面は軽く溶解し、ガラス化する。壁体は砂レキを多く含み、焼成甘く軟質。
108	2044	炉壁	126×155×44	458	暗青灰色～暗赤褐色～赤褐色	内面は被熱し、ガラス化する。一部粘土が溶解し、崩れている。壁体は砂レキを多く含み、スサを多く含む。
108	2045	炉壁	56×69×32	97	銀色～薄灰褐色～赤褐色	内面は強く被熱し、光沢をもったガラス質になる。壁体は粗砂を若干含み、スサを多く含む。
108	2046	炉壁	107×111×62	456	暗青灰色～灰褐色～赤褐色	内面は被熱し、ガラス化する。気泡多い。通風孔が内面に対し、斜めに入る。壁体は砂レキを多く含み、スサを多く含む。
108	2047	炉壁	202×165×82	1465	暗灰色～灰褐色～赤褐色	内面は平滑で、通風孔付近がやや盛り上がる。左側の通風孔は斜め下に向く。壁体は粗砂を若干含み、スサをやや多く含む。
108	2048	炉壁	90×161×60	750	暗黒褐色	ほぼ全体がガラス化する。内面は凹凸激しい。壁体は粗砂、レキを多く含む。概して被熱強い。
108	2049	炉壁	147×147×66	655	暗青灰色～灰褐色～赤褐色	内面通風孔付近は凹凸激しい。一部2次的に錆化する。壁体は砂レキを多く含み、スサが多く混入する。
108	2050	砂鉄焼結塊	63×85×19	97	黒色～灰褐色	内面は全体に砂鉄が焼結付着し、一部錆化する。外面は炉壁が付着する。
108	2051	砂鉄焼結塊	100×77×31	270	黒色～暗赤褐色	内面はほぼ全面に砂鉄粒が付着する。上位部分は温度低く、粒子が細かく、中位以下は高温でやや大粒になり、滓化する。内外ともに2次的な錆化がみられる。
108	2052	炉底滓	169×217×77	2510	薄黒灰色	炉内部分は砂粒を多く含み、木炭痕が見られる。2次的に錆が付着する。炉壁部分は滓が食い込む状況が先端部に見られる。下面は炉床粘土が付着する。
108	2053	炉底滓	163×176×89	2325	黒褐色～灰褐色	内面縁辺部にL字形に炉壁溶解部分が残る。強く被熱し、壁体部は完全に溶解する。内面に2次的な錆化がみられる。下面は炉床粘土が付着する。
108	2054	炉底滓	222×238×77	2817	暗黒灰色～薄灰褐色	表面上縁は炉辺と一致する。一部滓が流動的になり、排滓溝方向に流れ出す。裏面は全面に炉床粘土が付着する。
108	2055	炉底滓	116×143×72	1290	暗黒赤褐色～灰褐色	上面は2次的錆付着目立つ。下面は炉床粘土付着が見られる。
108	2056	炉底滓	142×105×37	730	黒色～暗赤褐色	表面に木炭痕残る。表面は赤鉄鉱化した鉄分が付着する。下面は炉床粘土が全体に付着する。
108	2057	炉底滓	130×163×98	1725	黒褐色～暗赤褐色	炉壁コーナー部分に当たり、強い楕円形コーナーを呈する。壁際には炉壁が溶解し、炉床に堆積した状況が伺える。滓部分には2次的な錆の付着が見られる。
108	2058	炉底滓	165×162×76	1470	暗黒褐色～灰褐色	上面はガラス質に溶解し、一部流動的になる。下面は全体に炉床粘土が付着する。
108	2059	炉底滓	108×162×58	810	暗灰赤褐色～暗灰褐色	炉コーナー近くの滓で、上面はわずかに流動的で気泡多い。裏面には炉床粘土、粗砂が付着する。
108	2060	炉底滓	74×75×51	252	暗灰褐色～暗赤褐色	排滓孔付近の滓。中央部が凹んでおり、滓の通り道になる。全体に2次的錆付着多い。裏面は排滓孔の形態を残す。
108	2061	流出溝滓	39×57×12	44	暗青灰色	全体に流動的で、表面にわずかに筋状のしわがみられる。下面は炉床と接し、なめらかである。
108	2062	流出溝滓	32×58×22	33	暗青灰色～暗青灰褐色	表面は流動的。急冷時の細かいしわが残る。下面は炉床に食い込み、細かな凹凸が多い。
108	2063	流出溝滓	69×79×37	230	暗灰褐色～暗緑灰褐色	上面は気泡による凹凸が著しい。下面は炉床粘土の付着が見られる。上面にも粘土、粗砂の混入が見られる。
108	2064	流出溝滓	32×58×22	160	暗青灰色～暗青灰褐色	表面は流動的。細かいしわが残る。下面は炉床に食い込み、細かな凹凸が多い。
108	2065	鉄塊系遺物	30×24×22	13	明褐色	表面は酸化土砂に覆われる。放射状のひび割れがみられる。

(3) 古墳出土鉄滓

3次調査では9基の古墳から鉄滓が出土した。以下ではこれらの鉄滓の出土状況を古墳毎に述べ、合わせて古墳供献鉄滓の位置付けについても言及することにする。

1号墳　古墳供献鉄滓をもつ古墳のなかで最も鉄滓の出土量が多く、個体数で31個、総重量で1442.7gに上る。うち9個体を図化する。2066～7は炉壁で、いずれも小片。2066は送風孔付近と考えられるが詳細は不明。いずれも墳丘表土出土で、流れ込みの可能性がある。2070は鉄塊系遺物で、墳丘表土からの出土。これらの遺物及び全鉄滓の出土状況から、以下のことが特徴づけられる。鉄滓の種類では、炉内滓が比較的多く出土しており、羨道からの出土を中心とする。また墓道からは精練、鍛練の両鍛冶滓のみが出土する。出土位置では、羨道、墓道からの出土量が多く、墳丘からの出土量は比較的少ない。

2号墳からは1個体のみ出土した。2075は炉底滓。墳丘表土から出土し、7号墳出土2076に類似す

る。小型の滓である。

7号墳からは個体数6個が出土し、総重量1826.7gを計る。2076は炉底滓で、供献鉄滓のなかでは大型の部類に入る。コーナー部分にあたり、一部炉底と炉壁の隙間に食い込むかたちになる。7号墳全体では、鍛練鍛冶滓の割合が全体に高いことと、その鍛練鍛冶滓が全て墳丘基底面から出土していることがいえる。また表土からは炉内滓が出土するが、いずれも小片である。

8号墳からは12個体、総重量1115.8gが出土している。2079は炉内滓で、上面はやや流動的な様相を呈する。2080～3は碗形滓で、いずれも扁平な作りになる。8号墳出土鉄滓を通じていえることは、碗形滓の割合が高いことである。これらの碗形滓はいずれも周溝から出土している。周溝からの出土は碗形滓に限らず多く、重量比で半分以上を占める。またマグネタイトが見られることも特筆すべき内容である。

9号墳からは1号墳に次ぐ量の鉄滓が出土している。個体数で、19個体、総重量では1号墳を上回る1934.5gの鉄滓が出土する。2086・2087は炉壁で、古墳供献鉄滓のなかでは比較的大型である．いずれも表面の凹凸が著しく、また炉壁の内部も空隙が目立ち、非常に粗く、実際に製錬に使用された炉壁とは考えにくい。2088・2089の炉内滓は小型のものである。これらの鉄滓を含め、9号墳から出土した鉄滓はやや特殊な様相を示す。まず、出土位置については、全て墓道からの出土となる。また炉壁の割合が非常に高く、しかも大型の炉壁を含む。さらに、流出滓、炉内滓など製錬の一連の過程で生じる滓をほぼ1セット含み他の古墳と比較しても一段特殊な内容となっている。また鍛冶滓が、9号墳では全く見られないのも特徴である。

10号墳からは墳丘表土から炉底滓が1点出土している。

14号墳からは墳丘周辺で炉壁が2個体計100.4g出土する。いずれも小型で、強い被熱を受けていない、いわゆる焼結粘土塊に属するもので、製錬時の炉壁ではないと考えられる。

20号墳からは墳丘表土から炉底滓が1点出土している。2085は比較的小型で、炉底縁辺部に位置する滓である。

以上、各古墳毎に様相を見てきたが、比較的まとまった量を出土している1・7・8・9の各古墳を主に、古墳供献鉄滓について見ていく。まず093・108の両製鉄遺構から出土した鉄滓と類似した鉄滓は、古墳供献のものからは少ない。20号墳の炉底滓が108にやや近い感はあるが、いずれにしても少量であり、2基の製鉄遺構の操業と古墳供献鉄滓の直接的なつながりは薄いものと考えられる。また古墳供献鉄滓のうち、製錬滓は主に墳丘表土から出土し、石室・墓道からは鍛冶滓が出土する傾向が大まかに見られる。ただし、1号墳羨道で炉内滓が大量に出土し、また9号墳で特異な状況を示すなど、一概に言えない部分もある。また時期差についてもはっきりしたことはわからない。

7・8号墳の鉄滓の種類を見ると、7号墳は製錬滓、鍛冶滓、含鉄鉄滓、8号墳は製錬滓、鍛冶滓、鉄塊系遺物で、各々の古墳の年代から見てもこの組み合わせは明らかに追葬を前提としたものである。

9号墳出土の鉄滓については、炉壁がいずれも粗く、ほぼ同一の操業時の炉から生成されたと考えられる。ただ093・108の各製鉄炉と比較した場合、9号墳出土の炉壁は比べようもなく粗悪で、操業の可能性自体を疑問視する余地すらある。特に炉壁の練りが甘く、操業時の高温に耐えられないことから、これらの炉壁は本来の鉄を生産するためのものではなく、9号墳への供献を目的として生成されたものであるという仮説も想定できる。9号墳で製錬時の滓がほぼセットで揃っていることも、このことを伺わせるものである。9号墳が7世紀初頭から8世紀の追葬まで確認されており、一連の鉄滓の時期特定は難しい。上部の流出した閉塞石とともに炉壁は出土し、7世紀後半以降の最終追葬に近い時期に供献されている。この段階で、それ以前の鉄滓の古墳供献と異なった供献方法、すなわち

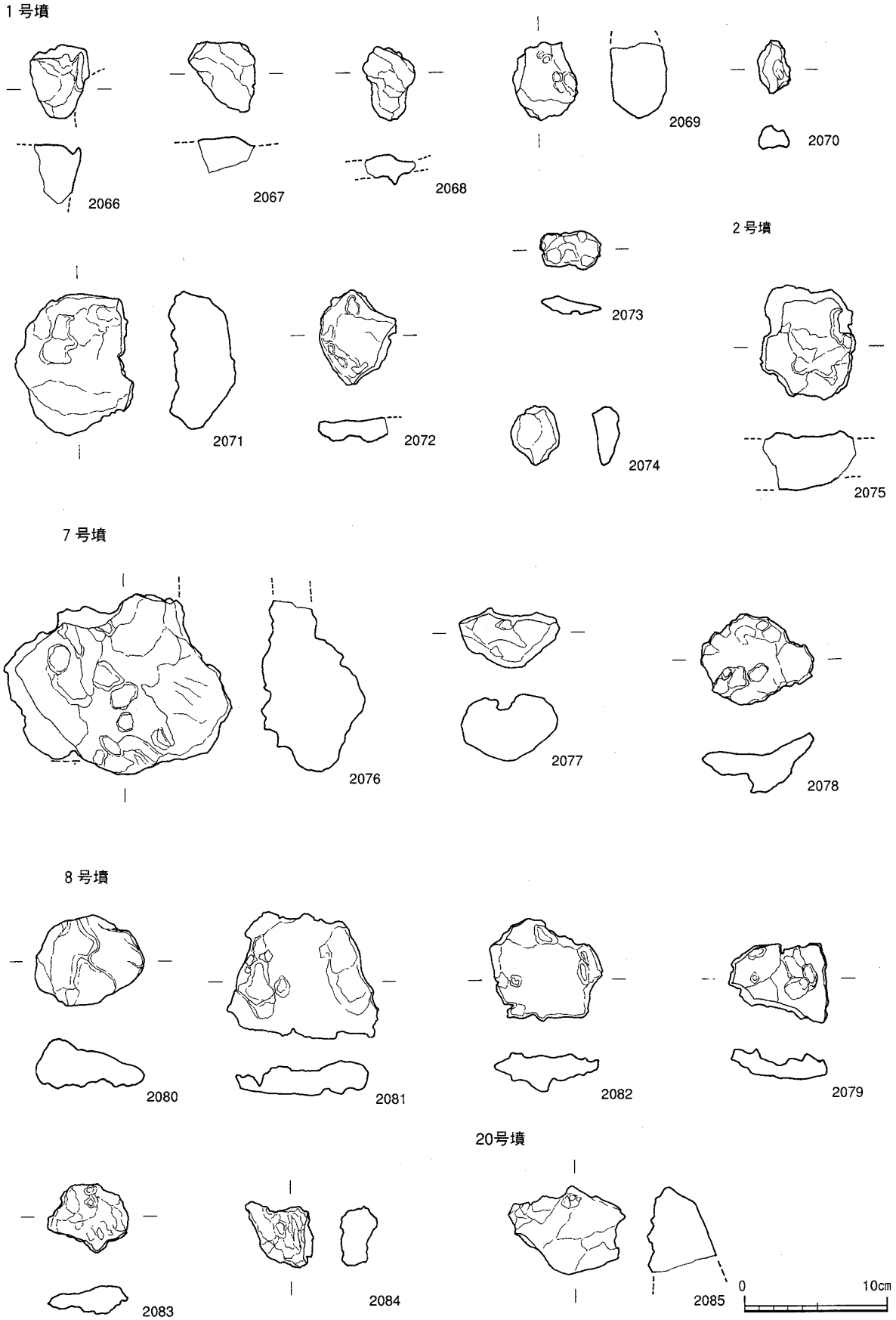


Fig. 182　古墳出土鉄滓実測図 1 （1/4）

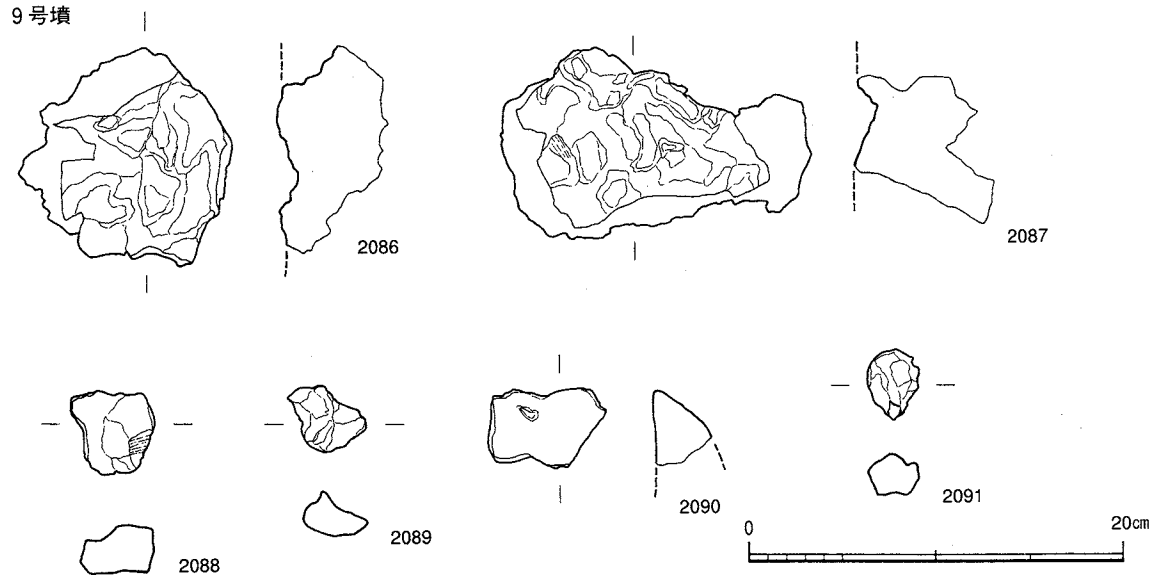


Fig. 183　古墳出土鉄滓実測図２（1/4）

Tab. 3　古墳出土鉄滓分類表

	1号墳		2号墳		7号墳		8号墳		9号墳		10号墳		14号墳		20号墳	
	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量
製錬鍛冶滓																
炉壁	3	88.6							11	1501.9			2	100.4		
炉底滓			1	223.5	1	1516.2	1	119.6			1	187.4			1	310.5
炉内滓	18	599.8			2	18.4	5	377.6	6	376.0						
流出孔滓									1	35.2						
砂鉄焼結塊							1	285.6								
鉄塊系遺物		32.8														
含鉄鉄滓	2	183.2			1	102.2	2	79.4	1	21.4						
マグネタイト							1	51.1								
精練鍛冶滓	3	454.4														
鍛練鍛冶滓	4	80.0			2	189.9	2	202.5								
玄室																
羨道	12	338.0					2	79.4								
墓道	7	534.4							19	1934.5						
墳丘表土			1	223.5	3	118.6	2	170.7			1	187.4			1	310.5
周溝							6	719.6								
墳丘基底面					2	189.9										
包含層その他	11	382.0			1	1516.2	2	146.1					2	100.4		

Tab. 4　古墳出土鉄滓観察表

出土古墳	出土位置	No.	鉄滓種類	縦×横×厚さ(mm)	重量(g)	色　調	特　記　事　項
1号墳	1区包含層	2066	炉壁	50×40×30	67	青灰色～薄灰赤褐色～薄赤褐色	通風孔脇の部分に当たる。送風孔際は内側に盛り上がる。内面のガラス化は比較的弱い。壁体粘土は粗砂を多く含み、粗い。
1号墳	羨道部末端	2067	炉内滓	45×40×25	86	薄赤褐色	上面は比較的平滑で、気泡がわずかに認められる。滓体は一部気泡があるが、全体に密で重い。破面多く、小割りの可能性有。
1号墳	羨道部末端	2068	炉内滓	47×30×22	44	暗赤褐色	上面は比較的平滑で、やや流動的な様相。下面は粘土砂粒が付着する。全体に密で重い。
1号墳		2069	含鉄鉄滓	50×40×40	156	明黄褐色	上面は平滑で、一部鉄分が付着する。下面は滓化が進み、砂粒を多く巻き込む。全体に2次的な錆化が著しい。メタル度H(○)
1号墳	墳丘表土	2070	鉄塊系遺物	38×24×17	33	褐色～灰色	表面は錆化によるひび割れによって剝落が多く見られる。全体に凹凸激しい。滓体は密で重量感がある。
1号墳	墓道黄色土	2071	碗形滓	90×80×40	390	薄明黄褐色～薄明褐色	上面はやや凹凸が見られ、一部流動的になるが全体に平滑。下面は炉床粘土が付着し、一部軽いガラス化を起こす。滓体は比較的密で重い。
1号墳	1区包含層	2072	碗形滓	50×60×25	102	明黄褐色	上面は比較的平坦で、一部鉄分の錆化が見られる。下面は一部炉床粘土の付着が見られる。全体に密。
1号墳	墓道黄色土	2073	碗形滓	43×27×12	14	暗赤褐色	上面は全体に軽く凹み、気泡が若干見られる。下面は凹凸著しい。全体に2次的な錆化が多く見られる。
1号墳	羨道下層	2074	碗形滓	35×35×17	21	紫褐色～薄明褐色	上面は比較的平坦で、やや凹む。下面は凹凸著しく、炉床粘土が付着する。全体に2次的錆化が見られる。
2号墳	4区表土	2075	炉底滓	80×66×40	224	暗黒赤褐色～薄褐色	上面は気泡多く、凹凸著しい。被熱は比較的弱く、壁体は粗い。下面は粘土粗砂が付着する。
7号墳		2076	炉底滓	108×158×74	1517	暗黒灰色	炉のコーナー部分に当たる。上面はやや流動的で、一部細かいしわが見られる。突出部分は壁に食い込んだ部分で、滓のなかに砂粒を巻き込む。下面は炉床粘土が付着する。
7号墳	3区表土	2077	炉内滓	70×45×35	100	明黄褐色	多孔質で被熱弱い。外面3箇所に鉄塊付着による錆化が見られ、他に全面に二次的錆化が見られる。メタル度H(○)
7号墳	墳丘最下	2078	碗形滓	80×64×43	97	薄褐色	上面は比較的平滑で、やや流動的。わずかに2次的な錆化が見られる。下面は凹凸著しく、炉床粘土を一部巻き込む。滓体は多孔質。
7号墳	墳丘最下	2079	碗形滓	55×70×21	93	薄褐色	上面は凹凸著しく、気泡多い。小レキを一部滓のなかに取り込む。下面は比較的滑らかで、炉床粘土がわずかに付着する。全体に薄手。
8号墳	1区周溝	2080	炉内滓	76×63×35	203	黒褐色～暗褐色	上面は流動的で、気泡多い。下面は小さな凹凸が著しく、やや流動的である。滓体は密で重い。全体に摩耗する。
8号墳	1区周溝	2081	碗形滓	106×89×25	286	薄褐色	上面は比較的平坦で、粘土砂粒が錆に取り込まれて付着する。下面は凹凸が多く、炉床粘土が食い込む。
8号墳	1区周溝	2082	碗形滓	78×71×29	138	薄赤褐色	上面は比較的平坦で鉄分による錆膨れがみられる。下面は凹凸が著しく、一部炉床粘土を取り込む。
8号墳	2区周溝	2083	碗形滓	50×56×21	56	薄褐色	上面は小さな凹凸が目立ち、一部錆化する。下面も凹凸著しい。滓の周縁はめくれる形になる
8号墳	羨門付近	2084	鉄塊系遺物	46×48×25	57	明褐色	全面錆化し、ひび割れが生じる。全体に凹凸著しく、一部粘土を巻き込む。メタル度L(●)
20号墳	3区表土	2085	炉底滓	63×82×49	311	暗赤褐色～薄灰褐色	上面はわずかに流動的な部分が見られ、鉄分を含む部分が若干点状に見られる。下面は炉床粘土が付着し、炉床への食い込みもも見られる。滓体は密で重い。
9号墳	墓道	2086	炉壁	117×113×70	496	黒褐色～薄赤褐色	内面は溶解著しく、ガラス質化し、凹凸著しい。外面は一部ガラス化するが、全体に被熱弱い。壁体は砂粒を多く含み、スサを若干含む。全体に粗末で多孔質。
9号墳	墓道	2087	炉壁	166×102×75	401	暗黒褐色～灰褐色	内面は凹凸著しく、溶解激しい。外面も凹凸著しい。壁体はスサを多く含み、粗砂を多く含む。壁体全体が粗末で多孔質である。。
9号墳	墓道	2088	炉内滓	45×45×27	60	黒褐色～灰黒色	上面に砂鉄焼結気味の部分がある。上面は比較的平坦で下面は凹凸著しい。滓体は密で重く、一部壁体ガラス質を取り込む。
9号墳	墓道	2089	鍛練鍛冶滓	35×42×24	20	暗褐色～灰褐色	全体に多孔質で凹凸著しい。炉床粘土を下面に取り込む。比較的軽い。
9号墳	墓道	2090	流出溝滓	64×42×31	102	黒褐色～明褐色	上面は平滑で流動的な様相を見せる。下面は炉床粘土が付着し、一部炉床への食い込みが見られる。滓体は密で重い。
9号墳	墓道	2091	含鉄鉄滓	38×28×27	21	明褐色	全面錆に覆われ、一部錆膨れも見られる。滓体は比較的密で重い。メタル度H(○)

9号墳で見られるような炉壁、含鉄鉄滓を含めた「一括供献」の行為が生じたものとも言える。この背景として、製錬の開始が挙げられ、それにより可能となった供献形態が生じたということも言えよう。

従来の「古墳供献鉄滓」に対する考えは、数次にわたる実際の操業のなかで生じ、蓄積された鉄滓を供献したものというものであった感がある。今回の調査で、9号墳については少なくとも実際の操業を想定することが困難で、さらに供献された滓の種類、出土位置などからみて、供献のための儀礼的な特別な操業を想定することが可能であるとの認識を得た。この見方についてはまだ仮定の域を出ないが、古墳供献鉄滓についての幅広い見方の可能性を見い出した点で、意義あるものと考える。

27. 窯　　跡

131　尾根上に位置し、横口炭焼窯の上方で検出された。地形の傾斜方向とは東に振れた主軸方向をとる。焚口は径50cmの円形の下端を呈し、基底は焼土化している。西側奥壁はオーバーハングして立ち上がり、南北の両側壁は近い立ち上がりである。壁高45cmが遺存する。壁は下位が赤色、上部が還元した青灰色を呈す。煙道は主軸から斜め方向に径30cmの略円形に穿つ。煙道壁面は全面、還元した青灰色を呈す。前庭部は裾広がりに延長し焚口奥壁から160cmまで確認できた。基底は焚口とほぼ水平で最下に炭層の黒色土が約10cm堆積する。

28. 焼 土 壙

ここでは古墳墳丘下で検出された焼土墳以外のものを一括して説明を行うが紙面の都合上、一部割愛する。焼土壙は古墳の祭祀行為に伴うものや、それ以外の、可能性としては製鉄関連の炭製造など性格も多様と考えられる。形状からは概ね以下のように分類できる。

Ⅰ類　長方形プランを呈すもの――――049、050（P－73に掲載）
　　049は８号墳Ⅲ区周溝内、050は７号墳Ⅲ区周溝内で検出

Ⅱ類　楕円形を呈すもの――――――033

Ⅲ類　略三角形を呈すもの――――――045、169、046、089、054、090、035、094、091、083、072、084

最も多く検出された。基底面の長軸長110～130cmのものが多いが、100cmを切る072、045も含まれる。斜面上に位置し主軸を等高線に直行させたものが多い。高所に略三角形の底辺、低所に頂部をおいた形状をなす。通風、掻き出しの機能を考慮したものと思われる。

Ⅳ類　小形のもの――――――――――034、037、039、044、082
　　Ⅲ類が小形化したものと更に小規模で方形、円形ないし楕円形のものがある。

049　８号墳Ⅲ区の周溝際で検出された。主軸長170cm、短軸長75cmの長方形プランを呈す。西側短辺が東側に比べやや幅広くなる。壁高50cmが遺存し直に立ち上がる。焼壁は東半に遺存する。基底はほぼ水平で、最下に層厚10cmの炭層が堆積していた。Ⅰ類としたものである。

033　北側丘陵斜面上の10号墳から降った墓道際で検出された。上端は主軸長200cm、最大幅112cmを測り、東側に幅広い楕円形プランを呈す。下端は主軸長160cm、短軸長68cmを測る隅丸の長方形を呈す。上端同様東辺側がやや幅広い。壁高50cmが遺存し、傾斜をもって立ち上がる。焼壁は西側によく残る。基底面の西辺際に倒置した高坏１に倒れかかるように長頸壺が置かれていた。この遺物上には剝落した焼壁が被る。焼土壙に遺物を供献した唯一の例である。

遺物　図示した遺物２点は基底面出土である。須恵器高坏1173は坏部に２条、脚部中央に２条の沈線を巡らす。脚部にはカキメをほぼ全面に施す。完形である。1174は台付長頸壺である。胴部上位に櫛歯斜行連続文、頸部と胴部に各２条の沈線を巡らす。口縁部の一部と台部が欠損する。

035　調査区北際の丘陵斜面に位置する。周辺には造成面が見られ、焼土壙が集中する。主軸長158cm、最大幅120cmを測る略三角形を呈す。主軸を地形の傾斜方向に直行させる。壁高40cmを測り、やや傾斜をもって立ち上がる。ほぼ全周に還元した青灰色を混じえた焼壁が見られるが、基底近くに堆積した炭層の範囲に焼壁は無い。Ⅲ類としたものである。

094　調査区南西際の斜面で検出された。北東隅を小石室23号から切られる。主軸長165cm、最大幅128cmを測る略三角形のプランを呈す。Ⅲ類としたものである。ほぼ全周に焼壁がみられ基底は地形

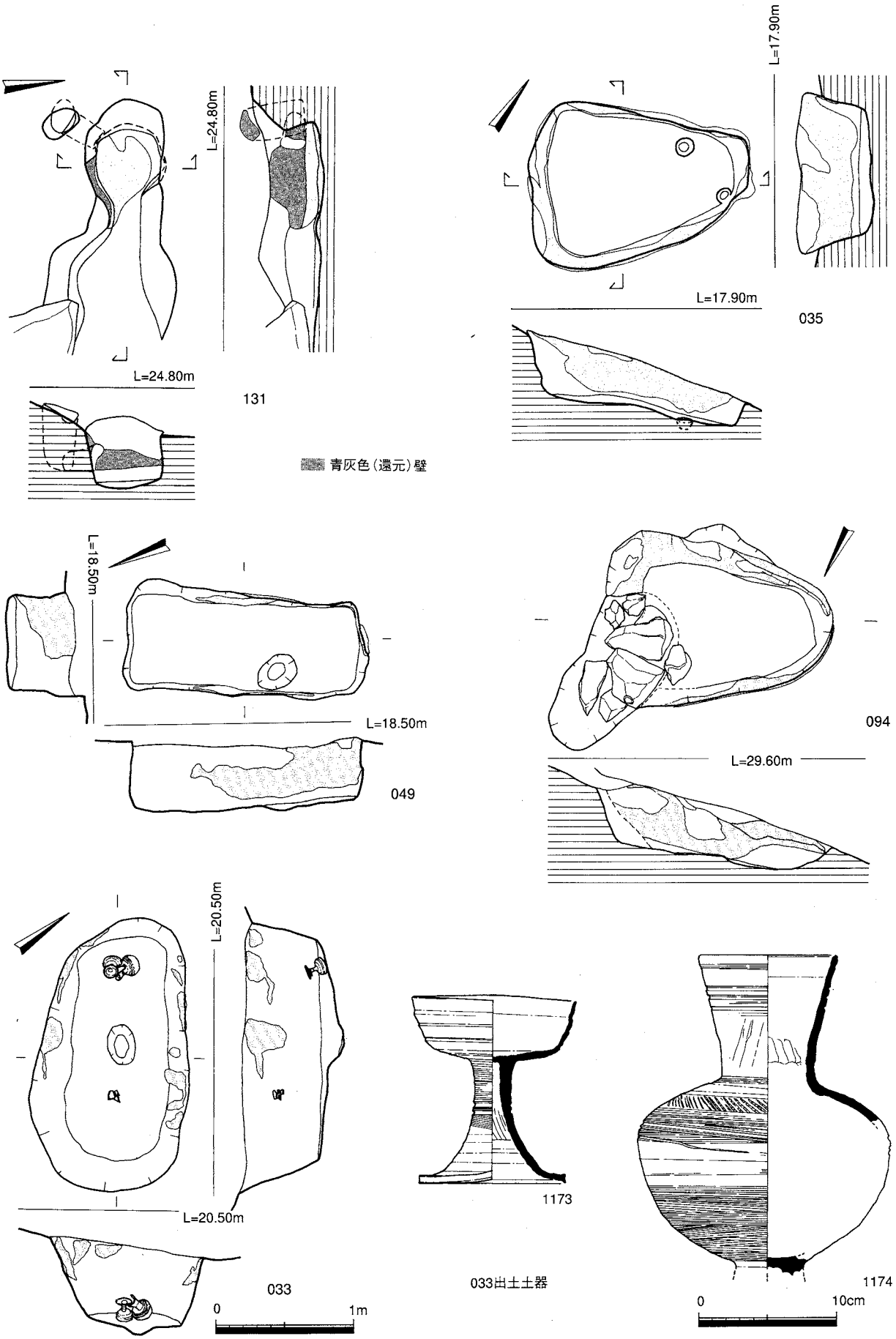


Fig. 184　焼土壙実測図・出土遺物実測図（1/40・1/4）

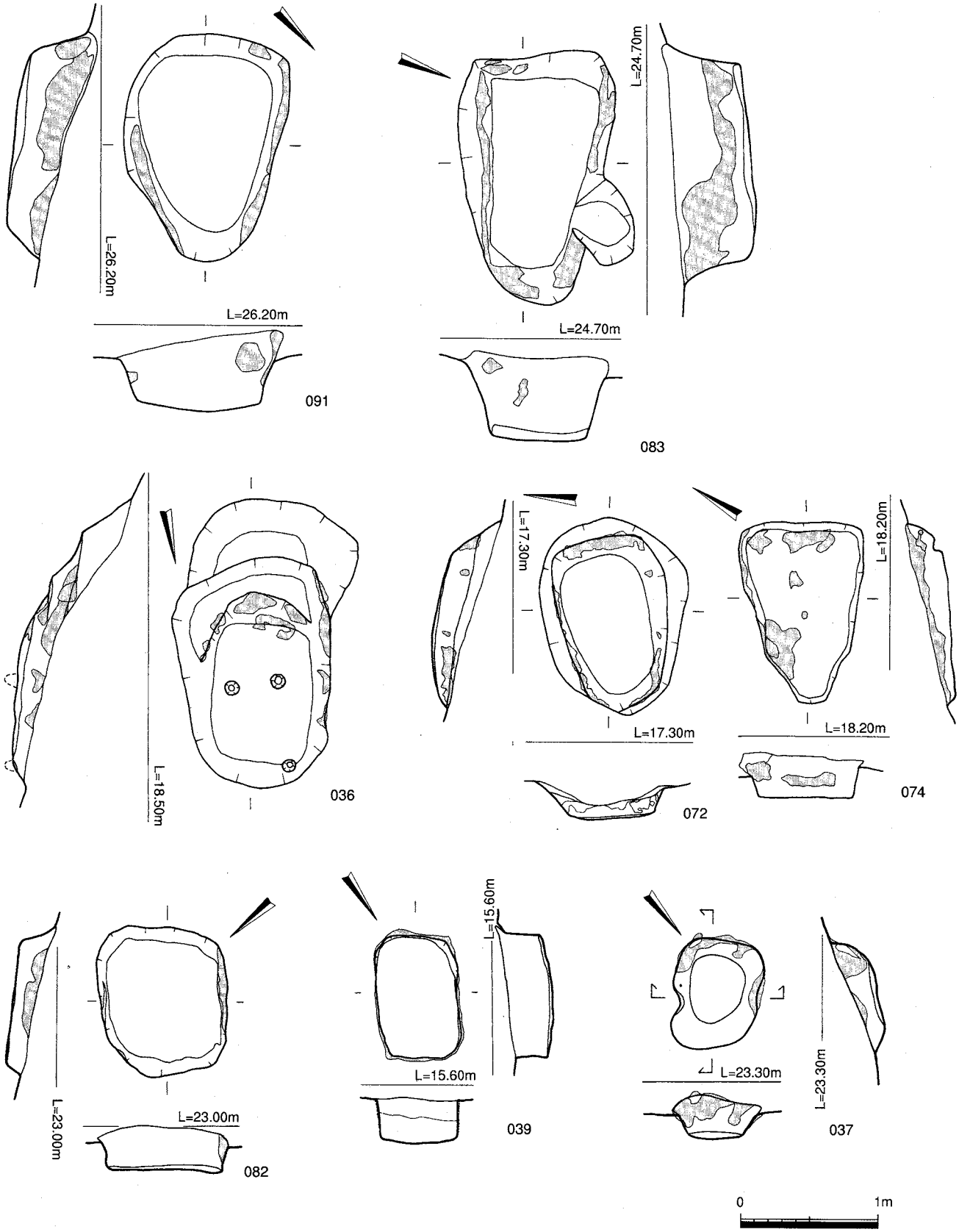


Fig. 185　焼土壙実測図２（1/40）

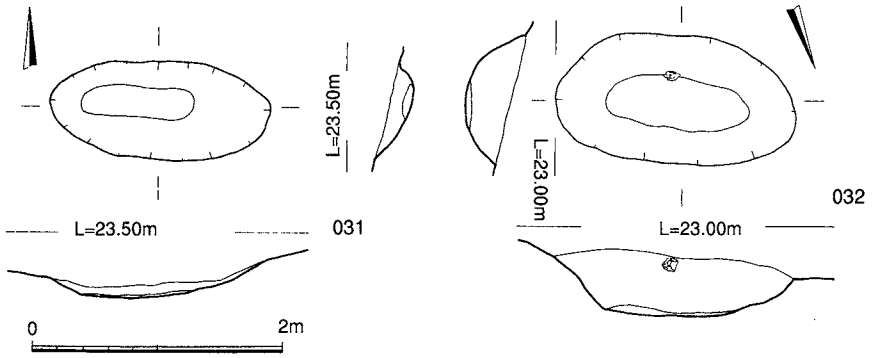


Fig. 186　031・032 実測図（1/60）

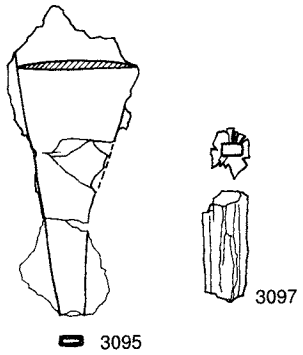


Fig. 187　031・032
出土遺物実測図（1/2）

に合わせて西側に下降する。

091　16号墳の北側に位置した尾根線よりの斜面上に築造されている。主軸長165cm最大幅110cmを測る。最下の炭層は基底面上約10cm堆積し、北辺へ立ち上がっている。

083　尾根線上の３号墳II区墳端から検出された。主軸長180cm、最大幅110cmを測る。壁高50cm遺存し、比較的直に近い立ち上がりである。基底面上の最下層に約10cm炭が堆積する。炭層は壁に向かって立ち上がるレンズ上の堆積である。

036　調査区の北東部の斜面上から検出された。周辺には焼土壙が密集する。主軸長160cm、最大幅115cmを測る。基底面は100×70cmの長方形を呈す。壁は緩やかな立ち上がりで西辺側にテラスが検出されたが、壁が崩落したものか。

072　調査区南西部の斜面上から検出された。主軸長145cm、最大幅95cmを測る。遺存が悪いため上端が縮小しているが、やや小規模な類になろう。

074　調査区南側の斜面に位置する。周辺では竪穴住居跡が検出された。検出された上端は主軸長130cm、最大幅90cmを測るが、基底面では他のIII類と同規模の主軸長120cmを測る。東壁が緩やかな傾斜で立ち上がっているのに対し、側壁は直に近い。

082　尾根線上の３号墳と９号墳との間に位置する。上端は崩落で歪みがあるが、基底は１辺80cmの隅丸方形を呈す。壁は比較的直にたちあがる。小形のIV類に含まれる。

039　調査区北際、８号墳III区周縁に位置する。長軸長87cm、短軸長58cmを測る長方形プランを呈す。焼壁は全周にみられ直に立ち上がる。基底上に層厚20cmの木炭の形を留めたものを含む炭層が堆積する。

037　調査区北側の６号墳と10号墳の中間に位置する。長軸長80cm、短軸長60cmの楕円機プランを呈す。壁は傾斜して立ち上がり、最下の炭は少ない。

29. 土　　壙

031　調査区東際、10号墳の南東部で検出された。032と主軸方向を同じく並列している。長軸長175cm、短軸長80cmの狭長な楕円形プランを呈す。壁は緩やかに立ち上がり、基底面との境が不明瞭となっている。東よりの基底面から鉄鏃3095が出土した。

遺物　3095は広根の鉄鏃であるが、広根式であるが、鏃身は三角形と思われる。

032　031の北側に並列して検出された。長軸長190cm、短軸長100cmの楕円形プランを呈す。壁は緩やかな傾斜で立ち上がり、壁高50cmを測る。上部から鉄滓、西よりの基底面から鉄鏃茎部の3097が出土した。

30. その他の遺構と遺物

本調査では掲載した古墳時代後期の遺構、遺物以外に縄文後期以降と思われる黒曜石製の石鏃、剝片や弥生中期初頭の遺構、遺物が検出された。ここでは一部を掲載し、詳細は別機会に委ねたい。

052 調査区北西部の8号墳II区周溝内で1607が潰れた状態で、1608、1609がその周辺に散在していた。布留期に属す。

133 調査区西側の丘陵裾部から検出された。南西側は削平され、不明瞭になっている。埋土中に焼土、炭を含む。土壙内からは多くの土器が出土。器種は甕と壷に限られ、甕は断面三角形と如意状口縁がある。弥生中期初頭の時期に含まれる。

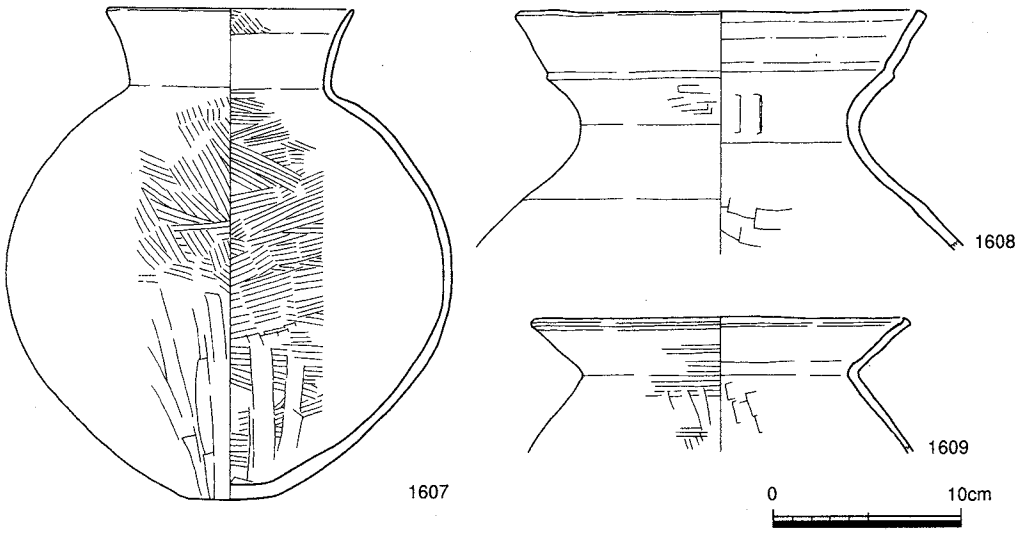


Fig. 188 052 出土遺物実測図（1/4）

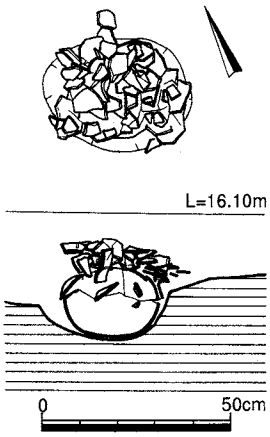


Fig. 189 052 実測図（1/20）

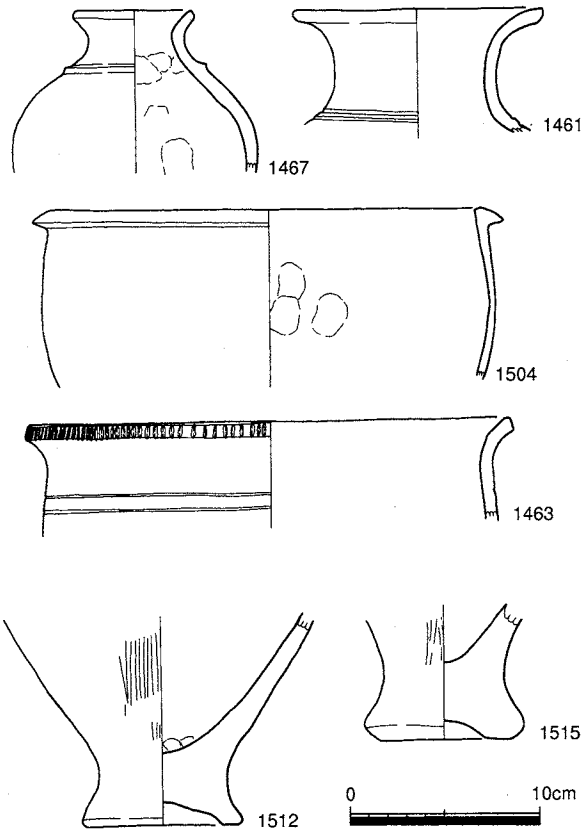


Fig. 190 133 出土遺物実測図（1/4）

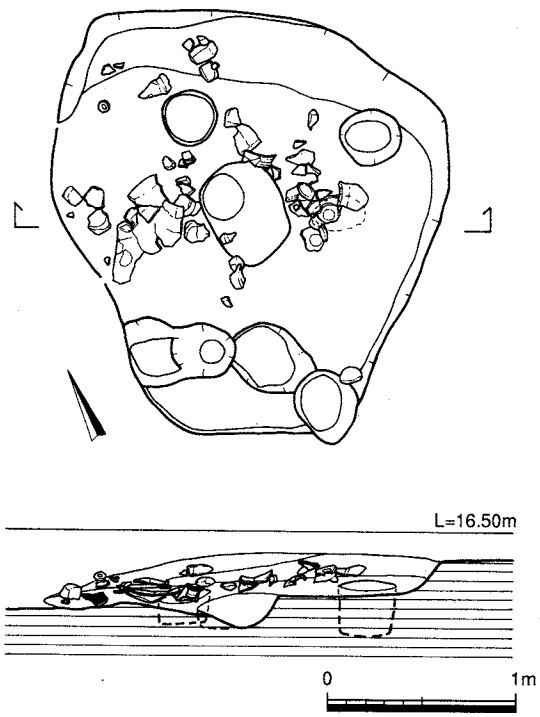


Fig. 191 133 実測図（1/40）

31. まとめ

出土須恵器について

時期決定にあたっては北部九州で多く用いられる小田氏の編年と牛頸窯址を中心とした須恵器編年を報文中でも使用した。しかし、該当期がやや曖昧で中間的なものも比較的多く認められる。特にIII～IV期にかけては境界が判然とせず、ここで、出土遺物の須恵器坏を中心に少し整理し直し、比定しておく。

IIIａ期は天井部と体部の境や口唇部に沈線状の段を有した特徴を持つものであるが、７号墳の墳丘内に供献された器高が高いものと８号、10号墳等で出土した器高が低くなり、天井部が丸みを帯びるものに分けられる。後者は体部と天井の境の沈線が無くなるものも現れ、より後出的でIIIｂ期に含まれる可能性があるが、前者をIIIａ期(古)とし、後者をIIIａ期(新)とし区別しておく。

IIIｂ期に該当するものとして15号墳出土の口径14.0cm前後、体部に深みがあり、丸みを帯びた坏があげられる。以後、縮小化していくが、IVａ期(古)段階では10号墳の293のように口径14.0cmを測るものがある。IVａ期～IVｂ期にかかるものとして６号墳出土の坏があるが、器高が低くなり、天井や底部のヘラケズリが粗略になる。IVａ期(新)に比定しておく。IVｂ、Ｖ期以降は従前どおりの編年に１号、５号、９号墳の出土遺物がよく合致する。

この時期分類によって、各古墳の営続期間を記したものが表５である。墳丘上、周溝内から出土した遺物には他古墳から流出混入したものも含む可能性があり、初葬を示す遺物は墳丘内もしくは石室に明らかに副葬されたと考えられる遺物になるべく限るようにした。個別にみると報文中記載したように16号墳周溝内から出土した遺物に２号墳のものを含む可能性が高く、表に載せている。15号墳は石室内出土の1719、７号墳は墳丘内に供献された023、063等に８号墳は墳丘基底面上の176、169に10号墳は墳丘内に供献された248、297等に、６号墳は表土等に古いものを含むが、Ｉ区墳丘基底近くに供献された406、374に築造時期が求められると考えられる。９号墳石室内出土のものにIIIｂ期のものを２点含むが（783、784）最下床面から多く出土したIVａ期の坏を石室の形態も考慮し築造時期のものとする。

Tab. 5　各古墳出土須恵器分類一覧

古墳名	II期	IIIａ古	IIIａ新	IIIｂ	IVａ古	IVａ新	IVｂ	V	VI	VII
3 号 墳	○	○								
7 号 墳		○	○	○						
8 号 墳			○	○						
2 号 墳			○	○						
15 号 墳				○	○					
10 号 墳				○	○					
6 号 墳					○	○				
4 号 墳				○	○	○	○			
5 号 墳					○	○	○	○	○	
9 号 墳					○	○	○	○	○	○
1 号 墳						○	○	○		

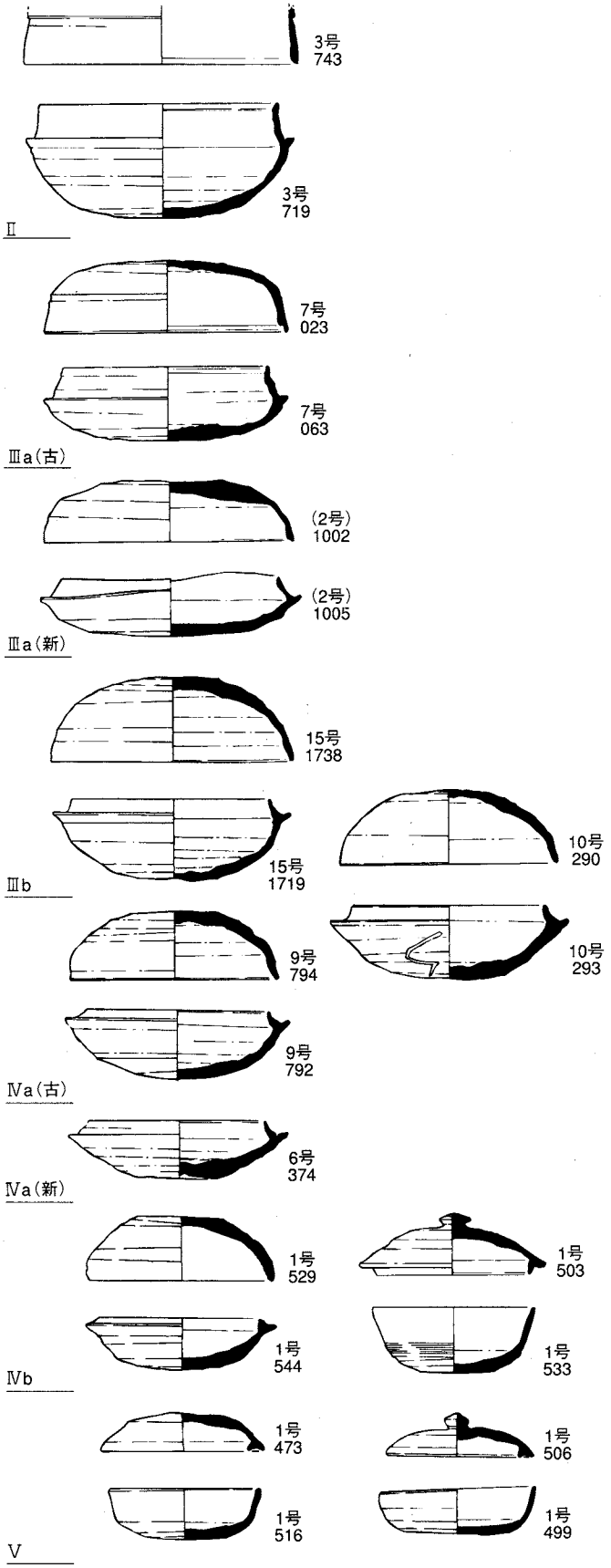


Fig. 192　古墳出土須恵器分類（1/4）

(1) 遺構の時期

調査対象の中心を占める古墳以外に縄文後期以降と思われる石鏃や剝片、弥生中期初頭の遺構・遺物等があるが、この章では古墳時代後期の遺構に限って述べていく。

古墳は第２次、第３次調査をあわせ11基（小石室を除く）が検出された。牛頸窯を中心とした北部九州の編年を援用し、Fig. 192で示した須恵器分類により古墳の推移を示すと表５の様になる。立地から２号－15号、６号－10号、７号－８号、４号－５号の近親的な関係が想定され、出土遺物からは近い時期に累積して築造されていった事が明らかである。

本文中、Ⅰ類とした狭長な竪穴式小石室を埋葬施設とする古墳は14号石室内出土の坏が古相を示すものの概ねIVa期内に含まれ、短期の間に次々と埋葬されたものと思われる。その他のII類、III類とした小石室は出土遺物が無いため明確な時期は明らかにできないが、III類に関しては立地が周辺域に限られる事や石室形態が粗略になることから後出するものと思われる。土壙墓は調査区西際の谷部近くに群を形成している。時期は156出土の坏に新相がみられるが、概ね小石室同様IVａ期内に含まれる。丘陵南側裾部で検出された竪穴住居跡もIVａ期内に収まると考えられ、その後廃絶された竪穴住居跡の上に１号墳がIVａ期(新)に築造される。

古墳の築造が終焉を迎えたV期以降に本格的な製鉄操業が行われたものと考えられ、製鉄炉93、横口式炭焼窯084はこの時期に築造されたものと思われる。更に古墳に供献された鉄滓量を考慮すれば９号墳の最終追葬時期のVI期～VII期初頭に最盛期を向かえ、横口式炭焼窯の床面の堆積状況からも短期間で操業を終えた可能性がある。

(2) 古墳の形成過程

３号墳が築造されたII期に始まり、９号墳の最終追葬と考えられるVI～VII期初頭までの間に連綿と墓域としての営みが続けられている。立地から２基の古墳が近接した５グループの集団が容易に見出

せる。調査区外の南側丘陵斜面には鋤崎古墳群B群が同じく2基近接して2グループ確認されている。谷をはさみ対峙したA群、B群との関係は具体的には不明であるが、立地、古墳規模から、古墳群の後半期にB群へ拡大したものと思われる。

A群では、先ず3号が尾根上に構築され、7号の竪穴系横口式石室が続いて築造された後、尾根上に2号、北側丘陵裾に8号、斜面に10号、4号墳が次々に築造されていく。築造の時期差は短いものと考えられる。さらに15号、6号、5号に累積していくが、その終焉は一様ではない。尾根線上の2号－15号墳はIVa期で、丘陵裾の7号－8号はIIIb期、斜面の10号－6号はIVb期、4号－5号はVI期に追葬を終える。その後小石室や土壙墓がIV期に構築されていくようになる。個別にみていくと8号墳に近接した14号、4号墳に近接して11号、12号、13号墳がある。14号は小石室中で古相の須恵器を副葬するが、8号墳の追葬が他に比べ早期に終えていることによるものか。11号、12号、13号墳は5号墳に追葬が行われた期間と並行して構築されたものと思われる。尾根線上では2号、15号墳周辺に5基の小石室が構築されている。6号、10号周辺には小石室が検出されなかったが、土壙墓の可能性がある031、032、033が付随している。更に、小石室17号墳の周溝内に検出された土壙墓159や10号墳墳丘内に構築された石室022にみられるように本古墳群の終末期には前代の古墳中にも累積して墓を構築するものがある。

IV期には新しい様相がでてくる。VII期までの追葬がみられ金銅装の太刀を副葬した盟主的な9号墳が尾根先端に築造される。尾根を境に南側の丘陵裾部では竪穴住居が建てられ、生活が営まれる。その基盤が製鉄に依存したものか証跡は無く不明。集落は小石室、土壙墓と期を同じくした短期的なものである。廃絶された要因のなかには谷近くの流路になり易い悪条件の立地であることが在ったであろう。検出された竪穴住居跡のほとんどが流失し極めて住居跡の遺存が悪い。集落の廃絶後まもなくIVb期に1号墳が築造される。墳丘基底面下には埋没した竪穴住居跡が検出されている。1号墳は位置的に孤立し、石室規模は当古墳群中最も大きく盟主的な役割をもっていた可能性がある。9号墳とは追葬に重複する期間があるが、1号墳羨道から出土した宝珠つまみの坏は9号墳からは出土せず、追葬の時期差があった可能性がある。

(3) 石室形態について

I期、竪穴系横口式石室若しくはその系譜をひくもの ―――――― 3号、7号、2号、15号

3号、7号は竪穴系横口式石室である。2号、15号は石室長が近似し、羨道の石組みは無い。プランは2号が胴張り7号は長方形プランになり横幅が拡大していく傾向にある。

II期　羨道部が連結し、横穴式石室が定型化する。―――――― 4号、10号、8号、9号

4号墳では羨道部に天井石が遺存する。壁体は小振りの石材を用い、特に羨道部は小さい。また羨道の床面は玄室よりわずかに高い。10号は4号と近似した石室形態と考えられるが羨道部の石材が大きくなり後出的である。8号、9号墳は前二者に比較し、立地、墳丘規模、使用石材の点で大きく異なる。両袖の石室で腰石が大きく、羨道長が玄室長さに近い。

III期　石室が簡略し、規模が縮小するものと、大型の石材を使用したものがある。

―――――― 5号、6号、1号

前期の4号、5号墳に近接した5号、10号墳は狭長な石室に退化し、6号墳では無袖の石室になる。一方1号墳は腰石が更に大型化し、羨道長も長さを増し、玄室長の2倍近くになる。

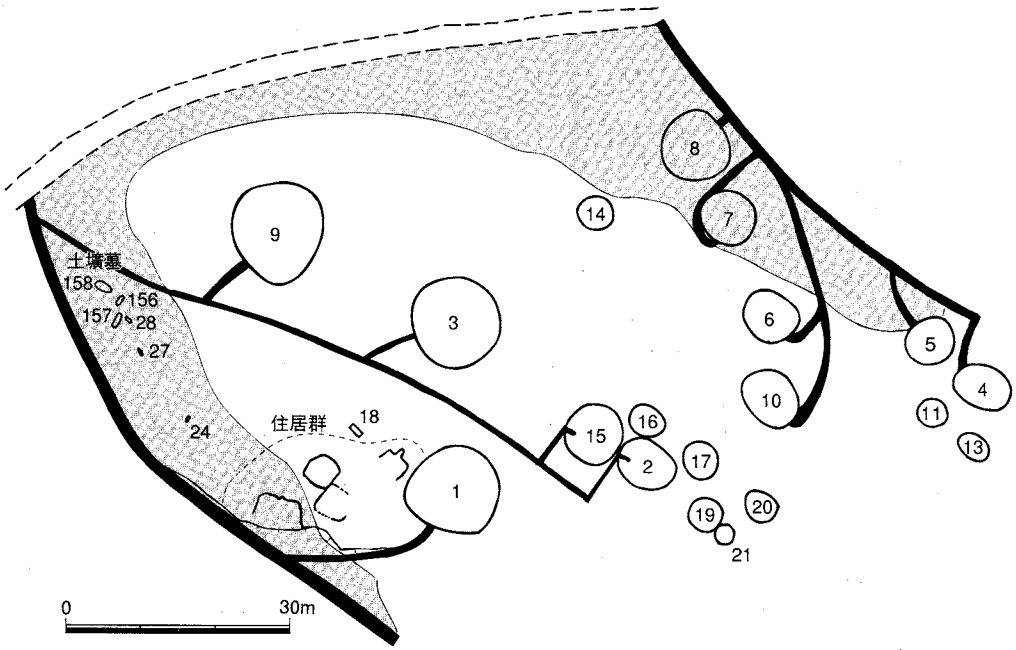


Fig. 193　鋤崎古墳群A群墓道復原図

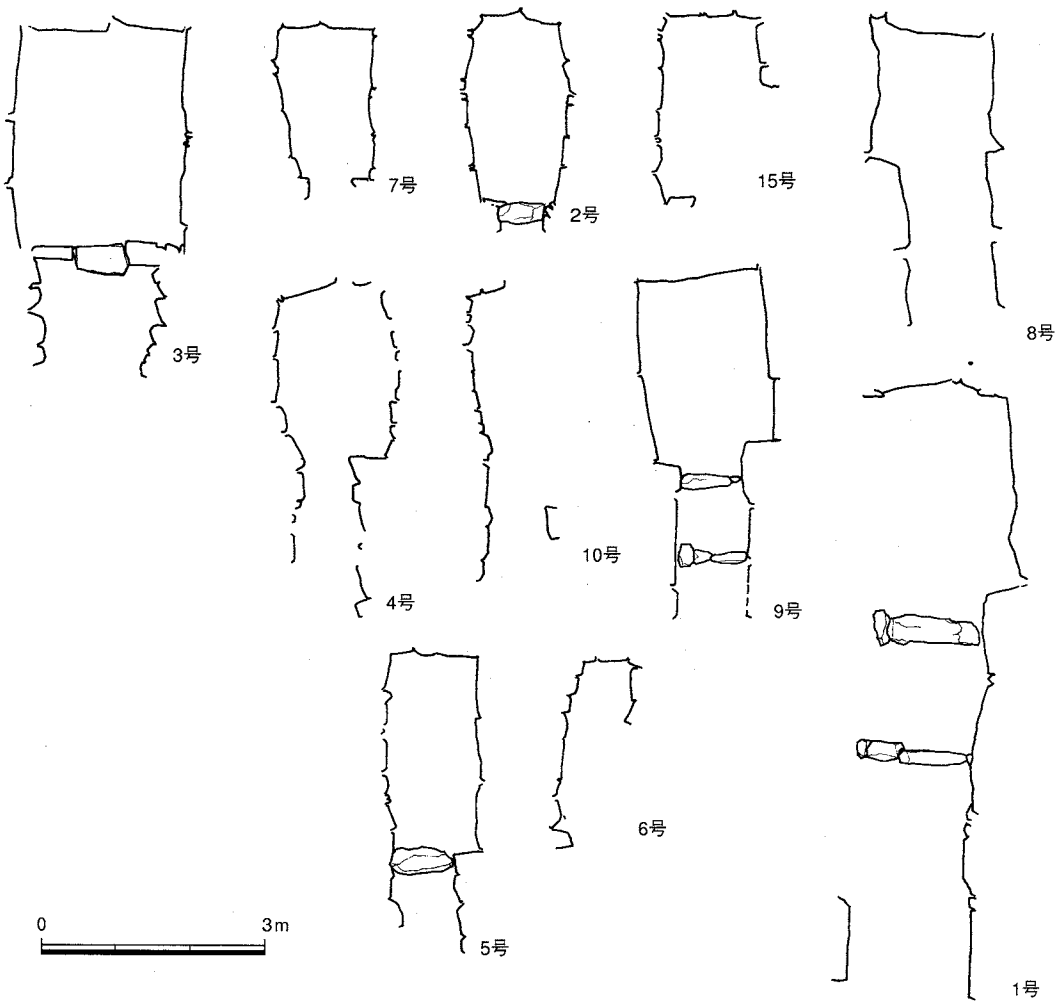


Fig. 194　古墳石室一覧（1/100）

古墳祭祀について

古墳に伴う焼土壙が墓道と対面したII区、III区の周溝内に多く見られるなど共通した祭祀行為の他近接した古墳に類似した祭祀が見られる。7号墳、8号墳には周溝内に類似した長方形の焼土壙049、050が構築され、墳丘基底にはともに焼土、炭の散布がみられ、7号墳では須恵器甕片などの土器片と、8号墳では土師器甕片ともに鉄滓が供献されている。7号墳I区の墳丘基底ちかくには5セットの須恵器坏が供献されている。

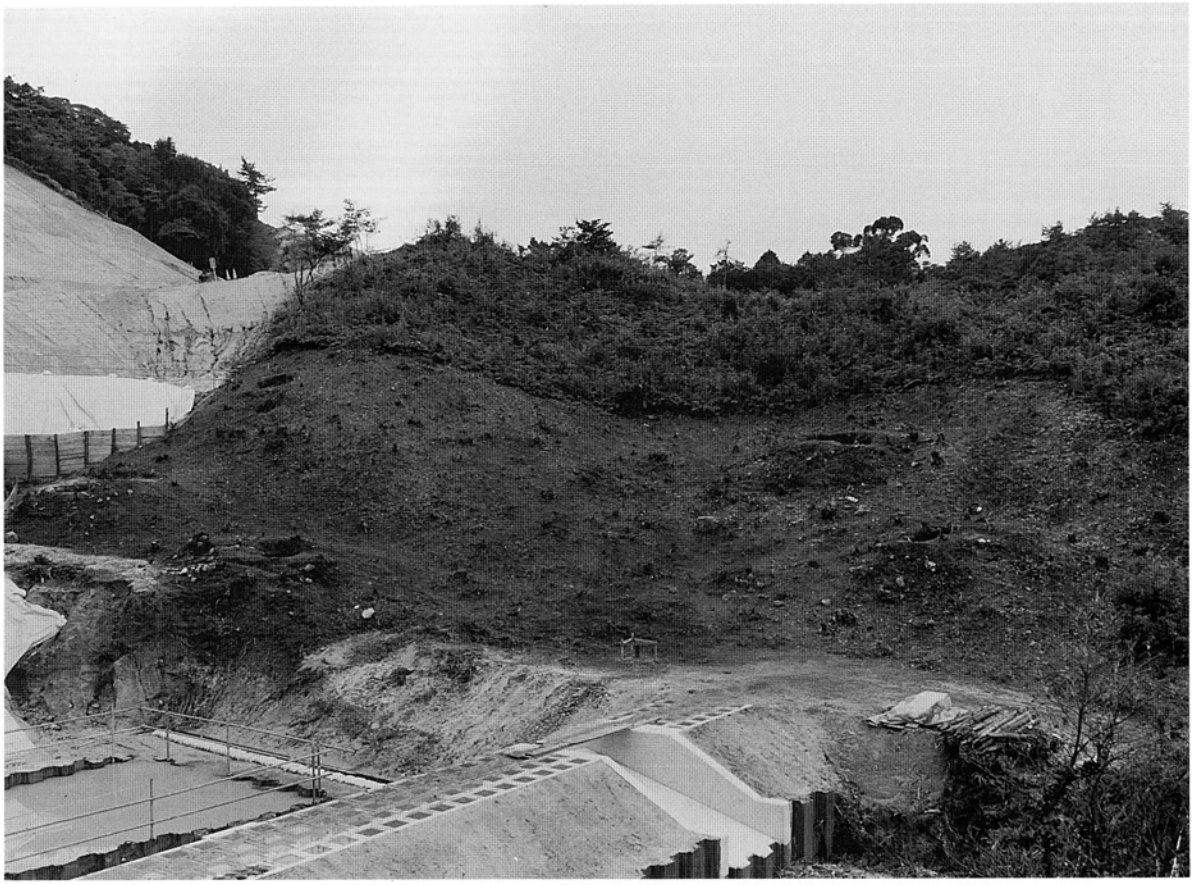
10号、6号墳はともにII区周溝内に焼土壙を構築し、10号墳I区墳丘下部 に坏身4個体、土師器壺1個体の破損した状態のものが供献されていた。6号墳ではI区墳丘下部に須恵器甕、土師器甕須恵器坏身2個体が埋置され、II、III区の墳丘下部に軟質の須恵器甕が破砕され散布する。6号、10号墳の墳丘内の土器供献は馬蹄形周溝を掘削した高方のI、II区にみられる。比較的傾斜が緩やかな基底面が確保できたことによるものと思われる。

図　　版

(PLATES)

(1) 鋤崎古墳群全景（東より）

(2) 鋤崎古墳群全景（北より）



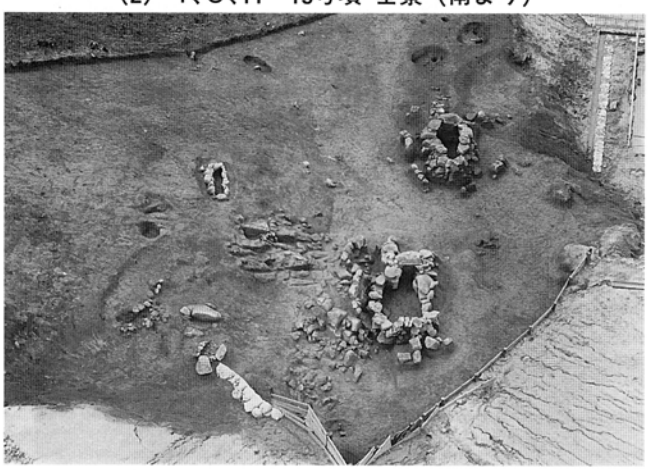
(1) 第２次調査区全景（北東より）

(2) 第２次調査区全景（東より）

(1) 第２次調査区地山整形全景（東より）

(2) 4、5、11～13号墳 全景（南より）

(3) 4、5、11号墳 全景（北東より）



(4) 4、5、11～13号墳 全景（北東より）

(5) 4、5号墳 石室全景（南より）

(1) 4号墳 全景（東より）

(2) 4号墳 石室全景（北東より）

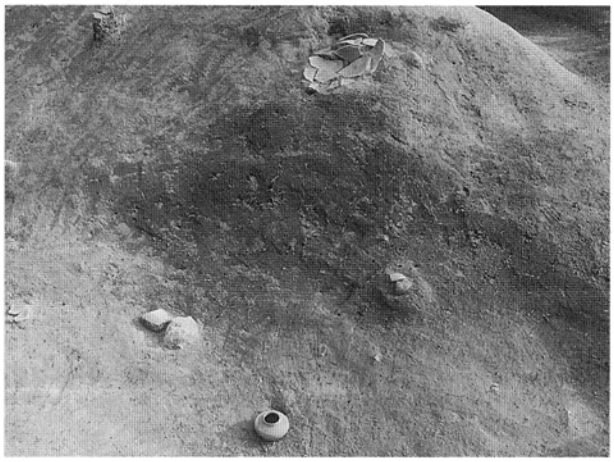
(3) 4号墳 奥壁（北より）

(4) 4号墳 右側壁（東より）

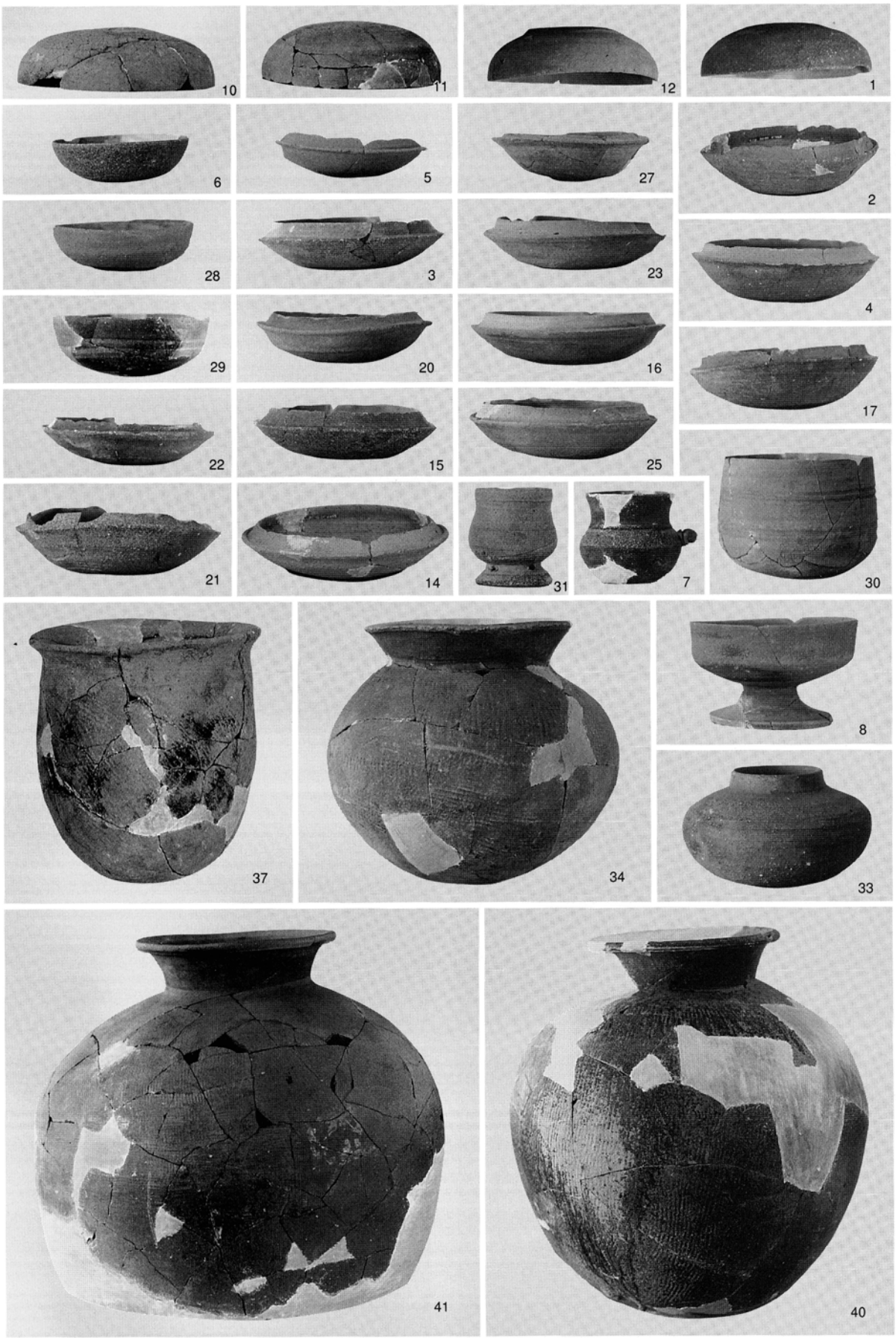
(5) 4号墳 左側壁（西より）

(6) 4号墳 閉塞部（北より）

(7) 4号墳 墓道遺物出土状況（東より）



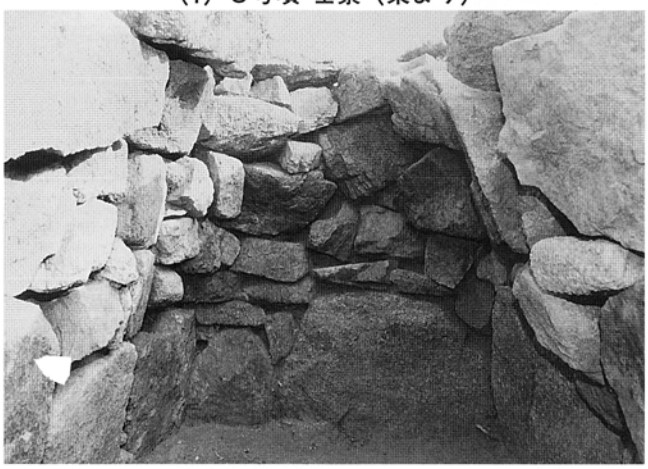
(8) 4号墳 墳丘遺物出土状況（北より）


10
11
12
1
6
5
27
2
28
3
23
4
29
20
16
17
22
15
25
21
14
31
7
30
37
34
8
33
41
40

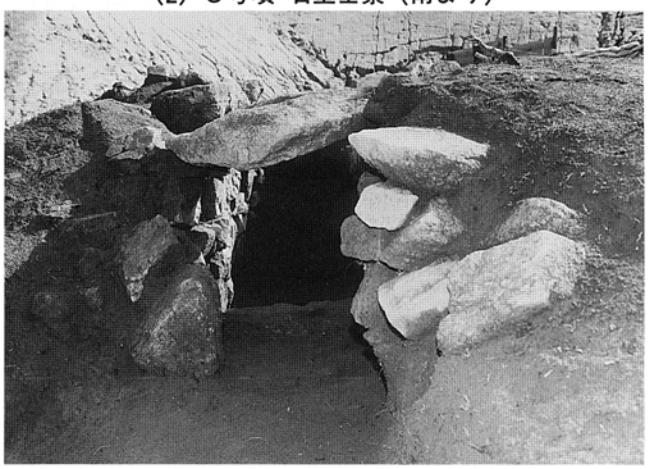
4号墳 出土遺物

(1) 5号墳 全景（東より）

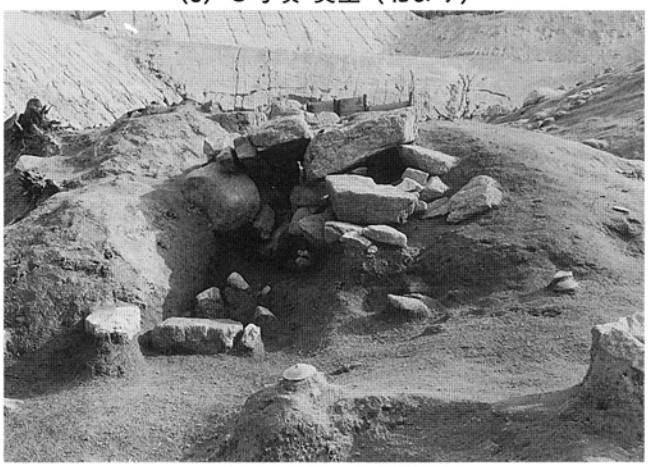
(2) 5号墳 石室全景（南より）



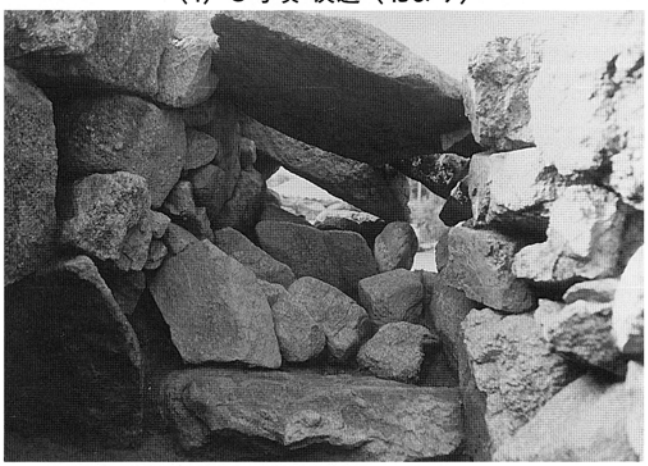
(3) 5号墳 奥壁（北より）



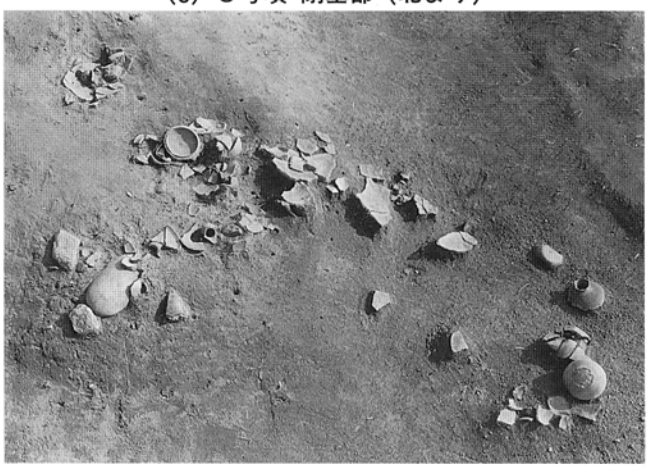
(4) 5号墳 羨道（北より）



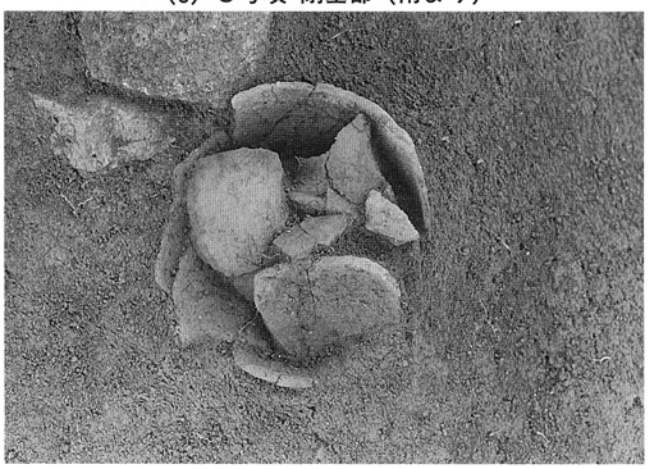
(5) 5号墳 閉塞部（北より）



(6) 5号墳 閉塞部（南より）



(7) 5号墳 墳丘(Ⅳ区)遺物出土状況（北より）

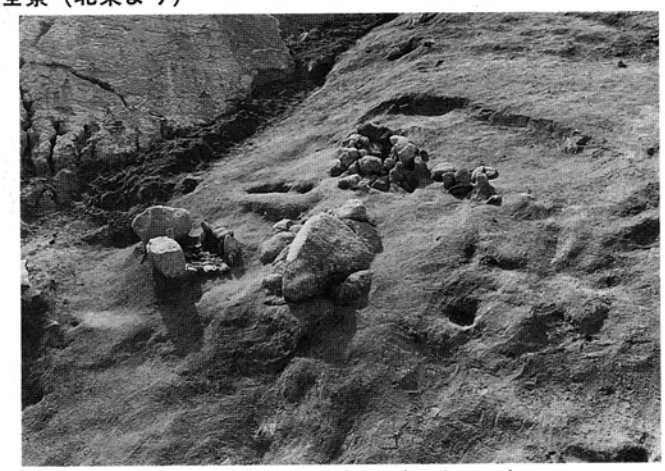


(8) 5号墳 墳丘(Ⅳ区)遺物出土状況（北より）

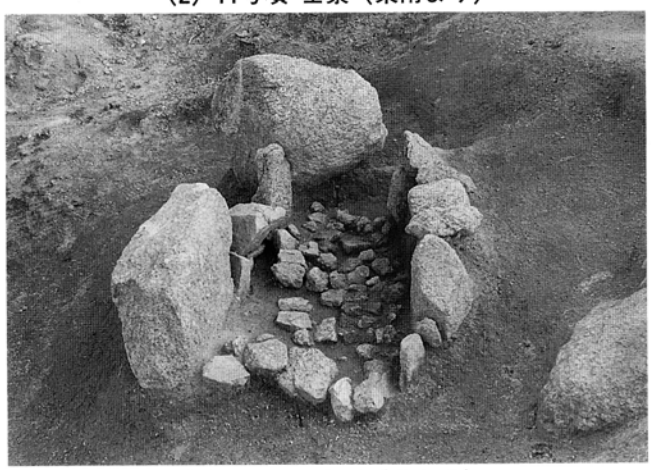
5号墳 出土遺物

(1) 11～13号墳 全景（北東より）

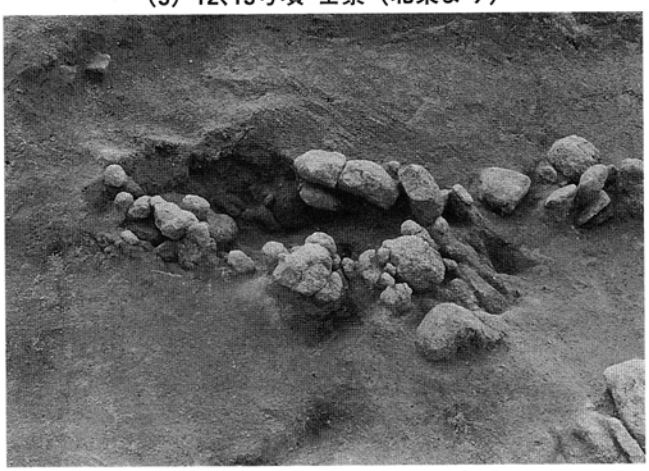
(2) 11号墳 全景（東南より）



(3) 12、13号墳 全景（北東より）

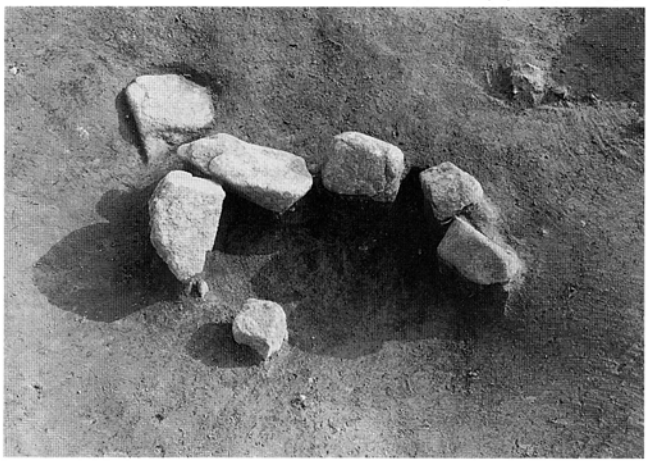


(4) 12号墳 全景（北より）

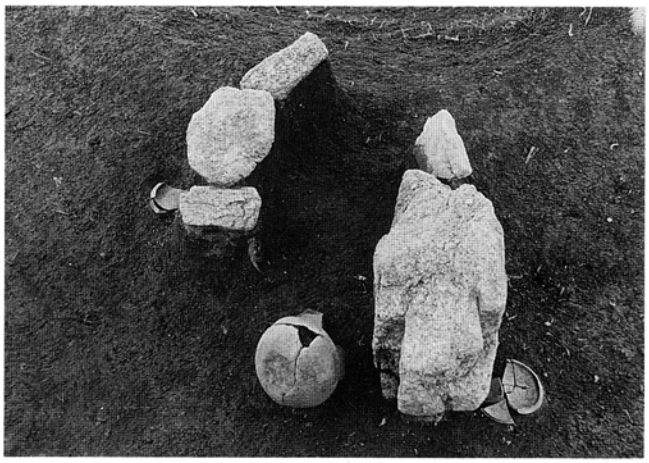


(5) 13号墳 全景（南より）

(1) 2～7号 土壙全景（北より）

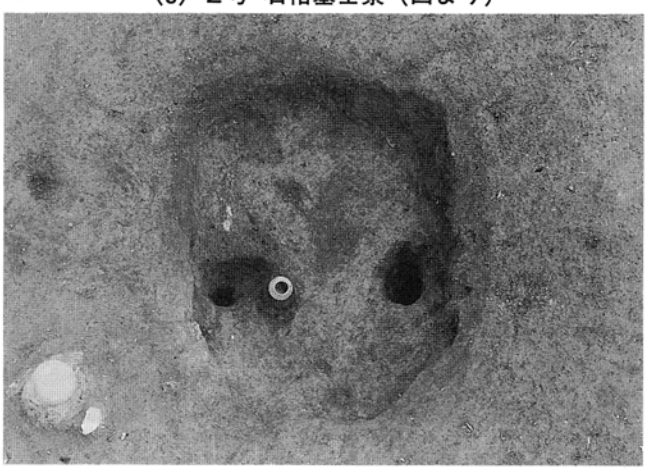


(2) 1号 石棺墓全景（北より）

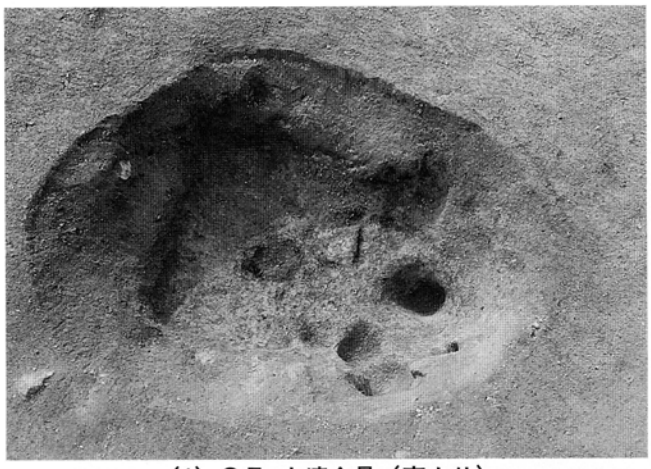


(3) 2号 石棺墓全景（西より）

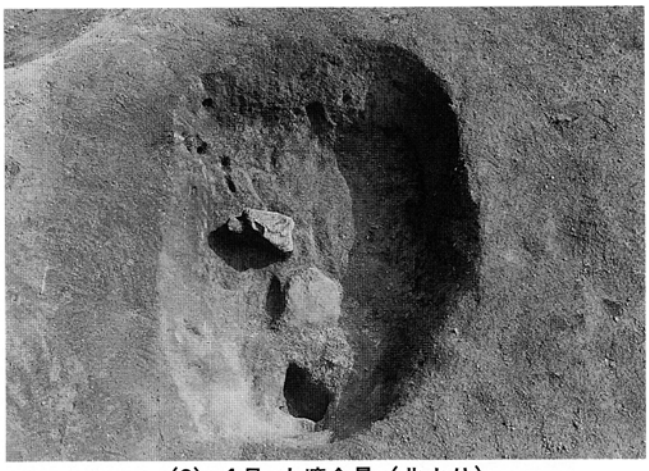
(4) 1号 土壙全景（東より）



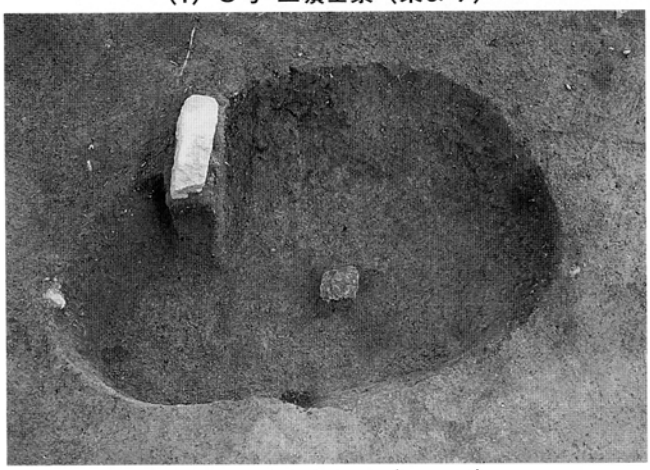
(5) 2号 土壙全景（北より）



(1) 3号 土壙全景（東より）

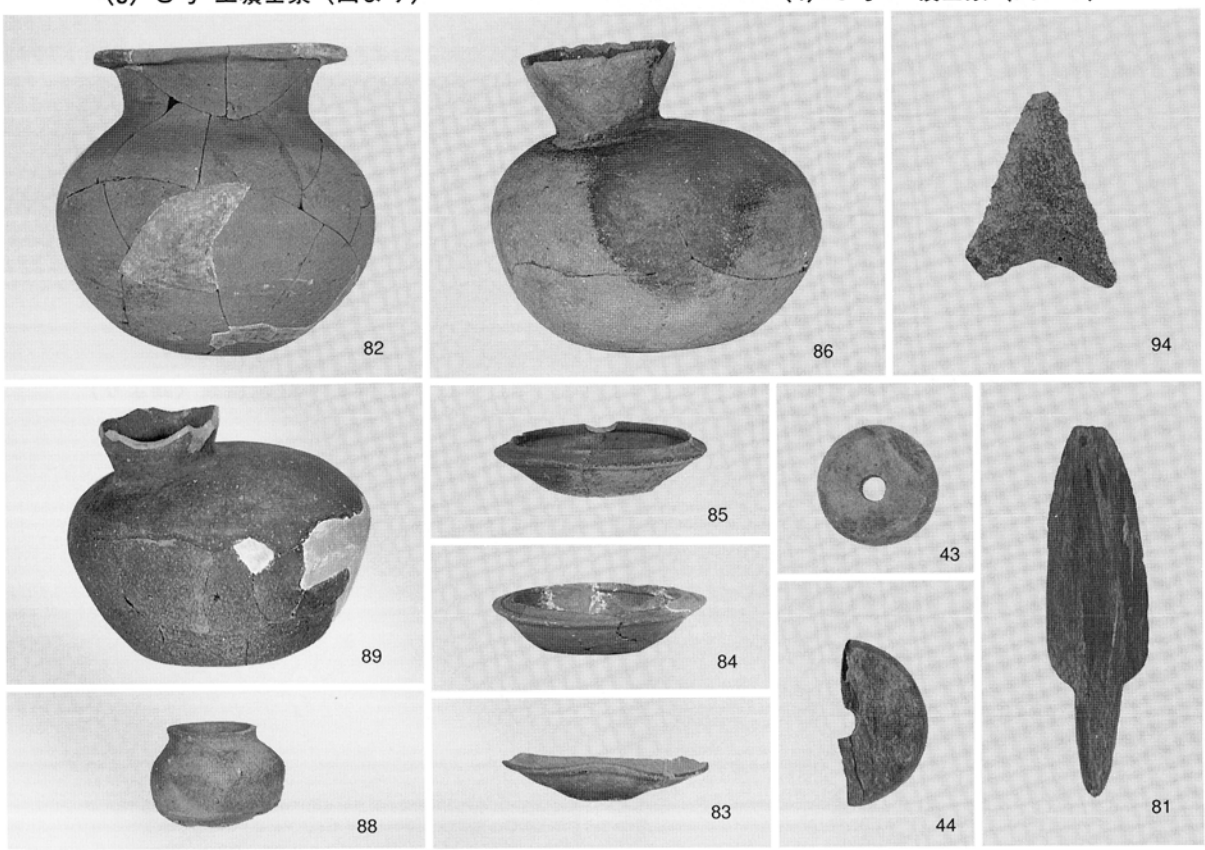


(2) 4号 土壙全景（北より）



(3) 8号 土壙全景（西より）

(4) 9号 土壙全景（西より）



(5) 石棺墓、土壙出土遺物

(1) 第３次調査全景（南東から）

(2) 尾根線上古墳（２、15、16、17、19、20、21号墳、南東から）

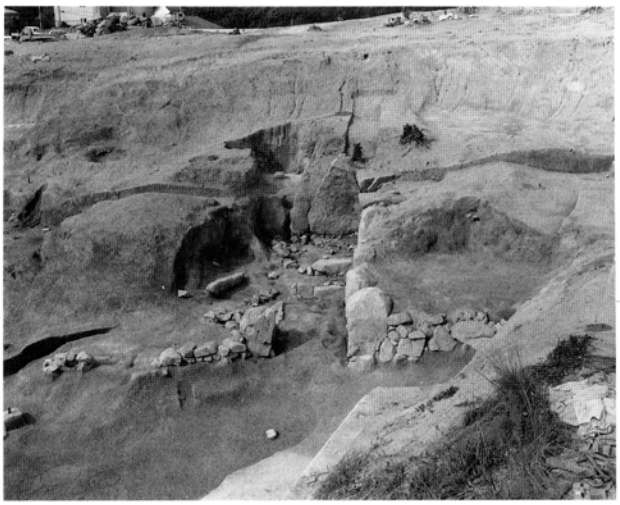
(1) 第３次調査全景（南東から）

(2) 北側丘陵裾部（６、10、７、８号墳、北東から）

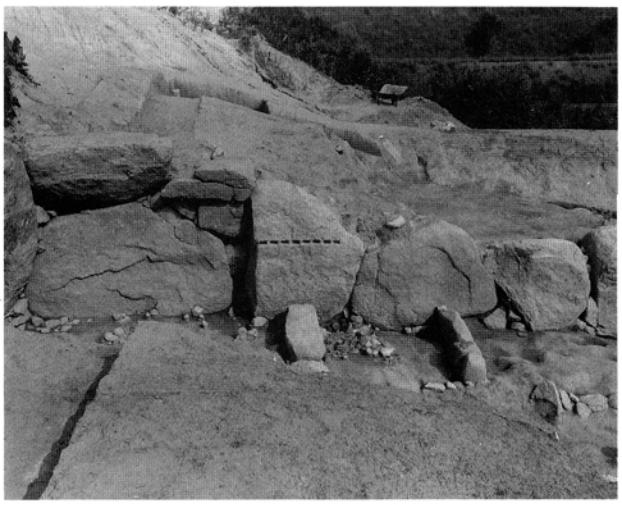
(3) 北側丘陵裾部（６、10、７、８号墳、東から）

(4) 北側丘陵斜面（14号墳付近、北から）

(5) 南側丘陵裾部（北から）

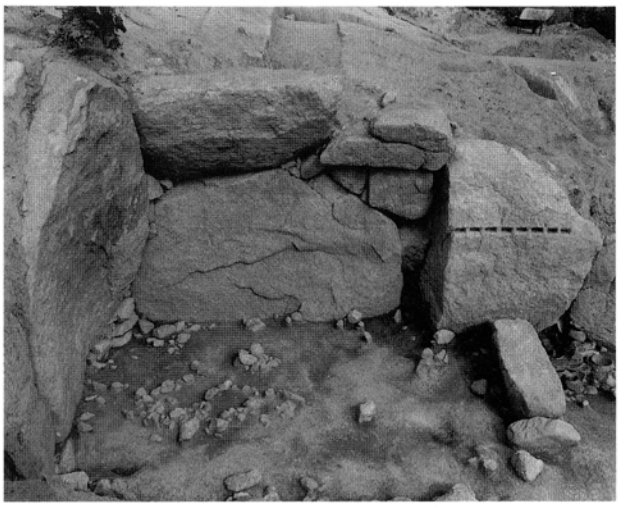


(1) 1号墳 全景（南東から）

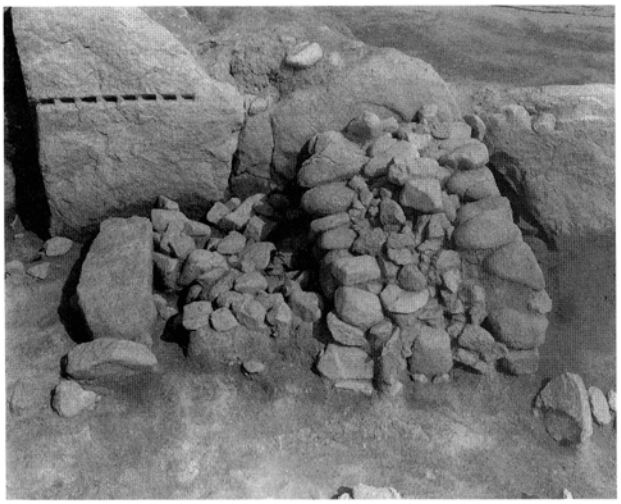


(2) 1号墳 右側側壁（西から）

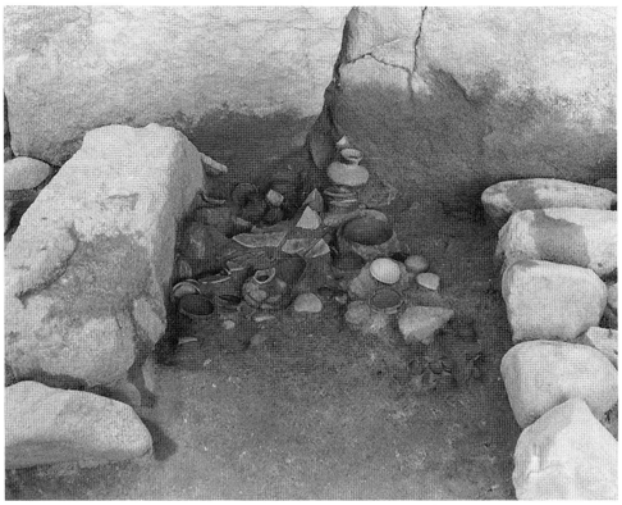
(3) 1号墳 閉塞石（北東から）



(4) 1号墳 玄室（西から）



(5) 1号墳 閉塞石（西から）



(6) 1号羨道部遺物出土状況

(1) ２号墳 地山成形（北西から）

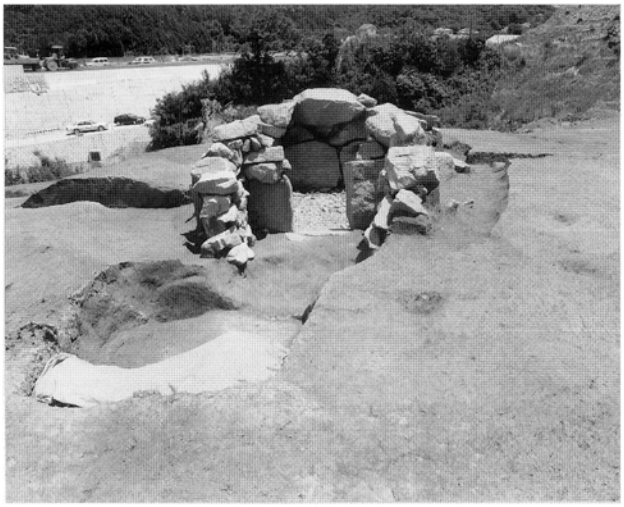
(2) ２号墳 石室全景（北西から）

(3) ２号墳 石室全景（南西から）

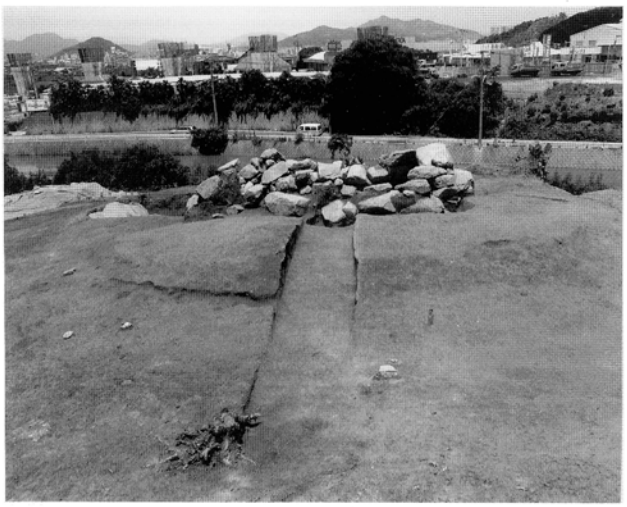
(4) ２号墳 石室全景（北西から）

(5) ２号墳 石室内遺物出土状況（左袖石隅角）

(1) ３号墳、９号墳 墳丘遺存（南西直上から）



(2) ３号墳 石室全景と地山成形（南西から）

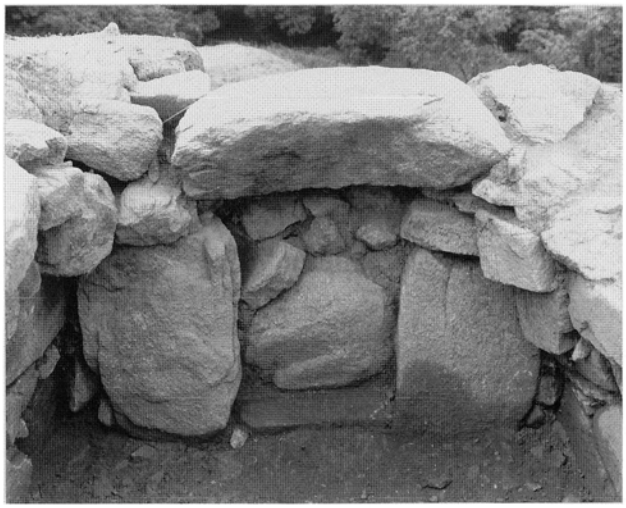


(3) ３号墳 石室全景と地山成形（南から）

(4) ３号墳 Ａトレンチ土層断面（西から）

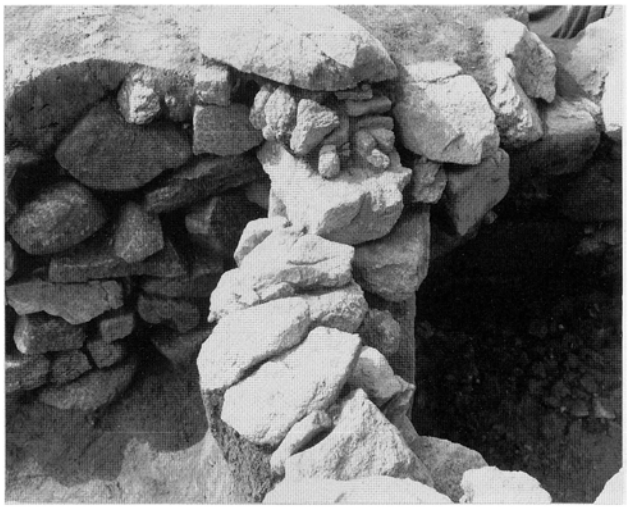
(5) ３号墳 玄室内鉄刀出土状況（北から）

(1) ３号墳 石室全景（南西から）



(4) ３号墳 玄門閉塞石（北東から）

(2) ３号墳 玄室全景（北東から）



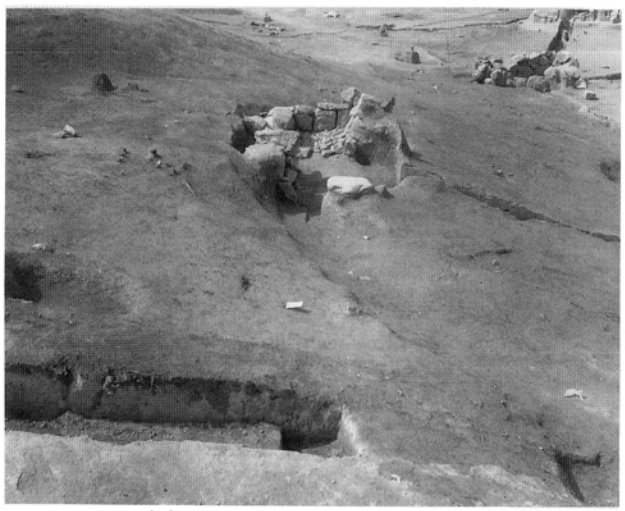
(5) ３号墳 閉塞石（南東から）

(3) ３号墳 玄室右側壁（北西から）

(6) ３号墳 横口部左側壁（南から）

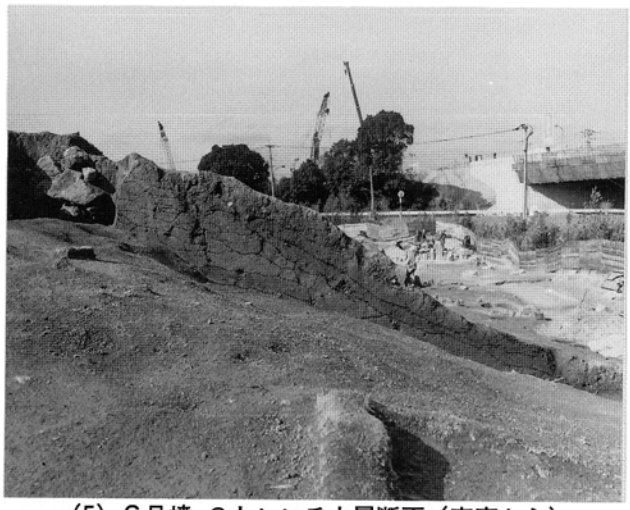
(1) 6号墳、10号墳 墳丘遺存（北直上から）

(2) 6号墳 墳丘遺存（東から）



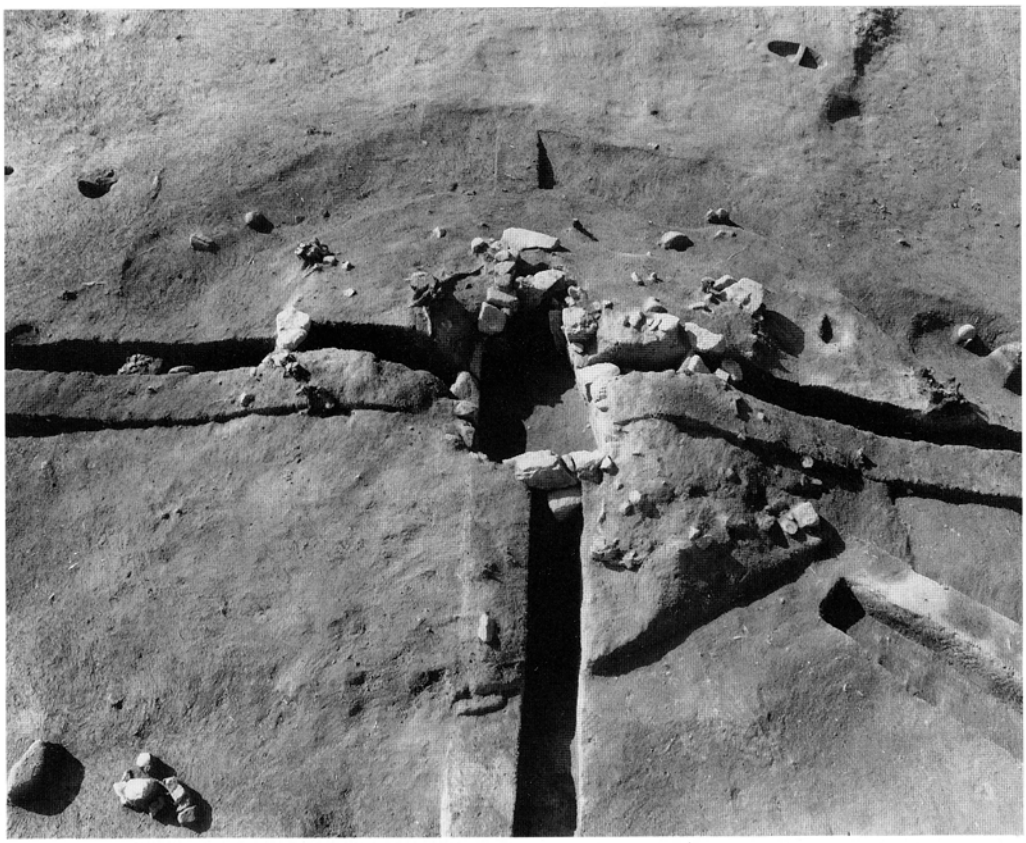
(3) 6号墳 地山成形（東から）

(4) 6号墳 地山成形（北西から）



(5) 6号墳 Cトレンチ土層断面（南東から）

(6) 6号墳 閉塞石（南東から）



(1) 7号墳 墳丘遺存（南西から）

(2) 7号墳 石室全景（南東から）

(1) 7号墳 墳丘遺存（南西から）

(4) 7号墳 玄室右側壁（北西から）

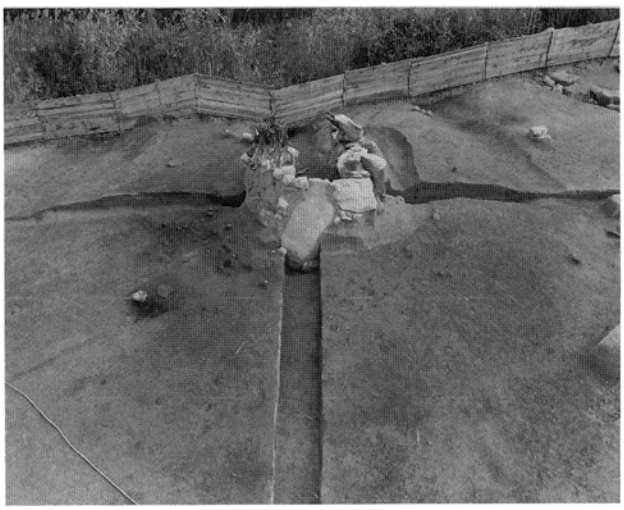
(2) 7号墳 地山成形（南西から）

(5) 7号墳 閉塞石（南西から）

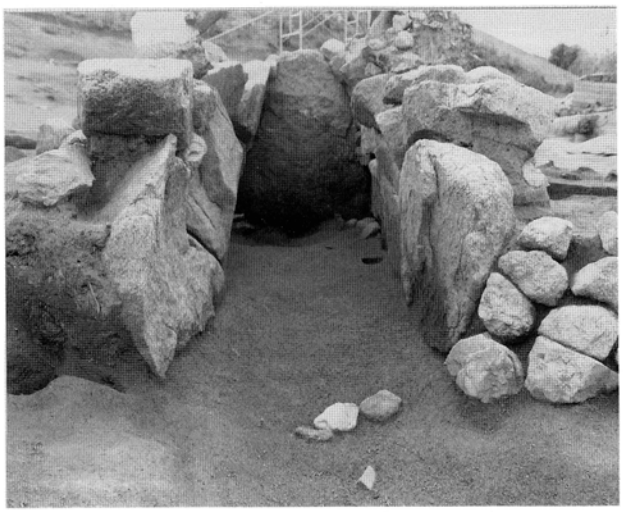
(3) 7号墳 玄室奥壁（南西から）

(6) 7号墳 Ⅰ区墳丘内供献土器

(1) ８号墳 墳丘遺存（北東から）

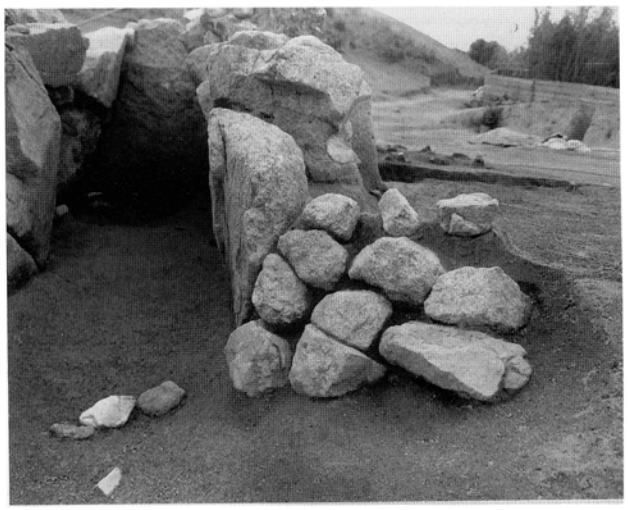


(4) ８号墳 地山成形（南西から）



(2) ８号墳 石室全景（北東から）

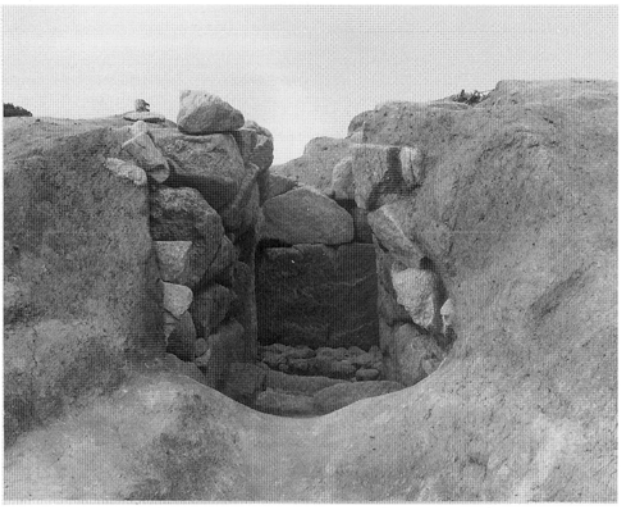
(5) ８号墳 閉塞石（北東から）



(3) ８号墳 前庭部積石（北東から）

(6) ８号墳 Ｃトレンチ土層断面（北東から）

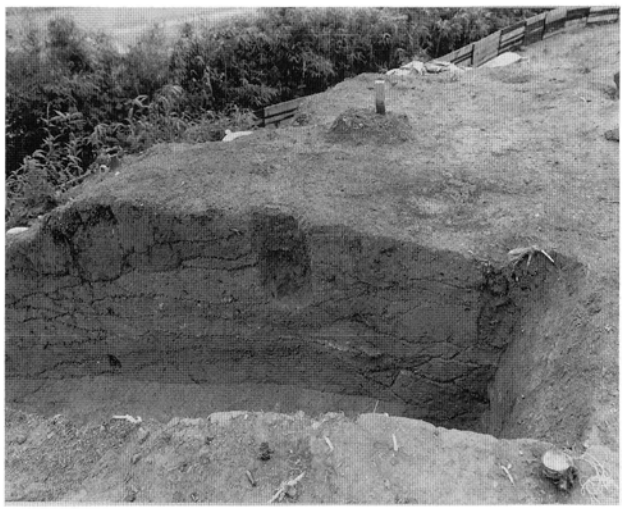
(1) 9号墳 墳丘遺存（南西から）



(2) 9号墳 石室全景（南西から）

(3) 9号墳 墳丘遺存と墓道（南西から）

(4) 9号墳 石室俯瞰（北東から）



(5) 9号墳 Aトレンチ土層断面（南西から）

(6) 9号墳 地山成形（南西から）

(1) ９号墳 玄室内遺物出土状況（北東から）

(2) ９号墳 玄室右側壁第１、２面遺物出土状況（北西から）

(3) ９号墳 左側壁第１、２面遺物出土状況（南東から）

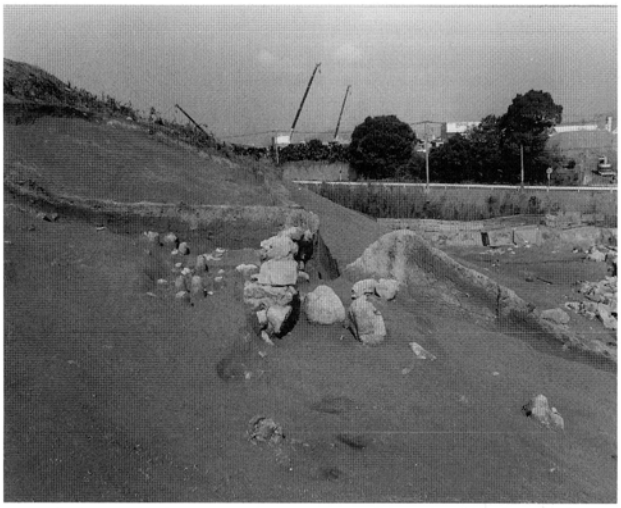
(4) ９号墳 玄室右側壁第３面遺物出土状況（北西から）

(5) ９号墳 墓道閉塞石流出状況（南西から）

(6) ９号墳 墓道鉄滓出土状況（北西から）

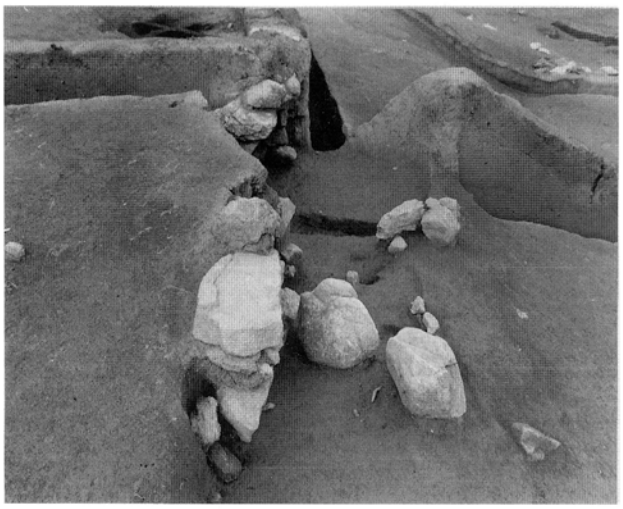
(1) 10号墳 墳丘遺存（南東から）

(4) 10号墳 石室全景（北東から）

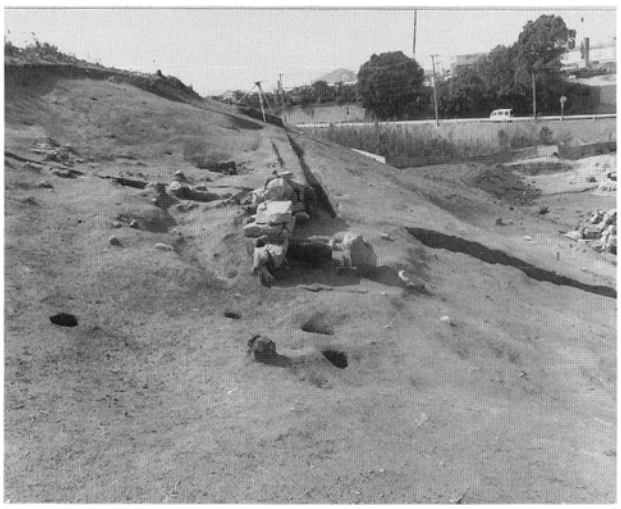


(2) 10号墳 A、Cトレンチ土層断面（南東から）

(5) 10号墳 石室遺存状況と閉塞石（北東から）



(3) 10号墳 石室全景（南東から）

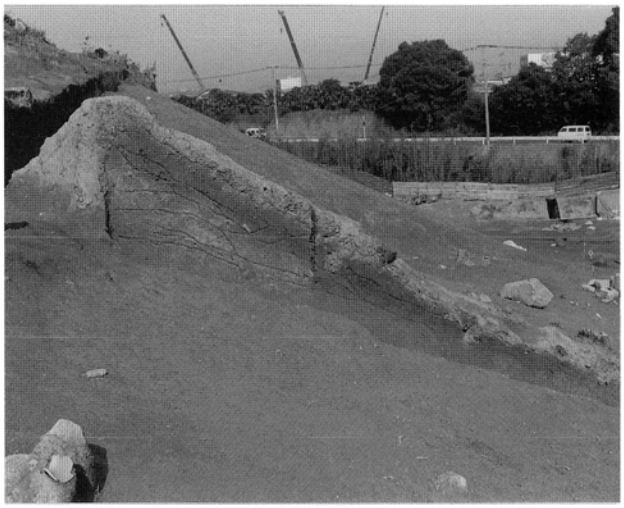


(6) 10号墳 地山成形（南東から）

(1) 10号墳 Ⅰ区墳丘内遺物出土状況（南西から）

(3) 10号墳 墓道遺物出土状況（南から）

(2) 10号墳 Ⅰ区墳丘内供献遺物出土状況（南西から）



(4) 10号墳 Ｃトレンチ土層断面（南東から）

(5) 10号墳 Ⅱ区墳丘内石室(022)検出状況（南東から）

(6) 10号墳 Ⅱ区墳丘内石室(022)検出状況（北東から）

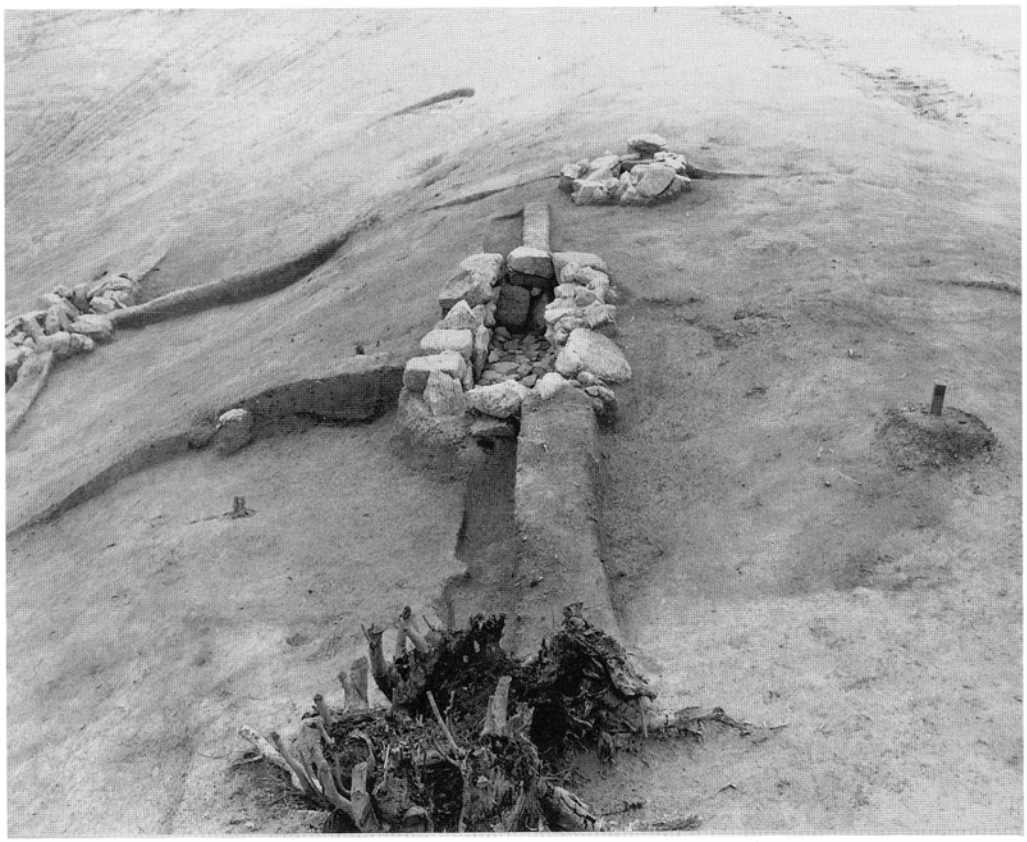
(1) 15号墳 石室全景（南西から）

(2) 15号墳 石室全景（北西から）

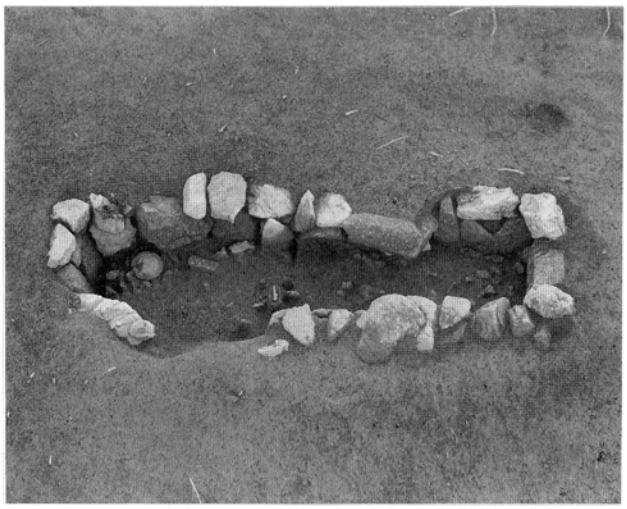
(3) 15号墳 玄室内鉄刀出土状況（南西から）

(4) 15号墳 玄室内遺物出土状況（南から）

(1) 尾根線上小石室（16号、17号、20号墳、北西から）



(2) 尾根線上小石室（19号、21号墳、北西から）

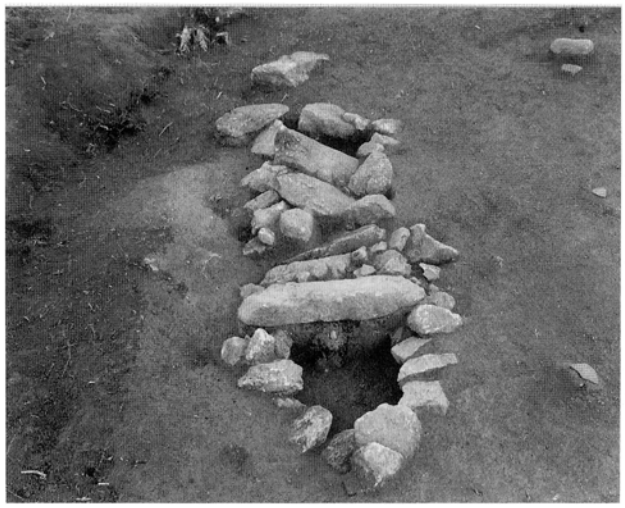


(1) 14号墳 石室完掘（北東から）

(2) 16号墳 完掘（西から）

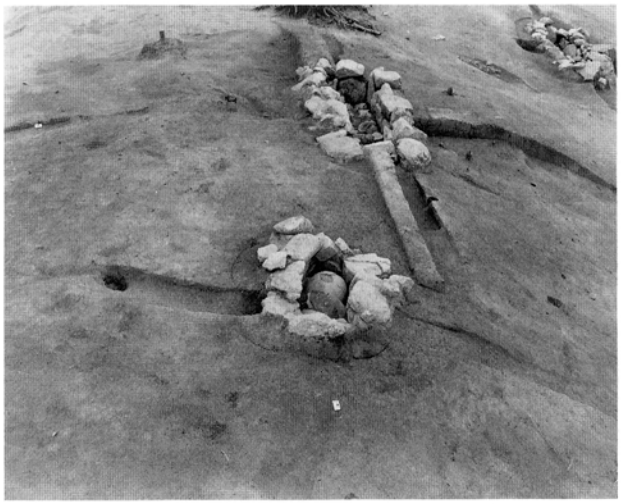
(3) 16号墳 周溝内遺物出土状況（東から）

(4) 16号墳 周溝内遺物出土状況（近景、東から）



(5) 17号墳 石室検出状況（北西から）

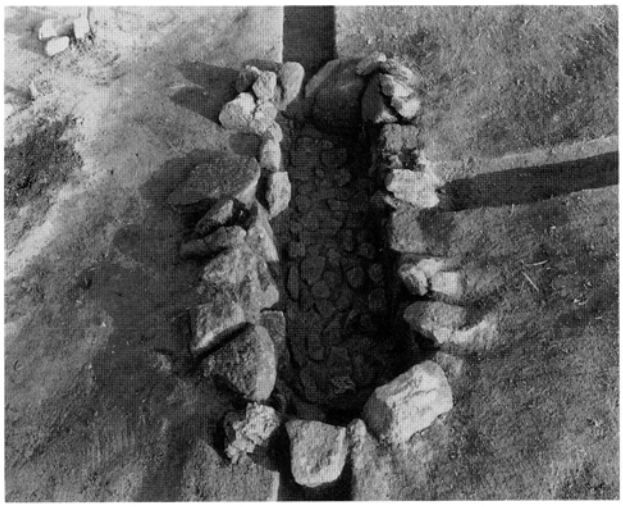
(6) 17号墳 石室完掘（南東から）



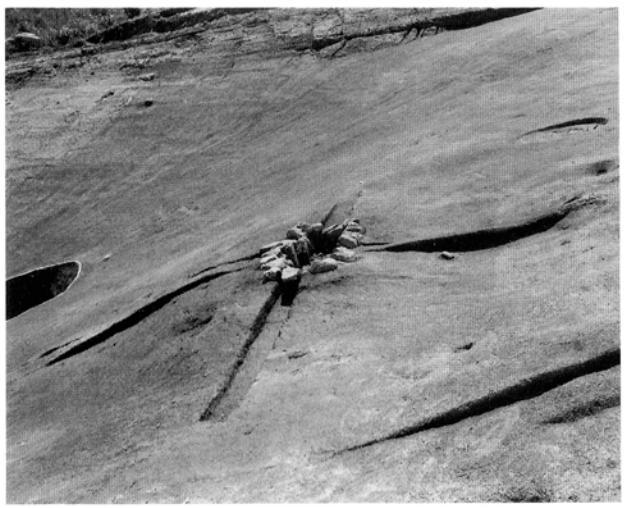
(1) 19号、21号墳 完掘（南東から）

(2) 19号墳 石室完掘（南東から）

(3) 19号墳 石室内遺物出土状況（北東から）



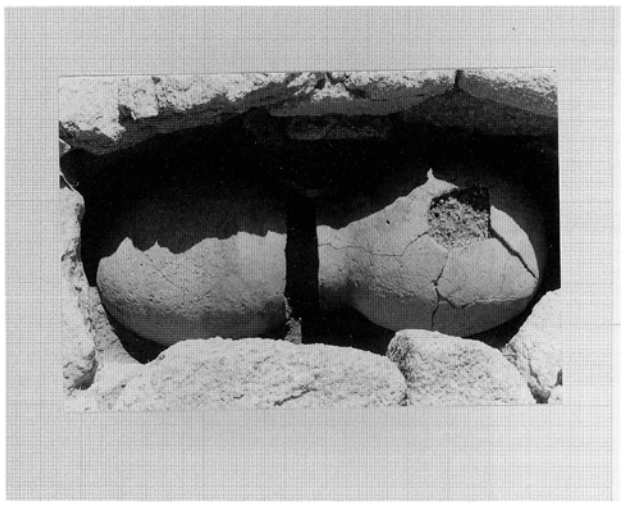
(4) 20号墳 石室完掘（北西から）



(5) 20号墳 墳丘遺存（西から）

(6) 20号墳 石室内鉄器出土状況（北から）

(1) 21号墳 完掘（北から）

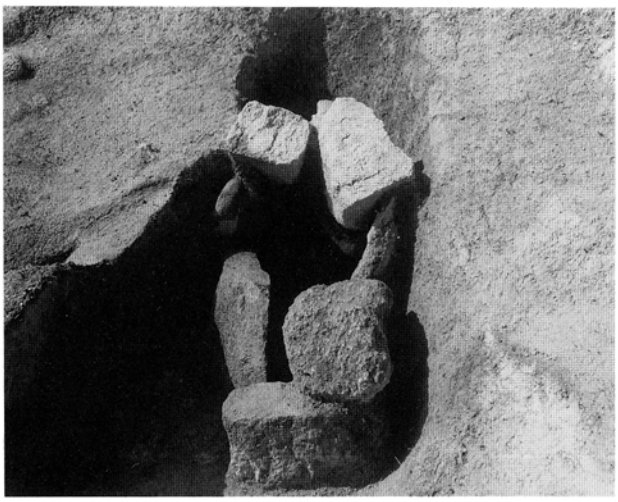


(2) 21号墳 石室内土師器甕棺（東から）

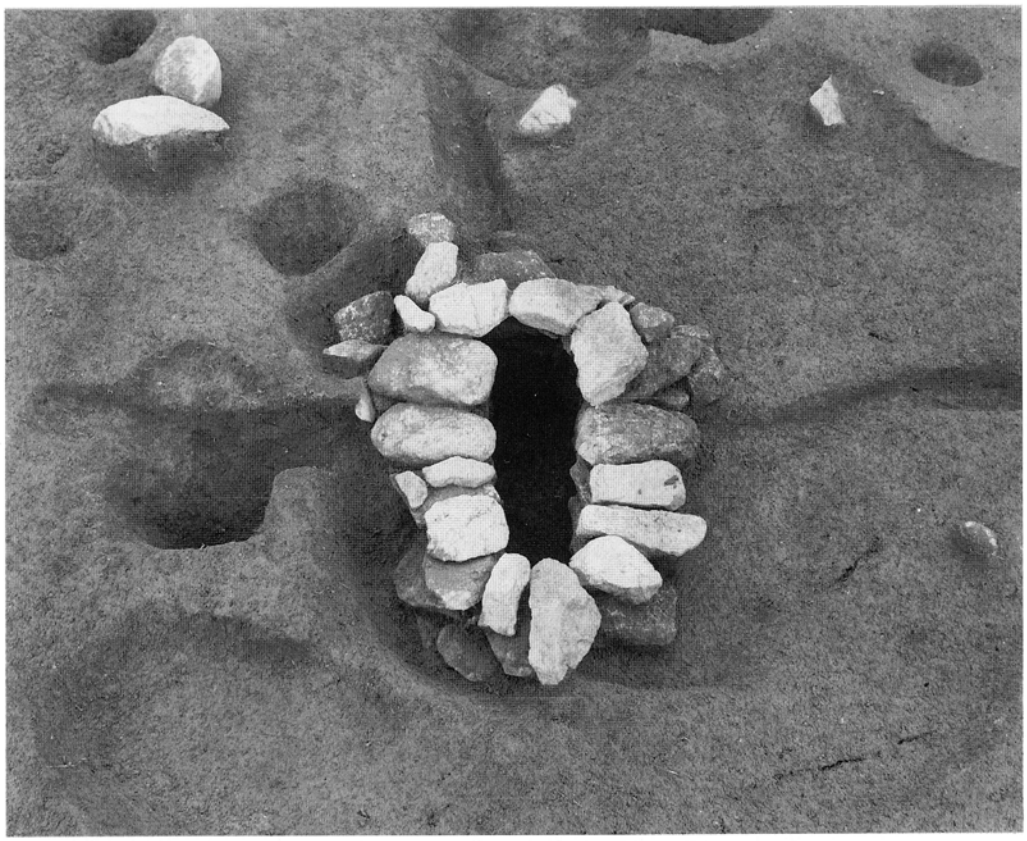
(4) 18号墳 石室完掘（北西から）

(3) 21号墳 石室床面（南から）

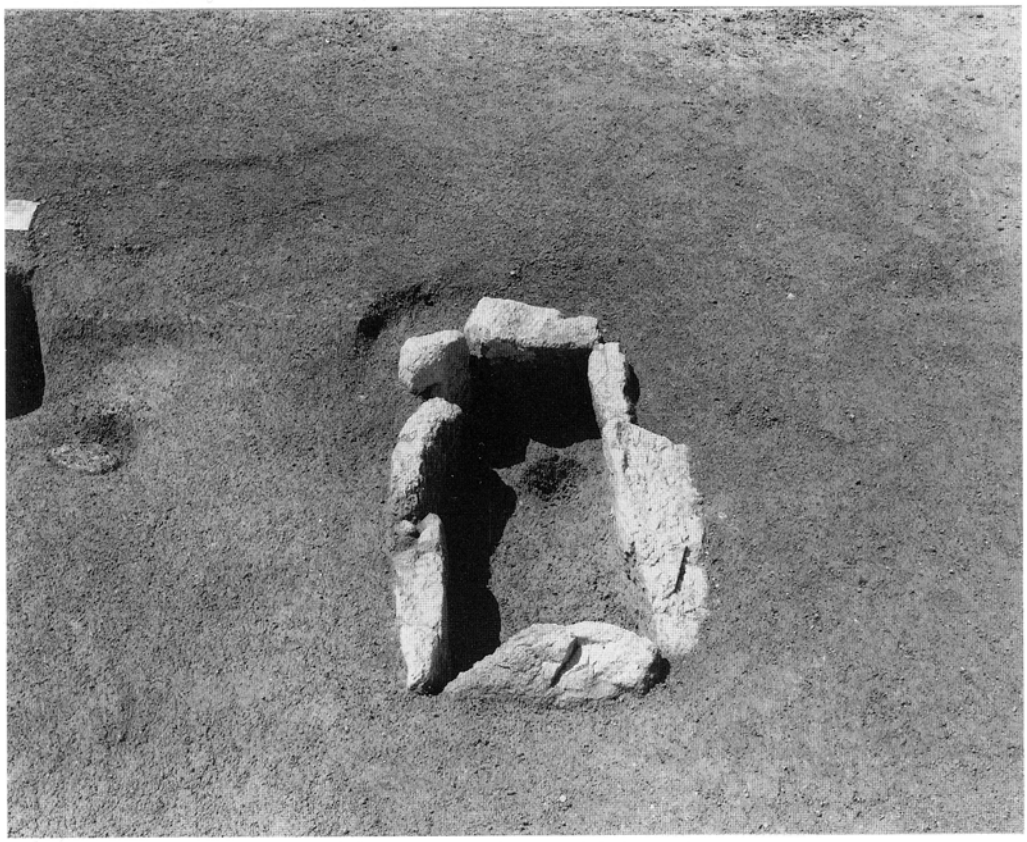
(5) 18号墳 左側壁（西から）



(6) 23号墳 石室完掘（南から）



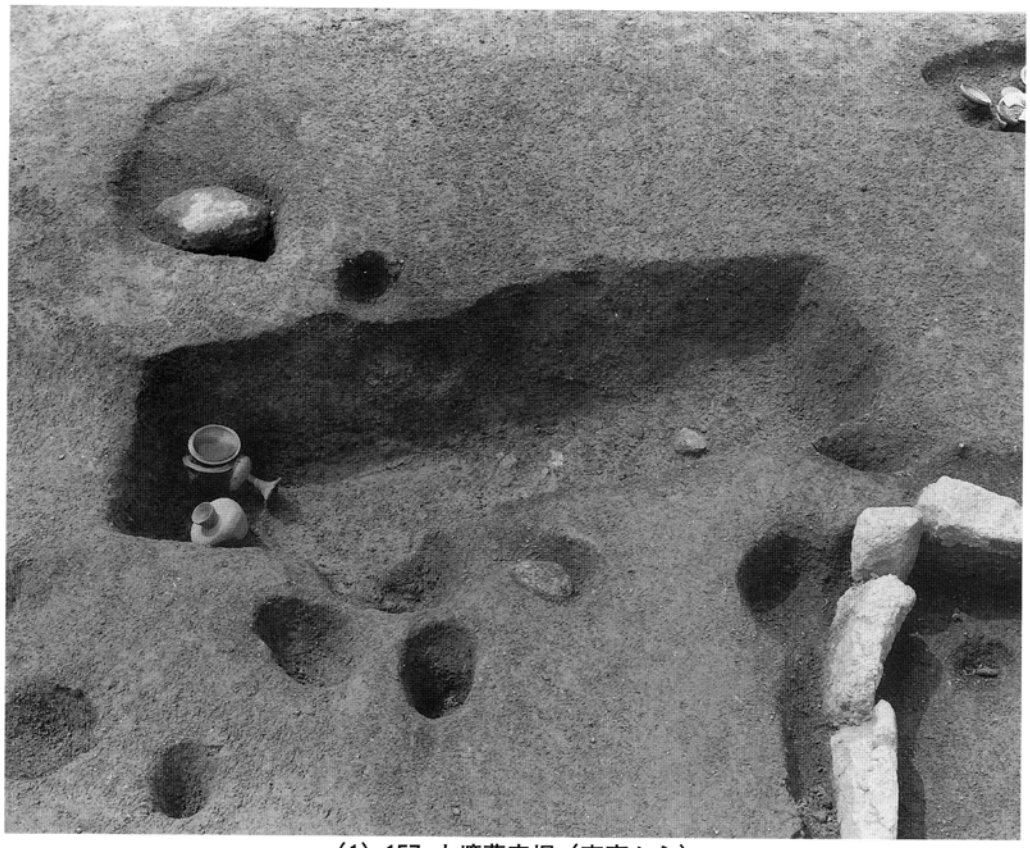
(1) 24号墳 石室完掘（北東から）



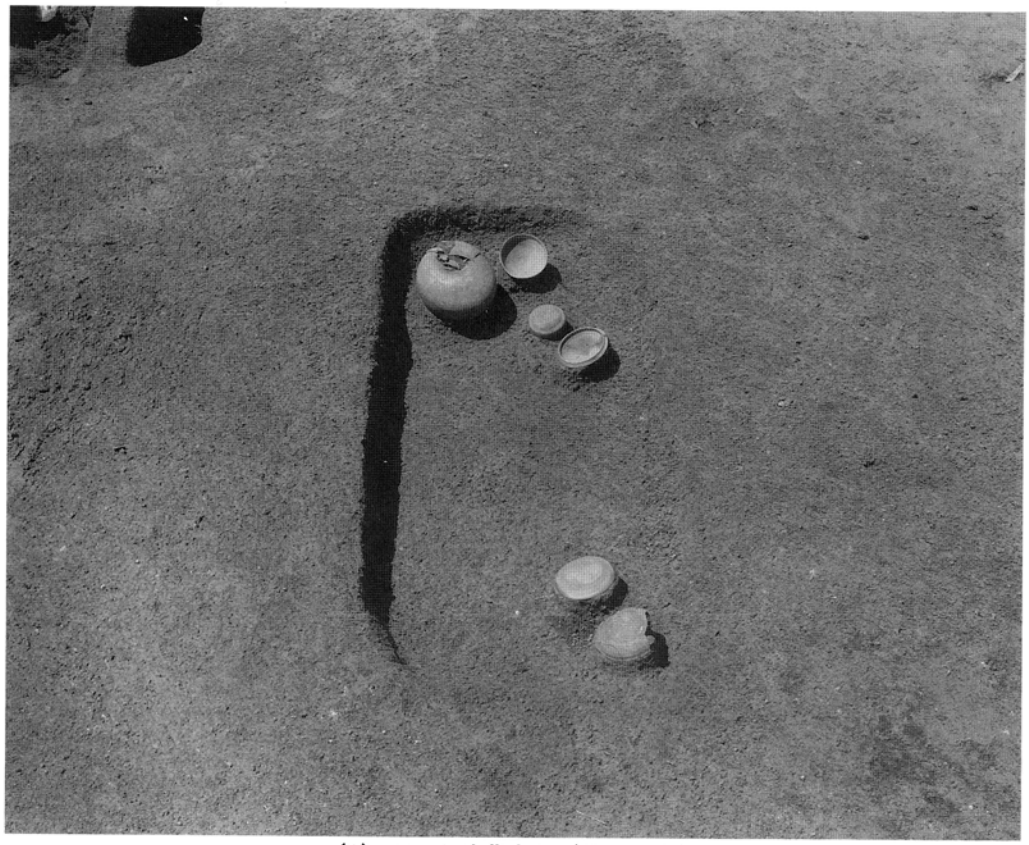
(2) 28号墳 石室完掘（南東から）

(1) 27号墳 石室完掘（南から）

(2) 23号墳、094(焼土壙)完掘（北から）



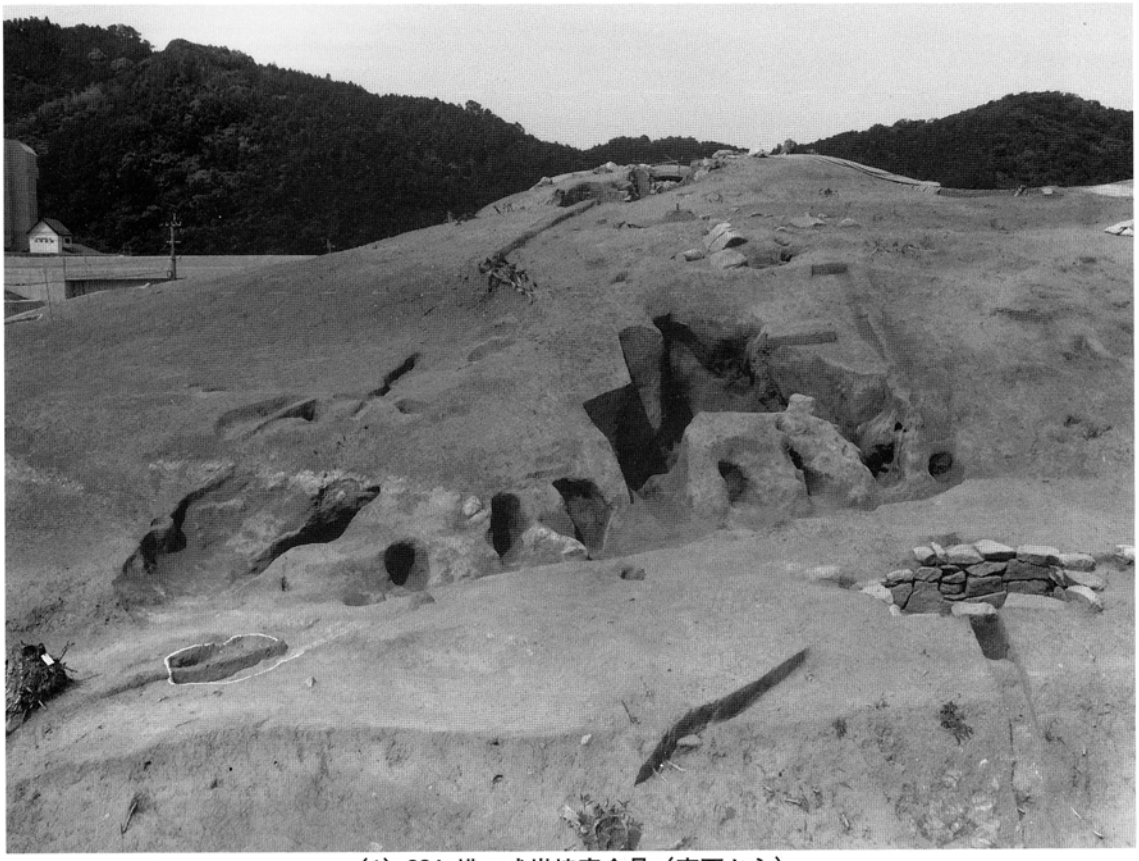
(1) 157 土壙墓完掘（南東から）



(2) 156 土壙墓完掘（北東から）

(1) 164 竪穴住居跡完掘（北西から）

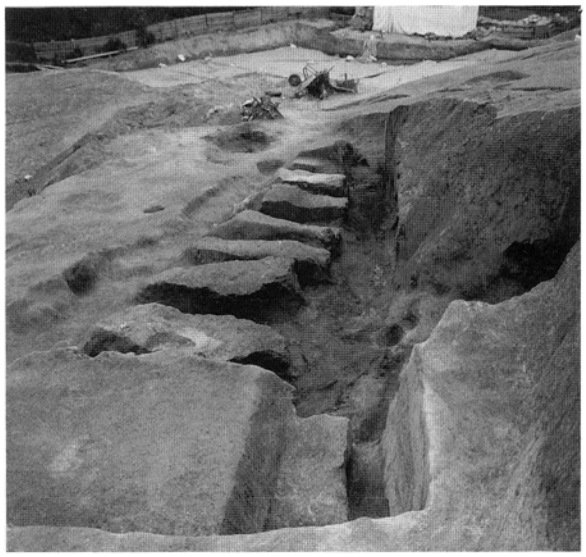
(2) 079 竪穴住居跡完掘（西から）



(1) 084 横口式炭焼窯全景（南西から）

(2) 084 横口式炭焼窯全景（北西から）

(1) 084 横口式炭焼窯完掘（南西から）



(2) 084 横口式炭焼窯内部（南東から）

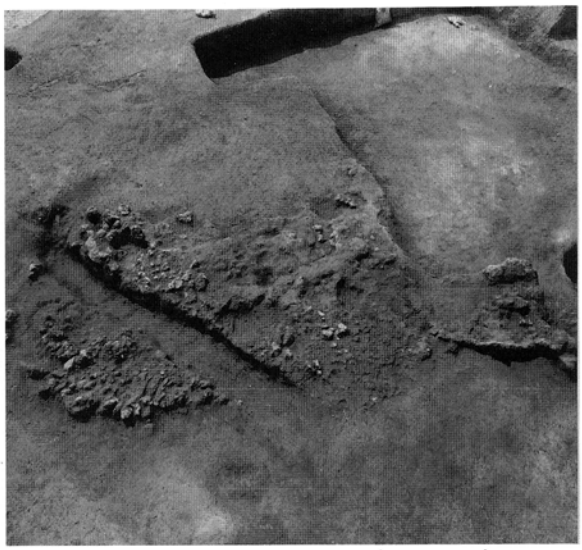
(3) 084 第３～４横口付近焼成部断面（南東から）

(4) 084 第３横口付近焼成部（南から）

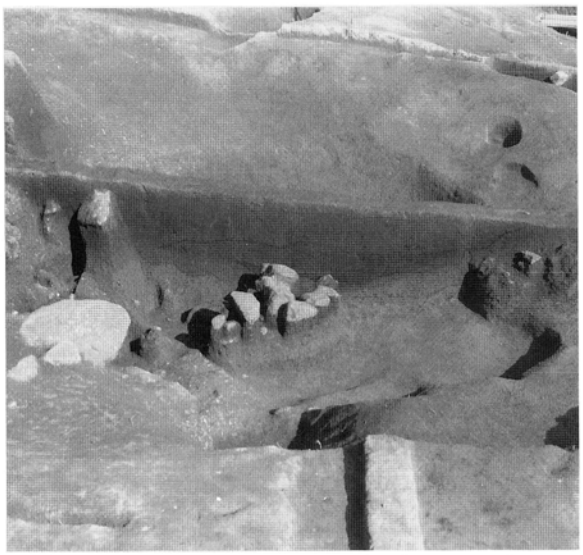
(5) 084 第２横口断面（南東から）

(6) 084 第１～２横口付近焼成部断面（北西から）

(1) 093 製鉄炉跡全景（南西から）



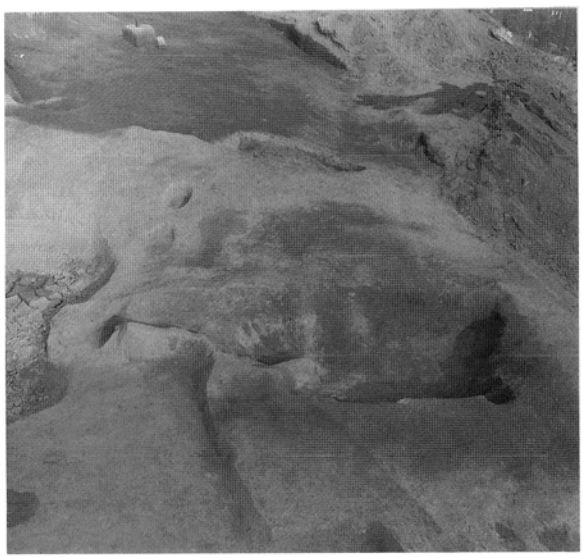
(2) 093 南側排滓溝検出（南東から）



(3) 093 北側排滓溝土層断面（北西から）

(4) 093 南側排滓溝断面（北西から）

(5) 093 炉床部検出状況（南東から）

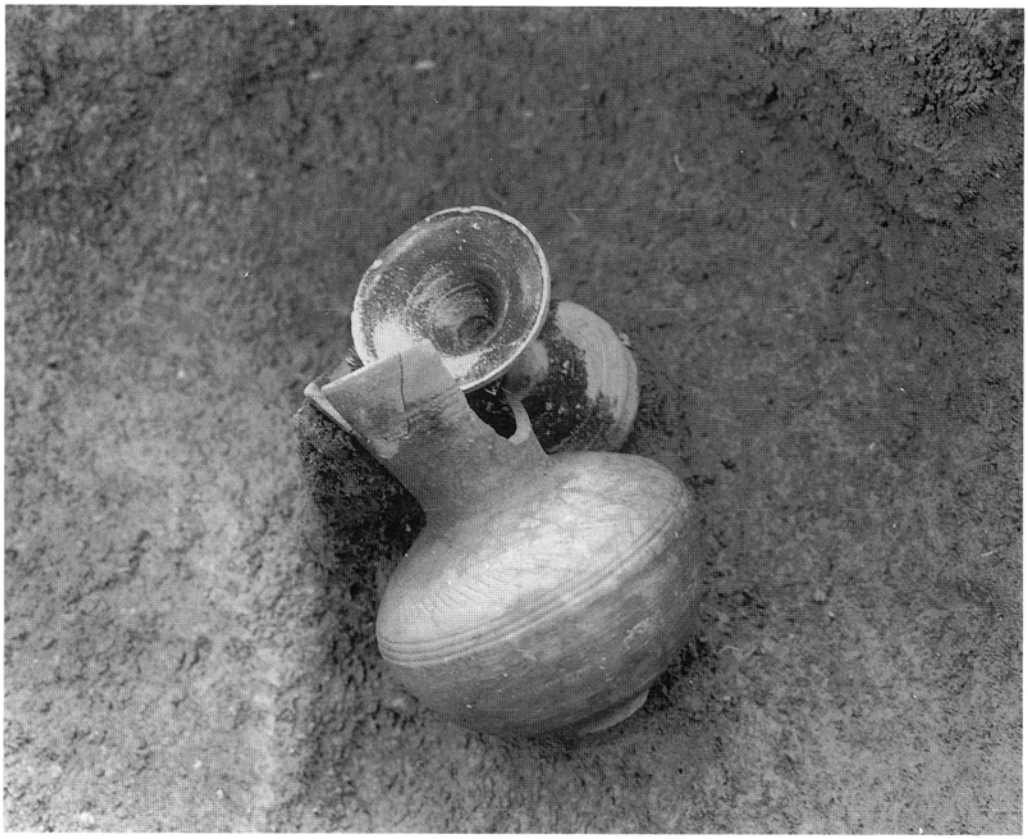


(6) 093 炉床・南側排滓溝完掘状況（北西から）

(1) 131 窯跡完掘（北から）

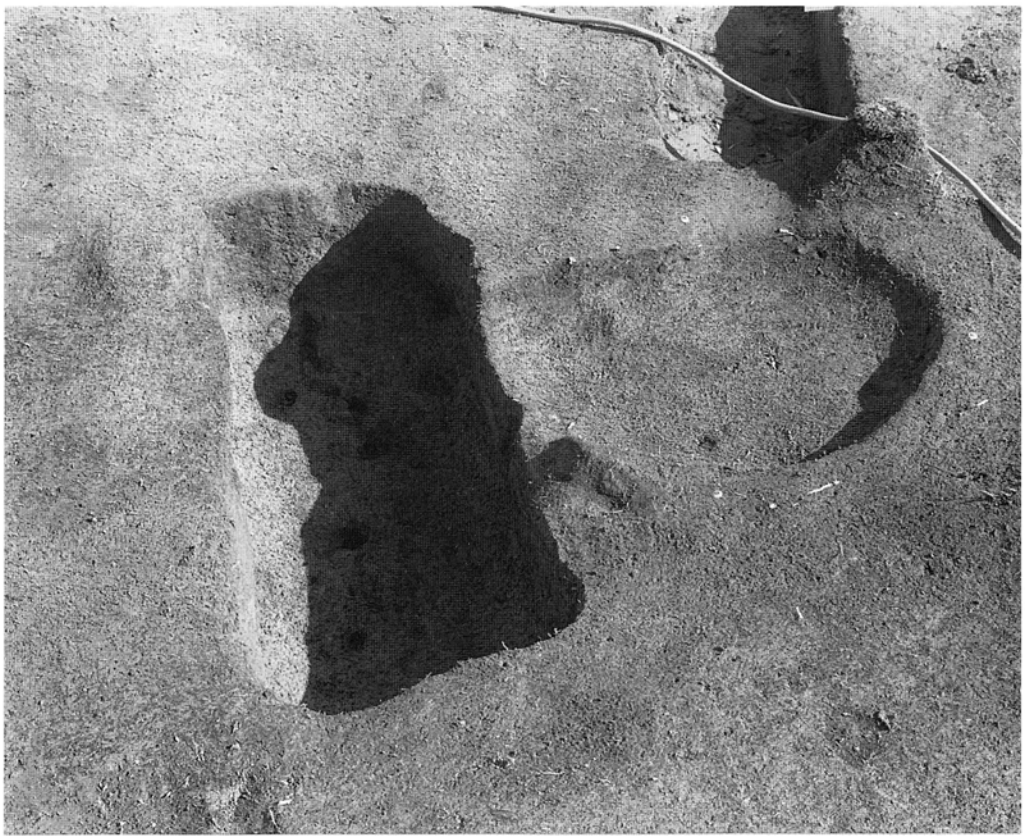
(2) 050 焼土壙完掘（東から）

(1) 033 焼土壙完掘（北東から）

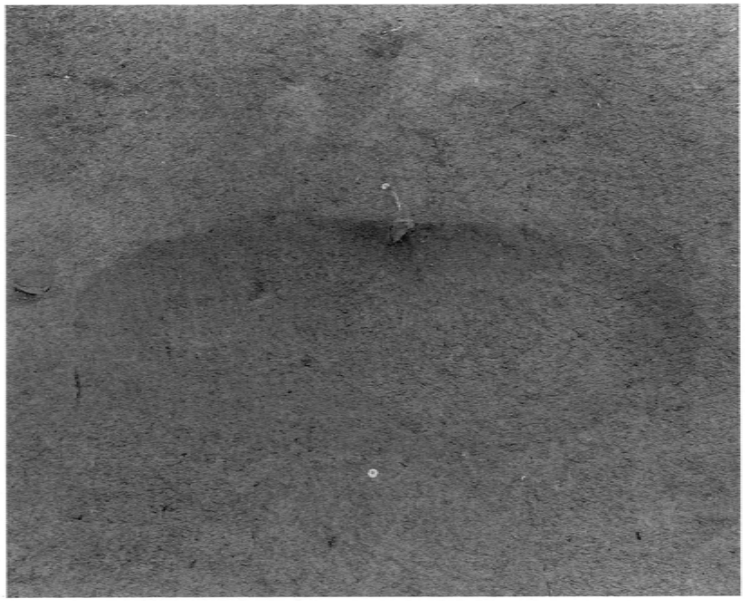


(2) 033 焼土壙内遺物出土状況（北東から）

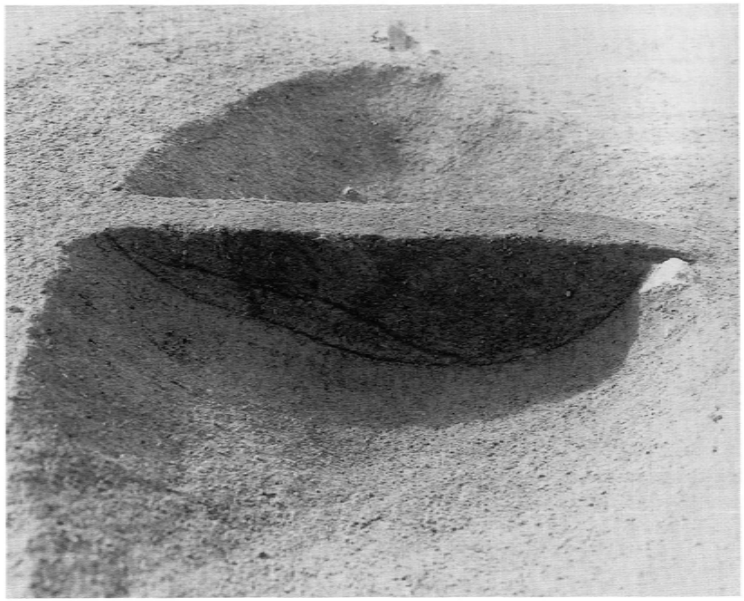
(1) 133 完掘（東から）



(2) 049 焼土壙完掘（南西から）

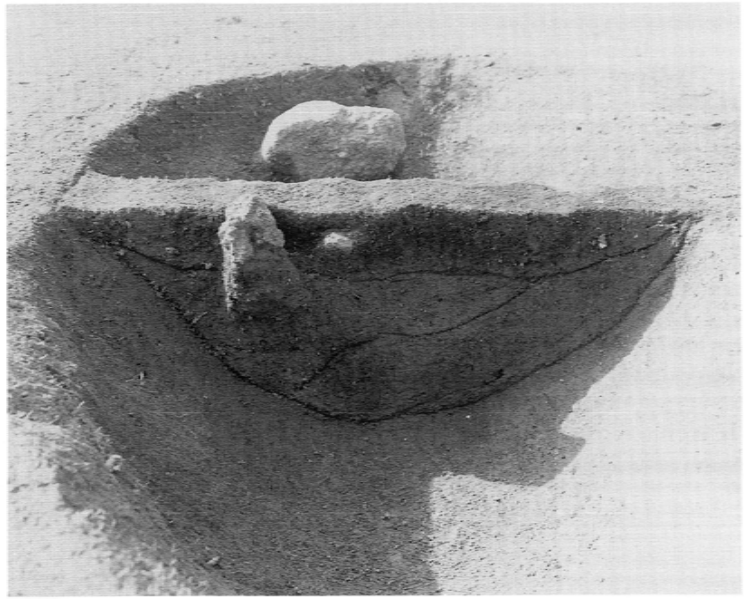


(1) 031 完掘（南から）



(2) 031 土層断面（東から）

(3) 032 完掘（南から）



(4) 032 土層断面（東から）

鋤崎古墳群 2

鋤崎古墳群Ａ群第１次、第２次、第３次調査
鋤崎製鉄Ａ遺跡第１次調査

福岡市埋蔵文化財調査報告書第506集

1997年（平成９年）３月31日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目８番１号

印　刷　福岡印刷株式会社
福岡市博多区東那珂一丁目10番15号